

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告VII

博 多

— 高速鉄道関係調査(4) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集

1988

福岡市教育委員会

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告VII

博 多

— 高速鉄道関係調査(4) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集

1988

福岡市教育委員会

8150



1. 貴服町Bトレンチ出土金銅仏

8150



2. SK03

8150



3. SK07出土遺物

363、355
354、357、351



4.

247, 414, 246
89, 68 550

8.

534



5.

539, 33



9.

162



6.

499, 242
395, 238
544

10.

248



7.

543, 542, 240



11.

7833

161, 251, 252
2197, 1477

8148

98

序

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以來路線内遺跡の調査と出土遺物の整理作業を行なって参りました。発掘調査は昭和59年度に、整理作業も昭和62年度をもって完了いたしました。

本書は地下鉄1号線関係の博多遺跡群と2号線関係の博多遺跡群、箱崎・馬出遺跡群について報告するものです。

博多および箱崎地区は、中世、対外交渉の窓口として日本の歴史の上で特異な発展をとげてきました。貿易陶磁をはじめとする多量かつ多様な出土遺物がそれを物語っています。

この報告書が埋蔵文化財への認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸甚に思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、指導委員の先生方をはじめ交通局関係者など多くの方々のご協力に対し深甚の敬意を表します。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本報告書は、福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における埋蔵文化財発掘調査の報告書の第7冊目で、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VII」とする。1号線関係博多遺跡群の調査と、2号線関係博多遺跡群、箱崎・馬出遺跡群の調査について収録する。
2. 題字は、故筑紫豊先生の揮毫による。
3. 本文中で用いている貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告VII 博多 1984年 別冊）に掲っている。
4. 本報告書で用いた遺構略号は、SK=土壌 SD=溝 SE=井戸 SP=柱穴 SS=集石遺構 SX=不明遺構である。一部整理後遺構の性格の違いが見られたが、あえて旧遺構略号を用いている。
5. 本文の執筆は浜石哲也、小畠弘己、池崎謙二が行い、編集は折尾学、浜石、小畠の協力を得て池崎が行った。
6. 遺構の実測は、浜石、池崎、信行千尋、日野孝司、大橋隆司、岩切幹嘉、井手透、吉田健一、大野淳一郎、上山千重、山口美矢、樋口一明、柴田喜瑞、坂本真二、香月聰が行った。
7. 遺物の実測とトレースは、森本、仲道美津代、田崎真理、中野純江、入江のり子、撫養久美子、池崎、小畠が行った。
8. 写真撮影は現場関係を折尾、浜石、池崎、白石公高、宮島成昭が、遺物写真は白石彰、井上靖崇の協力を得て白石が担当した。
9. 遺物、図面整理には以下の方々の手を煩した。
木村厚子、仲道美津代、里村寿子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、檜崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聰子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、西原年枝、古谷宏子、萩尾朱美、安武智子、森本朝子、田崎真理、入江のり子、西嶋南紗子、日高さゆり、浜砂美津代、佐々野彰子、高原由季、中野純江、森福ひでみ、伊崎マサ子
10. 本報告書作成にかかる遺物整理は、福岡市教育委員会における「埋蔵文化財資料の整理・収蔵要項」に従っており、遺物実測図等に付した番号は遺物個体の登録番号である。これらの資料は福岡市埋蔵文化財センターで一括保管される。実測図、写真図版ページ上部に付した4桁番号は遺跡調査番号である。

本文目次

I	高速鉄道路線内遺跡調査概要	1
II	高速鉄道関係調査 博多(4)	
第1章	博多遺跡群における発掘調査の概要	6
第2章	祇園町工区本体部の調査	9
1.	H・I・J区の調査	9
2.	夜間調査区の調査	53
3.	L・M区の調査	61
4.	N・O・P区の調査	78
5.	Q区の調査	89
6.	まとめ	95
第3章	祇園町工区4号出入口の調査	97
第4章	祇園町工区5号出入口の調査	107
第5章	祇園町工区P ₂ 出入口の調査	121
第6章	博多駅前工区の調査	129
第7章	吳服町工区本体部の調査	131
第8章	吳服町工区換気塔部の調査	145
第9章	吳服町工区出入口の調査	151
1.	A出入口の調査	151
2.	B出入口の調査	165
3.	C出入口の調査	175
III	高速鉄道関係調査 箱崎・馬出遺跡群	195

挿図目次

Fig.	1 路線内遺跡地図.....	P 2
Fig.	2 博多遺跡群地形図.....	折り込み
Fig.	3 1号線関係調査区全体図.....	折り込み
Fig.	4 H 区 SK03・SK14・SK17・18.....	P 10
Fig.	5 H・I・J 区遺構全体図（上部検出遺構）.....	付図 I
Fig.	6 H・I・J 区遺構全体図（下部検出遺構）.....	付図 I
Fig.	7 H・I 区土層断面図	付図 II
Fig.	8 H 区 SK01・SK02・SK19A・SK19B・SK33	P 11
Fig.	9 H 区 SK16・SD01	P 12
Fig.	10 I 区 1号墓・2号墓・SK04・SK05	P 13
Fig.	11 I 区 SK06・SK12・SK13・SK25	P 14
Fig.	12 I 区 SK26・SK27・SK29・SK39	P 15
Fig.	13 H 区 SK01・SK03・SK04・SK05 出土遺物	P 16
Fig.	14 H 区 SK07 出土遺物（1）	P 17
Fig.	15 H 区 SK07 出土遺物（2）、SK08・SK10・SK14 出土遺物.....	P 18
Fig.	16 H 区 SK15 出土遺物、SK17 出土遺物（1）	P 19
Fig.	17 H 区 SK17 出土遺物（2）	P 20
Fig.	18 H 区 SK23 出土遺物	P 21
Fig.	19 H 区 SK24・SK25・SK26・SK28・SK31・SK33・SK34 出土遺物.....	P 22
Fig.	20 H 区 SK37・SK39・SK40・SK41・SK42・SK43・SK44・SK46 出土遺物	P 23
Fig.	21 H 区 SK47・SK48・SK49 出土遺物	P 24
Fig.	22 H 区 SK51・SK52・SK53・SK54・SD01 出土遺物	P 25
Fig.	23 H 区 SD03 出土遺物	P 26
Fig.	24 H 区遺構外（包含層）出土遺物（1）	P 27
Fig.	25 H 区遺構外（包含層）出土遺物（2）	P 28
Fig.	26 H 区遺構外（包含層）出土遺物（3）	P 29
Fig.	27 H 区遺構外（包含層）出土遺物（4）	P 30
Fig.	28 H 区遺構外（包含層）出土遺物（5）	P 31
Fig.	29 H 区遺構外（包含層・表土）出土遺物（6）	P 32
Fig.	30 H 区遺構外（表土）出土遺物（7）	P 33

Fig. 31	I区 SK01・SK02 出土遺物	P 34
Fig. 32	I区 SK04 出土遺物と SK05 出土遺物 (1)	P 35
Fig. 33	I区 SK05 出土遺物 (2)、SK06 出土遺物	P 36
Fig. 34	SK11・SK12 出土遺物	P 37
Fig. 35	I区 SK13 出土遺物	P 38
Fig. 36	I区 SK14 出土遺物と SK15 出土遺物 (1)	P 39
Fig. 37	I区 SK15 出土遺物 (2) と SK16・SK23 出土遺物	P 40
Fig. 38	I区 SK24・SK26・SK29 出土遺物	P 41
Fig. 39	I区 SK29・SK31 出土遺物	P 42
Fig. 40	I区 SK33・SK36 出土遺物と SK39 出土遺物 (1)	P 43
Fig. 41	I区 SK39 出土遺物 (2) と SK40 出土遺物	P 44
Fig. 42	I区 SK42・SK43 出土遺物と SK44 出土遺物 (1)	P 45
Fig. 43	I区 SK44 出土遺物 (2)、1号墓出土遺物、遺構外(包含層)出土遺物 (1)	P 46
Fig. 44	I区 遺構外(包含層)出土遺物 (2)	P 47
Fig. 45	I区 遺構外(表土)出土遺物 (3)	P 48
Fig. 46	I区 遺構外(表土、攪乱)出土遺物 (4)	P 49
Fig. 47	J区 SK02・SK07 出土遺物	P 50
Fig. 48	J区 SK09・SK15・SK16 出土遺物	P 51
Fig. 49	J区 遺構外(表土)出土遺物	P 52
Fig. 50	夜間調査区 SK03・SK29・SK32・SK54	P 54
Fig. 51	J・K・L区夜間調査区	付図III
Fig. 52	夜間調査区 SK49・SK65・SK67	P 55
Fig. 53	夜間調査区 SK02・SK03・SK07・SK08・SK09・SK10・SK13・SK15 出土遺物	P 56
Fig. 54	夜間調査区 SK27・SK28・SK29・SK32・SK45・SK49 出土遺物	P 57
Fig. 55	夜間調査区 SK54・SK58 出土遺物	P 58
Fig. 56	夜間調査区 SK62・SK65・SK67・SK70・SK73・SK74 出土遺物と 遺構外出土遺物 (1)	P 59
Fig. 57	夜間調査区 遺構外出土遺物 (2)	P 60
Fig. 58	L区 SK03・SK04・SK06・SK11・SK14	P 62
Fig. 59	L・M区 遺構全体図	付図III
Fig. 60	L区 SD03・SK05・SK09・SK12	P 63
Fig. 61	M区 SK06・SK08・SK09・SK10	P 64

Fig.	62	M 区 SK02・SK04・SK05・SC01	P 65
Fig.	63	L 区 SK02・SK03・SK04・SK05 出土遺物	P 66
Fig.	64	L 区 SK08・SK11・SK12 出土遺物	P 67
Fig.	65	L 区 SK14・SK15 出土遺物	P 68
Fig.	66	L 区 SK16・SK18・SK19 出土遺物	P 69
Fig.	67	L 区 SD03 出土遺物 (1)	P 70
Fig.	68	L 区 SD03 出土遺物 (2)、SC01 出土遺物	P 71
Fig.	69	L 区 遺構外 (包含層) 出土遺物 (1)	P 72
Fig.	70	L 区 遺構外 (包含層、表土) 出土遺物 (2)	P 73
Fig.	71	M 区 SK04・SK05 出土遺物	P 74
Fig.	72	M 区 SK06・SK07・SK08・SK09 出土遺物	P 75
Fig.	73	M 区 SK10・SK11・SK12・SK13 出土遺物	P 76
Fig.	74	M 区 SK15・SD05 出土遺物と遺構外 (包含層) 出土遺物	P 77
Fig.	75	N・O・P 区 遺構全体図	付図III
Fig.	76	N 区 SC01・SC02・SC03・SK08	P 79
Fig.	77	N 区 SD03・SK02・SK03	P 80
Fig.	78	O 区 SK11・SK12・SK13・SK14・SK17	P 81
Fig.	79	O 区 SK15・SK20	P 82
Fig.	80	N 区 SK01・SK02・SK03・SK05・SK08・SD01 出土遺物	P 83
Fig.	81	N 区 SD02・SD03・SC02・SC04 出土遺物	P 84
Fig.	82	O 区 SK07・SK08・SK11・SK12・SK13 出土遺物	P 85
Fig.	83	O 区 SK13・SK15・SK17・SK18・SK20 出土遺物	P 86
Fig.	84	O 区 SK24・SK25・SK29 出土遺物	P 87
Fig.	85	O 区 SD01・SD02 出土遺物、遺構外出土遺物	P 88
Fig.	86	Q 区 SK01・SK04・SK05・SK07	P 90
Fig.	87	Q 区 遺構全体図	付図III
Fig.	88	Q 区 SK08	P 91
Fig.	89	Q 区 SK01・SK03・SK04・SK05・SK08・SK10・SK11 出土遺物	P 92
Fig.	90	Q 区 SK12・SK13・SK14・SD01 出土遺物と遺構外 (包含層) 出土遺物 (1)	P 93
Fig.	91	Q 区 遺構外 (包含層) 出土遺物 (2)	P 94
Fig.	92	祇園町 4 号出入口 遺構全体図	P 98
Fig.	93	4 号出入口 SK01・SK02 出土遺物	P 99
Fig.	94	4 号出入口 SK03・SK05 出土遺物	P 100

Fig. 95	4号出入口 SK06・SK08・SK09 出土遺物	P 101
Fig. 96	4号出入口 SK10・SK11 出土遺物と SK12 出土遺物(1)	P 102
Fig. 97	4号出入口 SK12 出土遺物(2)と SK17 出土遺物、遺構外(包含層)出土遺物(1)	P 103
Fig. 98	4号出入口遺構外(包含層、攪乱)出土遺物(2)	P 104
Fig. 99	4号出入口遺構外(攪乱層)出土遺物(3)	P 105
Fig. 100	5号出入口 SC01	P 108
Fig. 101	祇園町5号出入口遺構全体図	付図IV
Fig. 102	5号出入口 1号墓・2号墓・3号墓と3号墓出土遺物	P 109
Fig. 103		P 110
Fig. 104	5号出入口 SK01・SK02・SK03・SK04・SK06・SK07 出土遺物	P 111
Fig. 105	5号出入口 SK08・SK09 出土遺物	P 112
Fig. 106	5号出入口 SK10・SK12・SK15 出土遺物	P 113
Fig. 107	5号出入口 SK16 出土遺物	P 114
Fig. 108	5号出入口 SK18・SK22・SK25・SK26・SK27 出土遺物	P 115
Fig. 109	5号出入口 SK28・SK29 出土遺物	P 116
Fig. 110	5号出入口遺構外出土遺物(1)	P 117
Fig. 111	5号出入口遺構外出土遺物(2)	P 118
Fig. 112	房州堀推定地	P 121
Fig. 113	P2出入口 SK04・SK07とSK12出土遺物	P 122
Fig. 114	P2出入口遺構全体図 SD04 土層断面図	付図IV
Fig. 115	P2出入口 SK11・SK17とSK11出土遺物、SK17出土遺物(1)	P 123
Fig. 116	P2出入口 SK32・SK34とSK17・SK32・SK33出土遺物	P 124
Fig. 117	P2出入口 SK36・SK37・SD03・SD04出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(1)	P 125
Fig. 118	P2出入口遺構外(包含層)出土遺物(2)	P 126
Fig. 119	駅前工区全体図	P 130
Fig. 120	駅前工区土層図	付図V
Fig. 121	2号線関係調査区配置図	P 132
Fig. 122	吳服町トレンチ土層図	付図VI
Fig. 123	Aトレンチ 出土遺物(1)	P 133
Fig. 124	Aトレンチ 出土遺物(2)	P 134
Fig. 125	Aトレンチ 出土遺物(3)	P 135

Fig. 126 B トレンチ E-I-a 区 検出遺構 (1/40)	P 136
Fig. 127 B トレンチ 出土遺物 (1)	P 137
Fig. 128 B トレンチ 出土遺物 (2)	P 138
Fig. 129 B トレンチ 出土遺物 (3)	P 139
Fig. 130 B トレンチ 出土遺物 (4)	P 140
Fig. 131 B トレンチ 出土遺物 (5)	P 141
Fig. 132 朝日生命換気塔調査区土層図 (1/60)	P 146
Fig. 133 朝日生命換気塔調査区位置	P 146
Fig. 134 大水道位置図	P 146
Fig. 135 B 換気塔調査区土層図 (1/60)	P 147
Fig. 136 B 換気塔調査区図	P 147
Fig. 137 B 換気塔出土遺物	P 148
Fig. 138 吾服町工区出入口調査地点	P 154
Fig. 139 吾服町工区 A 出入口遺構全体図	P 155
Fig. 140 A 出入口 SK01・SD01・SD01・SD03	P 156
Fig. 141 A 出入口 SD02	P 157
Fig. 142 A 出入口 SD04・SD05	P 158
Fig. 143 A 出入口 SD01 出土遺物	P 159
Fig. 144 A 出入口 SD02 出土遺物と SD03 出土遺物 (1)	P 160
Fig. 145 A 出入口 SD03・SD04・SD05 出土遺物と SD07 出土遺物 (1)	P 161
Fig. 146 A 出入口 SD07 出土遺物 (2) と SK01 出土遺物	P 162
Fig. 147 A 出入口 遺構外出土遺物 (1)	P 163
Fig. 148 A 出入口 遺構外出土遺物 (2)	P 164
Fig. 149 B 出入口 土層図	P 165
Fig. 150 B 出入口 遺構全体図	P 165
Fig. 151 B 出入口 SK01・SD01	P 166
Fig. 152 B 出入口 SK01・SK09・SK10・SK11・SD01 出土遺物と 遺構外 (包含層) 出土遺物 (1)	P 167
Fig. 153 B 出入口 遺構外 (包含層) 出土遺物 (2)	P 168
Fig. 154 B 出入口 遺構外 (包含層) 出土遺物 (3)	P 169
Fig. 155 B 出入口 遺構外 (包含層) 出土遺物 (4)	P 170
Fig. 156 B 出入口 遺構外 (包含層) 出土遺物 (5)	P 171
Fig. 157 B 出入口 遺構外 (包含層・表土) 出土遺物 (6)	P 172

Fig. 158	具服町工区 C 出入口遺構全体図 (1/100)	P 173
Fig. 159	C 出入口西壁土層断面図	P 173
Fig. 160	C 出入口 SD03・SK03	P 174
Fig. 161	C 出入口 SE03・SE16・SE13・SE14・SE15・SE17・SE18	P 175
Fig. 162	C 出入口 SK01・SK02 出土遺物と SK02・SK03	P 176
Fig. 163	C 出入口 SK03 出土遺物	P 177
Fig. 164	C 出入口 SK11 と SK11 出土遺物	P 178
Fig. 165	C 出入口 SE01、SE03、SE04、SE05、SE07 出土遺物	P 179
Fig. 166	C 出入口 SE08・SE09・SE14 出土遺物	P 180
Fig. 167	C 出入口 SE15・SE16・SE17・SE18・SD02 出土遺物	P 181
Fig. 168	C 出入口 SD03 出土遺物 (1)	P 182
Fig. 169	C 出入口 SD03 出土遺物 (2)	P 183
Fig. 170	C 出入口 97 号ピット、石組遺構出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物 (1)	P 184
Fig. 171	C 出入口遺構外(包含層)出土遺物 (2)	P 185
Fig. 172	C 出入口遺構外(包含層・攪乱)出土遺物 (3)	P 186
Fig. 173	C 出入口遺構外(攪乱)出土遺物 (4)	P 187
Fig. 174	箱崎馬出遺跡群と調査区位置図	P 197
Fig. 175	馬出東工区 1~7 ブロック遺構全体図	付図Ⅶ
Fig. 176	馬出東工区 8、11、12 ブロック遺構全体図	付図Ⅷ
Fig. 177	馬出東・西工区 9、10 ブロック遺構全体図	付図Ⅸ
Fig. 178	SE12・SE13・SE14・SE18・SE19	P 199
Fig. 179	SE12・SE13 出土遺物	P 200
Fig. 180	SE13・SE14・SE18・SE25 出土遺物	P 201
Fig. 181	SE25・SE28・SE33・SE42	P 202
Fig. 182	SE30・SE33・SE35・SE36・SE37・SE38・SE39・SE40・SE41	P 203
Fig. 183	SE18・SE19・SE28・SE35 出土遺物と SE30・SK203・SK303 出土遺物	P 204
Fig. 184	SK30・SK59・SK203 と 1 号中世墓	P 205
Fig. 185	SD12・SE13 と SX01	P 206
Fig. 186	SD01・SD12・SD13 出土遺物	P 207
Fig. 187	SD13 出土遺物	P 208
Fig. 188	SD13・SX01・SS01・SS02 出土遺物	P 209
Fig. 189	SS01	P 210
Fig. 190	SK121・SK145・SK180・SK196 と SX02・SX07・SX08・SX10	P 211

Fig. 191 SK04・SK07・SK08・SK10・SK16・SK21 出土遺物	P 212
Fig. 192 SK21・SK70・SK83・SK85・SK90・SK97・SK112・SK113・SK127・SK143 出土 遺物	P 213
Fig. 193 SK143・SK164・SK194・SK266・SK273・SK302・SK308・SK315 出土遺物	
	P 214

写真図版目次

- 巻頭図版 1. 吉服町 B トレンチ出土金銅仏 2. 吉服町 C 出入口 SK03 3. SK03 出土遺物
4. 象嵌青磁 5. 青磁 6. 青磁 7. 青磁 8. 青白磁 9. 天目碗 10. 天
目碗 11. 緑釉・三彩
- PL. 1 博多遺跡群遠景
 2 1. I 区調査風景 2. I 区調査風景 3. 夜間調査区表土剥ぎ風景
 3 1. N 区調査風景 2. L 区調査風景 3. Q 区調査風景
 4 1. H-I 区全景 2. H-I 区全景
 5 1. H-III 区全景 2. H-III 区全景
 6 1. H 区 SD01 2. H 区 SD01
 7 1. H 区 SK07 2. H 区 SK07 3. H 区 SK07
 8 1. I-I 区下面 2. I-I 区上面
 9 1. I-II 区下面全景 2. I 区 SD01
 10 1. I 区 1 号墓 2. I 区 2 号墓
 11 1. I 区 SK25 2. I 区 SK28, 29, 30 3. I 区 SK29 遺物出土状況
 12 1. L 区 SK14 2. L 区 SK14 遺物出土状況
 13 1. M-II 区全景 2. M 区 SC01
 14 1. N 区 SC01 2. N 区 SC03 3. N 区 SC03
 15 1. N 区 SD02, 03, SK01 2. N 区 SD02, 03
 16 1. N 区 SD03 遺物出土状況 2. N 区 SK01 3. N 区 SK02 4. N 区 SK05
 17 1. O 区 SK11 2. O 区 SK15
 18 1. Q 区遺構全景 2. Q 区 SK01 3. Q 区 SK07
 19 1. 紙屋町工区出土遺物 (1)
 20 1. 紙屋町工区出土遺物 (2)
 21 1. 紙屋町工区出土遺物 (3)

- 22 1. 紙園町工区出土遺物 (4)
23 1. 4号出入口遺構全景 2. 4号出入口遺構全景
24 1. 4号出入口出土遺物
25 1. 5号出入口調査風景 2. 5号出入口 SC01
26 1. 5号出入口 1号墓 2. 5号出入口 2号墓
27 1. 5号出入口 3号墓 2. 5号出入口 3号墓遺物出土状況
28 1. 5号出入口出土遺物 (1)
29 1. 5号出入口出土遺物 (2)
30 1. P₂出入口 A区調査風景 2. P₂出入口全景
31 1. P₂出入口 SD03 2. P₂出入口 SD03
32 1. P₂出入口 C区全景 2. P₂出入口 SD03 土層断面 3. P₂出入口 SK04
33 1. P₂出入口出土遺物
34 1. 呉服町交差点遠景 2. 呉服町工区 Bトレンチ検出遺構
35 1. 呉服町工区 Bトレンチ土層合成写真
36 1. 呉服町工区 Aトレンチ土層合成写真
2. 呉服町工区 Cトレンチ土層合成写真
37 1. 呉服町工区トレンチ出土遺物 (1)
38 1. 呉服町工区トレンチ出土遺物 (2)
39 1. B換気塔調査風景 2. 朝日生命換気塔調査区
40 1. 朝日生命換気塔土層断面 2. 朝日生命換気塔土層断面
41 1. A出入口調査風景 2. A出入口調査風景 3. C出入口調査風景
42 1. A出入口 SD02 2. A出入口 SD02 3. A出入口 SD02 遺物出土状況
43 1. A出入口 SD02 2. A出入口 SD02
44 1. A出入口 SD02 2. A出入口 SD02 部分
45 1. A出入口 SD03 2. A出入口 SD03
46 1. A出入口 SD03 遺物出土状況 2. A出入口 SD04、05
47 1. A出入口 SD04、05 2. A出入口 SK01
48 1. B出入口工区全景 2. B出入口II区全景
49 1. B出入口 SD01 2. B出入口 SD01 土留状況
50 1. B出入口 SD02 と杭列 2. B出入口 SK09
51 1. B出入口 SK09 遺物出土状況 2. B出入口 SK09 しゃもじ形木製品出土状況
52 1. C出入口 SK03 調査風景 2. C出入口 SK03
53 1. C出入口 SK03 2. C出入口 SK03 創葬品出土状況

- 54 1. C出入口 SD02 と SK11 2. C出入口 SK11 遺物出土状況
- 55 1. C出入口 SD03 2. C出入口 SD03 遺物出土状況
- 56 1. C出入口 SK07 2. C出入口 SK02 3. C出入口 ピット群
- 57 1. C出入口 SE03 2. C出入口 SE07 3. C出入口 SE07 部分
- 58 1. C出入口 SE04 2. C出入口 SE13、14 3. C出入口 SE15、18
- 59 1. C出入口 SE15 2. C出入口 SE16 3. C出入口 SE17
- 60 1. 呉服町出入口出土遺物（1）
- 61 1. 呉服町出入口出土遺物（2）
- 62 1. 呉服町出入口出土遺物（3）
- 63 1. 呉服町出入口出土遺物（4）
- 64 1. 9ブロック調査風景 2. 10ブロック調査風景
3. 11ブロック近世墓調査風景
- 65 1. 2ブロック調査区全景 2. 6ブロック調査区全景
3. 6ブロック調査区全景
- 66 1. 8ブロック調査区全景 2. 8ブロック調査区全景
3. 9ブロック調査区全景
- 67 1. 10ブロック上部遺構全景 2. 10ブロック上部遺構 3. 10ブロック上部遺構
- 68 1. 10ブロック下部遺構全景 2. 10ブロック下部遺構 3. 10ブロック下部遺構
- 69 1. 11ブロック全景 2. 11ブロック全景
- 70 1. 10ブロック SX02 遺物出土状況 2. 10ブロック SX02 完掘後
3. 12ブロック SX07
- 71 1. 11ブロック 井戸群 2. 11ブロック SE30 3. 11ブロック SE33
- 72 1. 11ブロック SE35 2. 11ブロック SE37 3. 11ブロック SE39
- 73 1. 9ブロック SD13 2. 9ブロック SD13 遺物出土状況
3. 10ブロック SK203 4. 12ブロック SK305
- 74 1. 箱崎馬出遺跡出土遺物（1）
- 75 1. 箱崎馬出遺跡出土遺物（2）
- 76 1. 箱崎馬出遺跡出土遺物（3）

I 地下鉄路線内遺跡調査概要



Fig.1 高速鉄道路線内遺跡地図 (1/75,000) 原図、国土地理院 5万分の1地形図「福岡」

高速鉄道路線内遺跡調査の概要

昭和 51 (1976) 年 8 月に地下鉄路線内遺跡の調査として、西新町遺跡の調査にまず着手した。以後、地下鉄工事各工区の発注とともに、Tab. 1 のように各遺跡の発掘調査が進められ、昭和 59 (1984) 年 4 月の博多遺跡群における祇園駅 P-2 出入口地点の調査をもって、路線内遺跡の調査は完了した。

この間、地下鉄工事も順調に進行し、昭和 58 (1973) 年 3 月の 1 号線の開通に続き、昭和 61 (1986) 年 1 月には、2 号線箱崎九大前駅まで、更に同年 11 月には貝塚駅までの 2 号線全線が営業運転を開始し、今やまさに福岡市における交通網の大動脈として、市民にとって不可欠の足としてその機能を發揮している。今後更に福岡空港までの延長も具体化し、都市交通体系の花形として、その存在はますます脚光を浴びることになろう。

この地下鉄開通という具体的な成果とともに、発掘調査で得られた考古学的な成果も、福岡市の歴史的重要性を明らかにする上で極めて価値の高いものであった。これらについては下記の如く順次発掘調査報告書を作成してきたところであり、今回の冊をもって一応完結する。

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書

I	「藤崎遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 62 集	1981
II	「西新町遺跡」	第 79 集	1982
III	「福岡城址 内堀外壁石積の調査」	第 101 集	1983
IV	「博多 高速鉄道関係調査 (1)」	第 105 集	1984
V	「博多 高速鉄道関係調査 (2)」	第 126 集	1986
VI	「博多 高速鉄道関係調査 (3)」	第 156 集	1987
VII	「博多 高速鉄道関係調査 (4) 箱崎・馬出遺跡」	第 193 集	1988

この他、「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 80 集 1982 に藤崎駅舎部 A・B 出入口の調査成果については収録している。

藤崎遺跡、西新町遺跡では弥生時代中期を中心とする斂棺墓地が広い範囲で検出され、また藤崎遺跡では古墳時代初頭の方形周溝墓群が、西新町遺跡ではほぼ同時期の堅穴式生居址群が検出され、早良平野の海岸部砂丘上に、内陸部とは性格の異なる特定集団の存在した可能性が指摘されるなど多大な成果が得られた。

福岡城址、内堀石垣調査では明治末年に埋め立てられた石垣が 70 年余ぶりのその姿を現わした。福岡城の縄張りの一端が明らかになり、また数度の修復があることも確認された。この石垣裏には、鴻臚館跡地から築城時に削り出された粘土が用いられており、鴻臚館に由来する多量の瓦と、越州窯青磁等の中国陶磁が含まれていた。福岡城のみならず奈良・平安時代にお

ける鴻臚館の活動内容の一端まで窺い知ることができた。1987年末から翌年1月にかけて、福岡市教育委員会が行った平和台球場外野席の発掘調査で、福岡城および鴻臚館跡の具体的な様相は更に明らかにされつつある。

博多遺跡群、箱崎馬出遺跡群については本書の中で触れているので述べないが、古代末から中世に至る貿易港をひかえた都市遺跡としての性格を如実に示している。

これらの遺跡の調査は、市街地化していた博多湾岸部砂丘地帯にも良好な形で遺跡が残っていることを明らかにし、のちの周辺部調査の嚆矢となっている。

これらの調査にあたっては多くの方々の御指導、御協力があったことは言うまでもない。これらの方々の御氏名を明記し、謝意を表したいが、何分にも多人数のため漏れを恐れ、敢えて割愛させていただきたい。昭和62年度整理報告に関する組織のみ記しておく。

福岡市交通局一調査委託

交通事業管理者 西津茂美 理事 日原節夫・平山幸生

総務部長 松木 健 総務課長 溝川常博

建設部長 松下征雄 工事課長 川口広恭

設計課長 萩原兼秀

計画課長 土師祥正 計画第1係長 磯野通雄

福岡市教育委員会一調査主体

教育長 佐藤善郎 文化部長 川崎賢治

埋蔵文化財課長 柳田純孝 第1係長 折尾 学

事務担当 松延好文 整理担当 折尾 学、浜石哲也、池崎謙二、小畑弘己

Tab. 1 地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名	項	所 在 地	時 代	性 格	調査期間	調査面積	備 考
新 城 遺 蹟		西区嘉穂町西区役所前	弥生時代	共 同 墓 地	昭和52年4月 ～昭和53年6月	4,925m ²	
(新 基 工 代)		西区堅粕前	新石器時代 ～古墳時代	生 活 痕 達	昭和52年12月 ～昭和53年6月	920m ²	堅粕と西新町 に入る
西 新 町 遺 蹟		西区堅粕高島前	#	共 同 墓 地	昭和51年8月 ～昭和53年1月	6,230m ²	
福岡城城址・石垣		中央区宮川・大学門・平和台・赤坂	古戸時代	遺 石 垣	昭和51年12月 ～昭和52年9月	14,900m ²	
福岡城東院新田石垣		中央区天神(旧東院前)	#	武家の野と常連宿 人頭とを分けた施設	昭和53年2月 ～昭和53年6月	500m ²	
博 多 遺 蹟 群	具 服 街 1 区	博多区・土器町・糸綱町・糸綱町・蓮池 (旧電車通り)	平安 ～奈良時代	中 世 の 遺 町	昭和53年1月 ～昭和56年3月	200m ²	
	店 鹿 街 工 区	博多区卯塙町守東長寺前	#	中世の舞多の街	昭和52年12月 ～昭和54年12月	1,832m ²	
	瓦 国 街 1 区	博多区馬場新町	#	#	昭和42年2月 ～昭和50年4月	4,500m ²	
	博 多 遺 蹟 群	博多区博多駅前	織 織 ～室町時代	#	昭和54年12月 ～昭和55年3月	4,500m ²	
	箱 崎 馬 出 遺 蹟	東区塙町宮参道・馬出	織 織 ～室町時代	瓦崎前街	昭和57年4月 ～昭和58年12月	約5,000m ²	

博多遺跡群

— 地下鉄路線内の調査(4) —



第1章 博多遺跡群における発掘調査概要

博多遺跡群 (Fig. 2) は、福岡県博多区に所在し、那珂川と石堂川（御笠川、旧比恵川）の沖積作用によって生じた沖の浜、博多浜（櫛田浜）と呼ばれる二つの砂丘（洲）に立地しており、旧那珂郡に属す。近世城下町としての「福岡」に対する商業都市「博多」を示す地域とほぼ等しく、これらよりもなおさず中世港湾都市の中心域を占めていたものと思われる。

博多が日本における海外先進文化流入の門戸として果たした役割の重要性については、主に文献史学の立場から多くの先覚が言及されており、他言を要しない。また考古学的立場からも中山平次郎、岡崎敬氏らをはじめとする研究がなされている。しかしながら、昭和40年代までは本格的な調査が行なわれておらず、博多遺跡群の内容、広がり等は具体的に把握することが困難な状況であった。

博多における本格的な発掘調査の嚆矢となったのは地下鉄1号線店屋町工区の調査（草末文献3）であった。その予想を上回る成果をもとに、各種開発に係る発掘調査体制は整備され、現在まで、Tab. 2 に示すように多くの発掘調査が行なわれてきた。その結果、博多における考古学的な視座を点から線へ、更に面から立体にまで広げることが可能になりつつある。しかし各調査の整理作業は充分に進行しておらず、それらのまとめはこれからのことであるが、その概要を記しておきたい。

博多遺跡群は平安時代末から戦国時代までを中心とし、更には江戸時代を経て現在に到るまでの都市遺跡としての性格がまず挙げられる。しかし遺跡としては弥生時代中期まで遡り、甕棺墓地の形成や、集落も見られる。古墳時代には前方後円墳（28次）や方形周溝墓（17、27次）をはじめ、古墳時代初頭の集落址や墓地が見られる。奈良時代～平安時代の律令期については良好な遺構は多くないものの、石塔、帶金具をはじめ須恵器、土師器、越州窑青磁、長沙窑陶器、製塩土器等が地点によっては多く出土しており官衙的施設の存在も推定されている。このように博多遺跡群は弥生時代から現在まで、連続として人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。

博多における歴史地理的な変遷も、文献史学、地理学方面との連繋もあり、徐々に明らかにされつつある。「袖の湊」に関しては「袖の湊平清盛整備説」とともに「袖の湊與服町交差点説」がほぼ定説となっていたが、地下鉄関係の與服町交差点の調査では、11～12世紀代の建物、側溝、墓などが検出され、「袖の湊與服町交差点説」は否定された。しかしその周辺の調査（16、29次）では、交差点の東西に低湿地があり、15～16世紀頃に徐々に埋め立てられていたことが明らかにされ、Fig. 2 の等高線に見られるように、沖の浜側に通じる陸橋のような地形をなしていたことが明らかになった。現在のところ両側の入り江状低湿地が「袖の湊」跡と考え易い。また沖の浜の形成時期も碇石の出土したこと（5次）によって、平安時代と推察される。

出土遺物は調査地点によっては諸相に変化があるものの、その種類、量ともに豊富であり、人々の豊かな生活ぶりを彷彿させるに充分である。なかでも中国製品を中心とする貿易陶磁の量と種類の多さは特筆すべきであり、国際貿易都市博多の性格を見事に代弁しているといえる。浙江・福建・廣東省を中心にそれらの産地も様々である。これら貿易陶磁の中には墨書をもつ例が少なからず含まれ、中国人姓と認められるものも多い。これらは地点毎に姓の偏りがあり、中国商人の居留地であった「宋人百堂」「大唐街」などの伝承を裏付けるものである。また、白磁を山の如く廃棄した地点（14次）や、同種の青磁碗、皿を大量に一括廃棄した井戸（店屋町工区出入口2・3）など、陶磁器を取り扱っていたと思われる商人の存在をうかがわせる出土状態も見られる。

長期にわたる都市遺跡であり、人々のエネルギーッシュな営みによって様々な遺構が刻まれている。井戸および廃棄物処理土壌の密度は疊まじく、複雑に互いに切り合って、遺構、遺物の把握を困難なものにしており、町屋等の建物群は殆ど復元されていないのが実情である。しかしながら、溝および道路等については比較的明瞭に見えられている。35次調査では幅6m程の両側に側溝をもつ室町～戦国期の道路が出土し、少なくとも6回の道路改修が行なわれていることが明らかになっている。また町割りに関すると思われる溝、道路等も各地点で見られ、現在までのところ、鎌倉時代末までの南北の町割、35次調査の道路に見られる町割、戦国時代末以降の太閤町割と、3回の町割の変遷が推定される。

博多遺跡群開埋蔵文化財調査報告書（Tab.2 の報告書番号に一致する）

1	『博多 I』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集	1981
2	『博多 II一図版編』	第86集	1982
3	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 IV』	第105集	1984
4	『博多 III』	第118集	1985
5	『博多 IV』	第119集	1985
6	『博多 V』	第120集	1985
7	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 V』	第126集	1986
8	『博多 VI』	第144集	1986
9	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VI』	第156集	1987
10	『博多 VII』	第147集	1987
11	『博多 VIII』	第148集	1987
12	『博多 IX』	第149集	1987
13	『博多 X』	第150集	1987
14	『中部地区埋蔵文化財報告 II』	第146集	1987
15	『博多 XI』		1988
16	『博多 XII』		1988
17	『博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 I 』	1988	
18	『博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 II』	1988	
19	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VII』	1988	

Table. 2 博多遺跡群調査地点一覧 (昭和63年3月現在)

公共事業関係

序号	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m ²)	調査期間	報告書	備考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	76.12~77.11	3.7	店屋町工区
B	7833	#	御供所町外	4,500	79.3~12	9	紙園町工区
C	7835	#	店屋町・上呂駅町外	200	78.11~79.5	19	典居町工区
D	7949	#	博多駅前一丁目外	4,500	79.12~80.8	19	駅前工区
E	8037	#	上呂駅町	100	81.3	19	典居町換気塔
F	8038	#	冷泉町・紙園町	435	80.10~12	3	紙園町P2号出入口
G	8148	#	御供所町	70	81.9	19	紙園町4号出入口
H	8149	#	紙園町	184	81.10~11.19	19	紙園町5号出入口
I	8150	#	上呂駅町・中呂駅町・網島町・店屋町	380	81.4~5	19	典居町出入口
J	8435	#	博多駅前二丁目	215	84.4	19	紙園町P2号出入口
K	8224	道路拡幅	上呂駅町	630	82.11~83.3	17	美港線1次
L	8331	#	#	564	84.2~9	19	美港線2次
M	8404	#	#	417	85.2~12	19	美港線3次
N	8527	#	御供所町	383	85.12~86.6	19	美港線4次
O	8653	#	#	380	86.10~11 87.2~10	19	美港線5次

民間事業関係

次	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m ²)	調査期間	報告書	備考
1	7810	跡骨堂建設	御供所町・東貴寺境内	360	79.11~80.1	本調査	
2	7928	ビル建設	店屋町99	約100	79.4	立会・土解因作成	
3	7929	納骨堂建設	紙園町・萬行寺境内	240	79.11	本調査	
4	7930	ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12~80.3	1.2	本調査
5	7931	ビル建設	下呂駅町T346	10	79.12	試掘調査、地表下4.5mから鍾乳石出土	
6	7932	ビル建設	冷泉町155他	640	80.3~4	本調査	
7	8023	ビル建設	紙園町130	210	80.6~8	本調査	
8	8024	本家建設	御供所町・東長寺境内	600	80.8~10	本調査	
9	8025	ビル建設	下呂駅町75		80.9	試掘調査	
10	8026	ビル建設	冷泉町474-9	54	80.12	1	本調査
11	8027	ビル建設	御供所町3-30		80.12	試掘調査	
12	8127	ビル建設	中島町152、153		81.6	試掘調査	
13	8128	ビル建設	駅前1丁目121~127	30	81.7	トレンチ調査	
14	8129	ビル建設	店屋町1-15	255	81.7~9	本調査	
15	8130	駐車場建設	上呂駅町369	100	81.8	試掘調査	
16	8131	ビル建設	店屋町246~248	150	81.9	本調査	
17	8132	ビル建設	駅前1丁目98	910	81.11~82.2	4	本調査
18	8156	ビル建設	駅前2丁目8-14	10	82.1	試掘調査	
19	8323	社務所建設	御田神社境内	200	83.4	本調査	
20	8324	ビル建設	駅前1丁目99	960	83.4	4	本調査
21	8325	ビル建設	駅前1丁目18-1	150	83.5	4	本調査
22	8327	ビル建設	冷泉町159他	840	83.9	4	本調査
23	8334	本堂建設	対宮守護院	約300	84.2	本調査	
24	8433	ビル建設	冷泉町1-1	250	84.4~5	5	本調査
25	8434	ビル建設	紙園町1-1	100	84.5~6	6	本調査
26	8506	ビル建設	上呂駅町34	134	85.5~6	8	本調査
27	8507	ビル建設	紙園町1-11	350	85.5~6	14	本調査
28	8508	ビル建設	御供所町70-2	1,800	85.5~6	10	本調査
29	8509	ビル建設	御供所町22-67	330	85.7~9	11	本調査
30	8605	ビル建設	御供所町36、37、38、39	496	86.5~7	12	本調査
31	8606	ビル建設	御供所町65、66	190	86.5~7	13	本調査
32	8608	ビル建設	紙園町21-1	約1,000	86.5~7	本調査	
33	8619	ビル建設	紙園町5他	898	86.7~11	15	本調査
34	8645	ビル建設	冷泉町238-2外	40	86.10~11	本調査	
35	8648	ビル建設	上呂駅町56	655	86.11~	10	本調査
36	8687	ビル建設	紙園町83外	506	87.8~10	本調査	
37	8687	ビル建設	博多駅前1丁目129外	1,427	87.12~88.3	本調査	

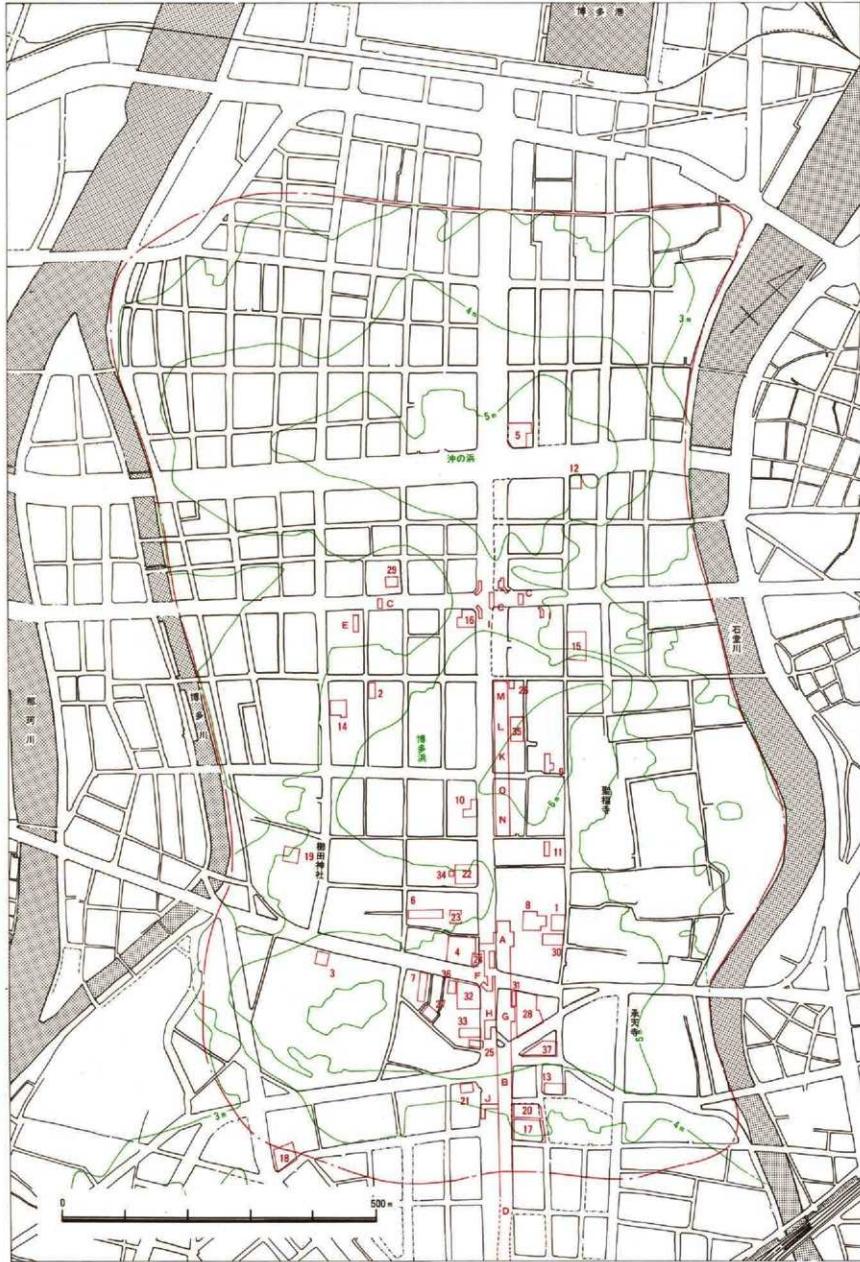


Fig.2 博多造跡群地形図 (1/600)

— 横多造跡群範囲
— 調査地点(符号、数字はTab.2に一致)
— 現在の等高線

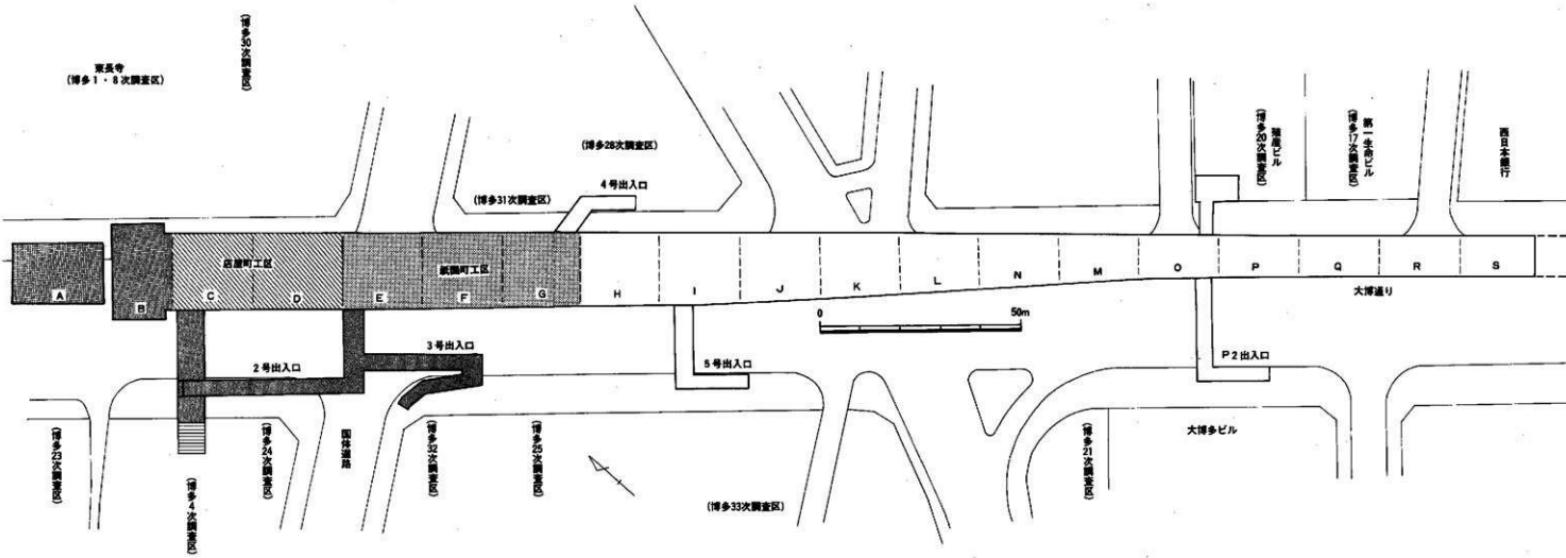


Fig. 3 博多地区群地下鉄1号線関係調査区(店屋町・紙園町工区)全体図 (1/1000)

第2章 祇園町工区本体部の調査 遺跡番号 HKT S-2 調査番号 7833

1. H・I・J区の調査 (Fig. 4-49 PL. 2-11)

祇園駅各部の調査で調査区幅は 13m、J区付近から博多駅方面に向って徐々に狭くなる。この付近は以前より博多駅前の商家などが建ち並んでいたところで、様々な生活活動が行なわれた。祇園町交差点付近から南側にかけては地山の白色砂層までが浅く井戸、廃棄物処理土壌など大きな掘方をもつ遺構の密度が高いため、切りあいが甚しい。全体的な様相はこれまでに報告した A~G 区とほぼ同様で、近世、近代を除けば平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構、遺物が多い。弥生時代中期の甕棺墓はほぼ姿を消し、古墳時代初頭の土師器が増え、堅穴式住居址などの遺構も検出される。この傾向は特に南下するに従って顕著である。古墳時代後期の墓も見られ (I 区 1・2 号墓)、周辺調査区の調査結果でも博多 1 号墳 (28 次) など前方後円墳が発見され、一帯が特定集団の墓域であったと思われる。奈良時代から平安時代前半にかけての遺物が多い。須恵器、土師器等に越州窯青磁も多數出土しているが、残念なことに明確な遺構はない。中世の遺構は密度が濃い。円形の桶組井戸、廃棄物処理土壌がほとんどである。柱穴も多いが、組織的な把握は困難で建物の復元はできない。溝は H 区、I 区でほぼ東西方向をとるもののが検出されている H 区北端で検出された幅のせまい溝は数条が平行して走り、一部切合いが認められる。数次の造り替えがあったものであろう。I 区検出の溝は幅の広いものである。現在の町筋と全く異なるこの東西、南北方向をとる溝は、A 区から夜間調査区にかけて検出されており、その廃絶年代は 14 世紀前半である。この溝は博多の古い町筋を把握する上で重要な遺構である。

出土遺物は多様で、実測図を掲げた遺物は遺構毎にまとまりのあるもの、重要と思われるものを中心にしている。誌面の都合上、遺構と同様に遺物のデータを今回は掲載できなかった。実測図で判断しにくいものについてのみ触れておく。1059~61 は近世土師器、1091 は青白磁香炉、1144 は陶器碗、1148 は青磁碗、1147 は白磁碗、1149 は滑石製品、1155 は白磁碗、1161 は青白磁碗、1156 は青白磁梅瓶、1173 は滑石製石鍋、1378 は近世土師質壺、1264 は瓦玉、1377 は土馬、1315 は陶器碗、1360、61 は龍泉窯系青磁双層碗、1354 は越州窯青磁、1355~58 は高麗青磁碗、1411 は中国製綠釉陶器壺、1415 は土師質十能、1468 はガラス製環、1474、75 は高麗青磁、1499 は青磁香炉、1510 は高麗青磁碗、1521 は陶器碗、1608 は高麗青磁碗、1609 は越州窯系青磁碗、1610 は陶器把手、1620 は土師質土鍋、1623 は磁灶窯系黒釉陶器軍持、1683 は焼台 (いて)、1703・04 は白磁蓋、1157 は高麗または越州窯青磁、1746 は陶器こね鉢、1800 は土師壺、1764 は須恵器杯、1952 は越州窯青磁か、1957 は李朝白磁碗。

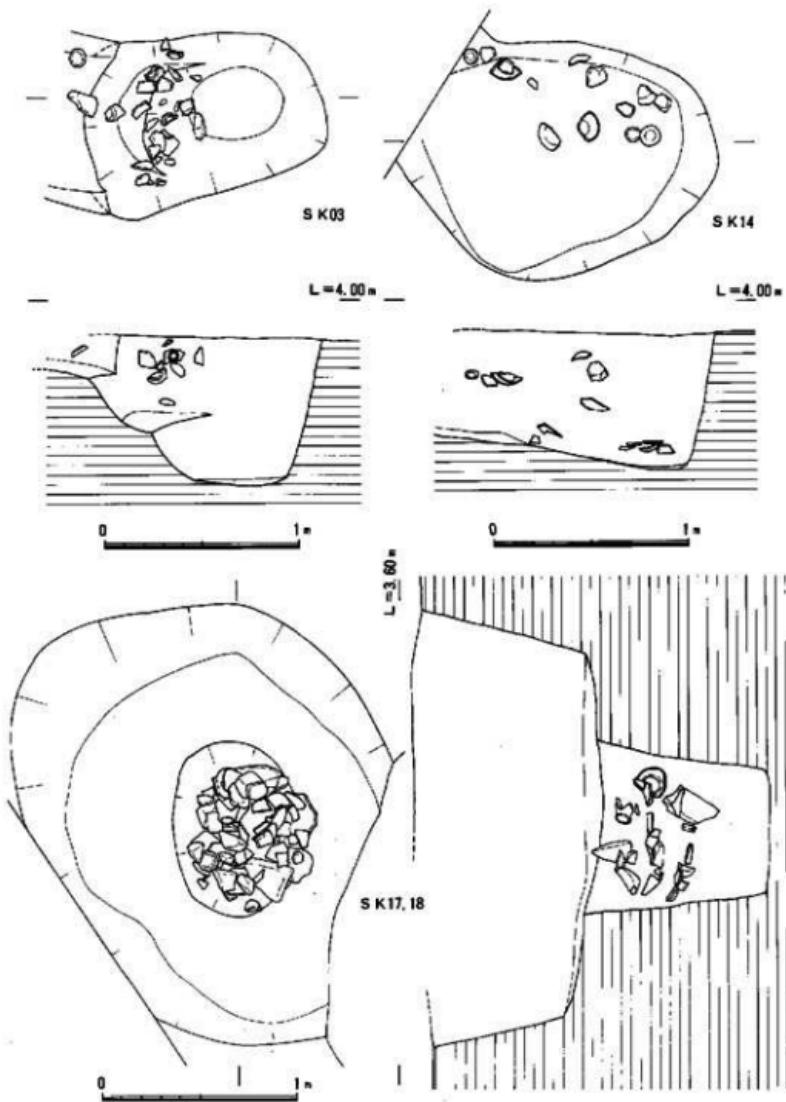


Fig.4. H区 SK03, 14, 17, 18

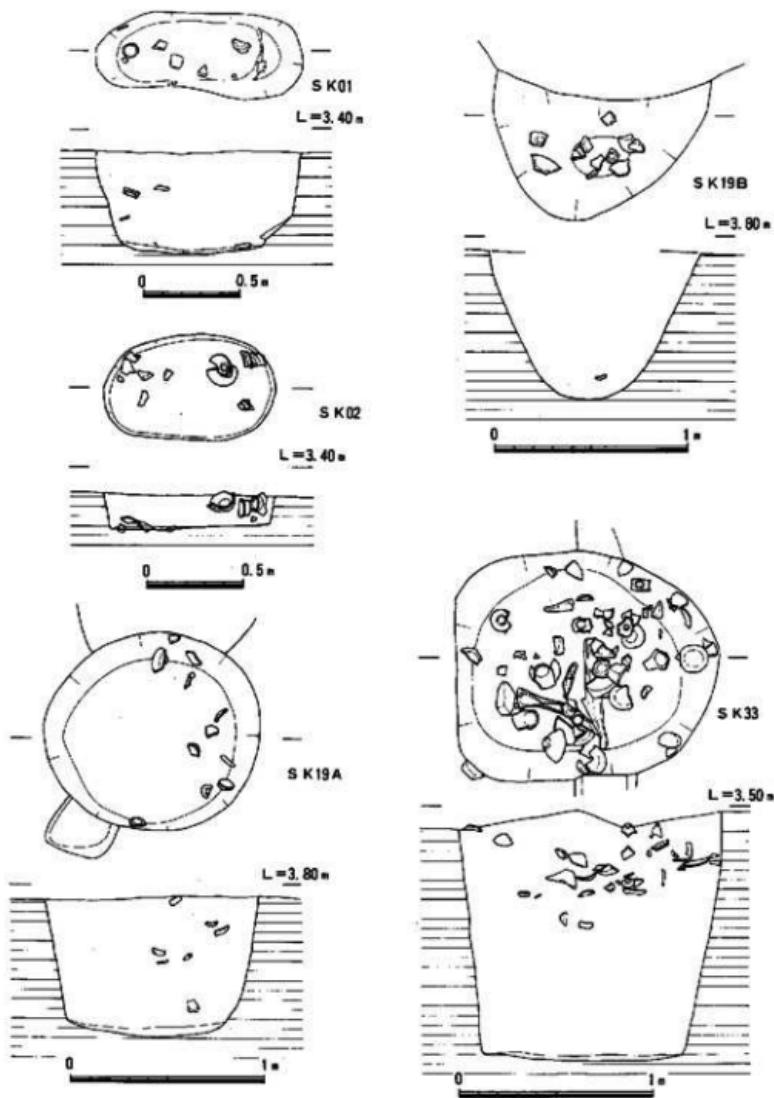


Fig.8 H区 SK01, SK02, SK19A, SK19B, SK33

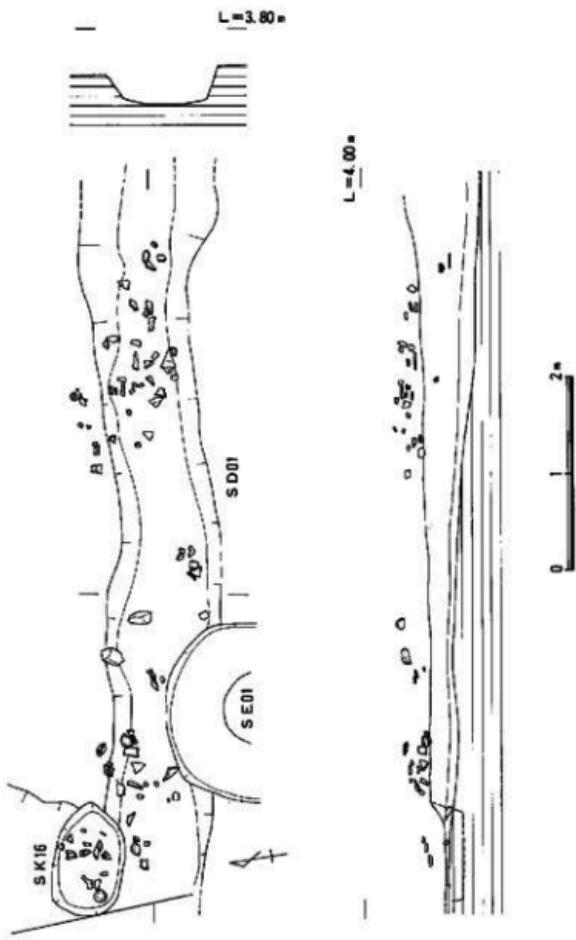


Fig.9 H区 SK16, SD01

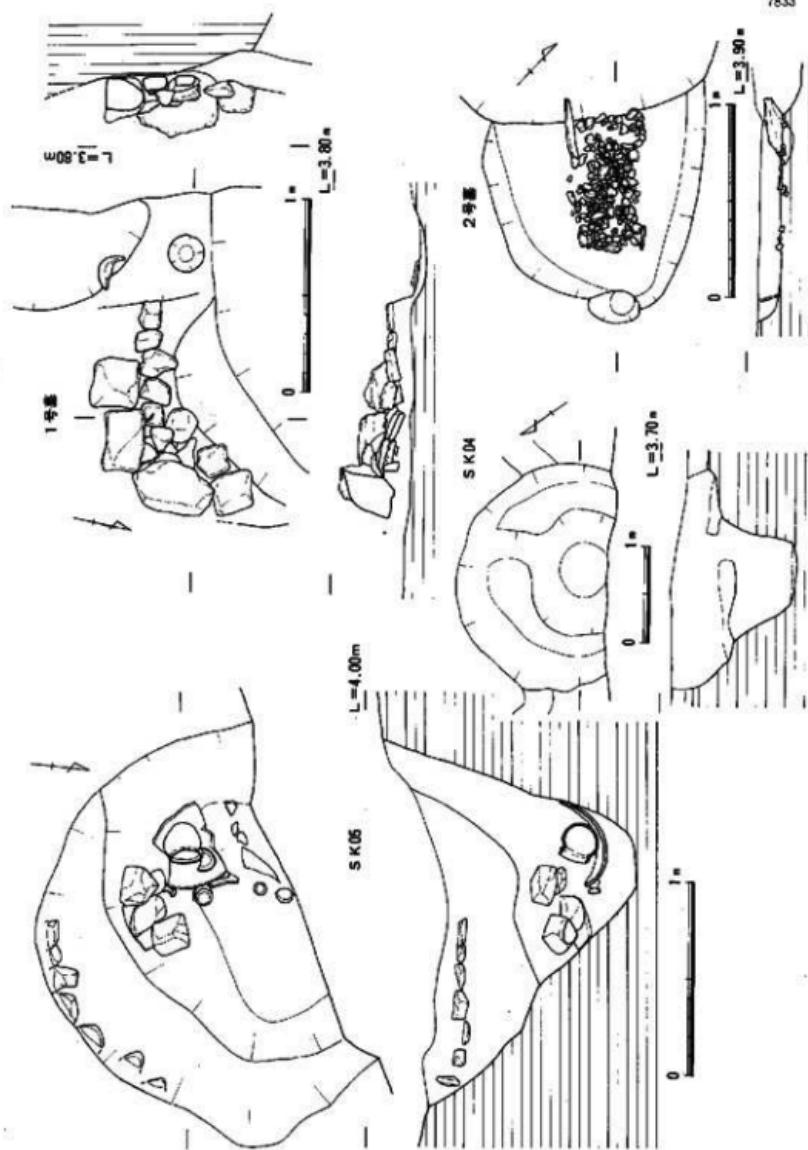


Fig.10 I区 1号墓 2号墓 SK04,SK05

7833

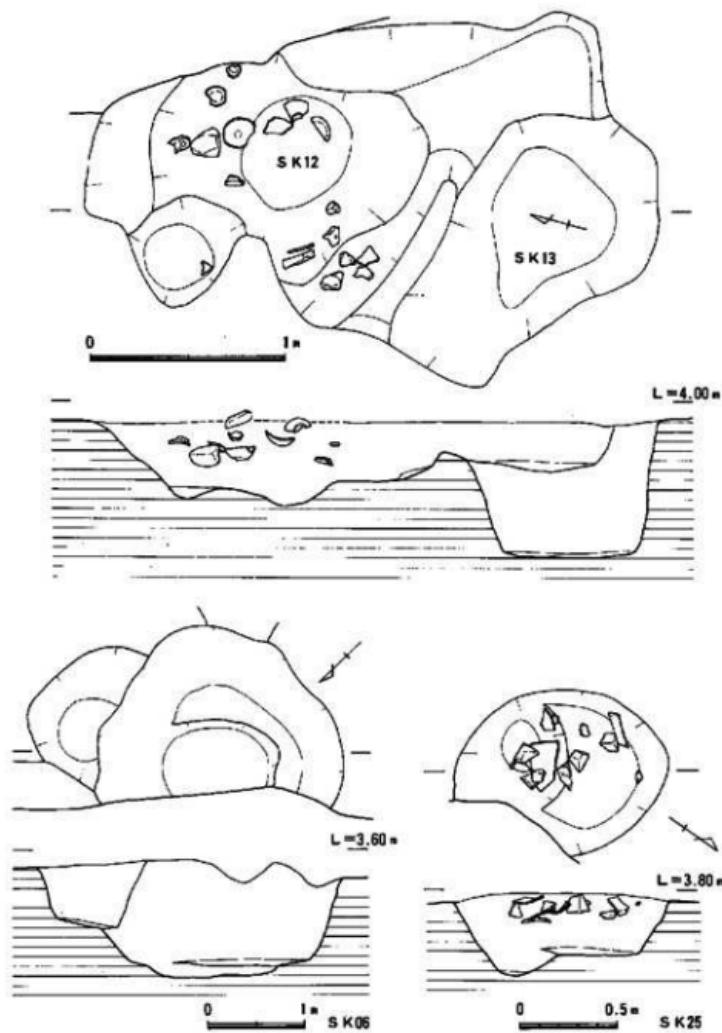


Fig.11 II SK06,SK12,SK13,SK25

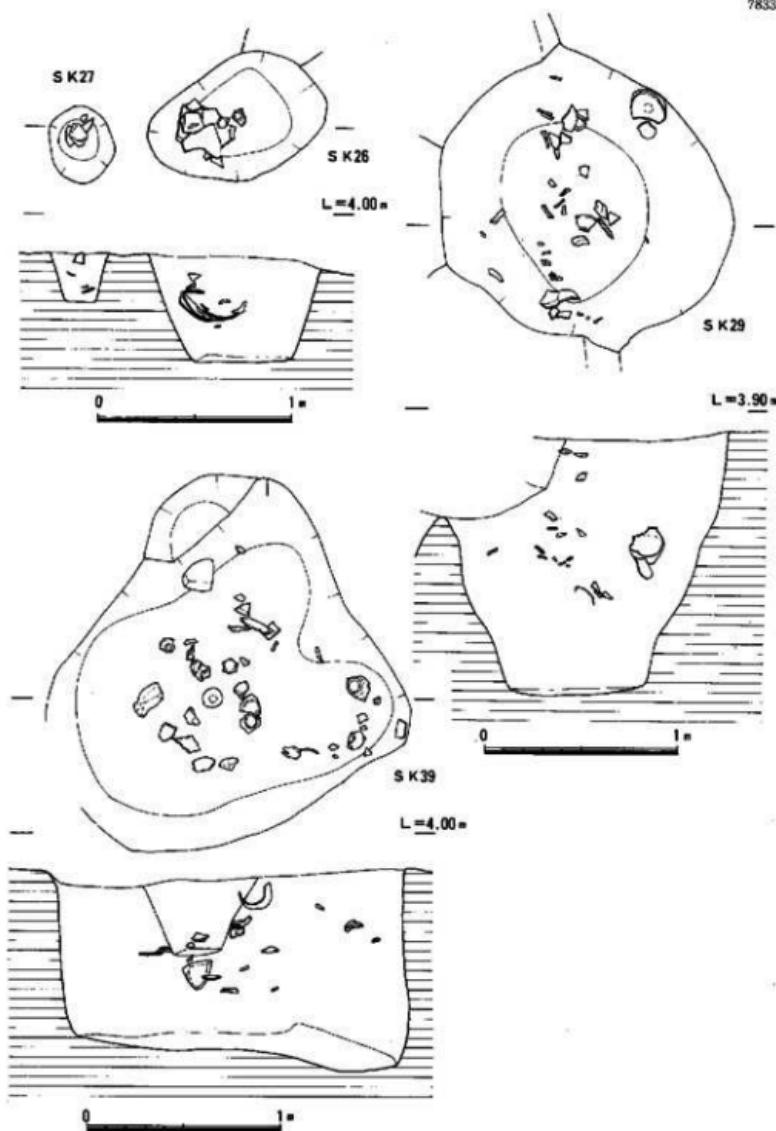


Fig.12 IX SK26,SK27,SK29,SK39

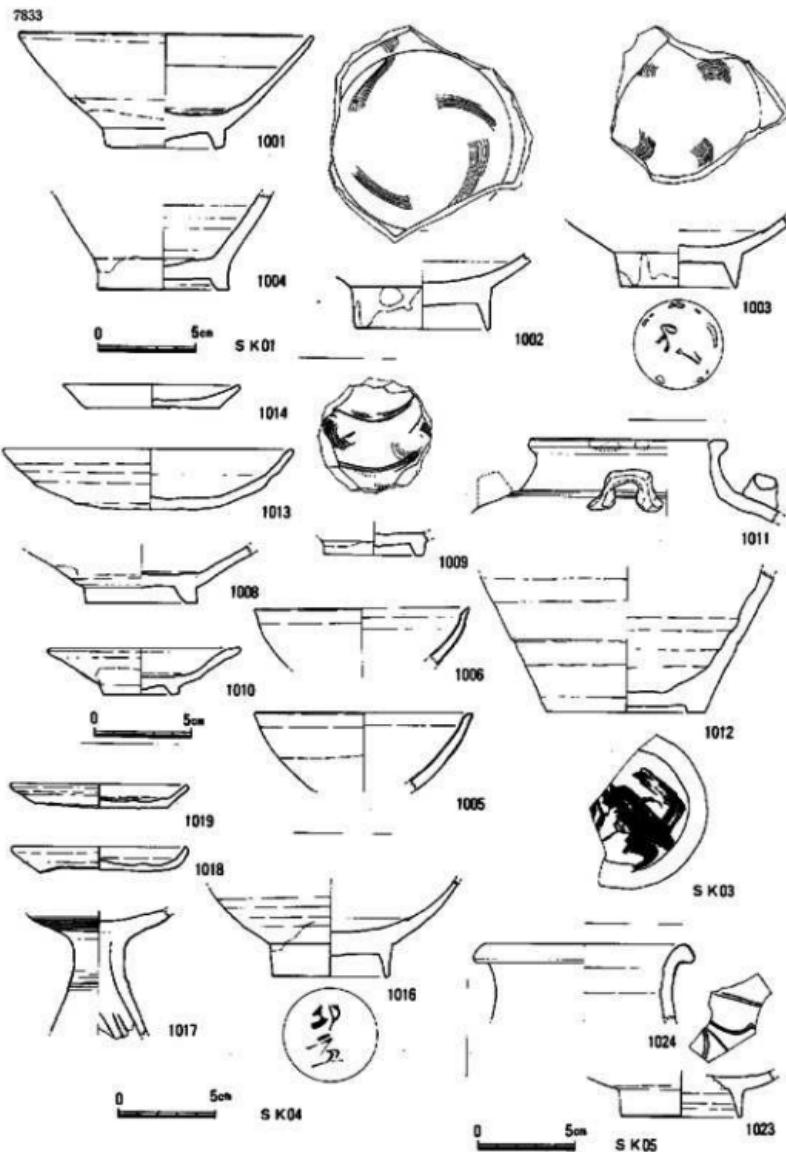


Fig.13 H区 SK01,SK03,SK04,SK05出土遺物 (1/3)

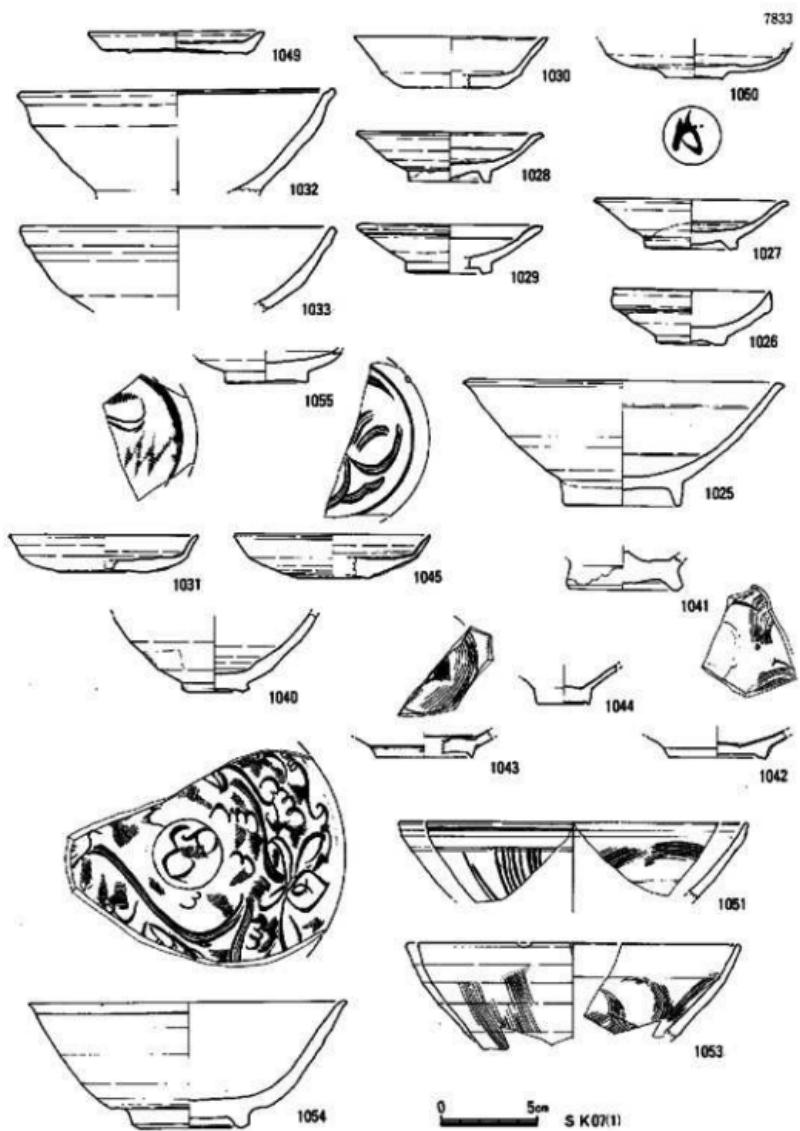


Fig.14 H区 SK07出土遺物(1) (1/3)

7833

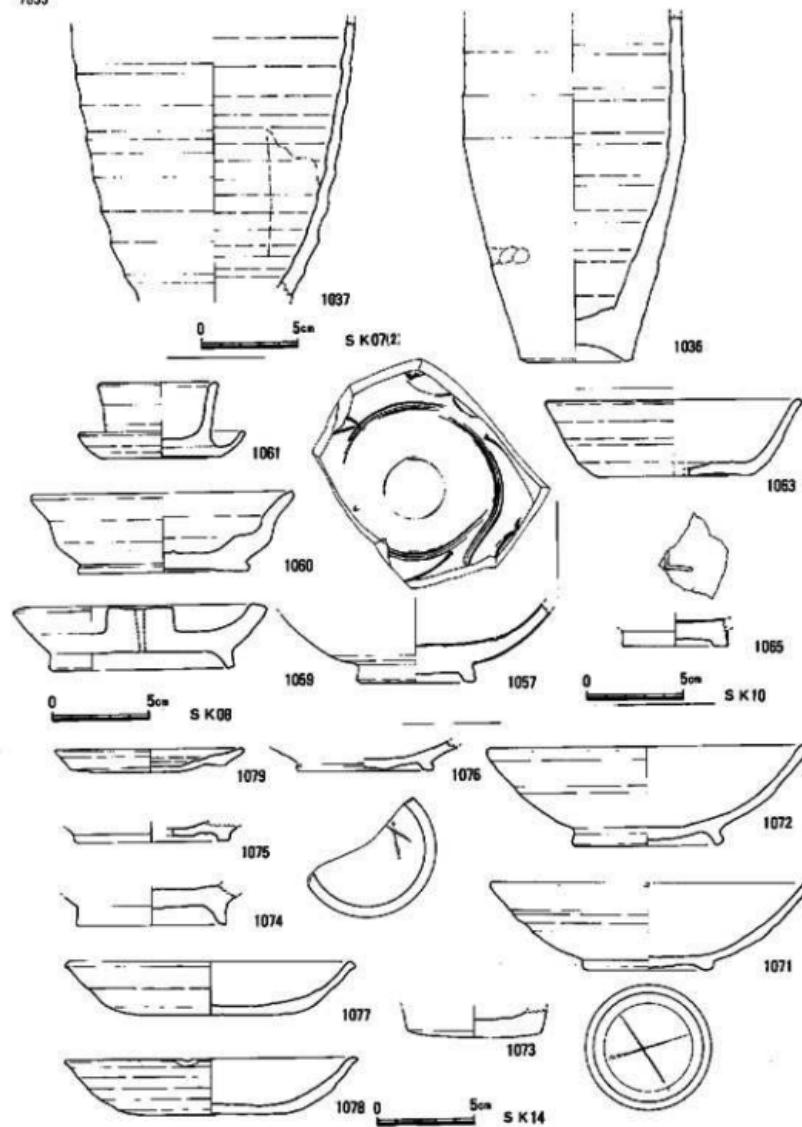


Fig.15 II区 SK07 出土遺物(2) SK08,SK10,SK14 出土遺物 (1/3)

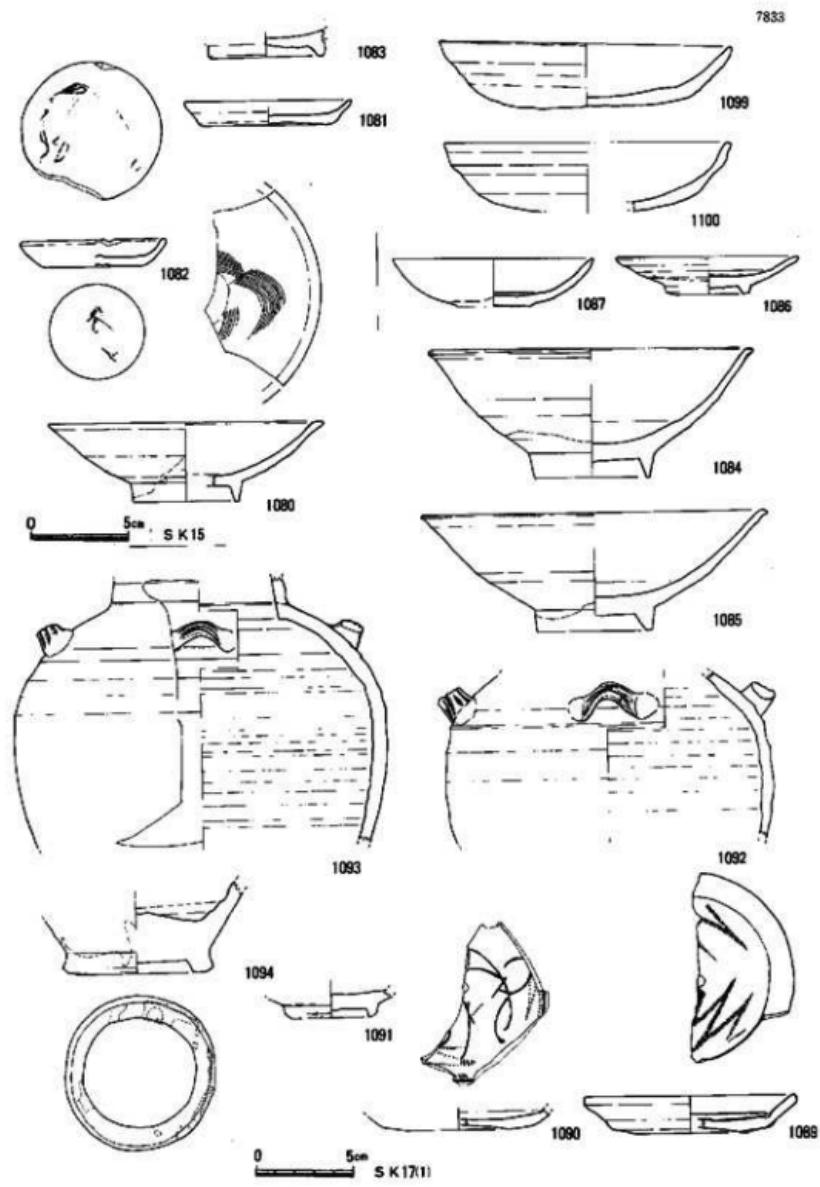
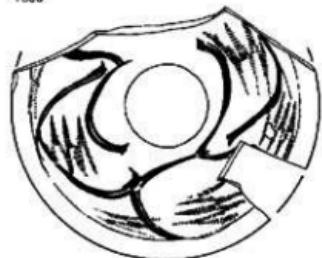
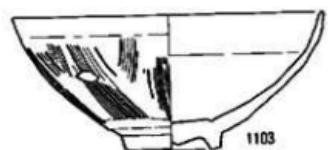


Fig.16 H区 SK15出土遺物、SK17出土遺物(1) (1/3)

7833



1097



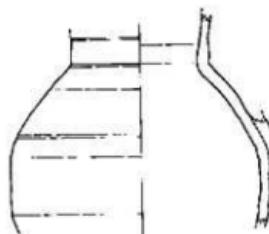
1103



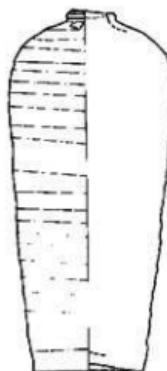
1104



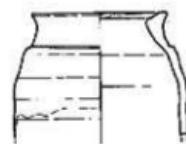
1088



1096

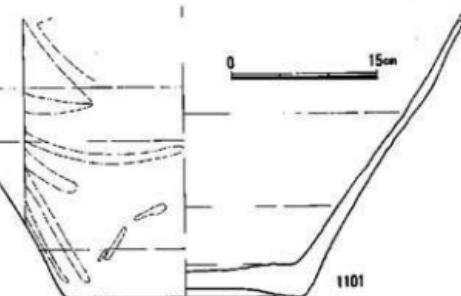


1085



1096

0 5cm



1101

Fig.17 H区 SK17出土遺物(2) (1/3 1101は除く)

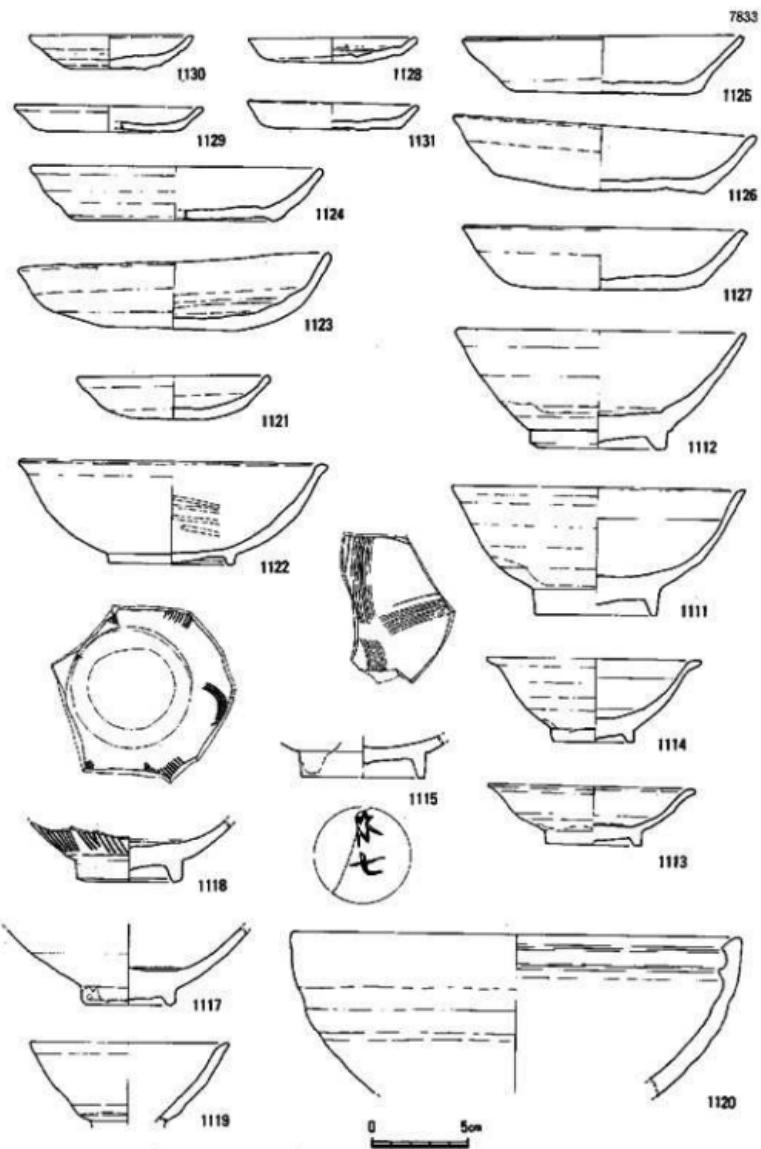


Fig.18 H区 SK23出土遺物 (1/3)

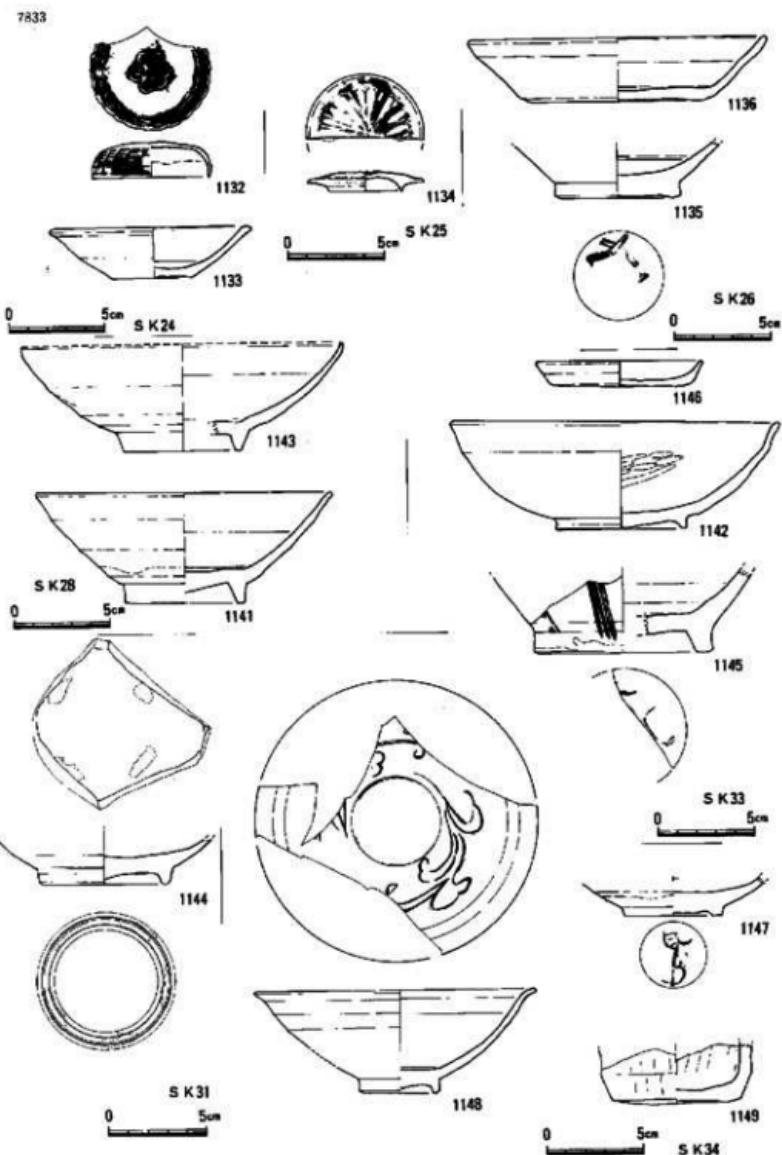


Fig.19 HX SK24,SK25,SK26,SK28,SK31,SK33,SK34出土遺物 (1/3)

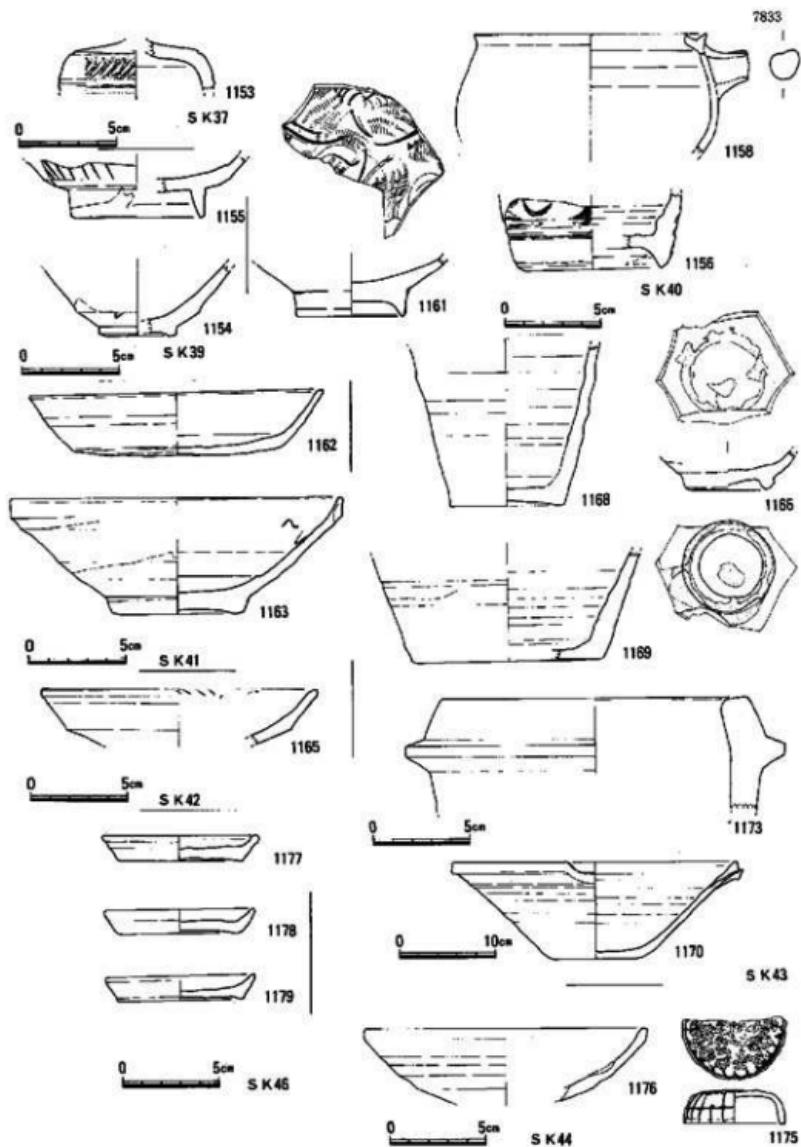


Fig.20 H18 SK37,SK39,SK40,SK41,SK42,SK43,SK44,SK46出土遺物 (1/3 1170を除く)

7833



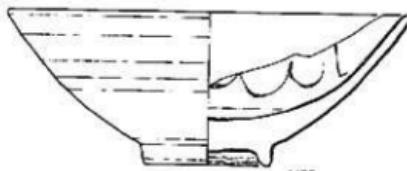
1184



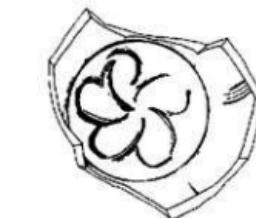
1187



1183



1180



1185



0 5cm

SK47

— —

— —



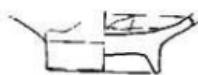
1185



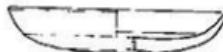
1398



1199



1198



1182



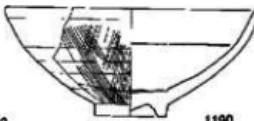
1189



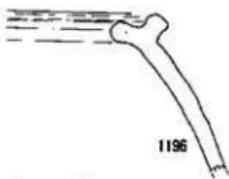
1194



1192



1190



1196

0 5cm

SK49

Fig.21 H区 SK47,SK49 出土遺物 (1/3)

7833

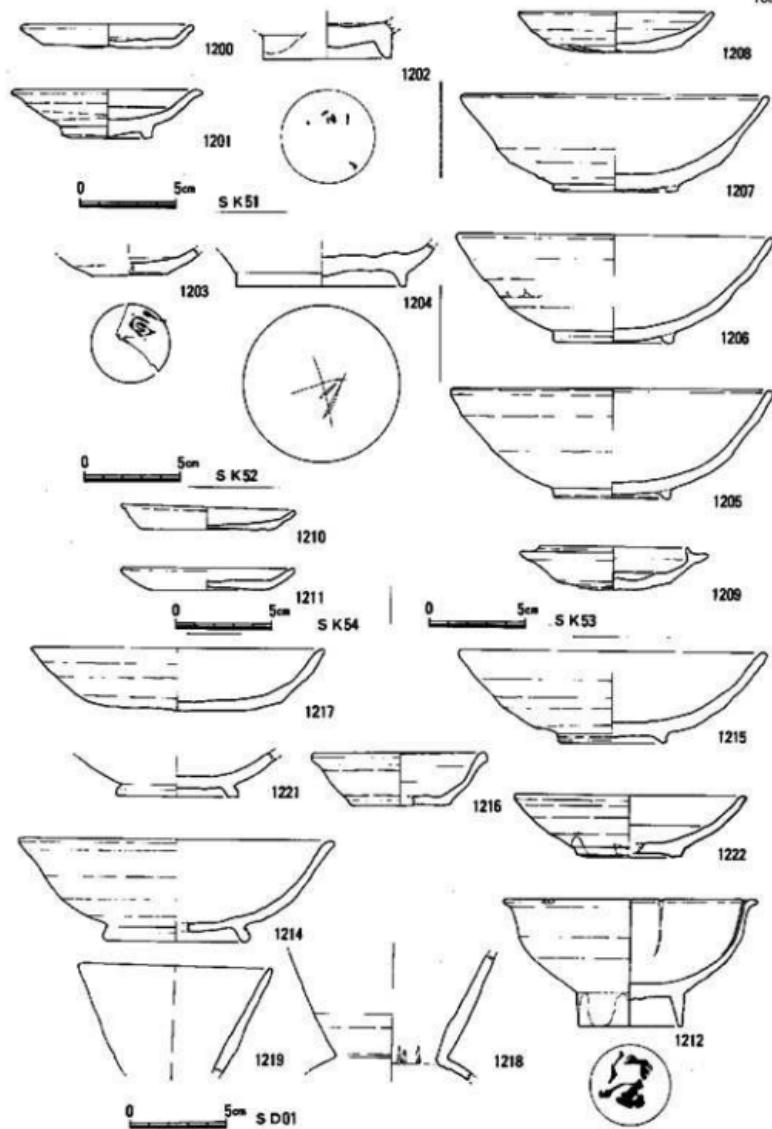


Fig.22 Hix SK51,SK52,SK53,SK54,SD01出土遺物 (1/3)

7833

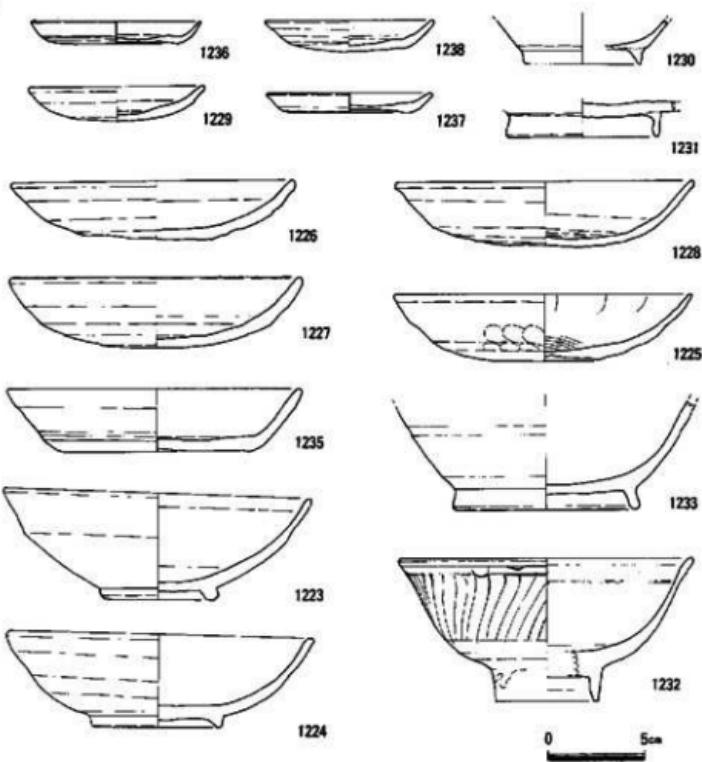


Fig.23 H区 SD03出土遺物 (1/3)

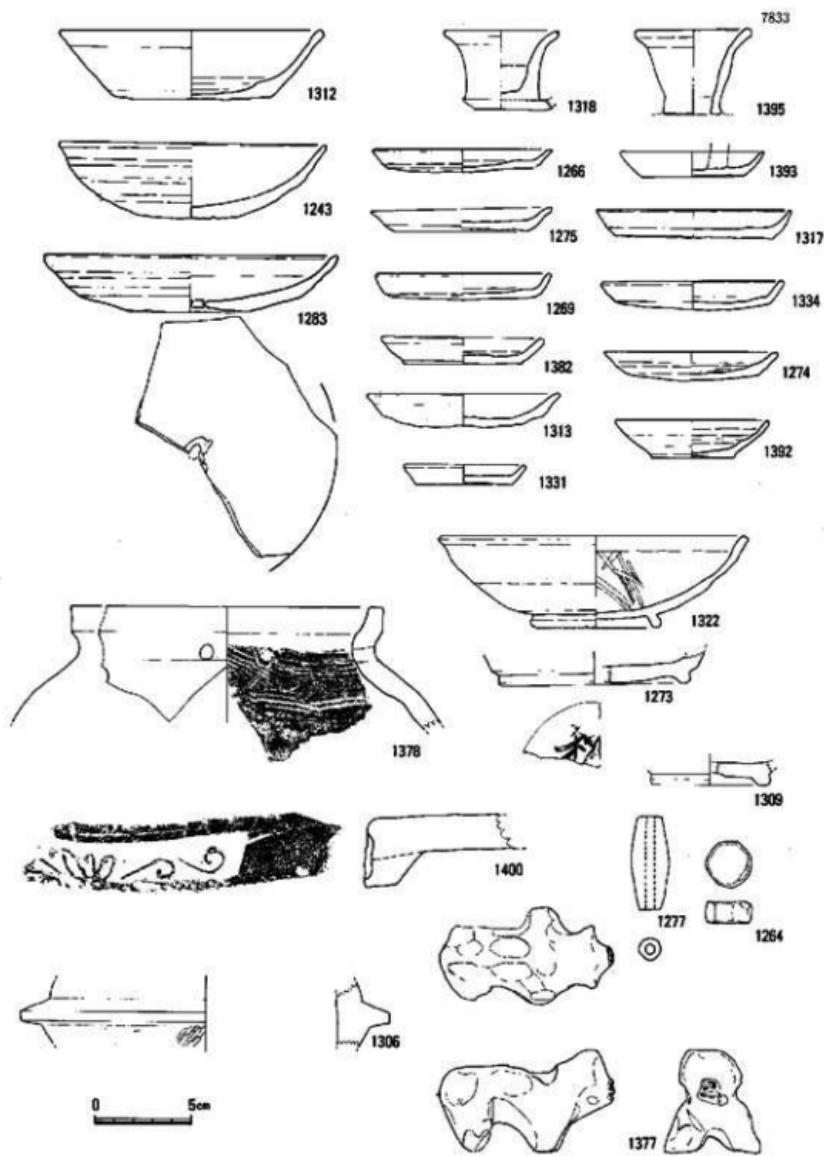


Fig.24 H区 造構外(包含層)出土遺物(1) (1/3)

7833

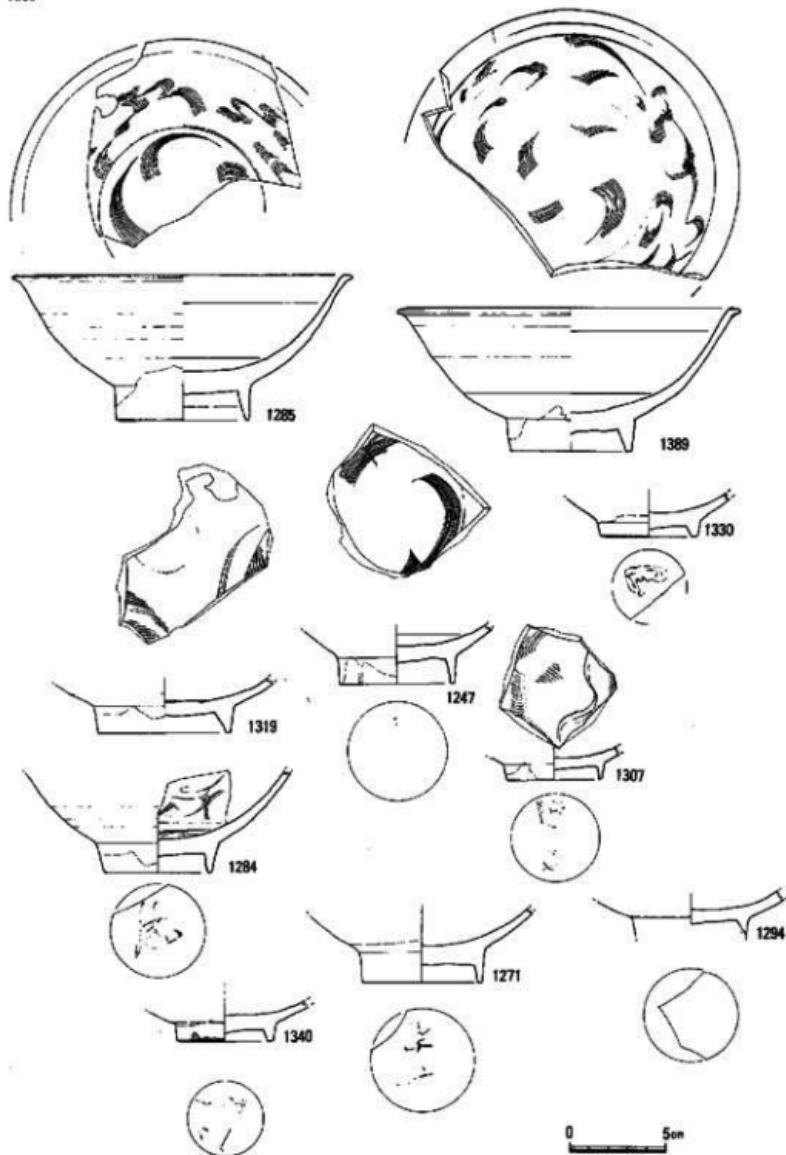


Fig.25 H区 造構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

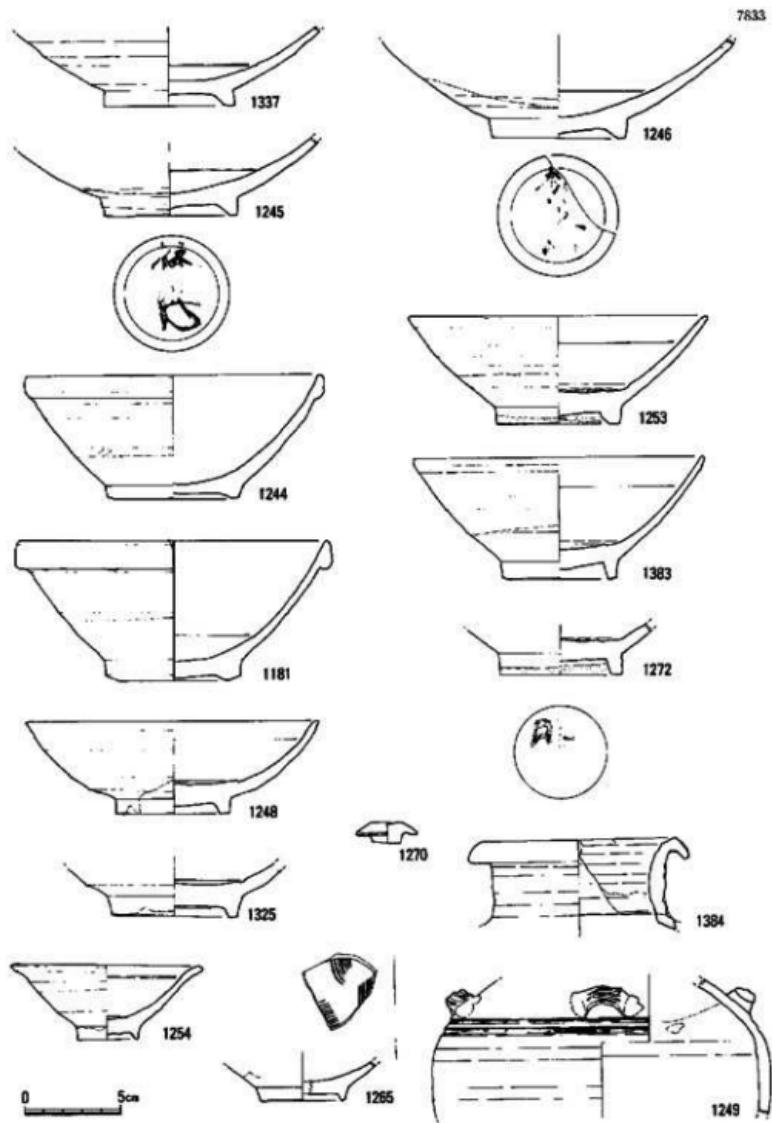


Fig.26 H区 造構外(包含層)出土遺物(3) (1/3)

7833

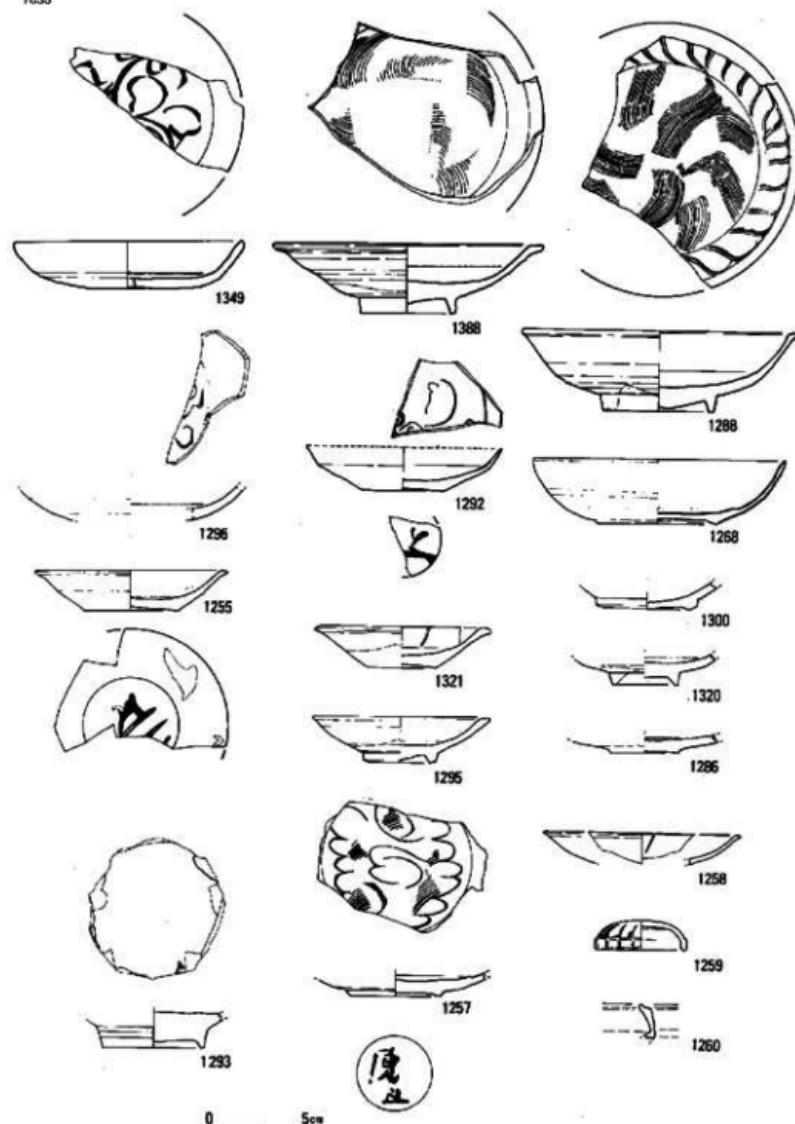


Fig.27 H区 造構外(包含層)出土遺物(4) (1/3)

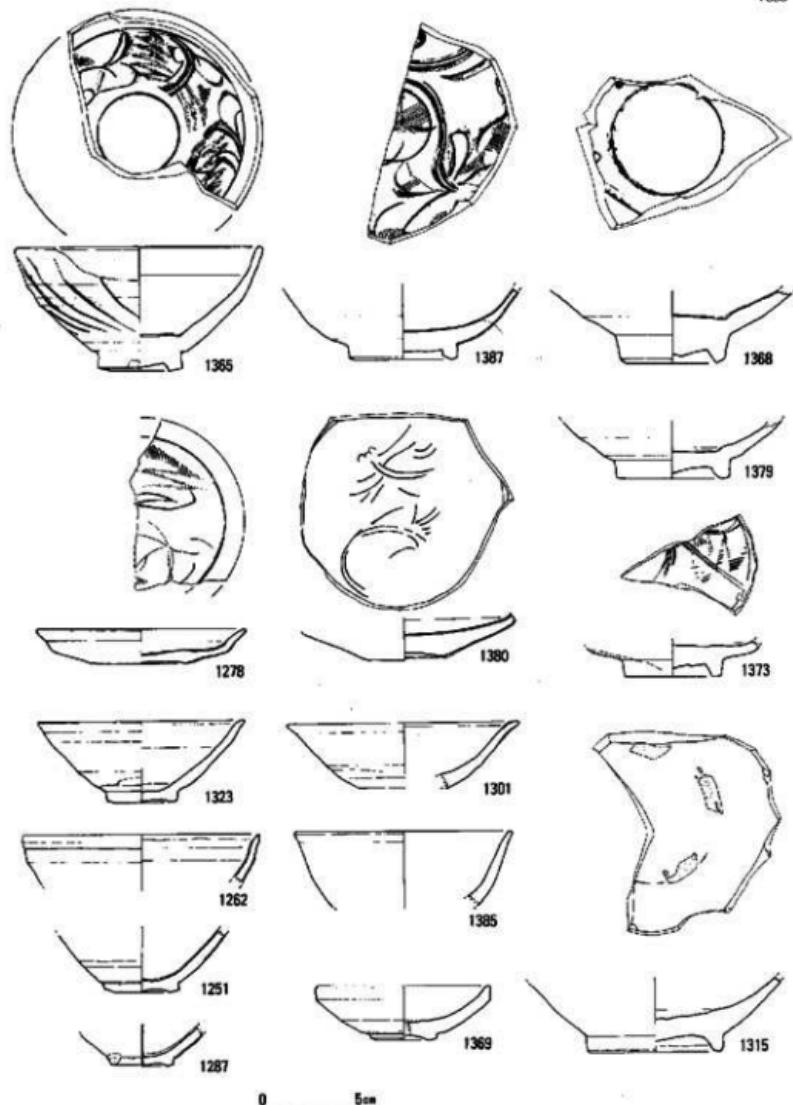


Fig.28 H1区 造構外(包含層)出土遺物(5) (1/3)

7833

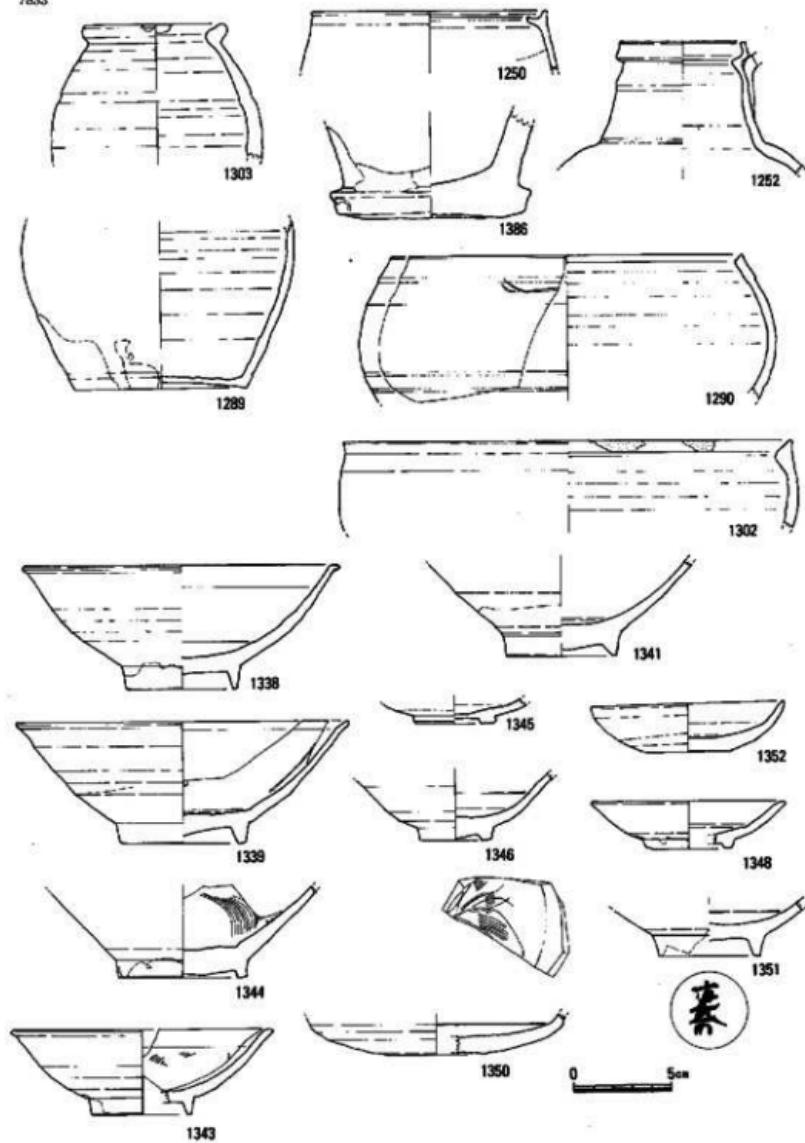


Fig.29 H区 造構外(包含層、表土)出土遺物 (1/3)

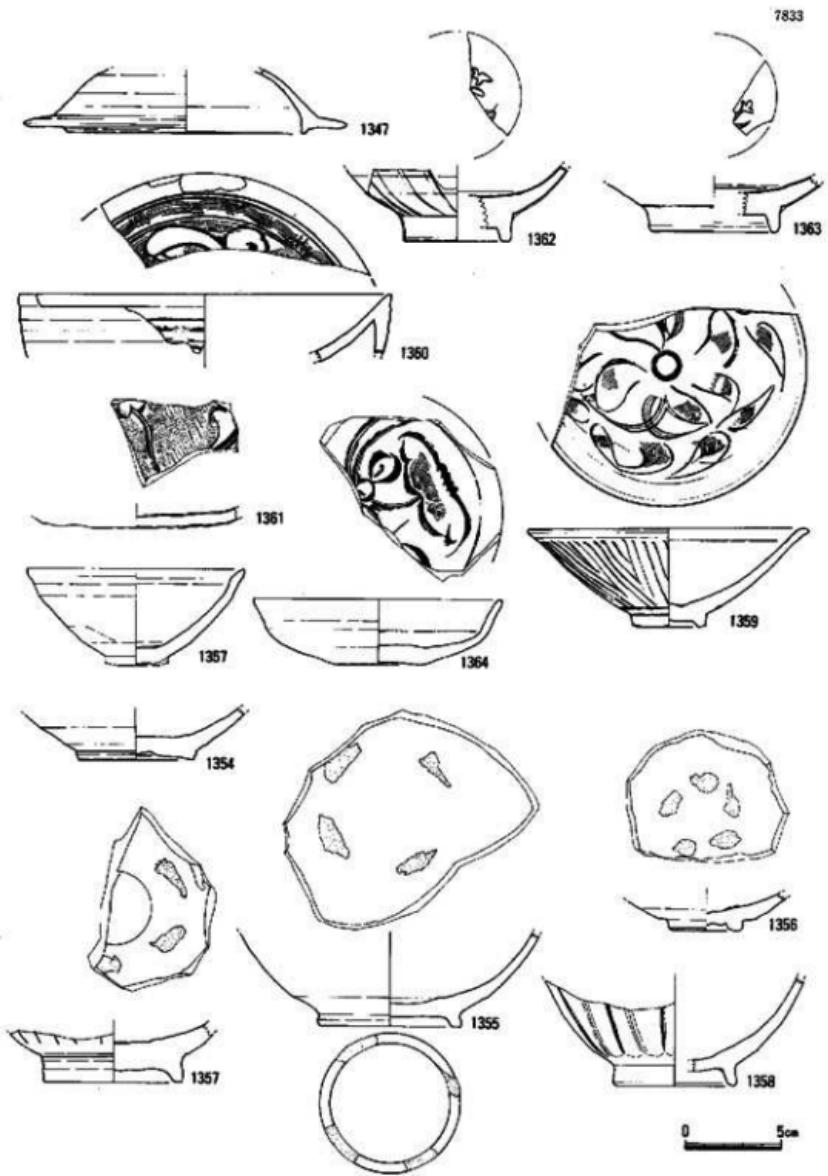


Fig.30 H区 造構外(表土)出土遺物 (1/3)

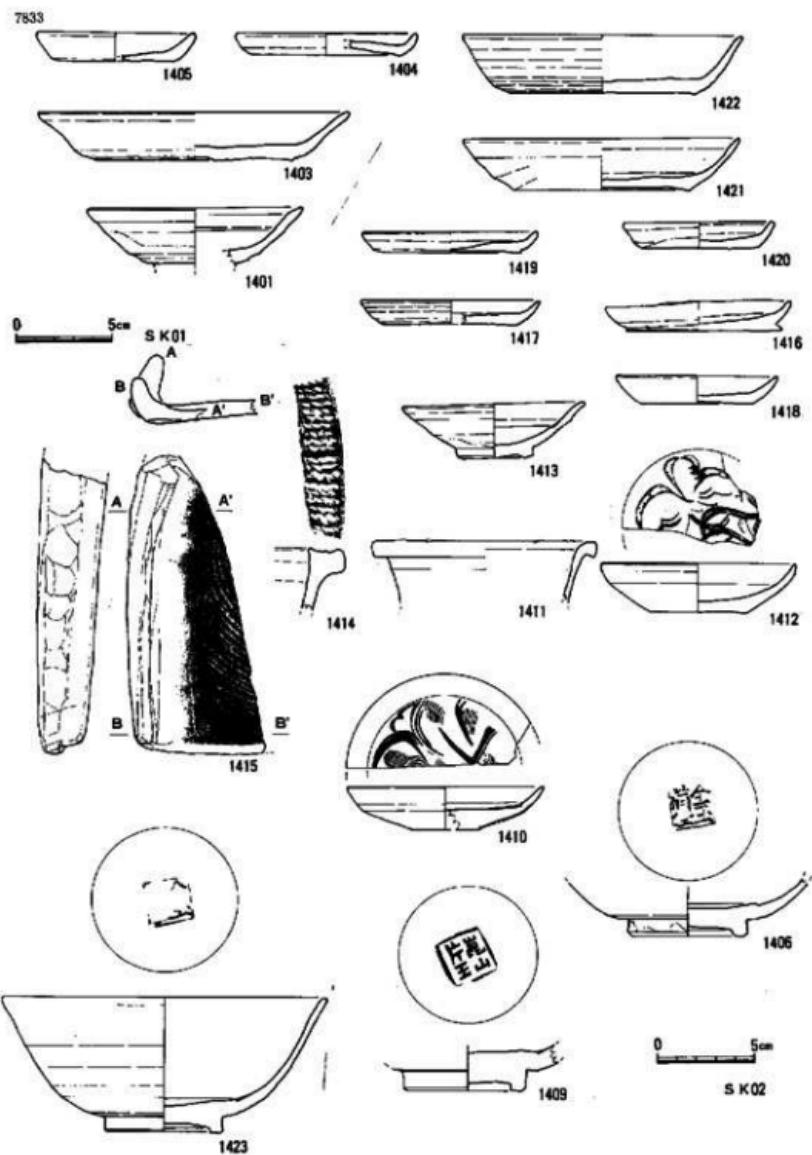


Fig.31 I区 SK01,SK02 出土遺物 (1/3)

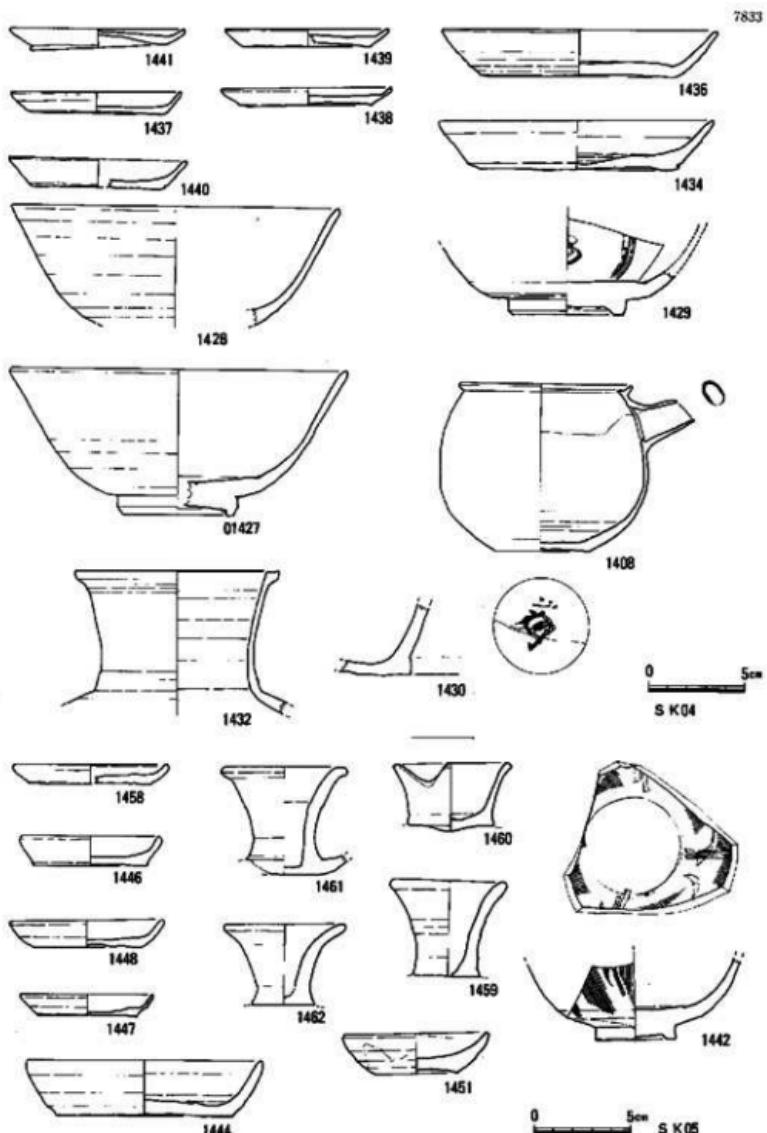


Fig.32 I区 SK04出土遺物とSK05出土遺物(1) (1/3)

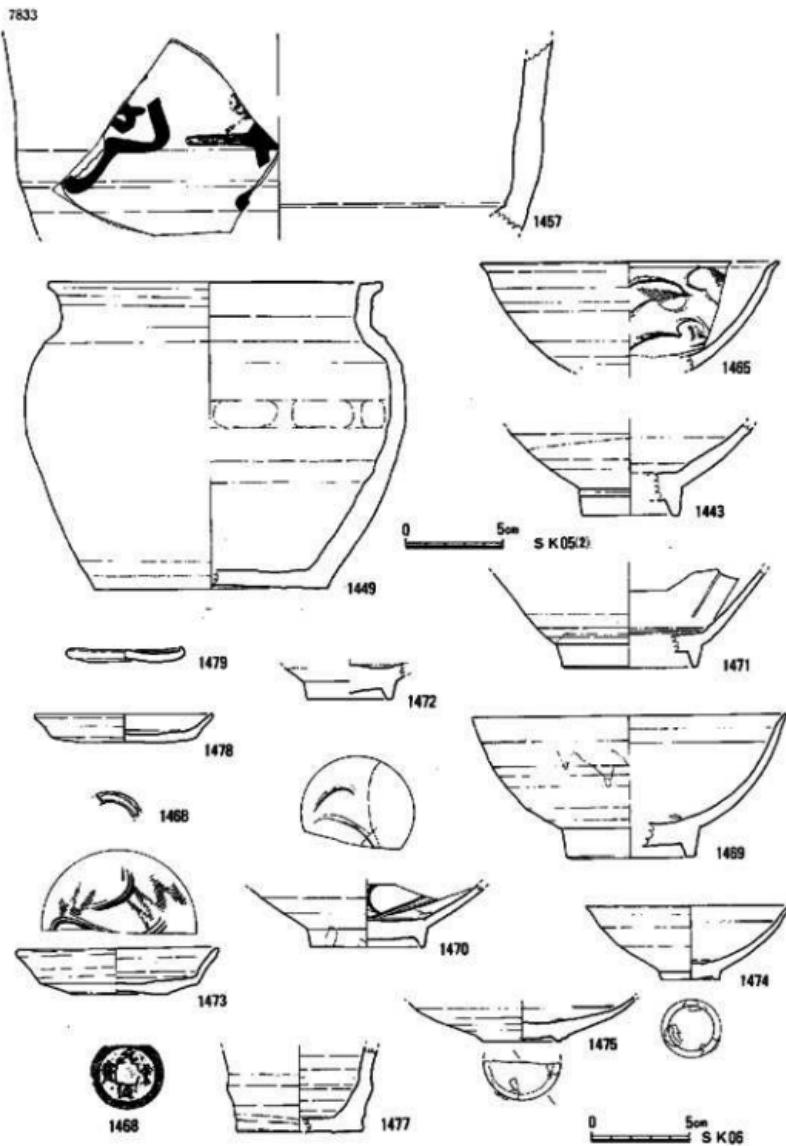


Fig.33 I区 SK05出土遺物(2), SK06出土遺物 (1/3, 1468を除く)

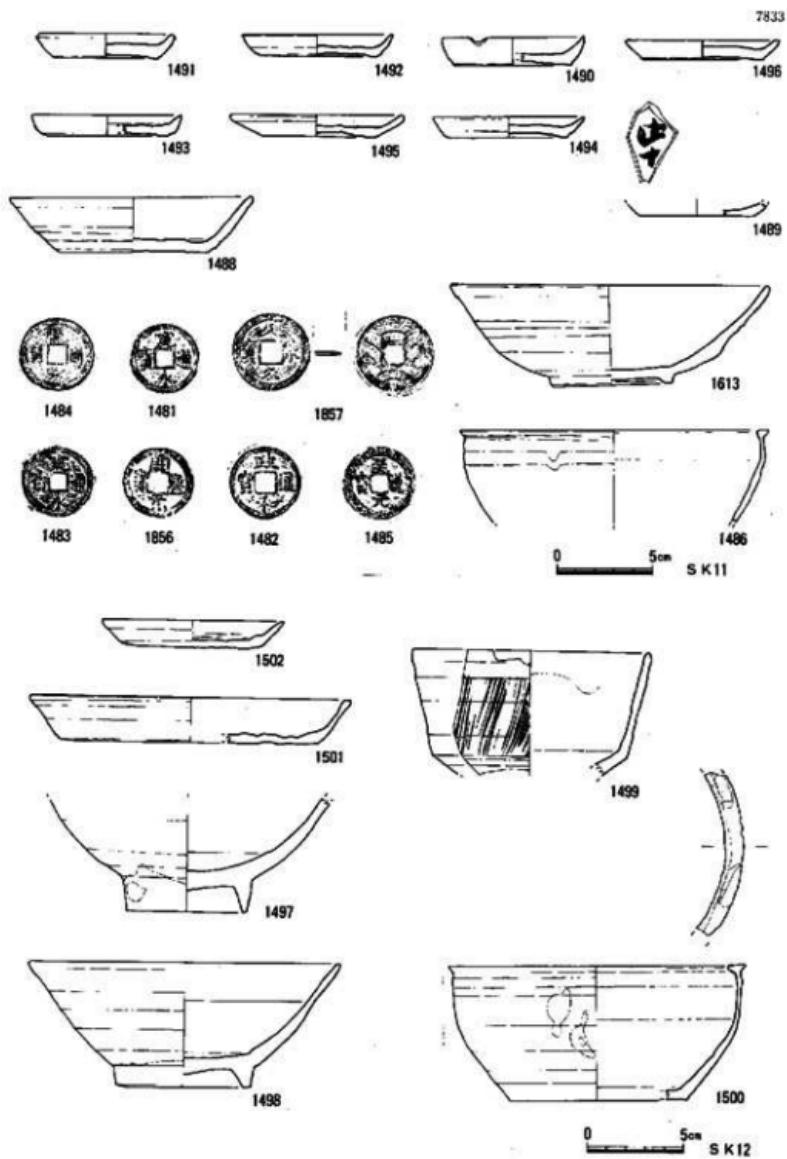


Fig.34 SK11,SK12 出土遺物 (1/3,銅錢を除く)

7833

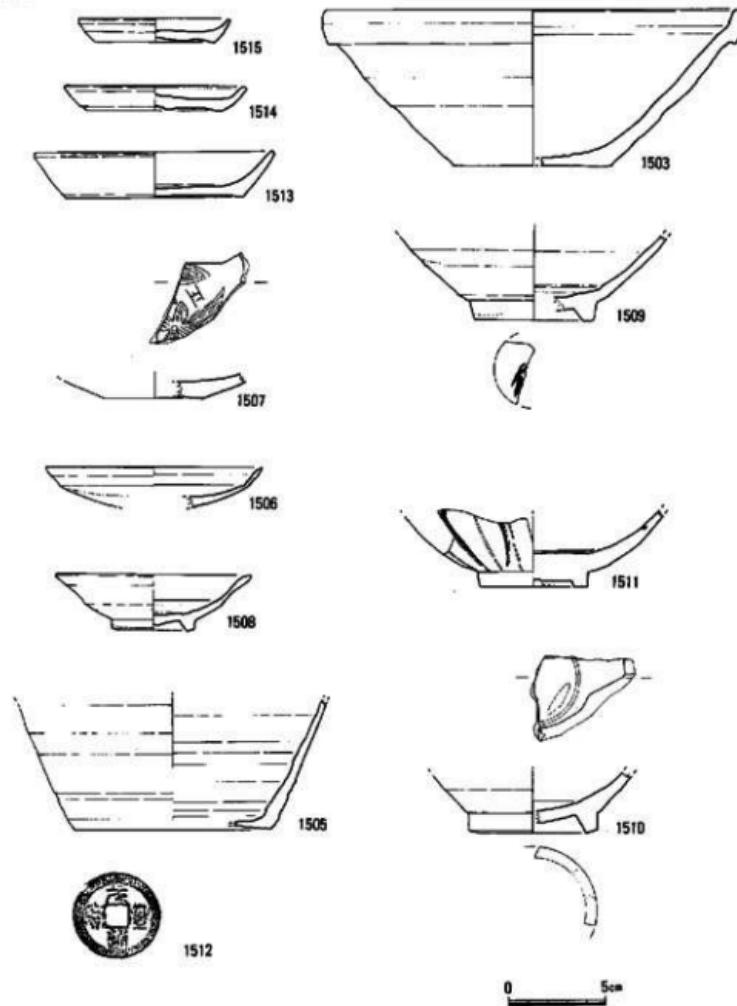


Fig.35 II区 SK13 出土遺物 (1/3,1512を除く)

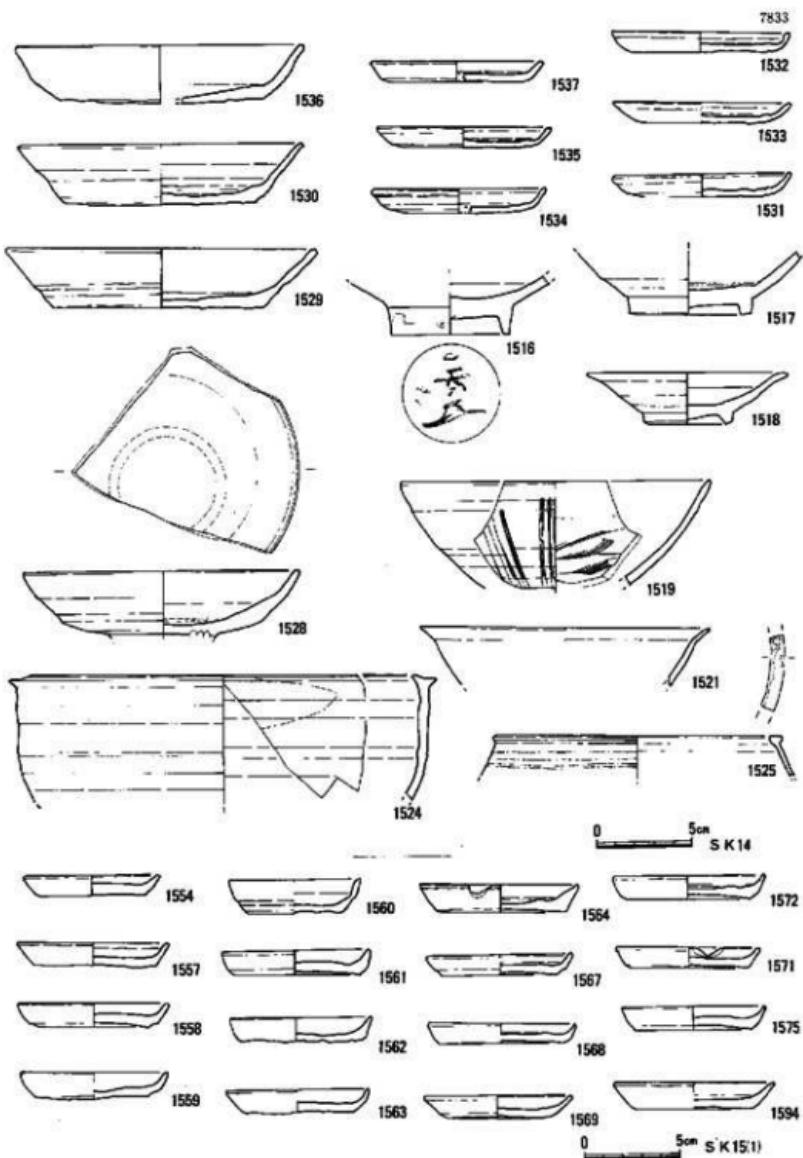


Fig.36 I区 SK14出土遺物とSK15出土遺物(1) (1/3)

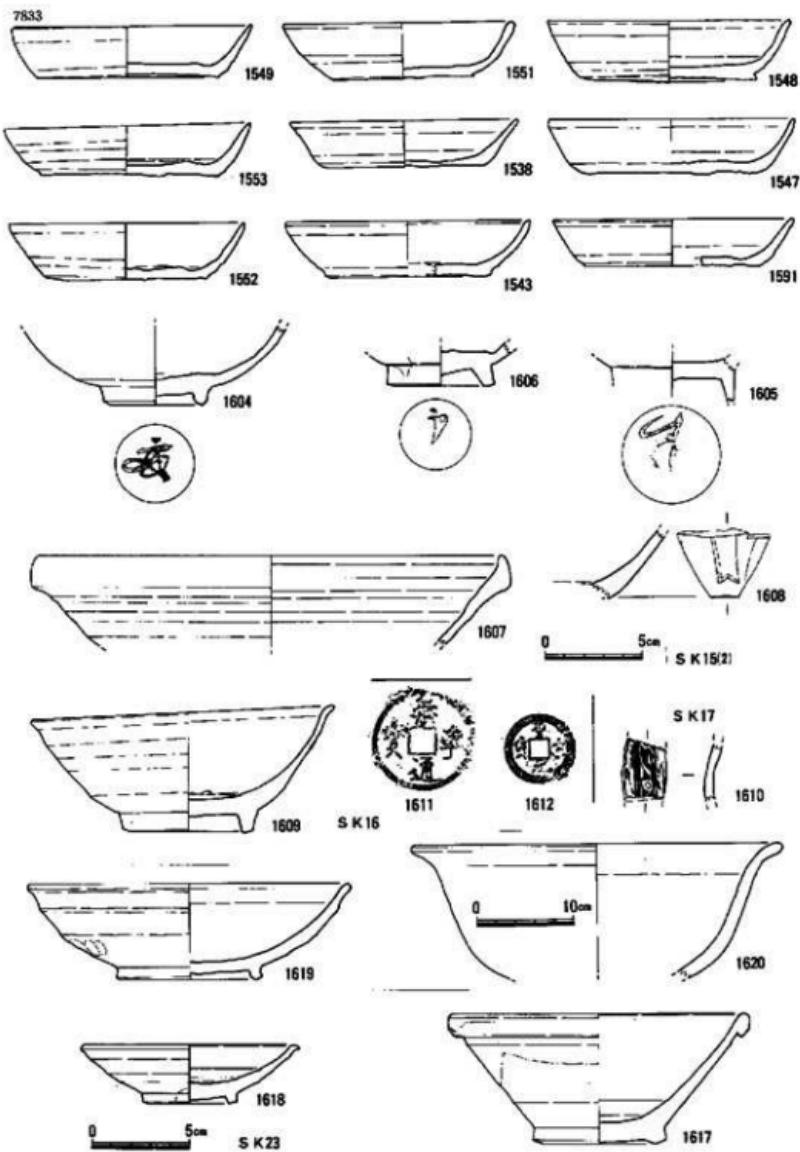


Fig.37 I区 SK15出土遺物(2)とSK16,SK17,SK23出土遺物 (1/3,1611,1612,1620を除く)

7833

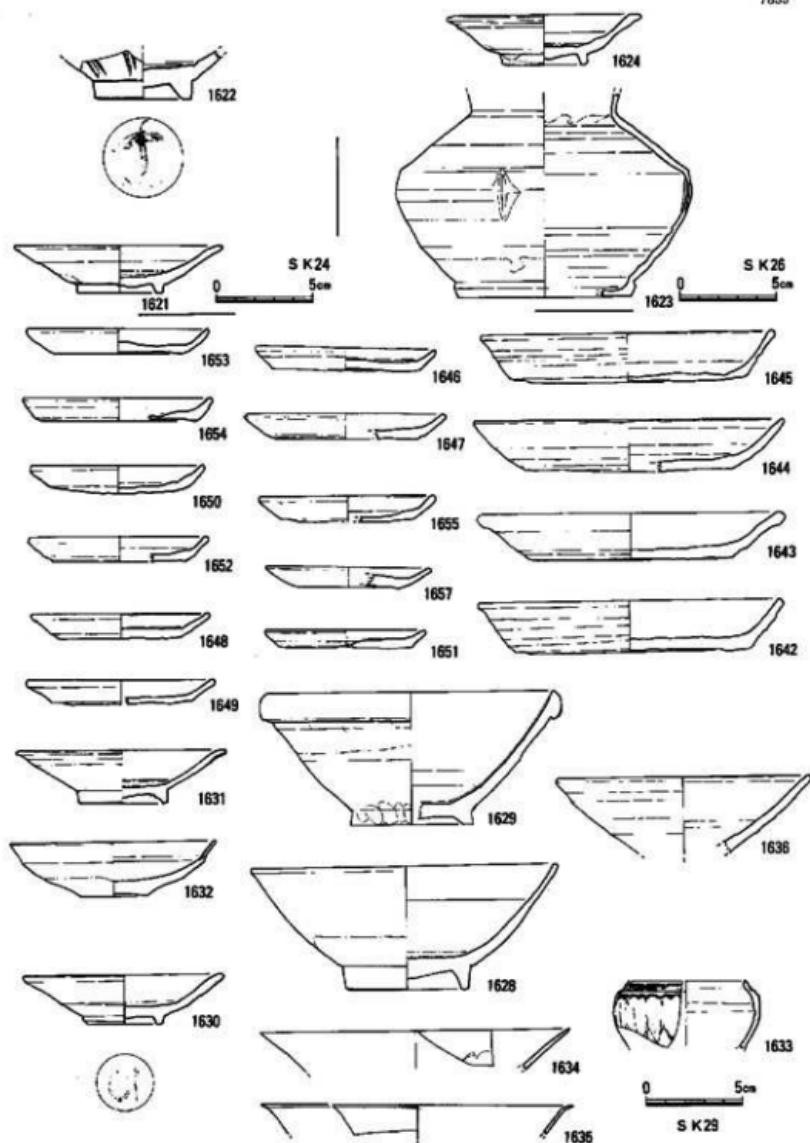


Fig.38 IX SK24,SK26,SK29 出土遺物 (1/3)

7833

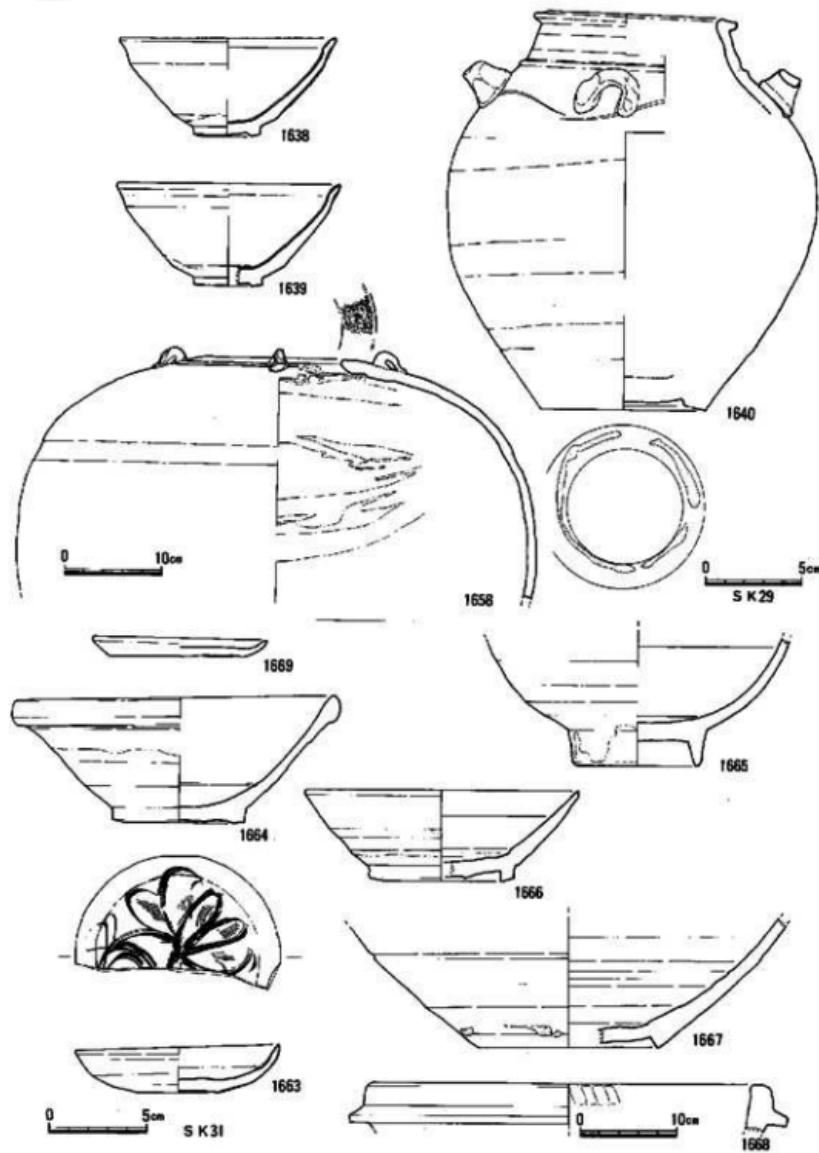


Fig.39 I区 SK29,SK31出土遺物 (1/3, 1658,1668を除く)

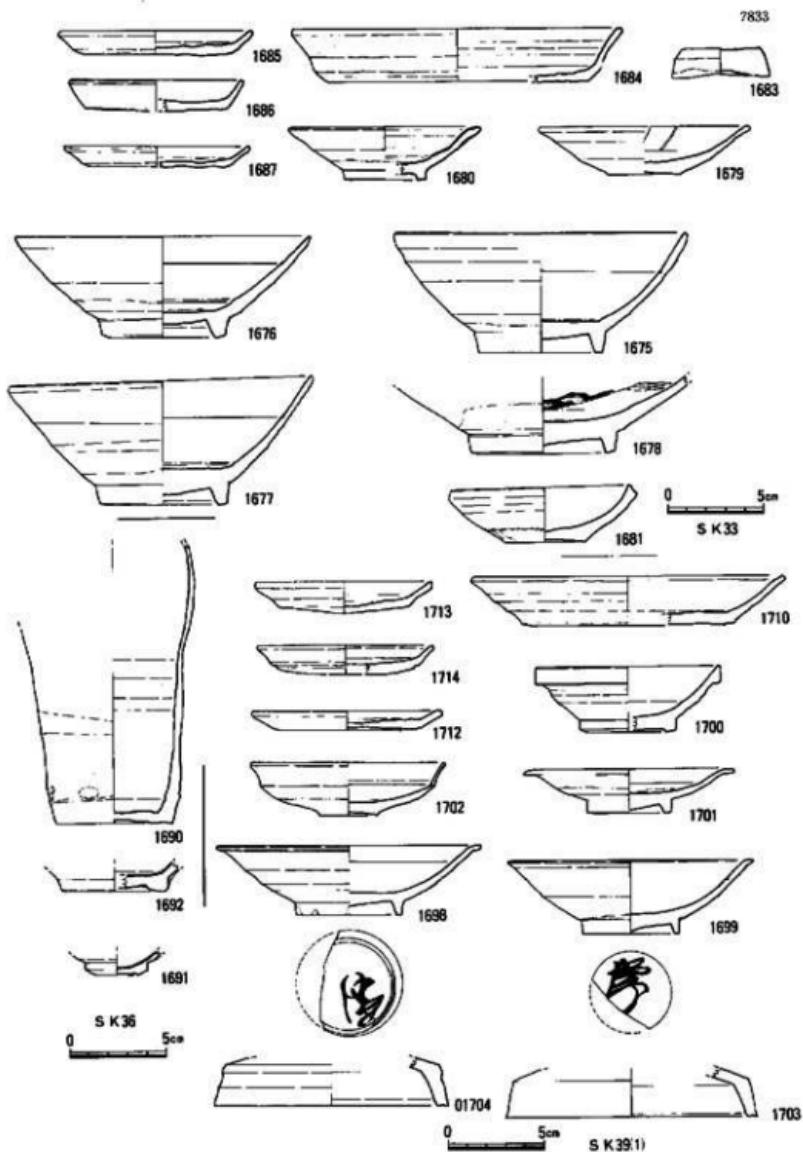


Fig.40 I区 SK33,SK36出土遺物とSK39出土遺物(1) (1/3)

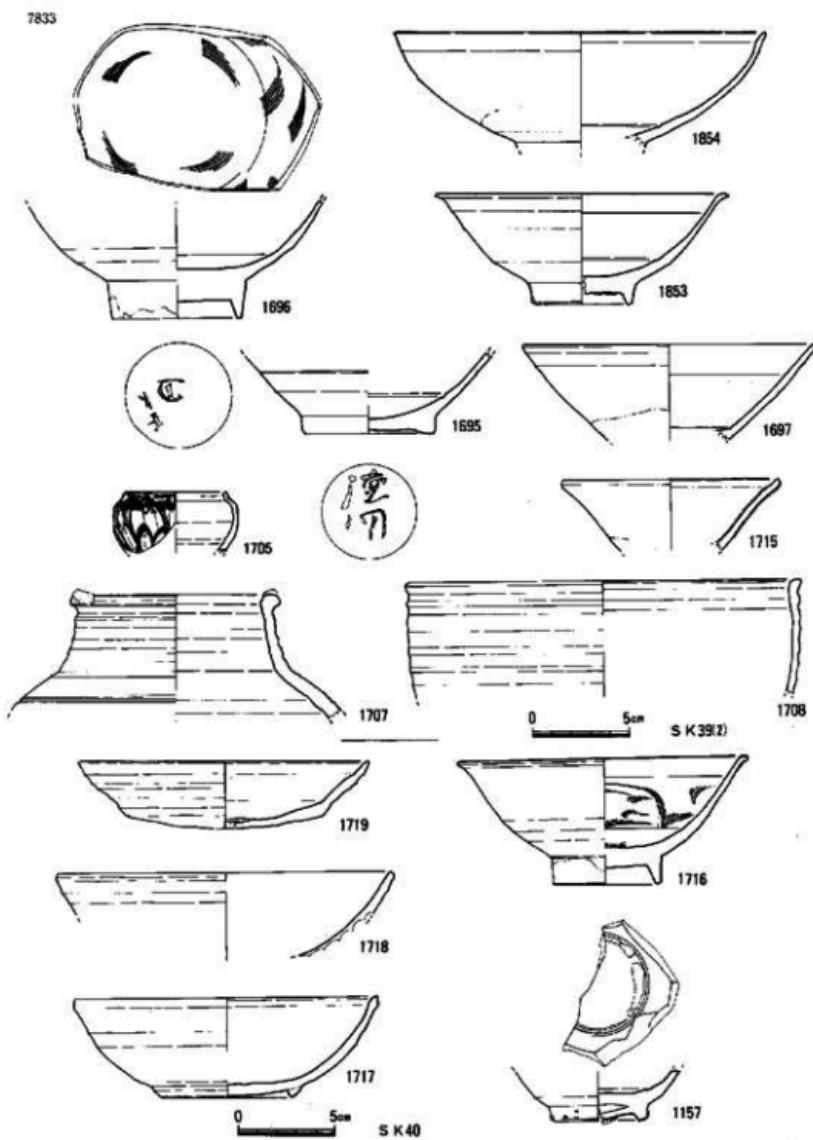


Fig.41 IIK SK39出土遺物(2)とSK40出土遺物 (1/3)

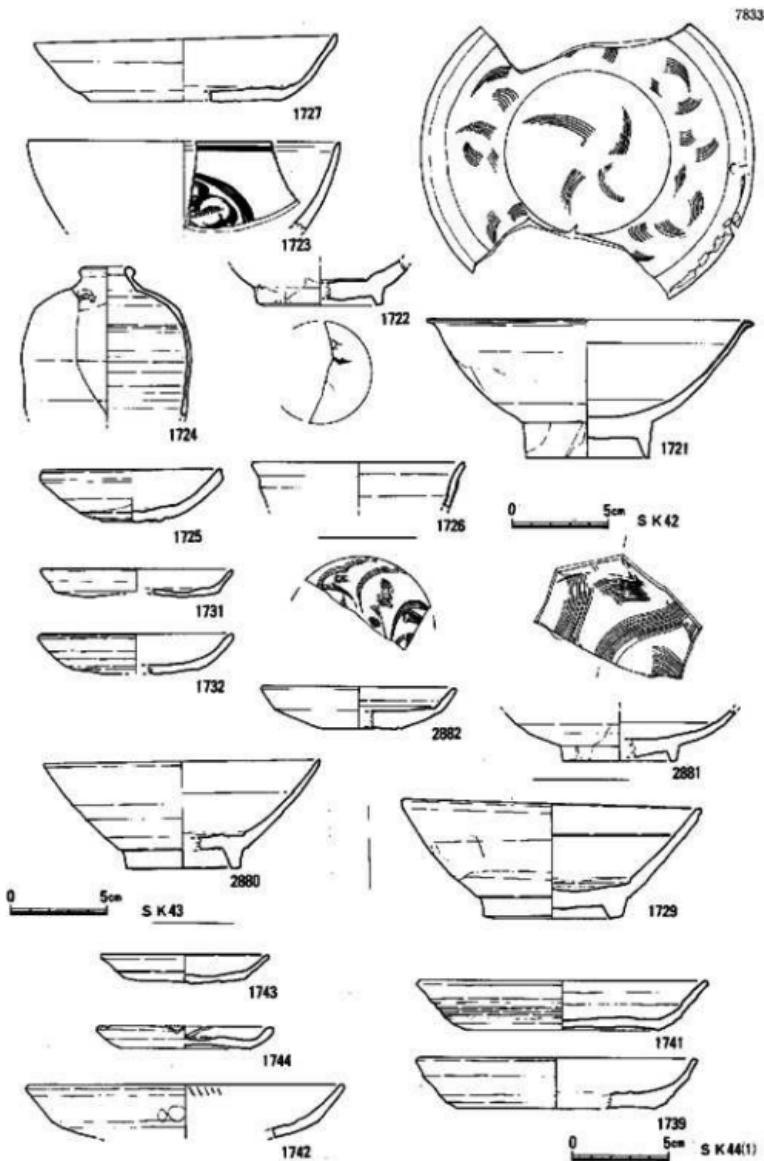
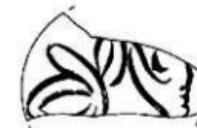
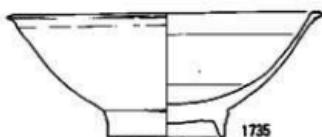


Fig.42 I区 SK42,SK43出土遺物とSK44出土遺物(I) (1/3)

7833

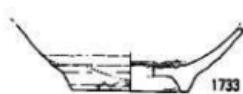
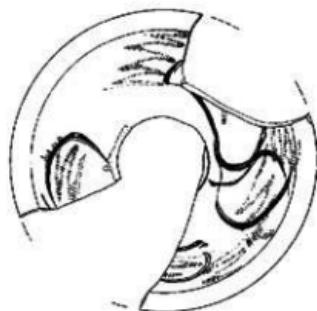


大田

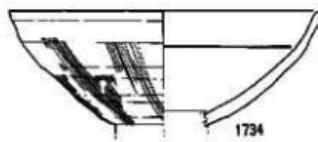
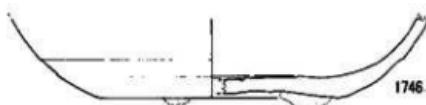
1735

1736

1745



1733

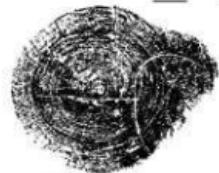


1734



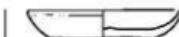
0 5cm

SK44(2)



1720

1752

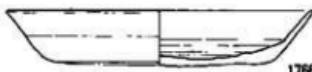


1781

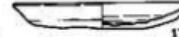
1765



1757



1766



1756

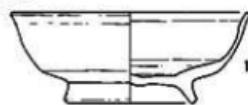


1774



1852

0 5cm 1号墓



1799

0 5cm 遺構外(包含層)出土遺物I (1/3)

Fig.43 I区 SK44 出土遺物(2), 1号墓出土遺物, 遺構外(包含層)出土遺物I (1/3)

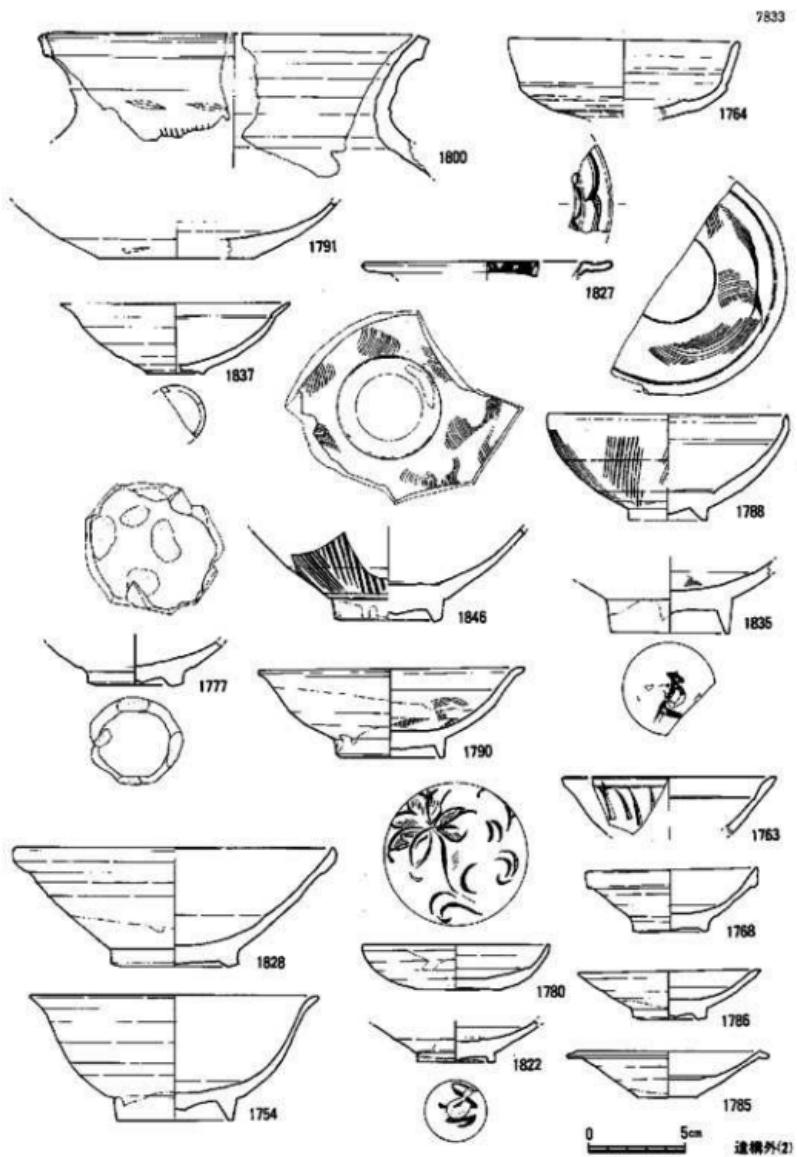


Fig.44 I区 造構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

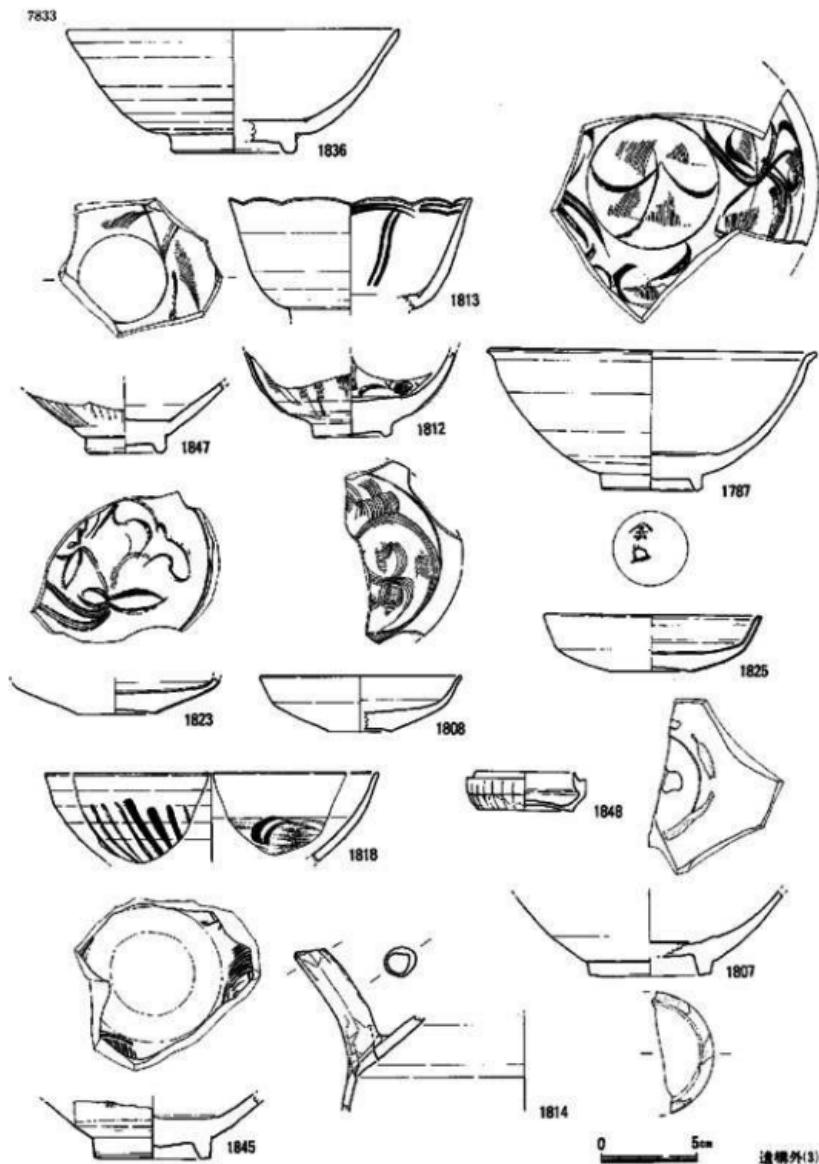


Fig.45 I区 造標外(表土)出土遺物(3) (1/3)

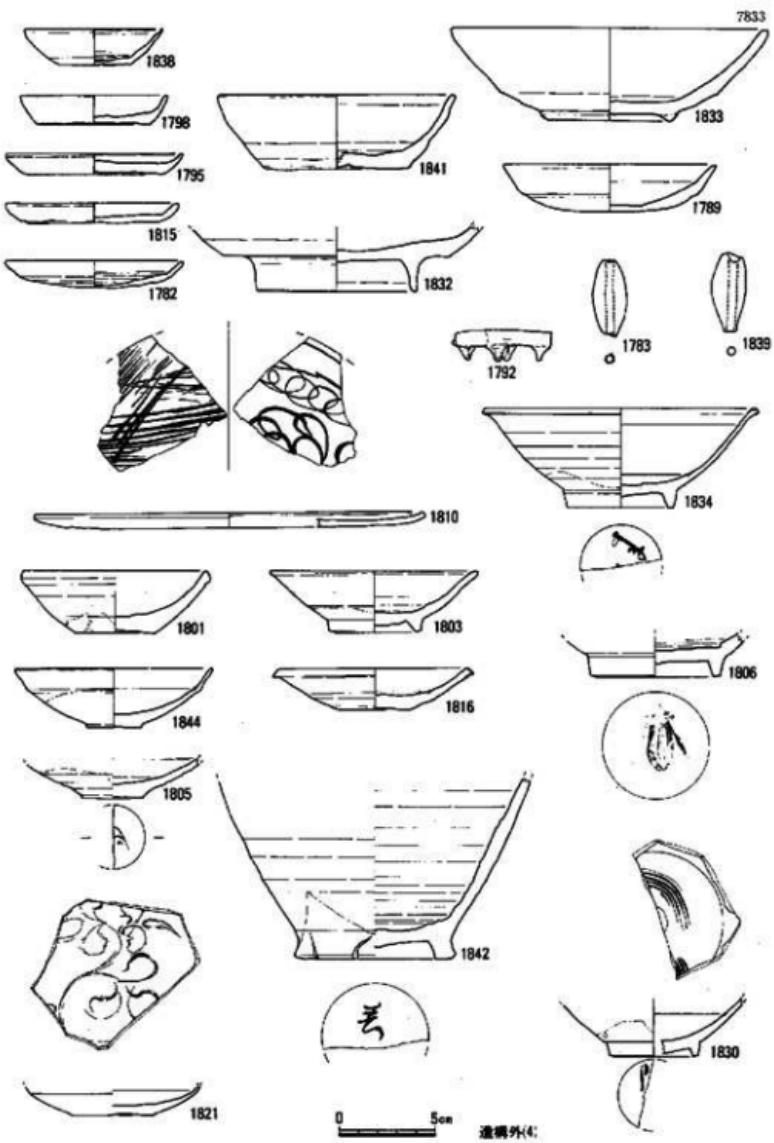


Fig.46 I区 造構外(表土,攪乱)出土遺物(4) (1/3)

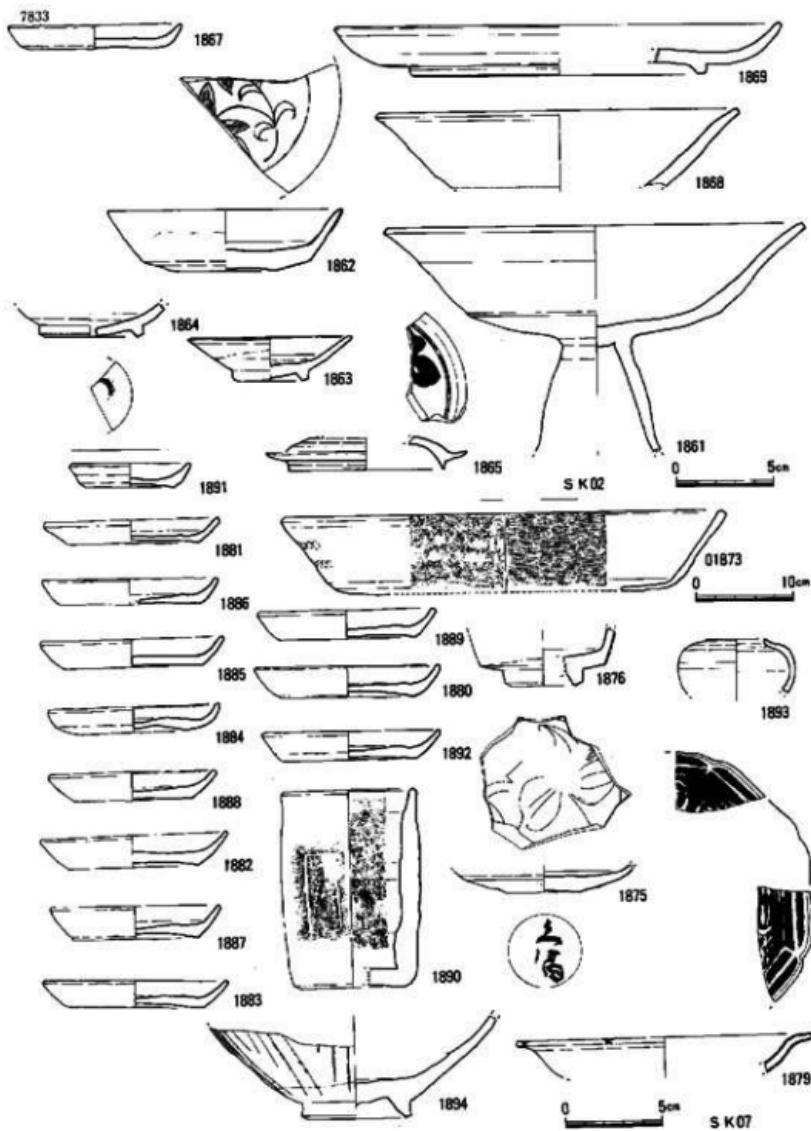


Fig.47 J区 SK02,SK07 出土遺物 (1/3, 1873を除く)

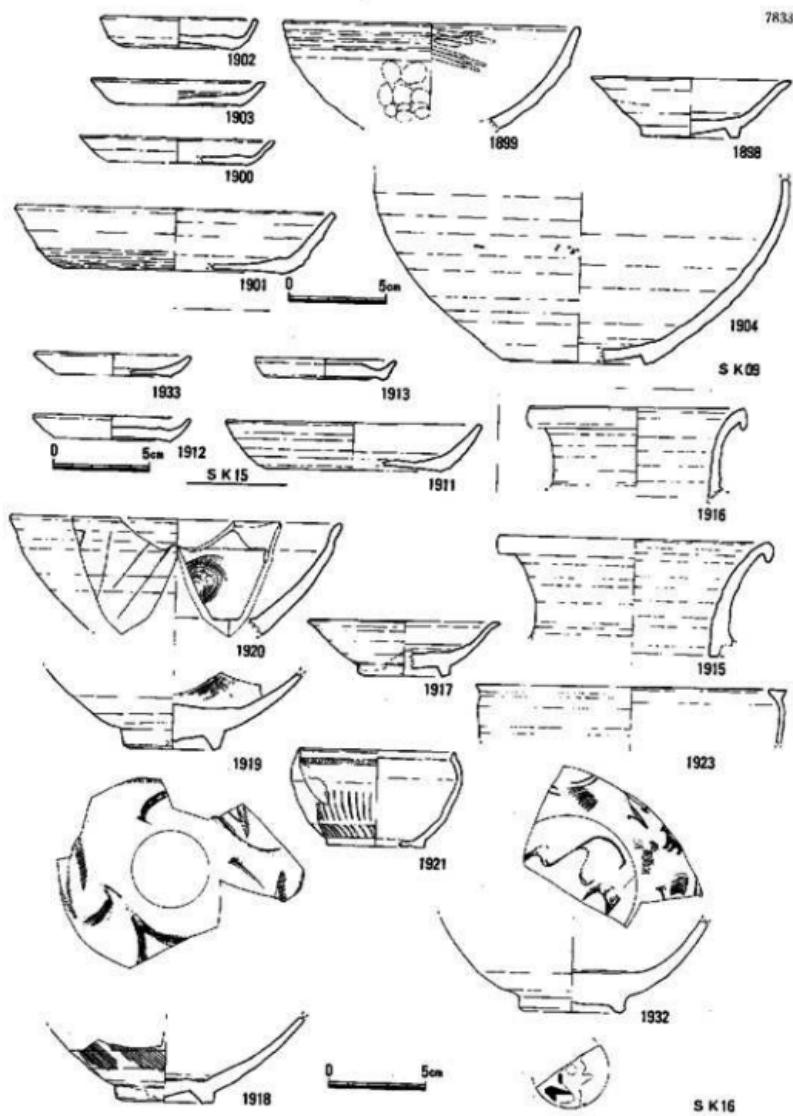


Fig.48 JK SK09,SK15,SK16出土遺物 (1/3)

7833

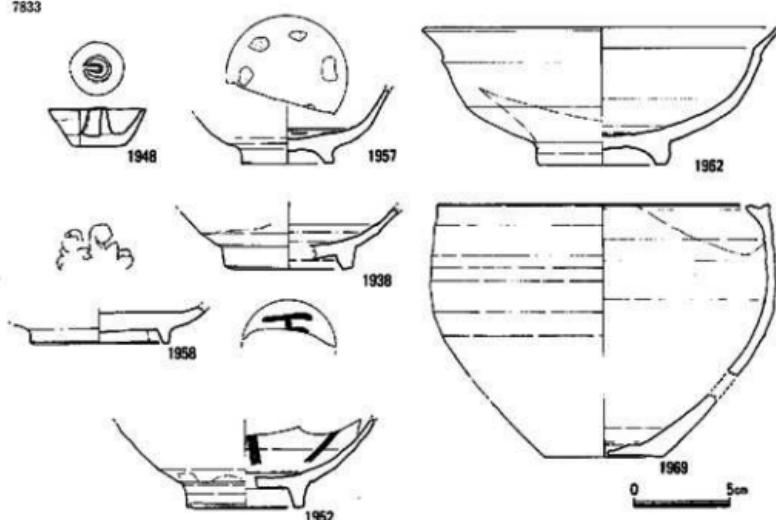


Fig.49 J区 造構外(表土)出土遺物 (1/3)

2. 夜間調査区の調査 (Fig. 50-57, PL. 2-3)

K 区と J、L 区の一部にかかる地点である。都市計画道路博多駅築港線(大博通り)と、県道博多停車場東本町線との交差点(通称馬場新町交差点)にある。地下鉄路線内の遺跡調査では、交通量の多い交差点等、昼間の道路占用が不可能な地点については、その遺跡の重要性に鑑み、止むなく夜間調査を行ってきた。この夜間調査区もその例にもれず、交差点という制約から夜間に行ったものである。夜 10 時から朝 6 時までの調査のため、職員の労働安全衛生上の問題から複数職員の交替勤務となり、また一回の調査占専用区域が狭く、細切れ調査となるため混乱が予想され、J・K・L 区の夜間調査部分については、一括して遺構番号を付し、あえて夜間調査区と呼んだ。調査期間は 1978 年 10 月 22 日から 12 月 15 日までであった。

この調査地点は、旧博多駅前広場であり、駅建設以前は町屋の立並ぶ地域であって、また交差点に通例の埋設管の縦横の敷設により多大な擾乱を受けており、一部調査を行えなかつたところもある。

確認できた遺構の大半は SK03 のように不定形の廃棄物処理土壌であり、近世遺物を含め各時期の遺物が混在する例が多い。SK29、32、54 (Fig. 49) などのやや大規模な掘り方で、標高 2 m 前後まで掘り下げている遺構は、木桶等、井筒部分の痕跡は留めていないもののほぼ井戸の掘り方であろうと思われる。SK29 出土の 2867 は糸切底土師器皿で口縁端を内側に折り曲げている。SK54 出土遺物は 2907、2918 など古相の龍泉窯青磁に、2920 の内黒土器、2922 の高台付土師器、2911 の越州窑系青磁が混在する。29 には国産灰釉陶器である。SK49 は木棺墓である。削平を受け遺存状態は悪いが、床面にほぼ原位置を留めた釘が並び約 1 m × 0.45 m 程の棺が想定される。土師皿 (2892~7) と白磁碗 (2890、91) が副葬されており、12 世紀半ばに位置づけられる。SK65 は不整長円形の掘り方の土壌墓で、東壁面に頭部を欠いた丸底の須恵器長颈壺 (2736) が副葬されている。SK67 は底に扁平な碟を敷いたもので、西南隅に脚を欠失した須恵器高杯 (2937) を倒置して副葬している。棺の痕跡は認められない。同遺構とともに 6 世纪代に位置づけられよう。古代末から中世にかけての墓は、粗密はあるものの博多遺跡群全域に分布しているが、古墳時代の墓は、馬場新町交差点を中心とした博多遺跡群南部域に集中する。夜 7 で検出した SC01 は小型の竪穴住居跡である。遺物は出土していないが、N、M 区に類似例があり、古墳時代と思われる。夜 7~10 にかけて 4 条の溝がみられる。SD01 はほぼ東西を向く。SD02、4 はややずれている。建物の雨落ち溝であろうか、いずれも浅い。鎌倉時代におさまる。Fig. 52 の 2840 は「許口」銘墨書のある白磁皿。Fig. 55 の 2938、2943 は近世土師器の灯明皿、2942 は李朝の碗、2949 は近世焼塩壺の蓋である。包含層中に奈良~平安初期の遺物も多く含まれており、元来当該期の遺構はかなりの密度をもって分布していたものと思われる。

7833

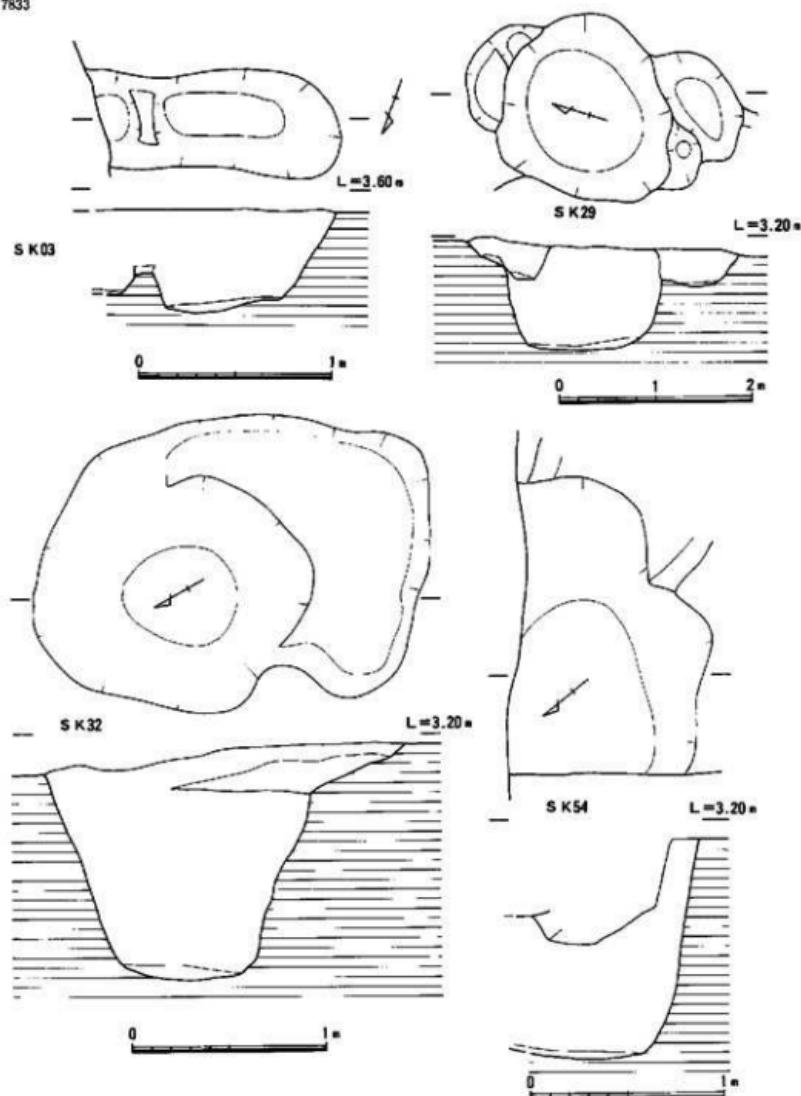


Fig.50 夜間調査区 SK03,SK29,SK32,SK54

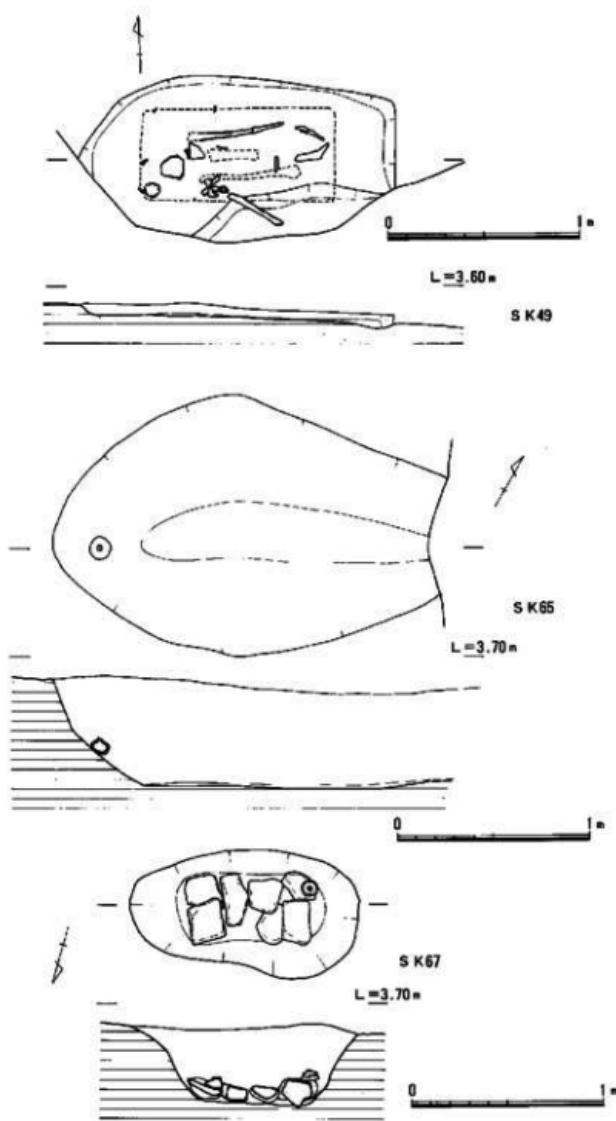


Fig.52 夜間調査区 SK49,SK65,SK67

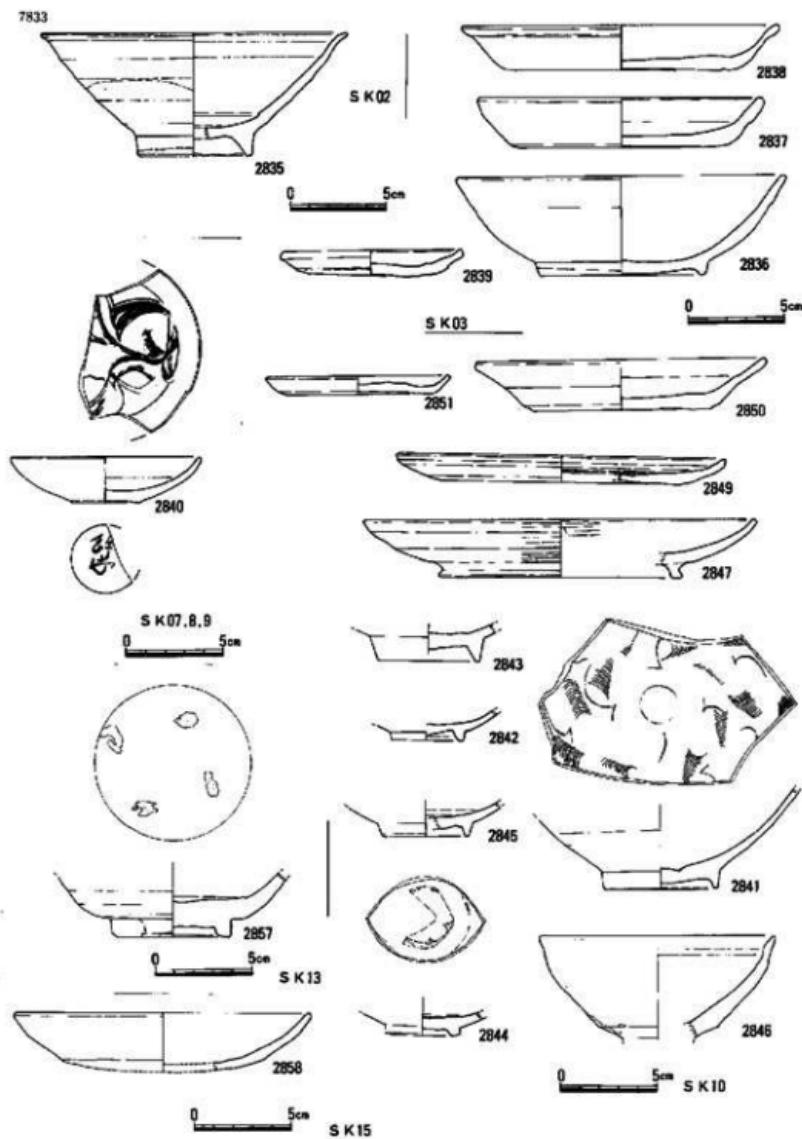


Fig.53 夜間調査区 SK02,SK03,SK07,SK08,SK09,SK10,SK13,SK15出土遺物 (1/3)

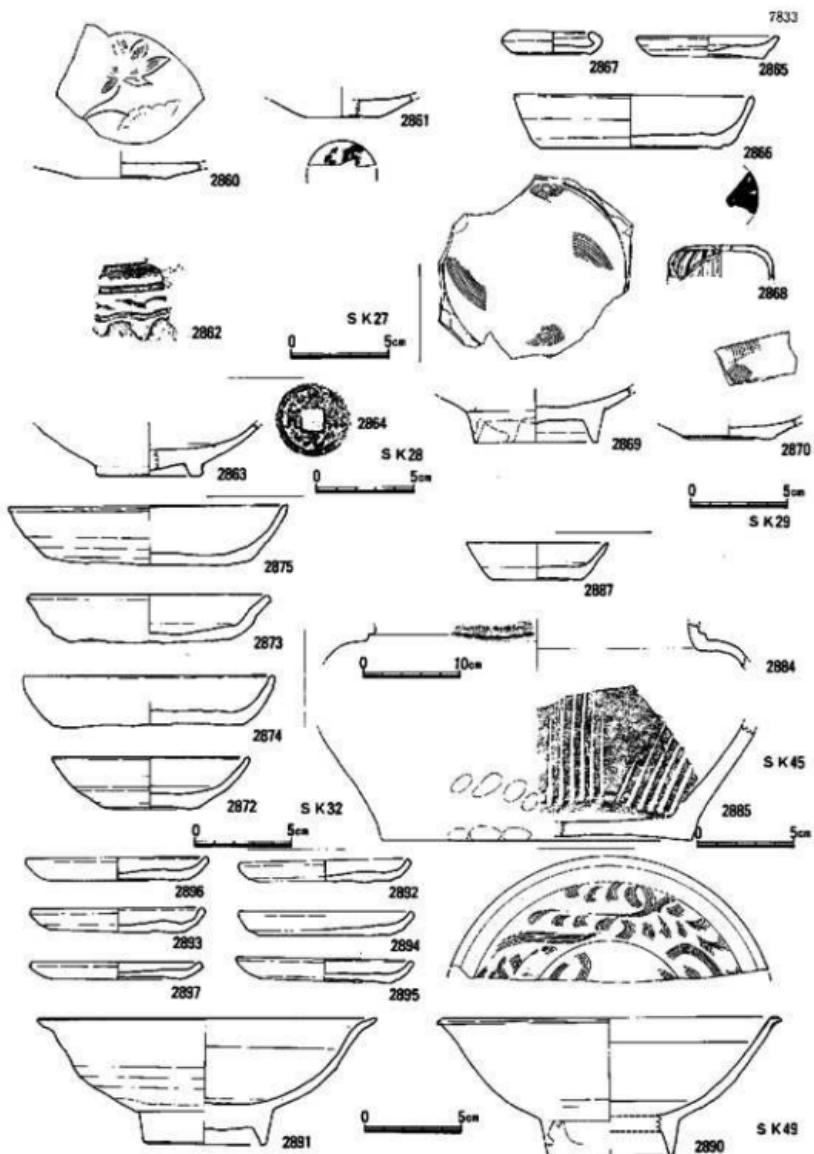


Fig.54 夜間調査区 SK27,SK28,SK29,SK32,SK45,SK49出土遺物 (1/3,2864,2884を除く)

7833

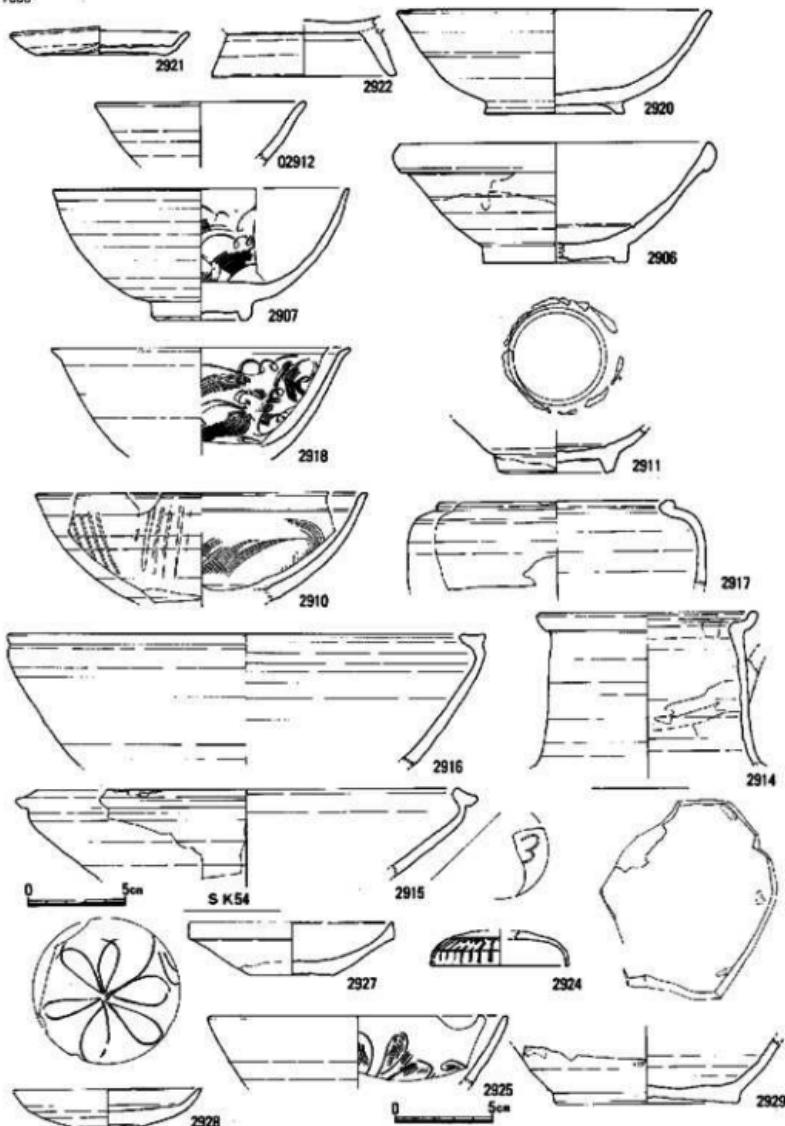
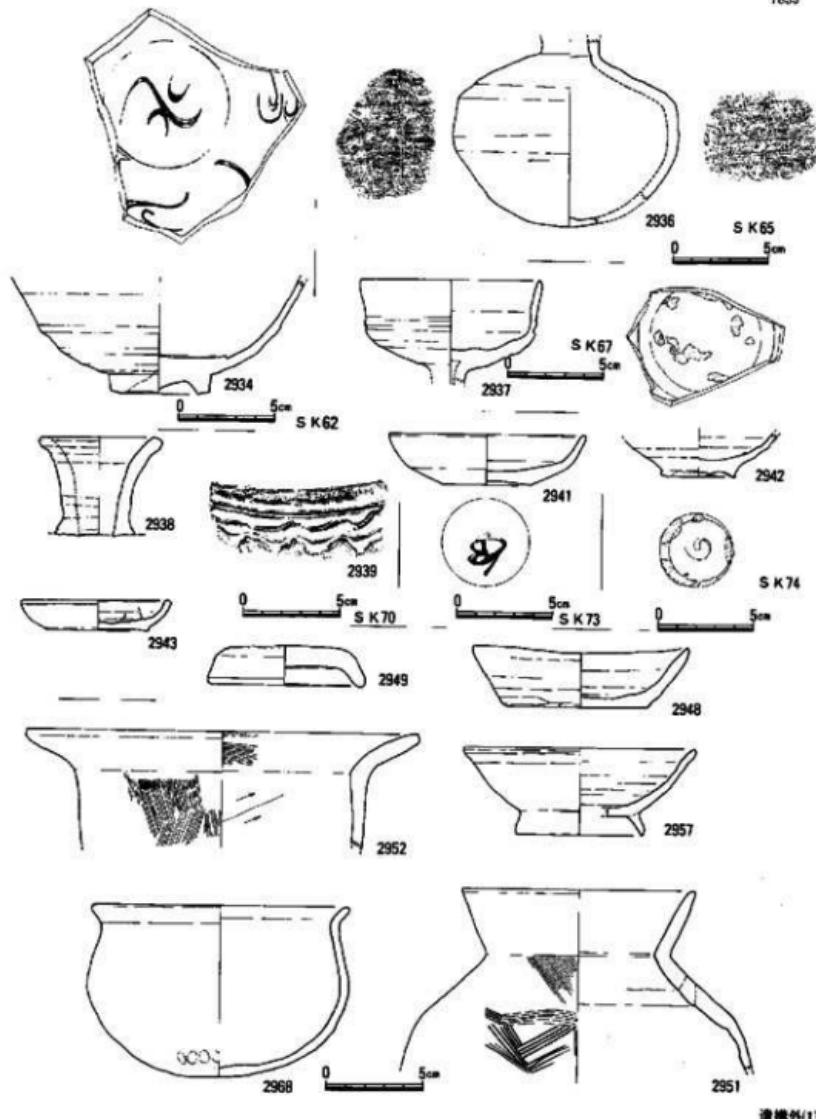


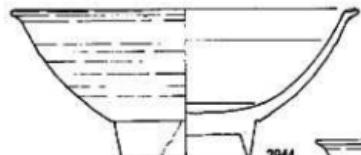
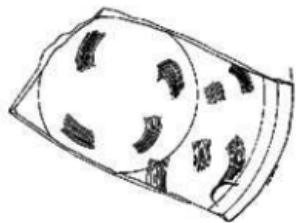
Fig.55 夜間調査区 SK54,SK58出土遺物 (1/3)



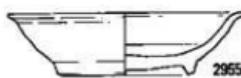
遺構外(1)

Fig.56 夜間調査区 SK62,SK65,SK67,SK70,SK73,SK74出土造物と遺構外出土造物(1) (1/3)

2933



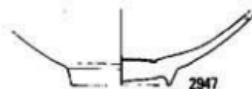
2944



2945



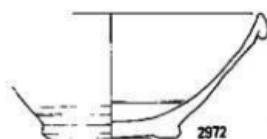
2948



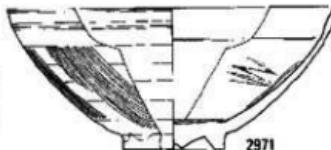
2949



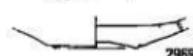
2950



2952



2953



2955

0 5cm

Fig.57 夜間調査区造構外出土遺物(2) (1/3)

3. L・M 区の調査 (Fig. 58—74, PL. 12—13)

L区 1978年8月22日～9月5日にかけて発掘調査を行なった。この地区も例にもれず、建物基礎、埋設管などによる現代の擾乱が著しく、それを受けないところに近世以前の遺構がかろうじて残存するといった状態であった。しかも場所によっては遺構の密度が高く、原形を残すものはきわめて稀であった。検出した遺構は竪穴住居跡？1基、土壙20基、溝3条で、他にピットがある。時代的に最も古い遺構はSK14である。遺構の半分以上が調査区外にかかるが、平面長方形の土壙墓で、床面近くに素文鏡、鉄訓、管玉、勾玉(大小あり)を副葬している(PL. 12)。玉類は土壙埋土の上位でも出土しており、木蓋上に置かれたものがあったことを示している。図示した土器類(Fig. 65)はこの遺構の上面から出土したもので、土壙墓そのものは副葬品などから5世紀を前後する時期に相当しよう。SC01とした竪穴住居跡は側壁の一部が残存するだけで、その形態など明確にしないが、出土遺物(Fig. 68)からみると8C前半の遺構と考えられる。この他の遺構は、SK09が土器類の出土がなく時期不明であるのを除けば、すべて鎌倉～室町時代に属する。土壙としたもののうち、SK17は井戸跡、SK11は土壙墓の可能性が強い。他の遺構は廃棄物処理壙と呼べるものであろうか。SK05には覆土の上部を中心に多数の土師皿が集積している。SK15も同様な状況である。SK19は平面円形の土壙で、白磁碗・黄釉鉄彩盤など(Fig. 65)が出土している。溝3条もこの時期のものである。SD03は鉤状に曲った部分に遺物が集中しており、土師器皿、白磁碗・皿、龍泉窯系青磁皿、天目碗、褐釉陶器四耳壺、緑釉陶器片、滑石製品などその種類はきわめて豊富である(Fig. 68)。包含層からの出土遺物も鎌倉・室町時代のものが大多数を占める。Fig. 68 の 02246 は砂岩製の硯である。

M区 1978年7月20日～8月5日にかけて発掘調査を行なった。この地区も著しく現代の擾乱を受けており、またそれ以前の遺構の重複もはなはだしい。検出した遺構は竪穴住居跡1基、土壙18基、ピットなどである(SK01は欠番)。竪穴住居跡(SC01)は1辺で2m弱の方形を呈し、床面の四隅に柱穴をもつ。N区にこの種の小型住居跡がみられる。古墳時代。土壙は擾乱による近世以降の遺物が一部混じるが、主だった出土遺物からすれば鎌倉～室町時代のものと考えてよい。またその多くが廃棄物処理土壙であろう。その中でSK04は長方形状の土壙をなし、その上部には石や土器・磁器類が集積している。SK10・11もまた長方形状の平面をもつもので土壙墓の可能性もある。出土遺物は底部糸切りの土師器皿が圧倒的に多いが、瓦器、白磁、青磁、陶器類の種類も豊富である。Fig. 74 の 2547 は青白磁托、2452 は青白磁水注。Fig. 72 の 2347 は瀬戸焼の瓶子。青磁、白磁のなかには底部に墨書きを有するものがみられる(Fig. 71—2314・2325、Fig. 74—2397・2454・2405)。

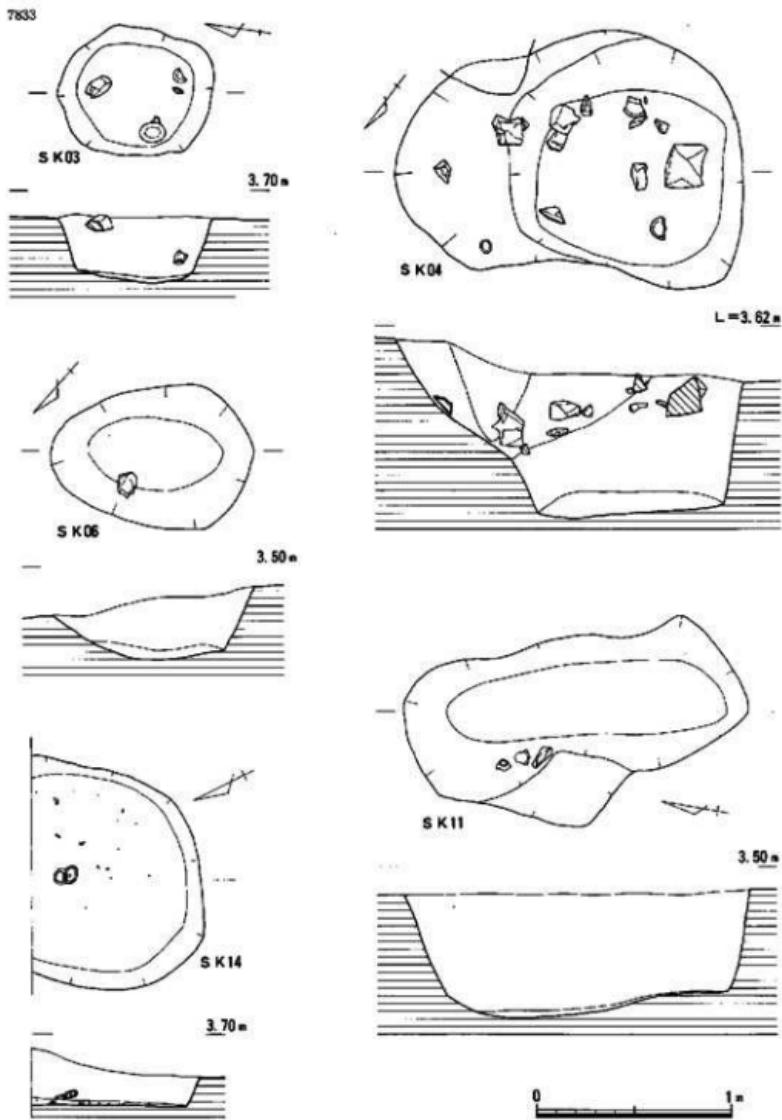


Fig.58 LK SK03,SK04,SK06,SK11,SK14 (1/3)

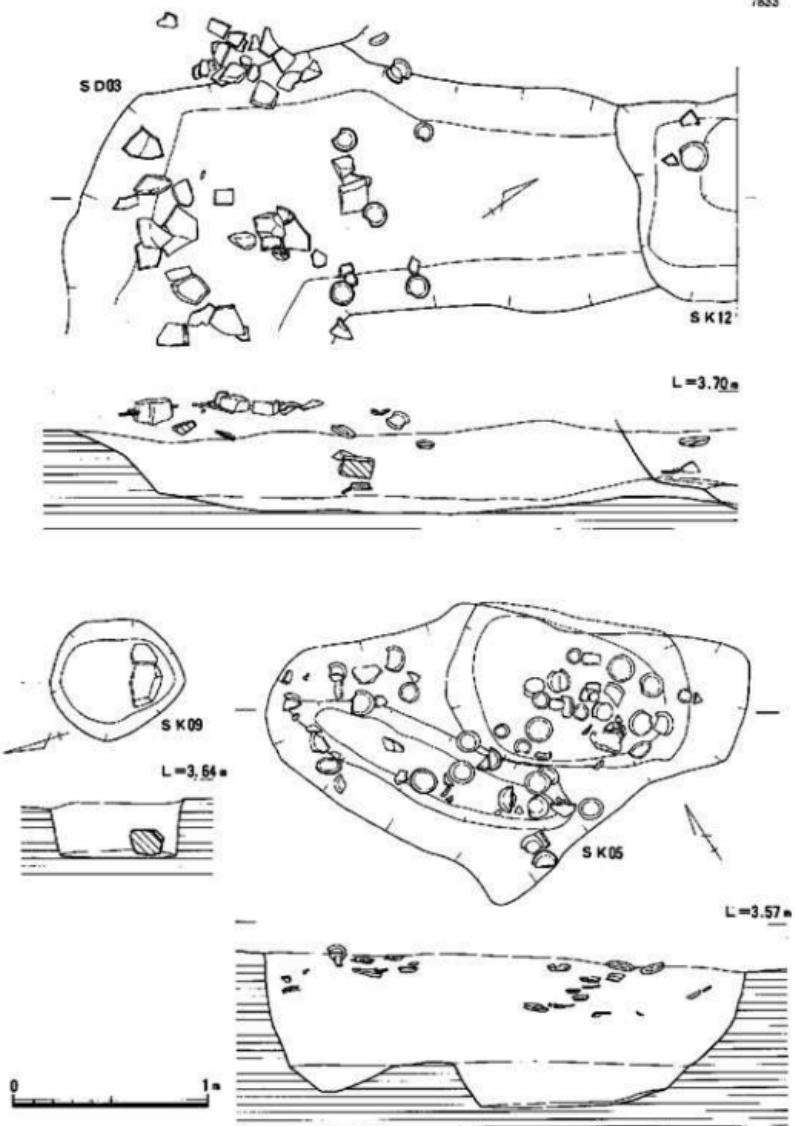


Fig.60 L区 SD03,SK05,SK09,SK12

7633

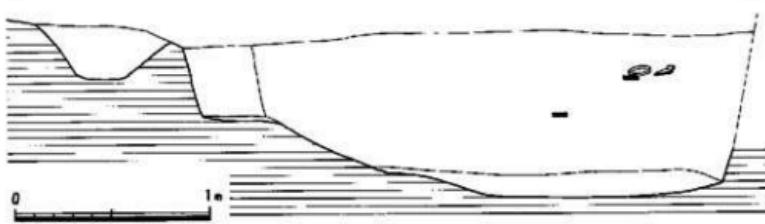
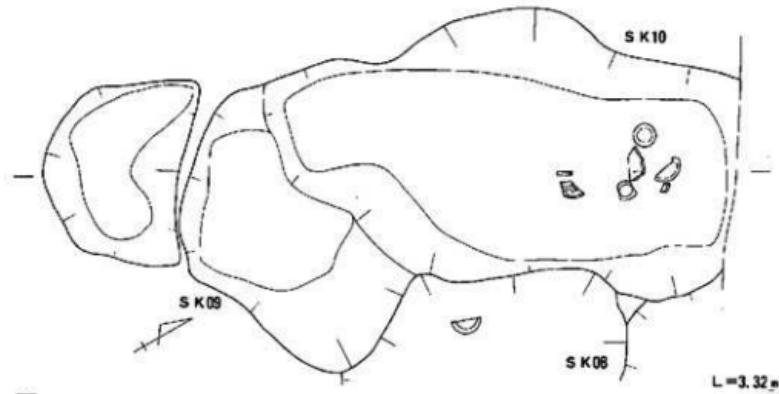
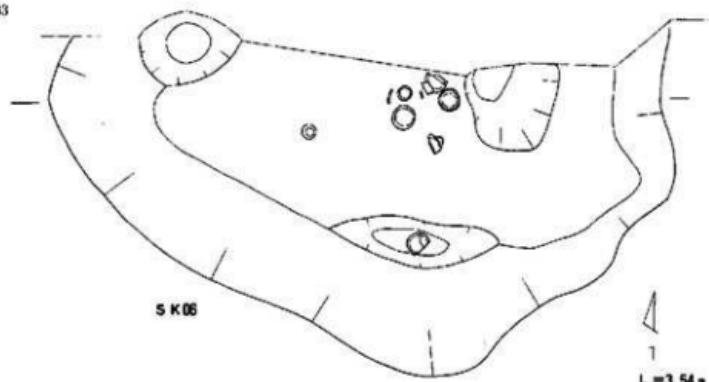


Fig.61 MĘ SK06,SK08,SK09,SK10

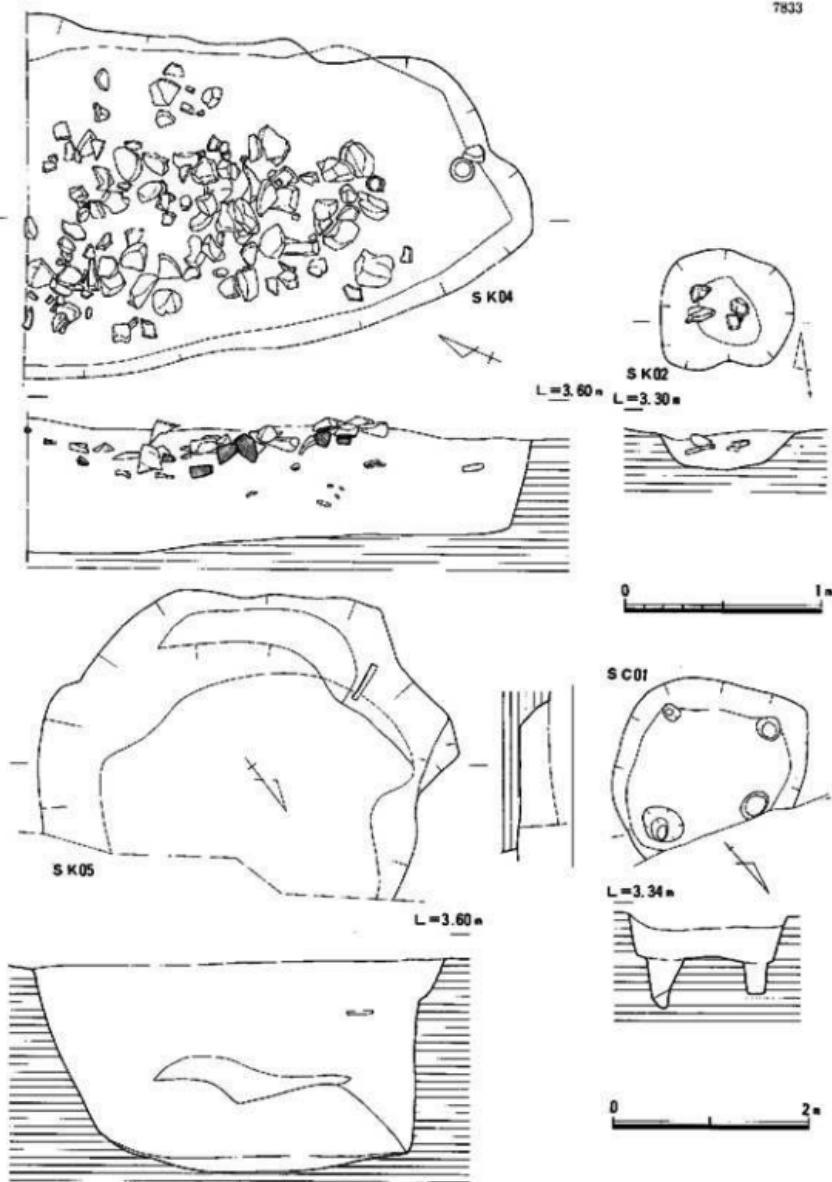


Fig.62 MEX SK02,SK04,SK05,SC01

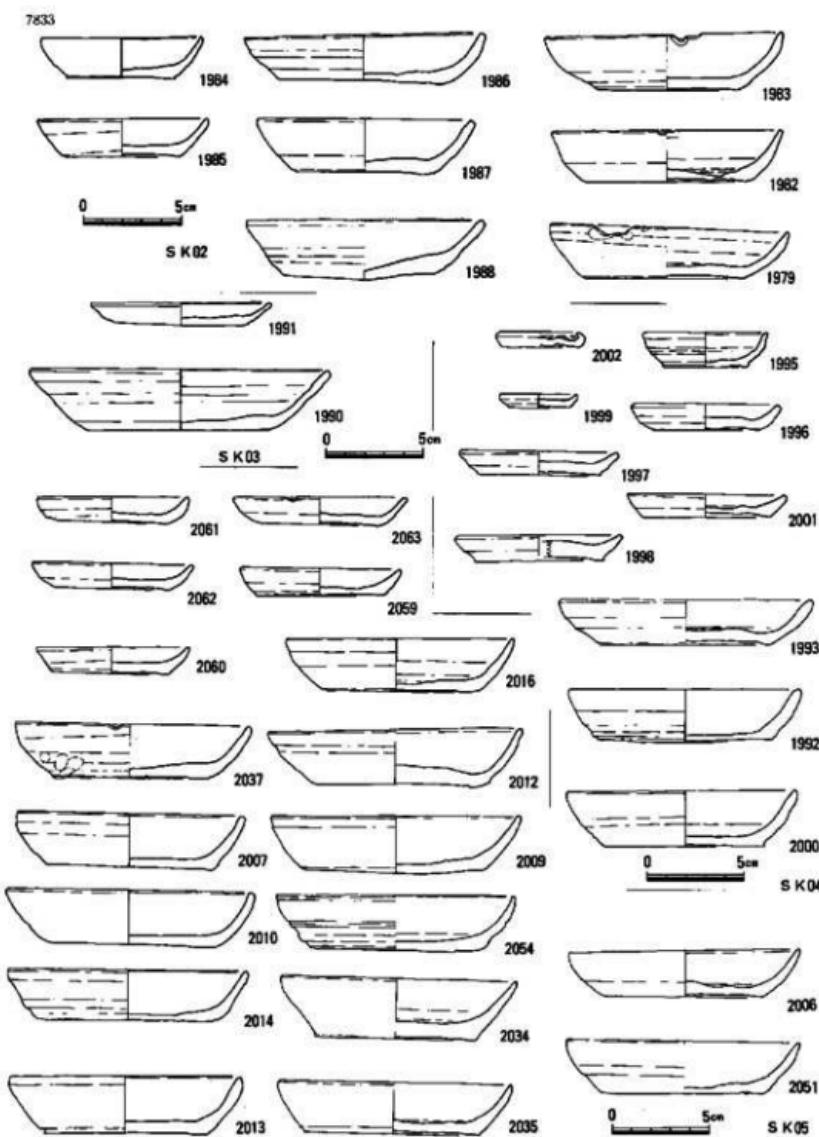


Fig.63 L区 SK02,SK03,SK04,SK05出土遺物 (1/3)

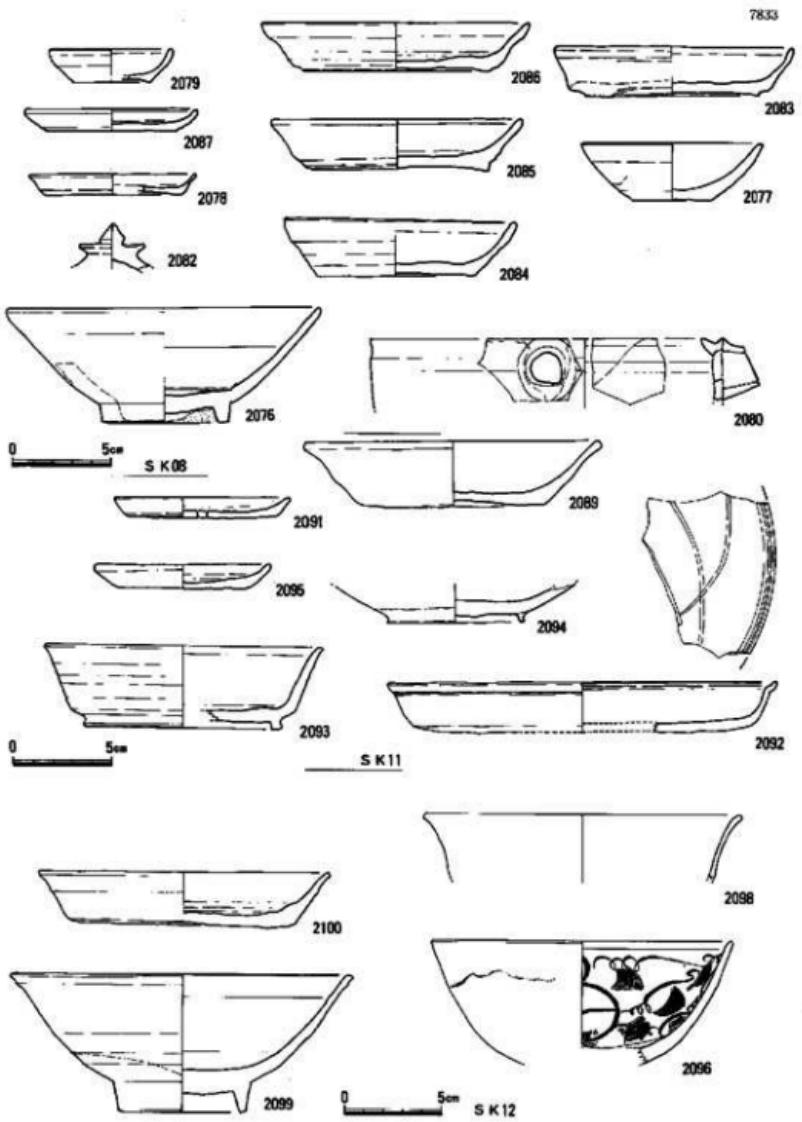


Fig.64 L区 SK08,SK11,SK12出土遺物 (1/3)

7833



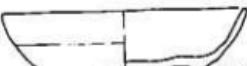
2104



2105



2110



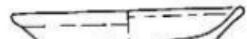
2103



2108



2106



2107

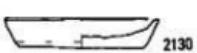
0

5cm

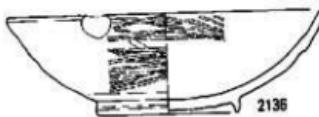
SK14



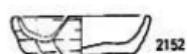
2146



2130



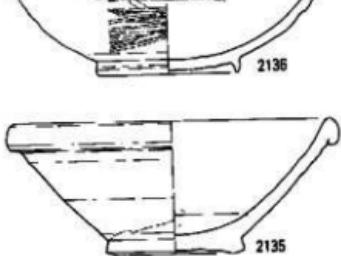
2136



2152



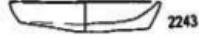
2149



2135



2155



2243



2144



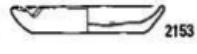
2143



2135



2154



2153

2135



2148



2123



2135



2139



2137



2135



2141



2140



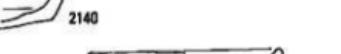
2135



2138



2132



2135



2142

0 5cm

SK15

Fig.65 L区 SK14,SK15出土遺物 (1/3)

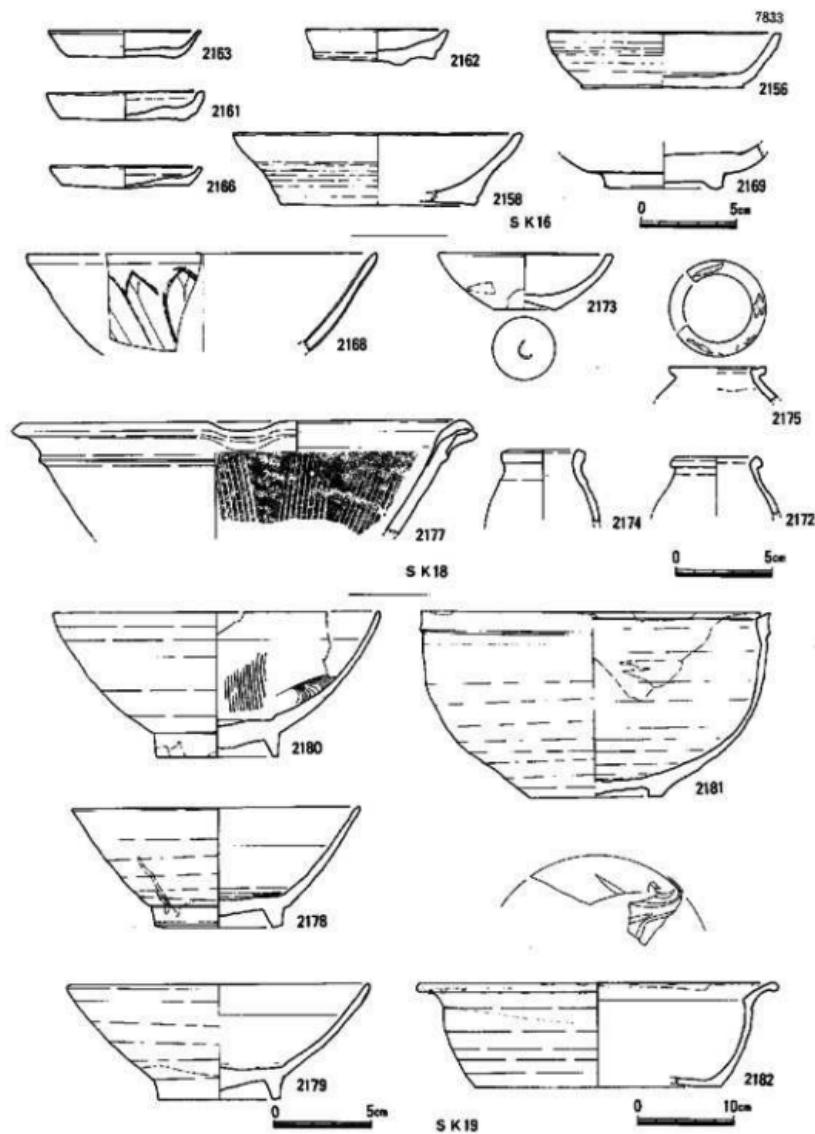


Fig.66 L区 SK16,SK18,SK19出土遺物 (1/3, 2182を除く)

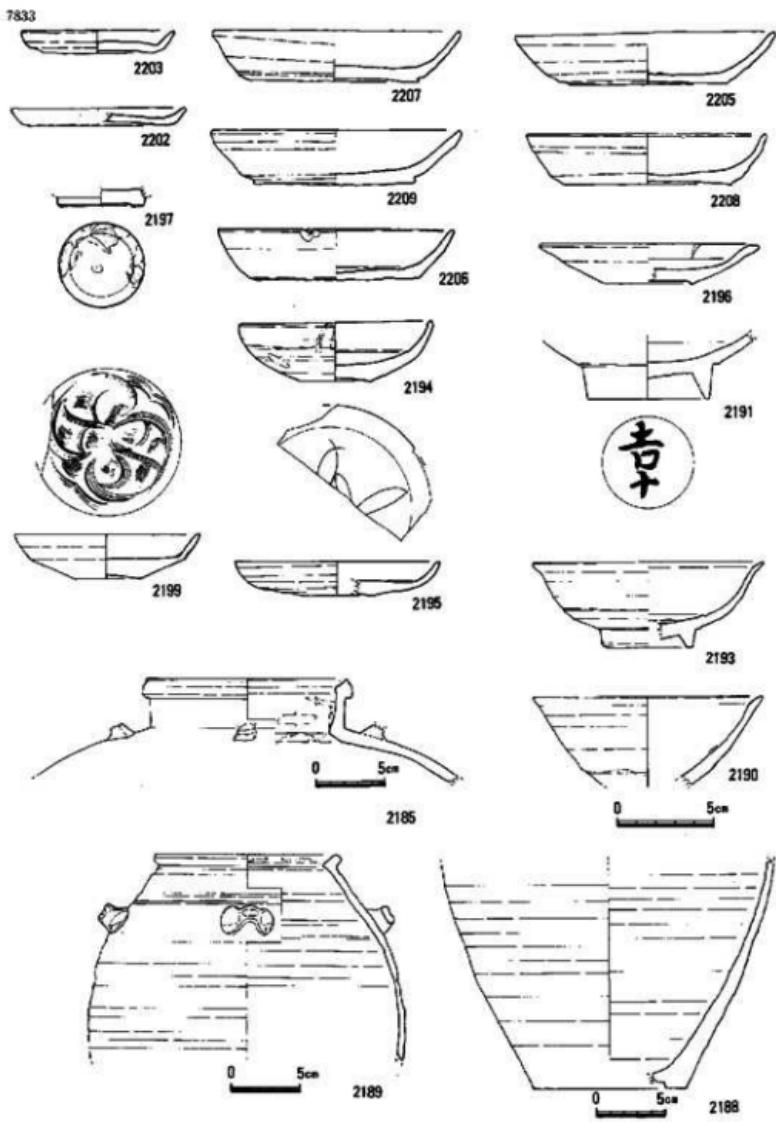


Fig.67 L区 SD03出土遺物(1) (1/3, 2185, 2188, 2189を除く)

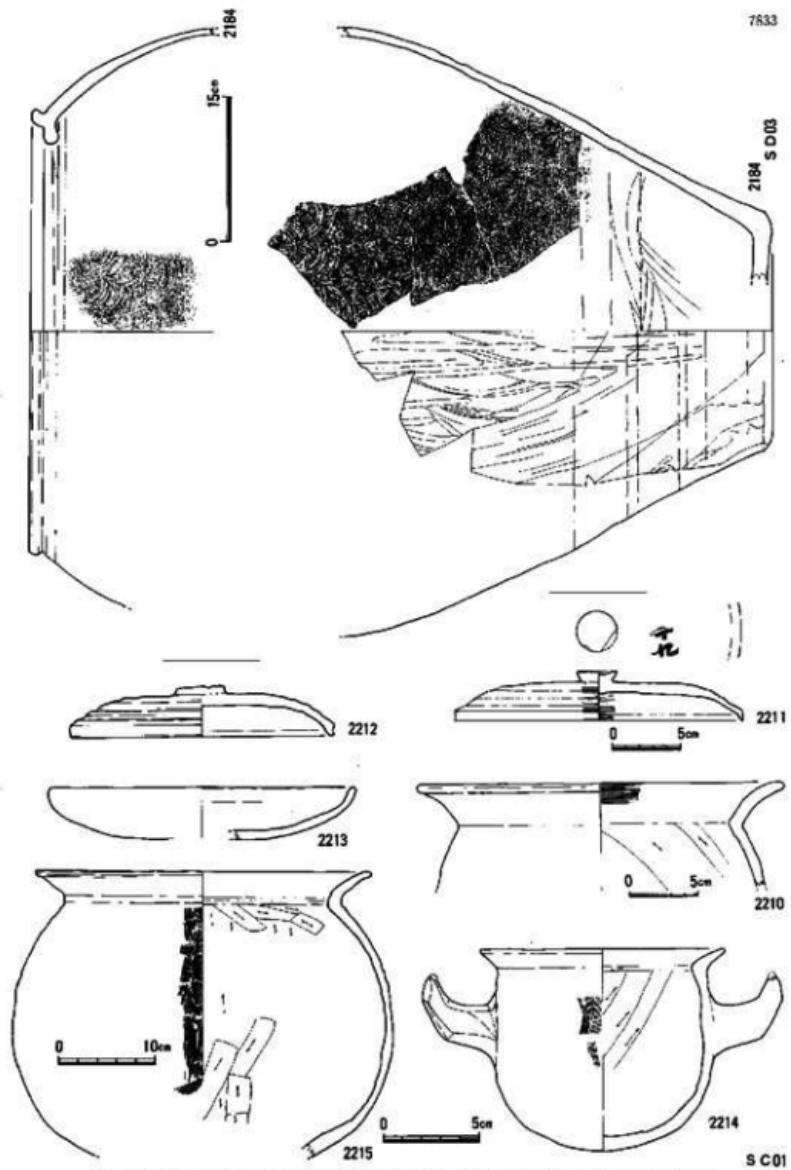


Fig.68 L区 SD03出土遺物(2)、SC01出土遺物 (1/3、2184、2210、2211、2215を除く)

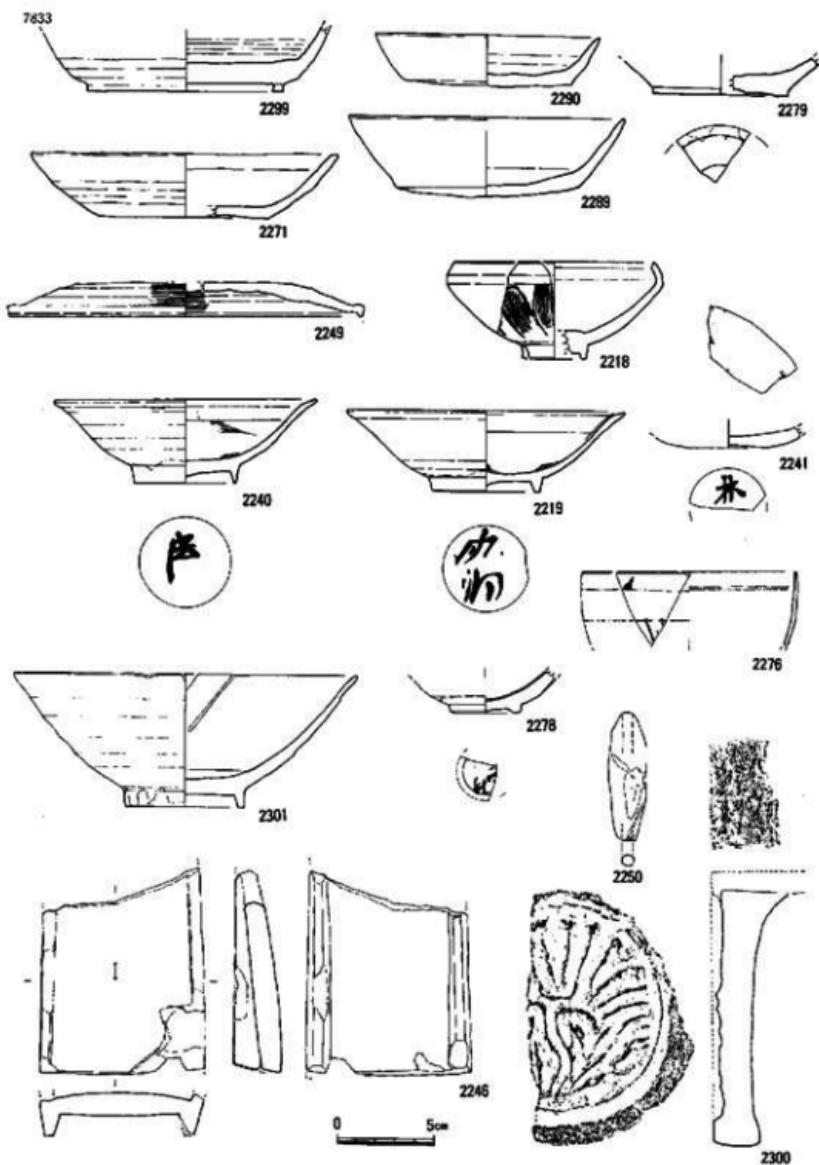


Fig.69 L区 造構外(包含層)出土造物(1) (1/3)

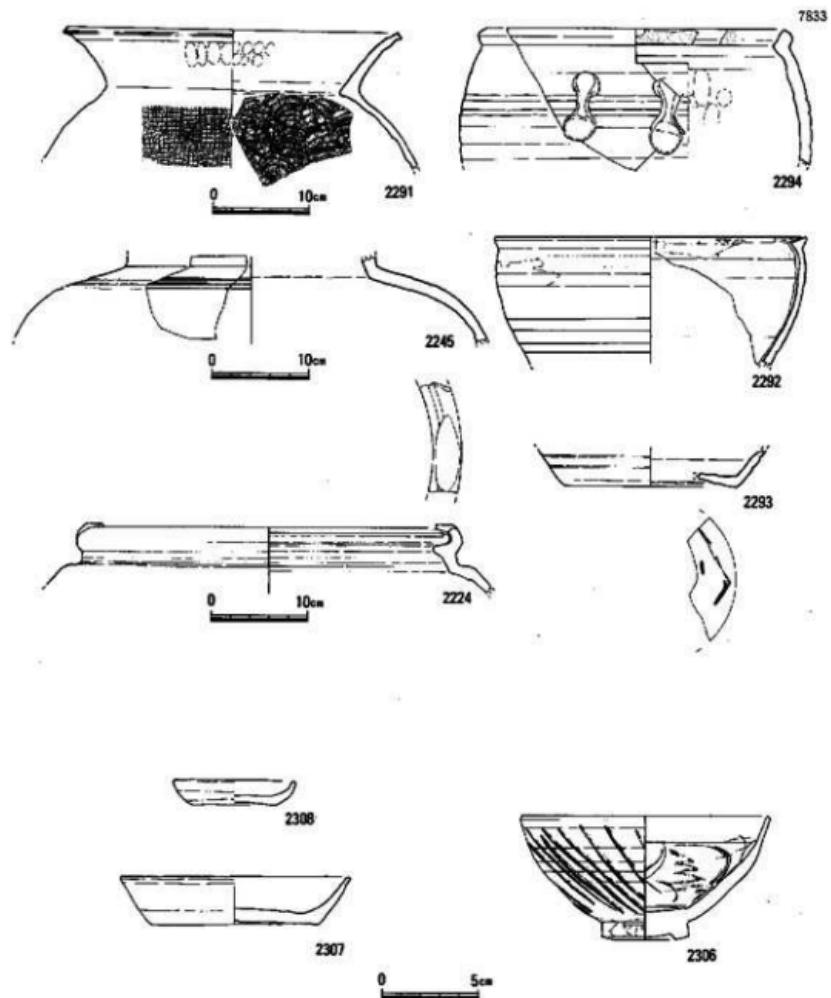


Fig.70 L区 造構外(包含層、表上)出土遺物(2) (1/3. 2291, 2245, 2224を除く)

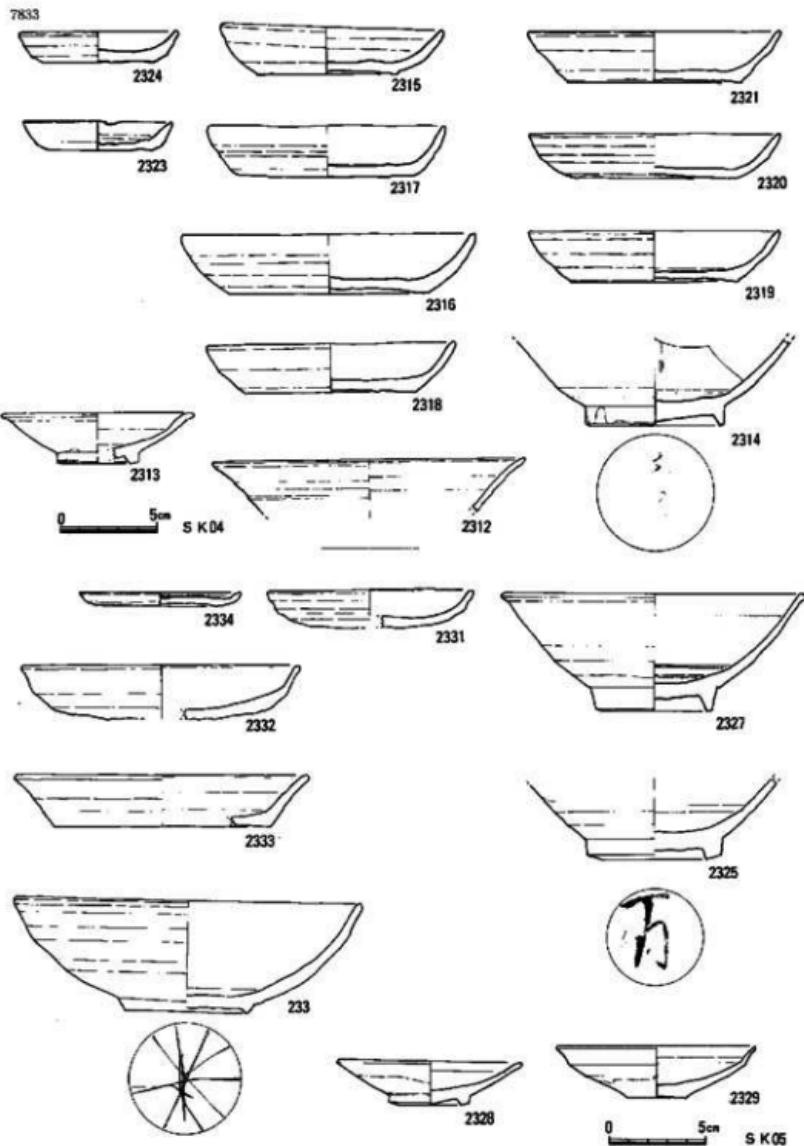


Fig.71 M区 SK04,SK05出土遺物 (1/3)

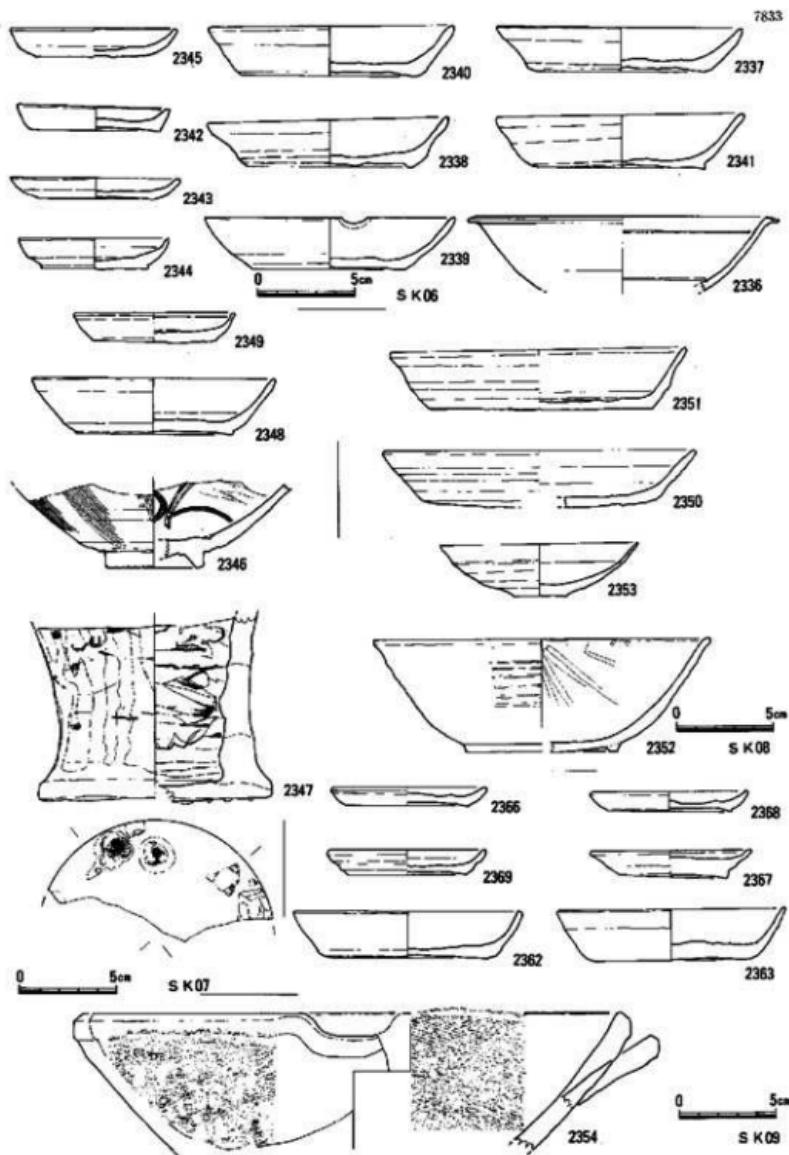


Fig.72 M区 SK06,SK07,SK08,SK09出土遺物 (1/3)

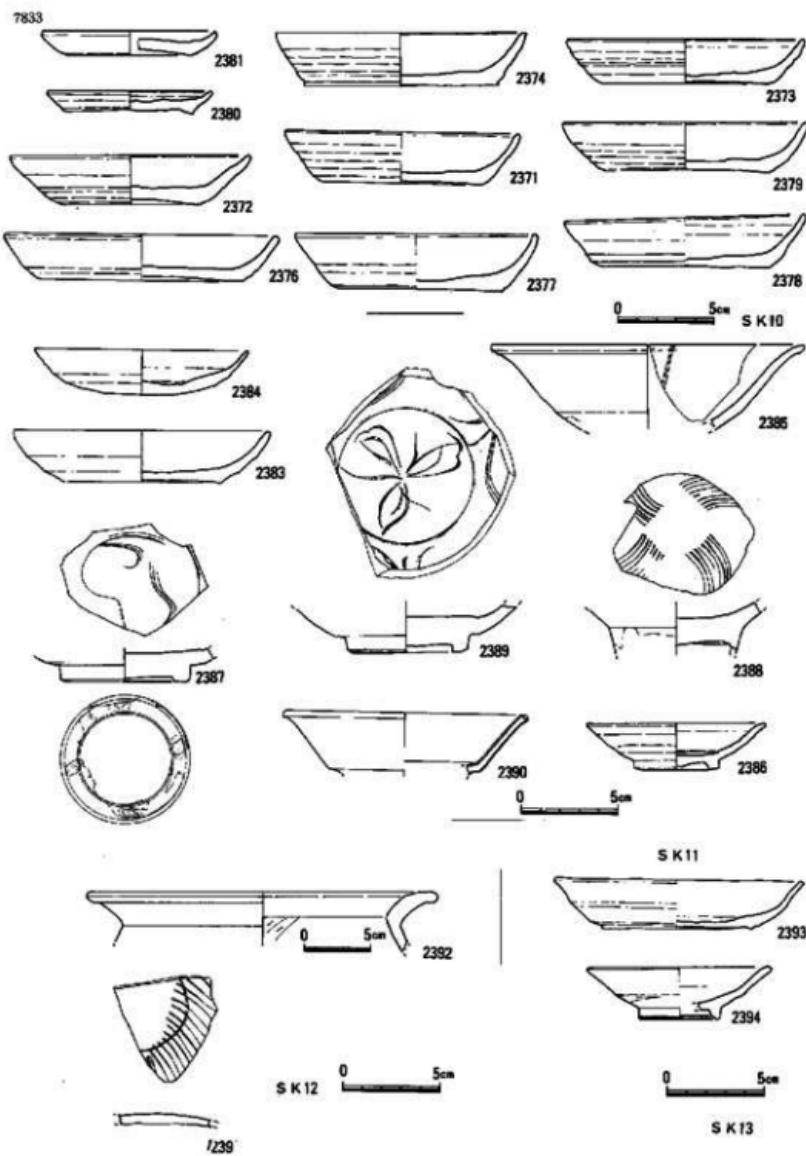


Fig.73 M区 SK10,SK11,SK12,SK13出土遺物 (1/3,2392を除く)

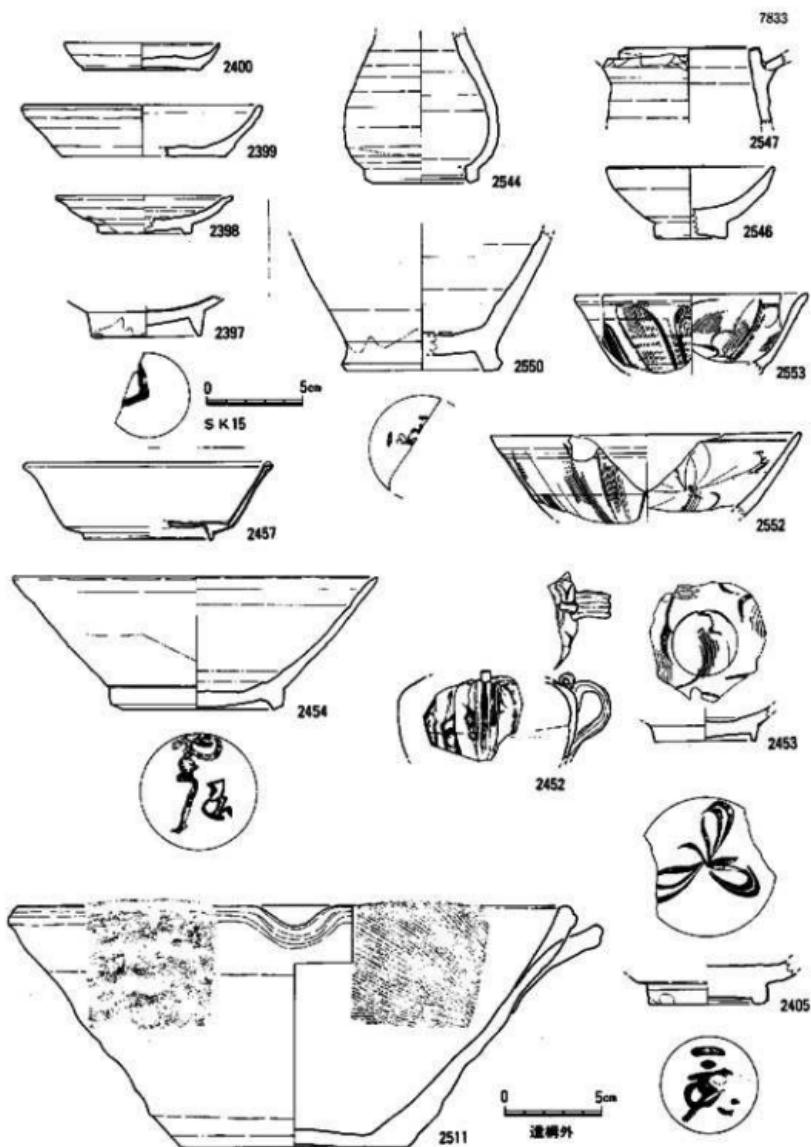


Fig.74 M区 SK15出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物 (1/3)

4. N・O・P 区の調査 (Fig. 76-85, PL. 14-17)

N・O・P 区は 1978 年 7 月 3 日 N 区の表土剥ぎから開始し、8 月中旬全区の調査をもって終了した。全地区にわたって埋設管などによる現代の擾乱が著しく、特に P 区はそれ以前の遺構がみられないほど破壊を受けていた。N・O 区でも、検出した遺構は擾乱を受けない部分にからうじて残存している状態であった。このような状況のため、調査は擾乱を受けていない部分を中心に行なった。以下 N 区、O 区の遺構・遺物について簡単に触れる。

N 区 検出した遺構は近世以降の廃棄物処理土壌を除き、土壌 8 基、溝 3 条、竪穴住居跡 4 基などである。土壌の大半は廃棄物処理土壌であり、その時期もおよそ 13 世紀～14 世紀中頃に集中する。ただ SK08 はその形態、出土遺物からして 11 世紀代の土壌墓と考えられる。3 条の溝は区北側を東西に平行して走っている。一番南側の SD01 が最も規模が大きい。断面は SD01・02 が逆台形、SD03 が U 字形を呈する。SD02 は SD01 を切っている。SD01・03 の上面近くには、溝埋没後投棄された土器溜りがみられる。これらの溝は道路側溝の可能性が強い。土器溜りの遺物からすれば、14 世紀頃に埋没していたものと考えられる。4 基の竪穴住居跡のうち、SC01・02 は 1 辺 2.5 m 前後の平面方形をなす小型のもので、四隅に柱穴を設けている。SC01 の覆土には多量の炭化物を含んでいた。SC03 は長方形、SC04 は側壁の一辺が残存するだけである。SC04 から出土した完形の土師器皿 (Fig. 81-2662) は、内面全体に赤色顔料が認められる。SC01-03 からは鎌倉・室町時代の遺物が出土しているが、一部擾乱を受けており、住居跡そのものは古墳時代のものとしてよいであろう。

O 区 検出した遺構は近世以降のものを除けば土壌 28 基、溝 3 条などである。これらの多くが擾乱を受け、また遺構相互の重複により、原形をとどめるものは少ない。土壌の形態はまちまちであるが、このうち SK04・05・11 が古墳時代に属する。SK11 は平面橢円形状をなし、中から土師器長頸壺 (2701) 1 個体だけが横置の状態で出土した。他の土壌のうち SK10 は奈良時代の可能性があるが、残りの 24 基は鎌倉～室町時代に属する。SK07・21・24・28 などからは古式土師器が比較的多く出土しており、図示したものもそれらに限られたが、他の遺物などからみても遺構そのものの時代は鎌倉～室町である。この時代の土壌のうち、SK07・08・14・17・20 は井戸側の残存こそないものの、その形態からして井戸跡と考えてよい。残りの土壌は廃棄物処理場であろう。ただ SK15 は平面橢円形の土壌で、境内からは完形の土師器皿がまとまって出土しており、別の用途を考える必要がある。遺物としては SK08 から綠釉陶器 (2697～2700)、SK17 から越州窯系青磁蓋 (2731) が出土している。SK12 の碧玉製管玉は古式土師器の時期に伴うものであろう。3 条の溝 (SD01～03) の性格は明らかでないが、時代的には鎌倉～室町におさまる。

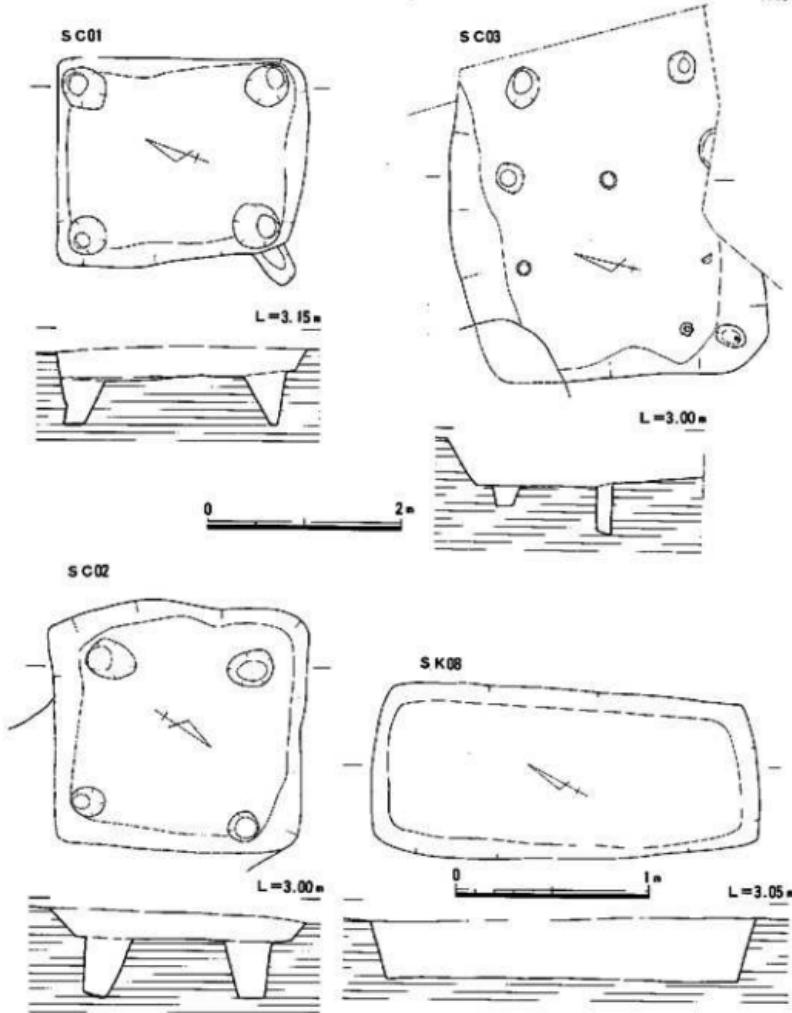


Fig.76 NEX SC01,SC02,SC03,SK08

7833

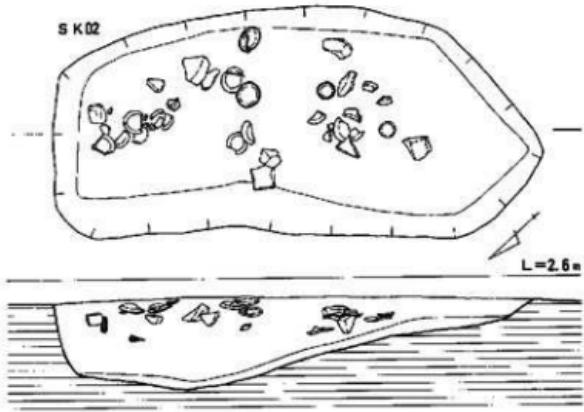
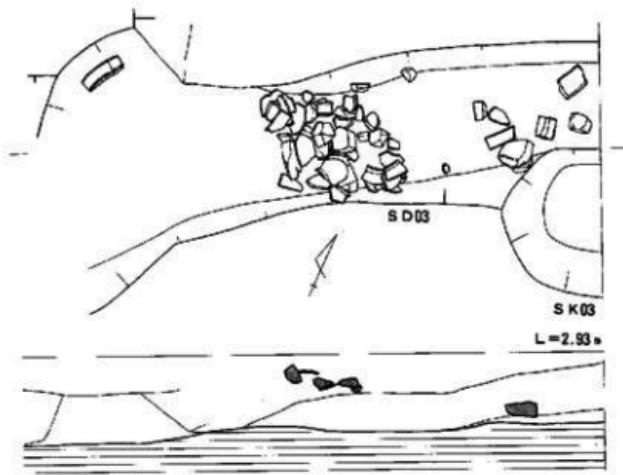


Fig.77 N区 SD03,SK02,SK03

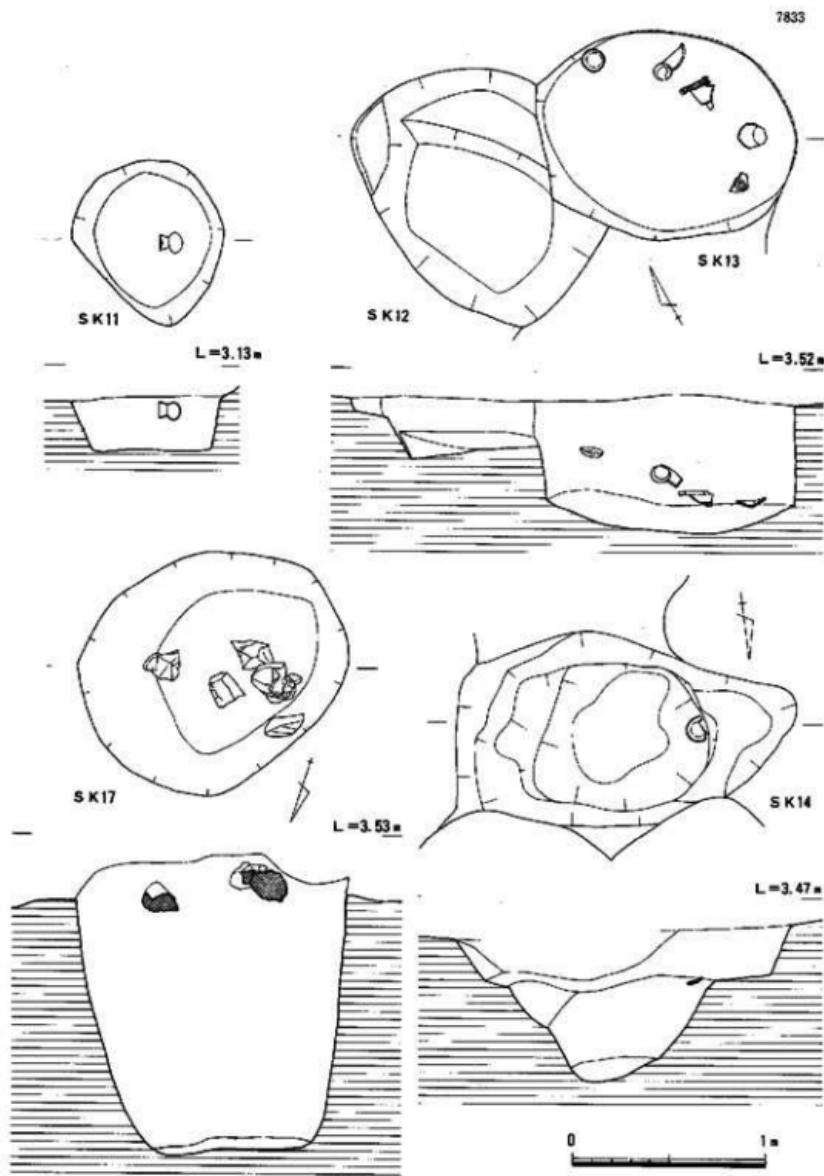


Fig.78 OEX SK11,SK12,SK13,SK14,SK17

7833

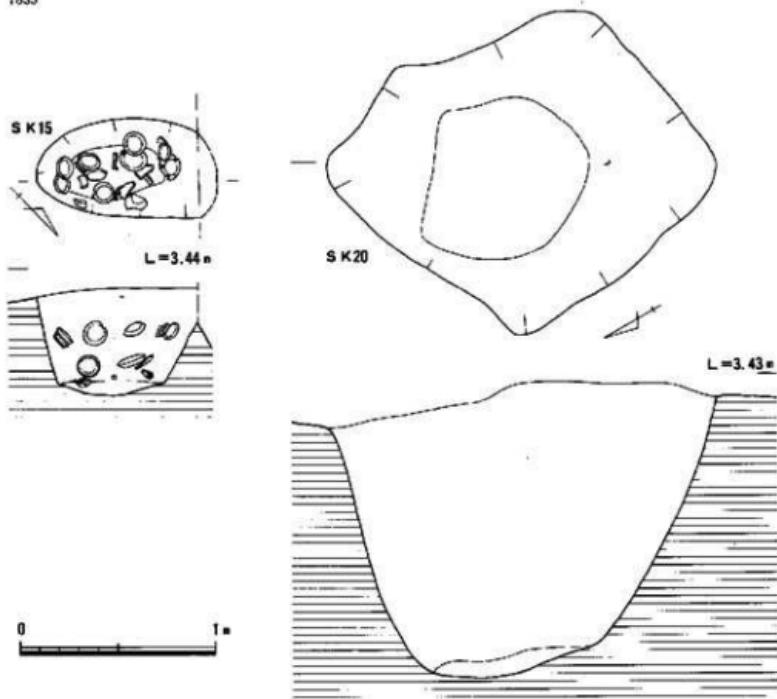


Fig.79 Obj SK15,SK20

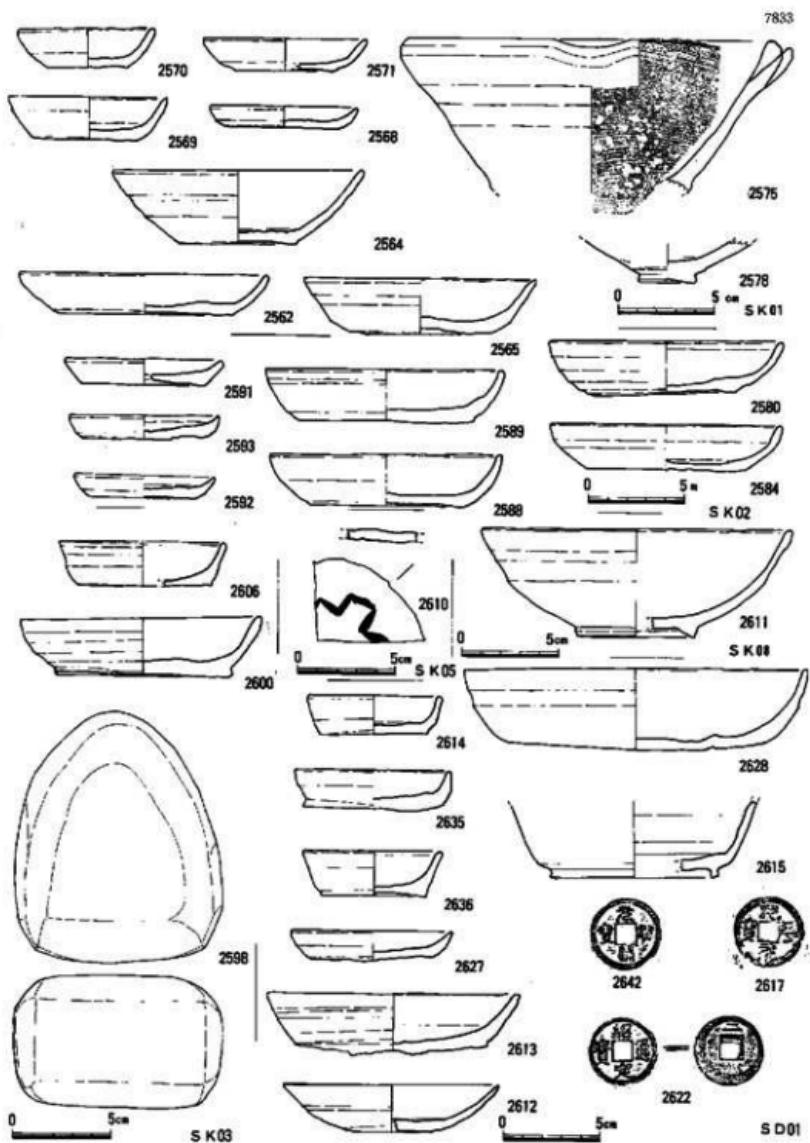


Fig.80 N区 SK01,SK02,SK03,SK05,SK08,SD01出土遺物 (1/3)

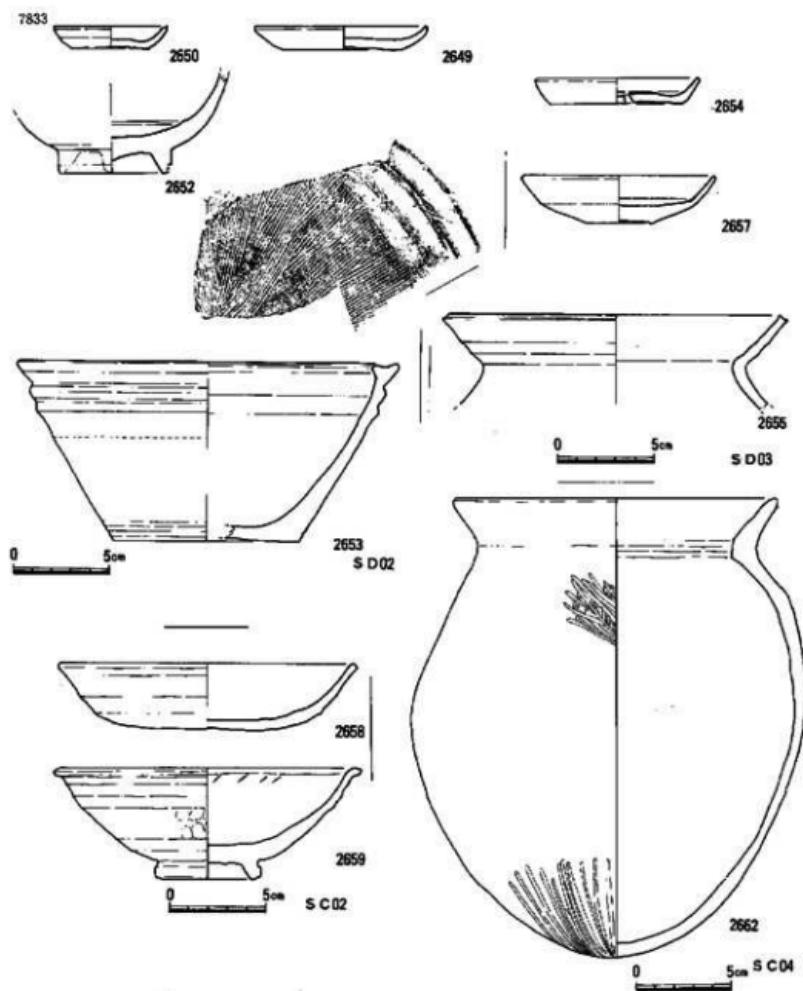


Fig.81 N区 SD02,SD03,SC02,SC04出土遺物 (1/3)

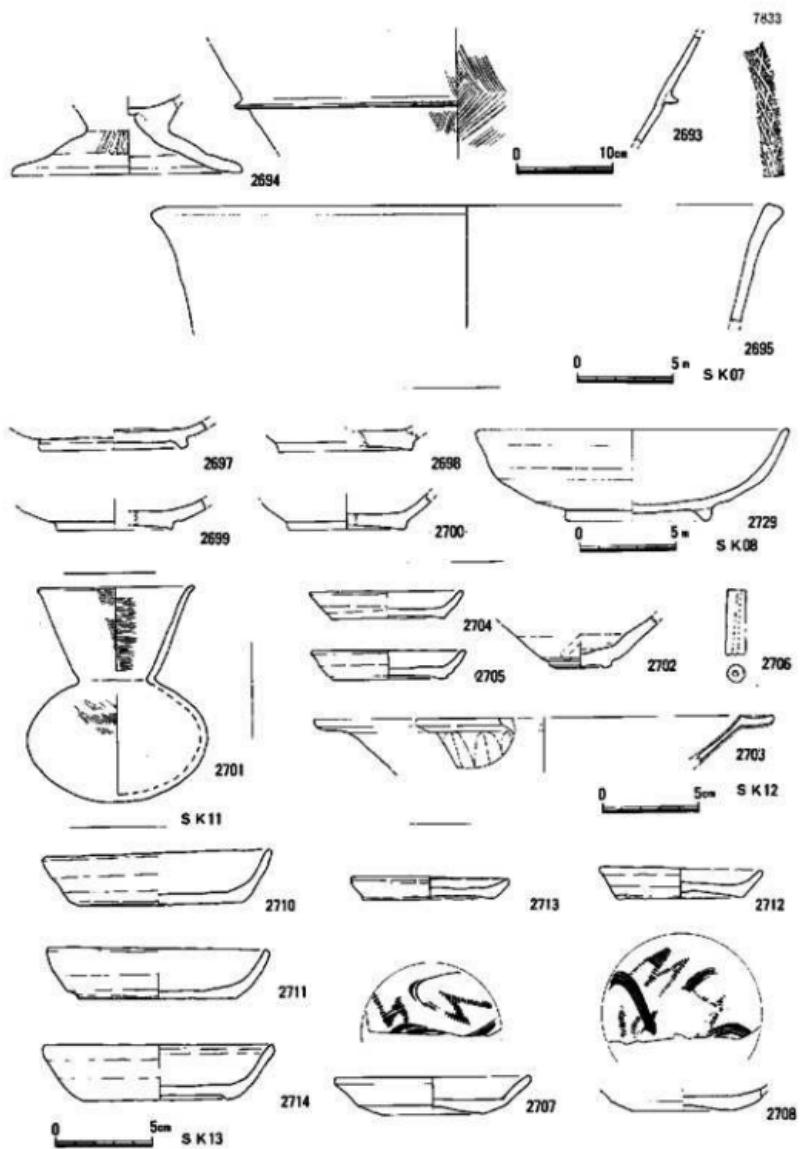


Fig.82 O区 SK07,SK08,SK11,SK12,SK13出土遺物 (1/3, 2693を除く)

7833

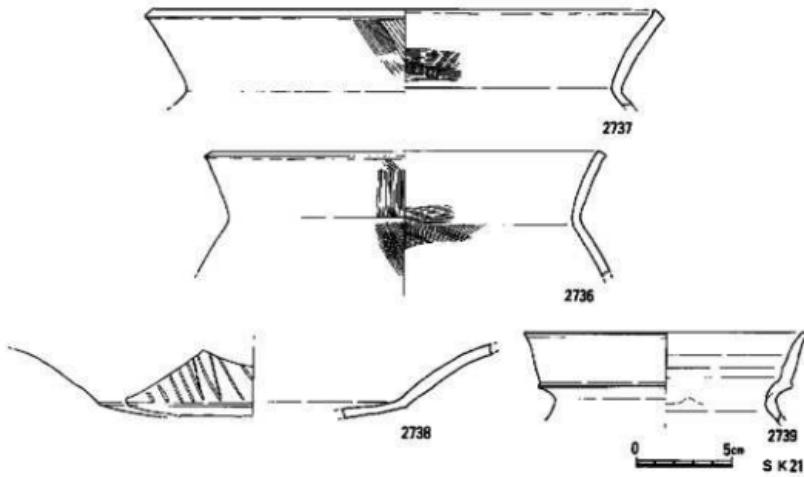
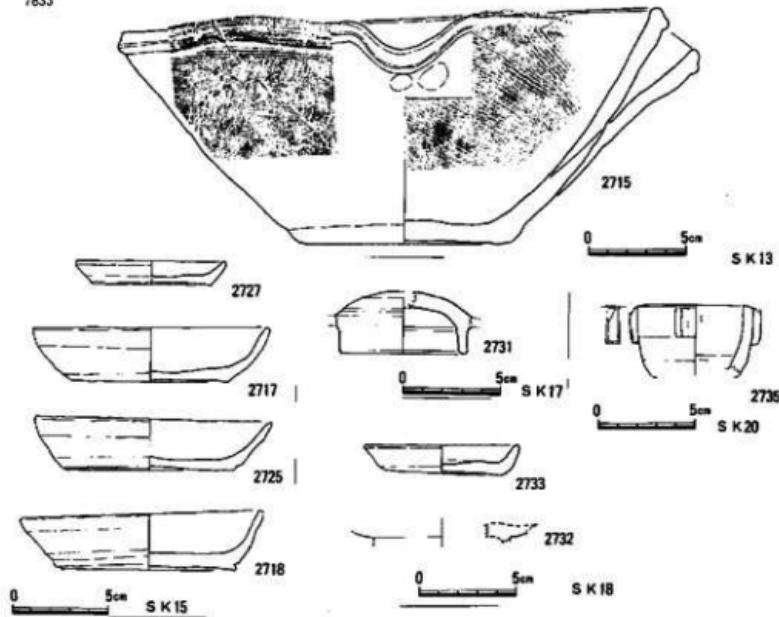


Fig.83 O区 SK13,SK15,SK17,SK18,SK20,SK21出土遺物 (1/3)

7833

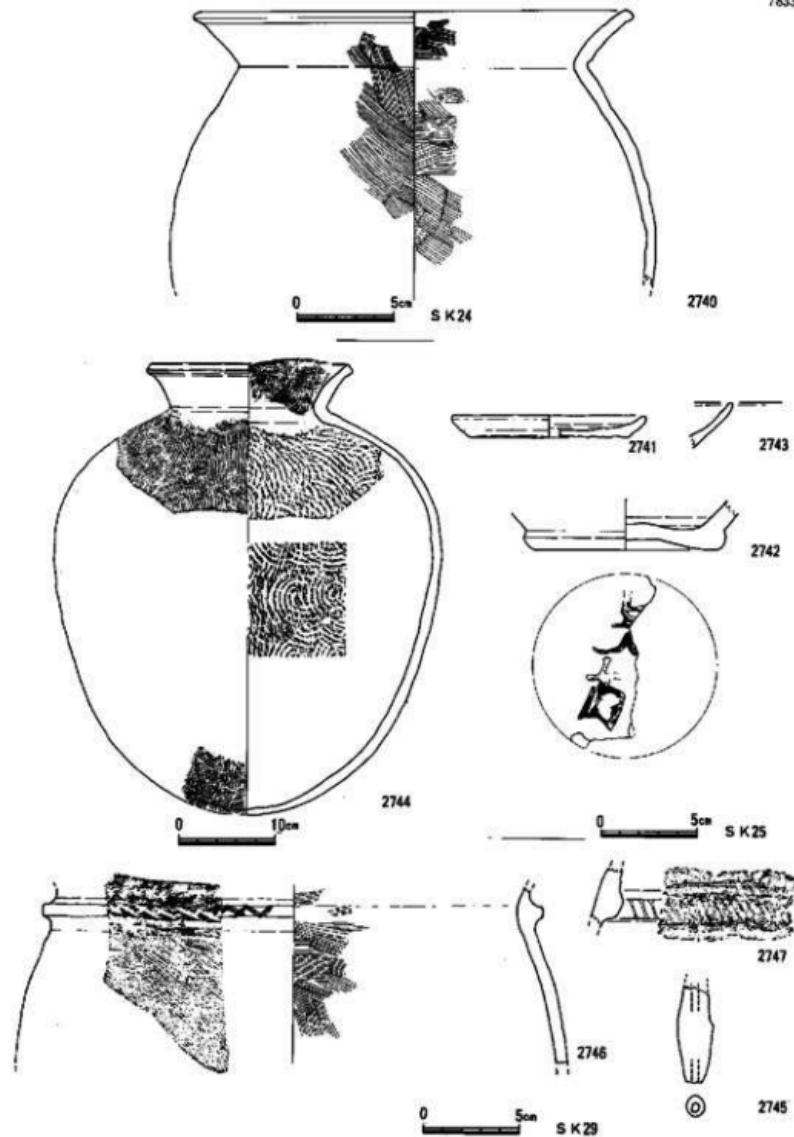


Fig.84 Oix SK24,SK25,SK29出土遺物 (1/3)

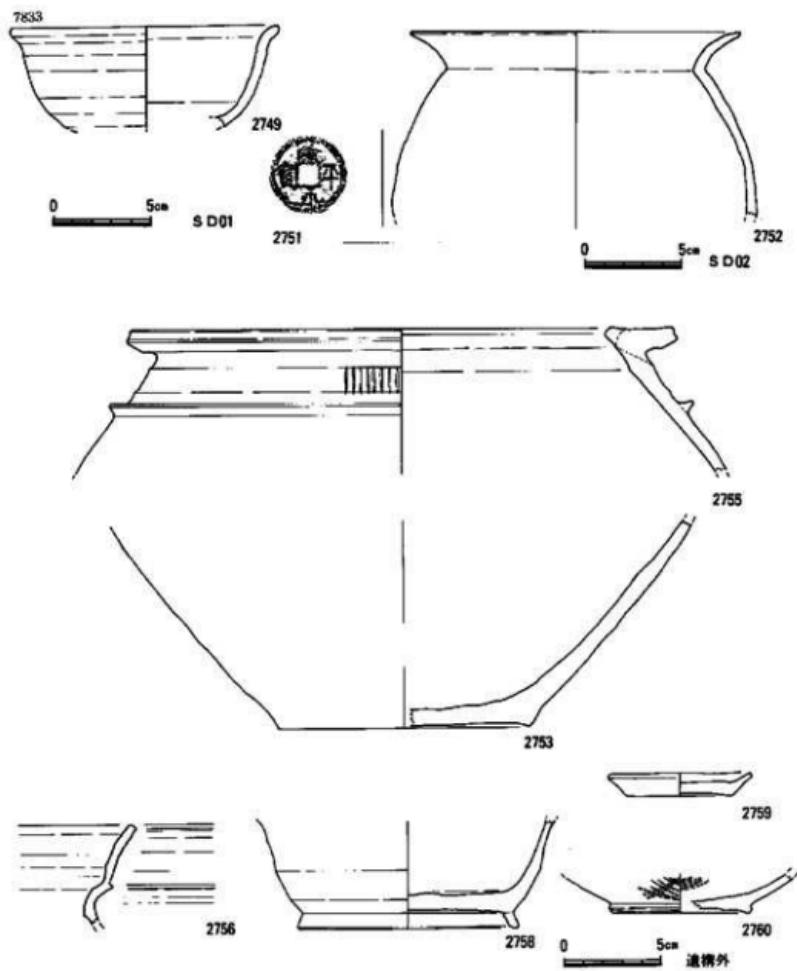


Fig.85 O区 SD01,SD02出土遺物、追構外出土遺物 (1/3)

5. Q 区の概要 (Fig. 86—91、PL. 18)

Q 区は 1978 年 5 月 29 日から調査を開始し、6 月 2 日に終了した。区内には擾乱部分が多く、調査したのは 10.5×14.0 m の範囲、調査面積は約 150 m^2 にとどまった。その中にも埋設管による擾乱があり、遺構のほとんどが何らかの形で破壊されていた。擾乱のない所は、地表下 $1.2 \sim 1.3$ m で地山の白砂に達した。検出した遺構は土壙（井戸・土壙墓・廃棄物処理場）15 基、溝一条で、その時期は古墳時代前半から近・現代にいたる。

古墳時代の遺構は SK04・11・13・14、SD01 である。SK11 は破壊が著しくほとんど原形をとどめないが、SD01 に切られており、またその出土遺物からしても、この地区で最も古い遺構である。SK14 は深さ約 30 cm の掘鉢状の土壙で、古式土師器が出土している。SD01 は西南から東北にかけて一直線に走る幅 1.8 m 前後、深さ 30~40 cm の断面 U 字形状の溝である。黒褐色砂の覆土から小型丸底壺（2827）、高杯（2828）などの土師器が出土しており、SK14 と近い 4 世紀中～後半頃の時期と考えられる。この西隣接した博多第 17 次調査においてこの溝の延長がさらに 38 m 検出されている (SD161、『博多 III』福岡市報 118 集、1985)。SK04 は梢円形、SK13 は長方形に復元できる土壙で、その出土遺物からすれば 6 世紀後半の時期のものであろう。SK13 からは肩部に花文を施した新羅焼の壺（2811）が 1 点出土している。ともに土壙墓の可能性がある。この他 SK15 もこの時期の須恵器・土師器を出土している。

SK12 は調査区北端にかかる円形状の土壙である。出土した杯・皿は墨書のもの（2809）も含めてすべてヘラ切りで、他の遺物も考えあわせると 8~9 世紀の遺構である。SK07・08 は 13~14 世紀の井戸で底には曲物の井戸側が残存する。SK01・02 は長軸方向をほぼ同じにして縦列する長方形土壙である。ともに土壙墓で、SK01 の遺物出土状況からすれば木蓋の存在が想定される。時期は井戸と同じ。SK05 も同時期の円形状土壙で、覆土に多くの炭化物や骨片を含む所から火葬墓の可能性もある。図示した土器（2692・2789）はこの遺構以前のものである。SK09 は 12~13 世紀の円形状遺構。

SK03・10 は近世以降の廃棄物処理土壙である。その覆土には古墳時代以降の遺物を含んでいる。SK03 の 2780、SK10 の 2802 は奈良時代の遺物。また SK10 の 2803 は脚が欠損しているが、鼎となるものであろうか。

包含層から多くの遺物が出土している。特に古式土師器の出土が多いのが特徴的である。Fig. 91 の 2817 は外面タタキ、内面刷毛目調整の壺で、庄内式系土器の新しいタイプに属する。他に図示した土器も柳田康雄氏編年の IIa の時期段階におさまるものである。Fig. 90 の 2825 は蛇目高台をもつ越州窯系青磁碗片である。

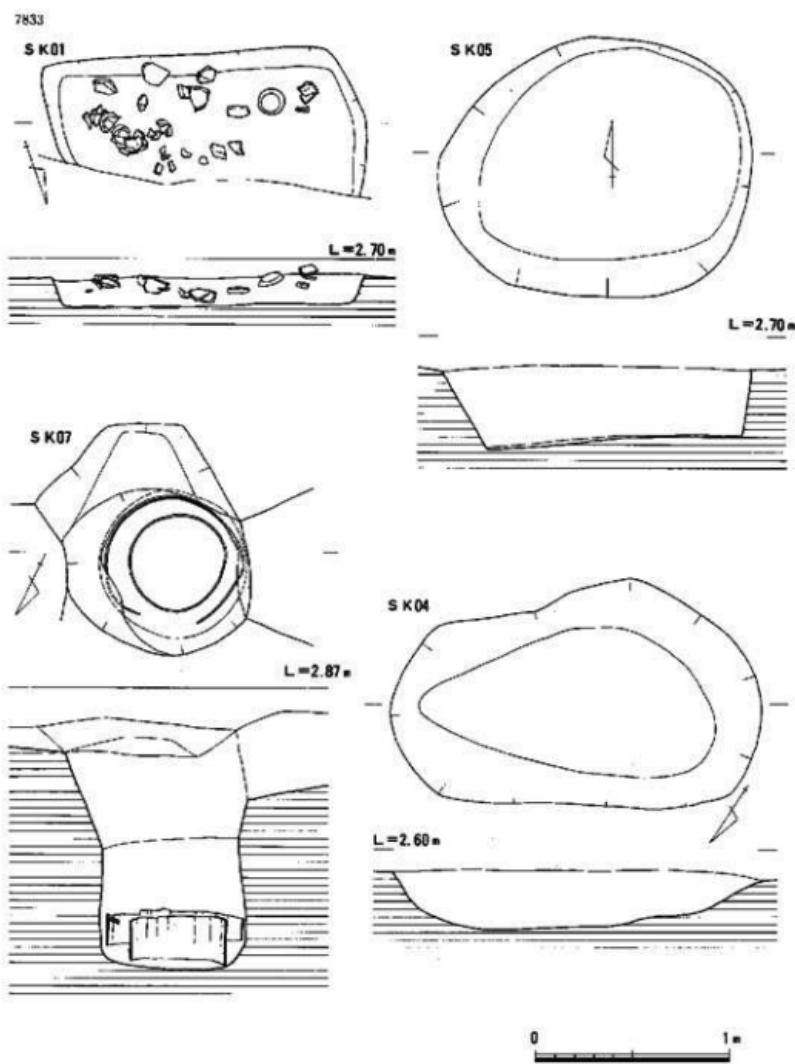


Fig.86 Q区 SK01,SK04,SK05,SK07

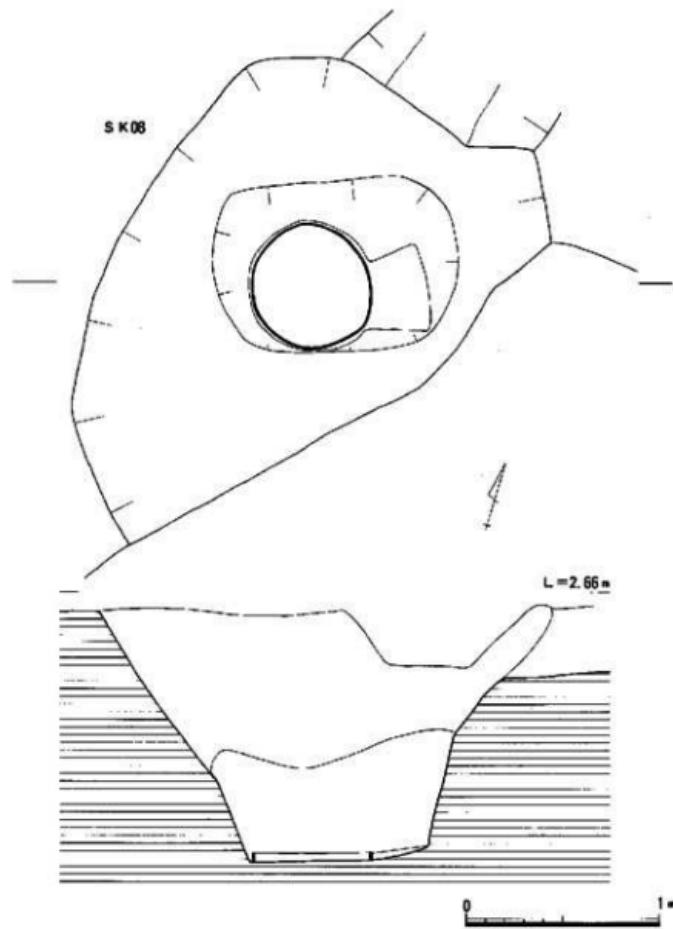


Fig.88 Q区 SK08

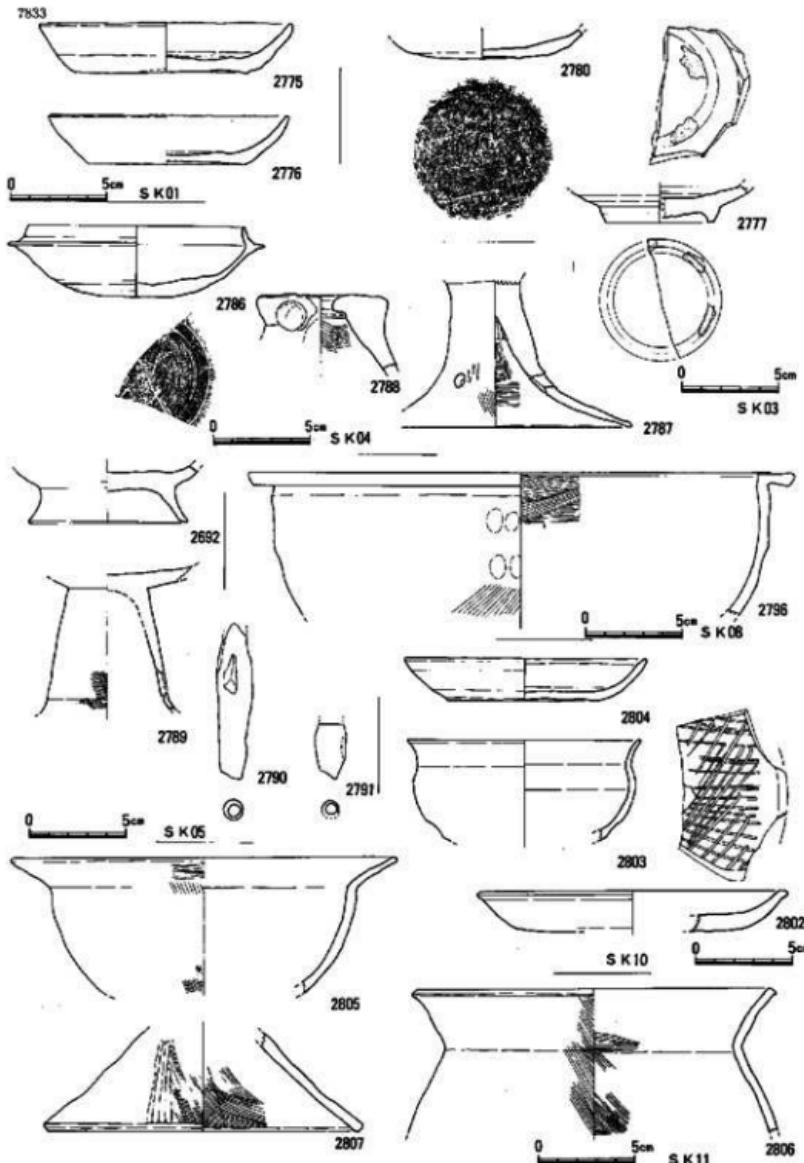
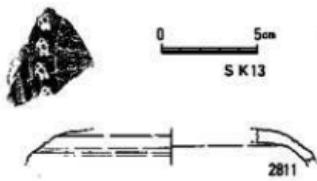
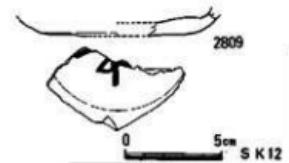


Fig.89 Q区 SK01,SK03,SK04,SK05,SK08,SK10,SK11出土遺物 (1/3)

7833



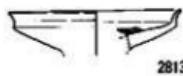
2811



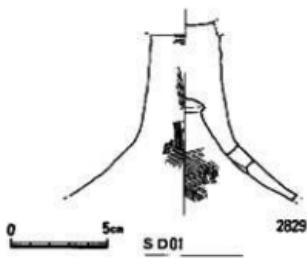
2809



2827

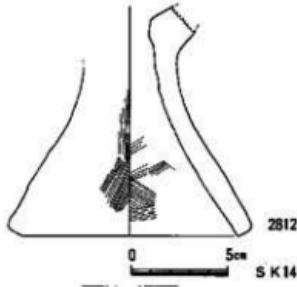


2813



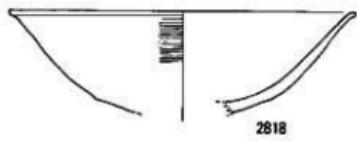
SD01

2829

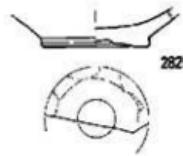


2812

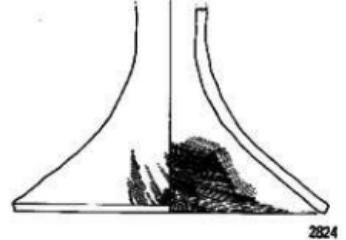
SK14



2818

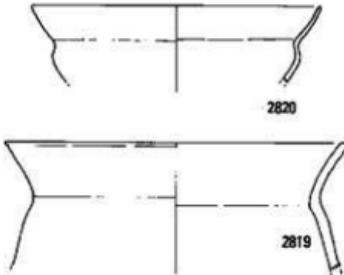


2825



2824

0 5cm 造構外

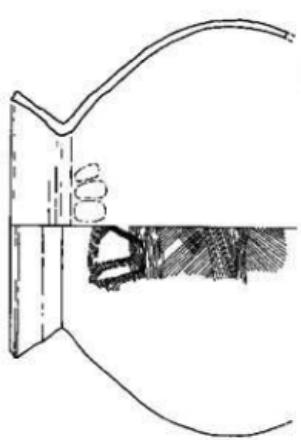


2819

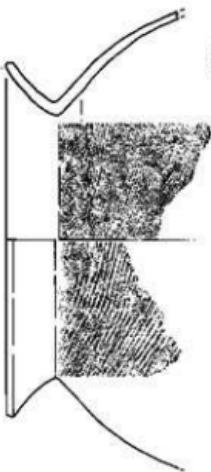
2820

Fig.90 Q区 SK12,SK13,SK14,SD01出土遺物と造構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

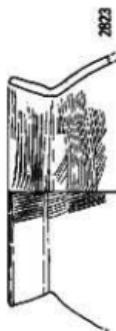
7833



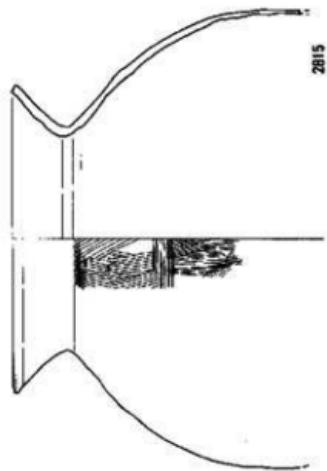
281



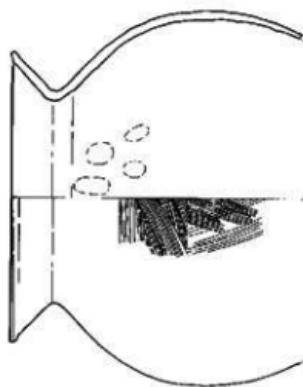
2817



2823



2815



2830

5cm

Fig.91 Q区造構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

6. まとめ

以上、地下鉄1号線紙園町工区本体部調査区のうち、H～Q区についてその遺構の概要と主な出土遺物について紹介してきた。1号線関係の調査区は「博多浜」と呼ぶ砂丘の南半部に巨大なトレンチをいたれた如きものであり、各調査区によって各時期の様相がやや異なる。すでに報告している店屋町工区A～D区、紙園町工区E～G区の調査結果をあわせて各時期ごとにまとめておきたい。

弥生時代中期に属する壇棺墓がB区を中心まとめて出土している。付近では2・3号出入入口、東長寺周辺(8、30次)、天福寺(22次)や24、32次調査などで同期の壇棺墓が出土している。このことから壇棺墓は谷頭部をベルト状にめぐる形で分布していることが明確である。またこの時期の住居址が30次調査で出土しており、集落も墓地周辺に営まれている。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物はH区付近以南徐々に多くなり、馬場新町交差点を中心にした地域に広く分布し、堅穴式住居、方形周溝墓や、古墳時代初頭の合せ口壇棺墓が検出されている。

古墳時代中・後期では、G・H区の東に接する28次調査区で、全長60m程と推定される前方後円墳(博多1号墳)が発見されたのをはじめ、I区で2基の石棺又は小石室墓が見られ、夜間調査区(SK65、SK67)、L区(SK14)、M区(SC01)、N区(SC01～03)、O区(SK04、05、11)、Q区(SK04、11、13、14、SD01)など土壤、墓、堅穴住居址、溝の遺構が検出されている。土師器、須恵器をはじめ多くの遺物も出土しているが、後世の擾乱を受けており、中・近世遺構に混在することが多い。後述する5号出入口では、金環、鉄製鋸を副葬し、環座金具をもった木棺墓も検出されており、博多1号墳に象徴される首長の系譜をもつ特定集団が居住していたものと思われ、その性格も大型魚、海獣を捕獲するような、海洋に開かれた民であったろう。

奈良～平安時代(律令期)の遺物はA区からQ区に致るまで出土しており、その量も多い。しかしながら、後世の擾乱等により、良好な遺存状況を示す遺構はそれ程多くない。ところが一方、この時期の遺物は土師器、須恵器が大半を示すが、石帶、鉄具、円面鏡、鴻臚館式軒丸瓦、製塙土器、焼塙壺、越州窯青磁、長沙窯水注、イスラム陶器片、皇朝十二錢などの官衙施設の存在を示すような特殊遺物も、博多浜最北端部(築港線第4次調査)から最南端部(17・20次調査)まで広く分布しており、その数量も少なくない。昭和62年12月から翌年1月にかけて平和台球場外野席で鴻臚館跡が発掘調査されたが、「入唐五家伝」、「類聚三代格」に見出せる鴻臚中嶋館については、現在のところ平和台球場東側にある福岡高等裁判所の地をあてる説が強い。「倭名類聚抄」に記される那珂郡の郷名に中島郷がある。貝原益軒は「筑前国統風土記」で中島郷を那珂川と比恵川(現石堂川)の間に比定し、博多遺跡群付近を海部郷に比定してい

る。しかしながら、日野尚志氏は「筑前国那珂・席田・柏屋・御笠四郡における条里について」1976で、海部郷は住吉付近の条里区、中島郷は博多湾の島が一郷を形成していたものとされている。博多遺跡群の立地を見ると、博多湾頭に浮ぶ島状の砂洲と見るに何ら差支えない。先程の出土遺物等も併せ昨今の調査結果からすれば、鴻臚中嶋館を博多遺跡群内に求めることもあるがち不可能なことではない。

平安時代末期から博多遺跡群の遺構と遺物は極端に増加する。戦国時代に到るまで博多の港湾都市としての性格は堅持され、江戸時代の鎮国令をもって國際舞台から退くまで、幾多の軒余曲折を経ながらも繁栄した。この時期の遺構、遺物は遺跡群全域で検出されており、以前の遺跡占地状況からすると区域は格段に広がっている。しかし、各時代ごと各地域の様相は少しずつではあるが変化が見られる。今回の1号線本体部の結果からすると、南側に下るにつれ、出土遺物の絶対量はやや少なくなる傾向があり、逆に博多駅築港線のように北側の調査地点では増加している。築港線調査区では遺物包含層が4m近くに及んでおり、その地点での造成事業の盛んだったことを示している。特に1号線関係調査区で出土量の少なかった14世紀以降の遺物の出土量には格段の差があり、14世紀以降博多中心部は遺跡群の北側、海岸寄りに移ってゆくことを示しているのではないか。遺物の数量と比率については各調査地点ごとに比較を試みれば新たな事実も呈示しえると思うが、今回はそこまでの時間的余裕がなく後日を期したい。

A区から夜間調査区まで検出されている東西、南北方向をとる溝状遺構も興味深い遺構である。これまで検出されたこの方向の溝は、祇園町交差点および馬場新町交差点を中心とした地域に分布し、築港線では発見されていない。この方向の溝は14世紀前半で廃絶されているが、その初源については今ひとつ明確でなかったが、律令時代の官衙が博多にある可能性は極めて高くなりつつあり、都城の条坊と一致するこの南北方向の溝の起源も、博多における官衙の存在と関連づけられる。A・B区5号溝とI区1号溝との間隔が約1町の幅をもつことも象徴的である。

陶磁器の高台内露胎部に墨書きをもつ、いわゆる墨書き陶磁が多いのも博多遺跡群の特色の一つである。中でも中国人姓を記すものは中国商人の博多における経済活動を示す具体的資料として注目されている。博多4次調査地点と近接するC・D区付近では「丁綱」銘の墨書き陶磁が50点以上まとまって出土し、丁某がこの地に居留していたものと考えられる。今回報告では「丁綱」銘も見られるが(2325)、「林」(1115、1245、1246、2241)、「陳」(1194、1307、1271、1257)などが目立っており、これら墨書き陶磁の調査地点ごとの銘の分布の偏り等の確認は今後重要な作業として行わなければならない。

最後に今回の報告では紙数の制限から遺構、遺物の細かいデータより出土遺物の実測図を出来るだけ掲載することに努めた。それぞれのデータについては機を見て明らかにしたい。

第2章 祇園町工区4号出入口の調査 (Fig. 92~99, PL. 23・24)

遺跡略号 HKT S-7 調査番号 8148

博多区御供所町に位置し、祇園町工区G・Hと、28次と31次調査とにはさまれる狹少な調査区がある。昭和56年9月1日から18日まで調査を行なった。調査面積は70m²である。この調査区では23基の土壙(井戸を含む)が検出されており、SK03、04、09、10の4基の井戸を除けば他はいずれも廃棄物処理土壙である。近現代の擾乱も多い。SK01は戦国末から近世初期の土壙で明代の青磁がある。11は潮戸のおろし皿である。SK03、05、06も同様の時期であるが、古い時期の遺物が混在する。SK03は木桶組井戸。SK04も痕跡は残さないが木桶組であろう。近世初頭。SK09は木桶組井戸であるが図示した遺物は掘方からの出土で、近世初頭の時期。SK10も木桶組井戸で、井筒内から明染付皿(65)が出土している。16世紀代。SK12は13世紀代の廃棄物処理土壙である。遺構外からの検出遺物も多く、明、李朝の陶磁や、国産品としても備前播鉢(146)、焼塩壺(123、138)など戦国期から近世にかけての遺物が目立つ。なお、122は粘板岩製の碗で、外縁を削り出して魚かと思われる装飾を施している。縁部に鱗を模した刺突痕をめぐらし、鱗状の突起部も見られる。所属時期は明らかでない。145は滑石製石鍋を再加工した有孔の温石である。28次調査地点では前方後円墳が検出され、本体部I区でも古墳時代の墓が検出されている。31次調査地点でも埴輪が出土しているが、ここでは当該期の遺構は検出さ

祇園町工区4号出入口出土主要遺物一覧(1)

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	SK01	青磁	經泉高台付皿
2	↓		經泉高台底皿
3	SK03		V型窓
4	SK01		V型窓不 明
5			V型
6			V型
7			V型見込み カキ取り
8		青磁か青磁か?	皿
9		明の赤拾か?	
10		土製品	I型
11		占察系	おろし皿 (潮戸)
12		瓦	軒平瓦
13		土師皿	糸切大皿
14			
15			
16			
17		土師皿	糸切小皿
18			
19			
20			
21	SK11	土師器	糸切皿
22	↓	土師質土器	すり鉢
23	SK02	土師皿	糸切大皿
24			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
25			
26			↓
27	SK03(井戸)	明染付	皿
28	↓	青磁	經泉V型高台 付皿
29	SK04	瓦	軒平瓦(裏面?)
30	SK05	土師皿	糸切小皿
31			
00032			
33			↓
34		瓦質	火鉢?
35			瓦質片口鉢
36			すり鉢
37			鉢
38			瓦質片口鉢
39		國產陶器	古窯系片(潮 戸)
40	SK06	白磁	碗V型(裏面)
41	SK06	白磁	高台付皿II型 カキ取りなし
42			↓
43			平底皿II-1型
44		青白磁	
45			器
46			盤口水注の口 縁か?
47		白磁	高台付皿 II-1型

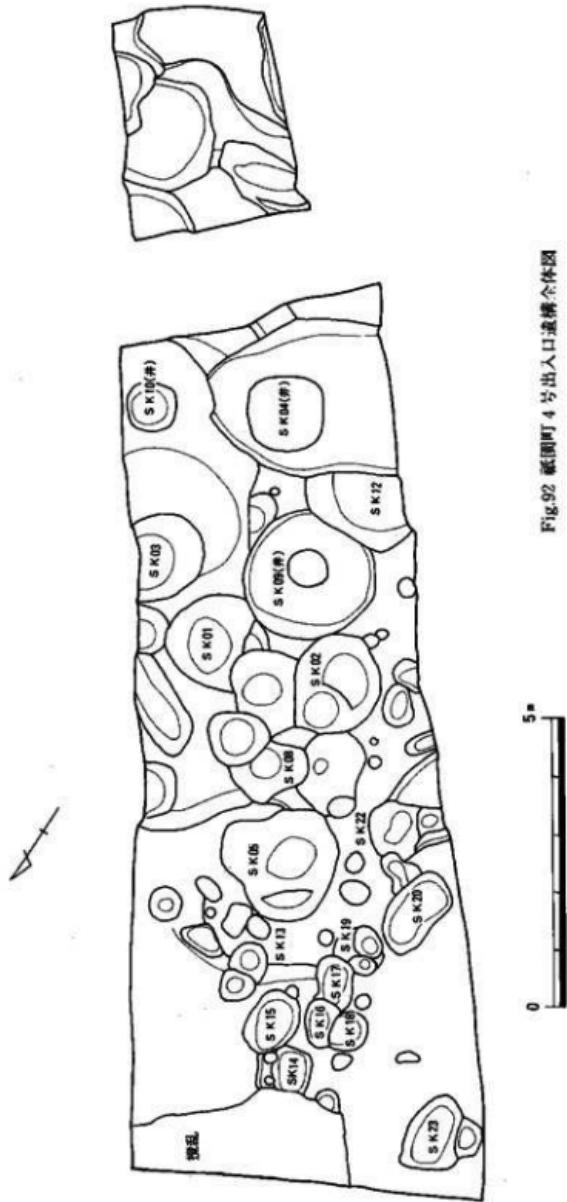


Fig. 92 紙廠町 4 號出入口遺構個體圖

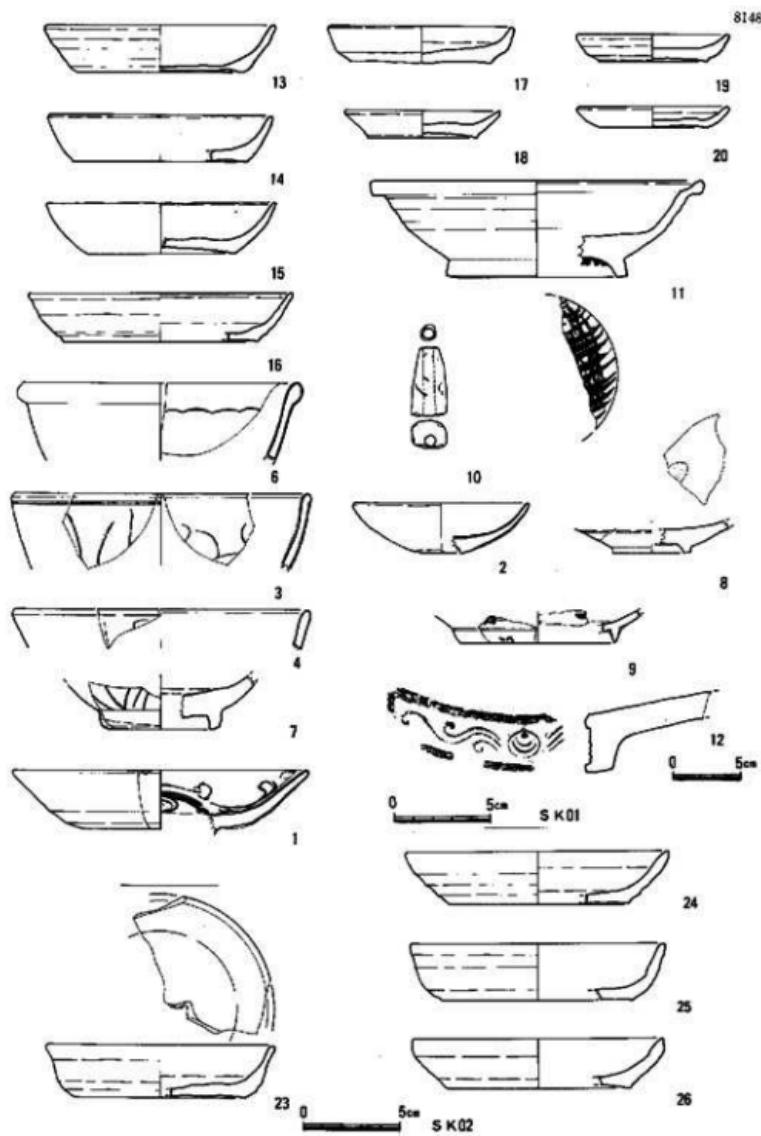


Fig.93 4号出土品 SK01,SK02出土遺物 (1/3,12を除く)

8148



27



29



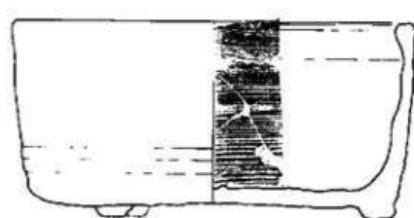
30



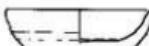
31



32



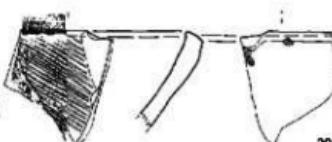
34



35



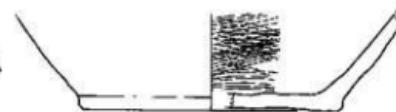
36



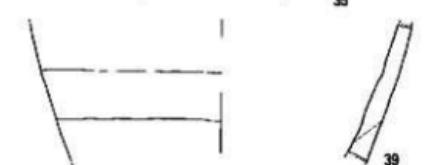
38



35



37



39



Fig.94 4号出入口 SK03,SK05出土遺物 (1/3,35,36を除く)

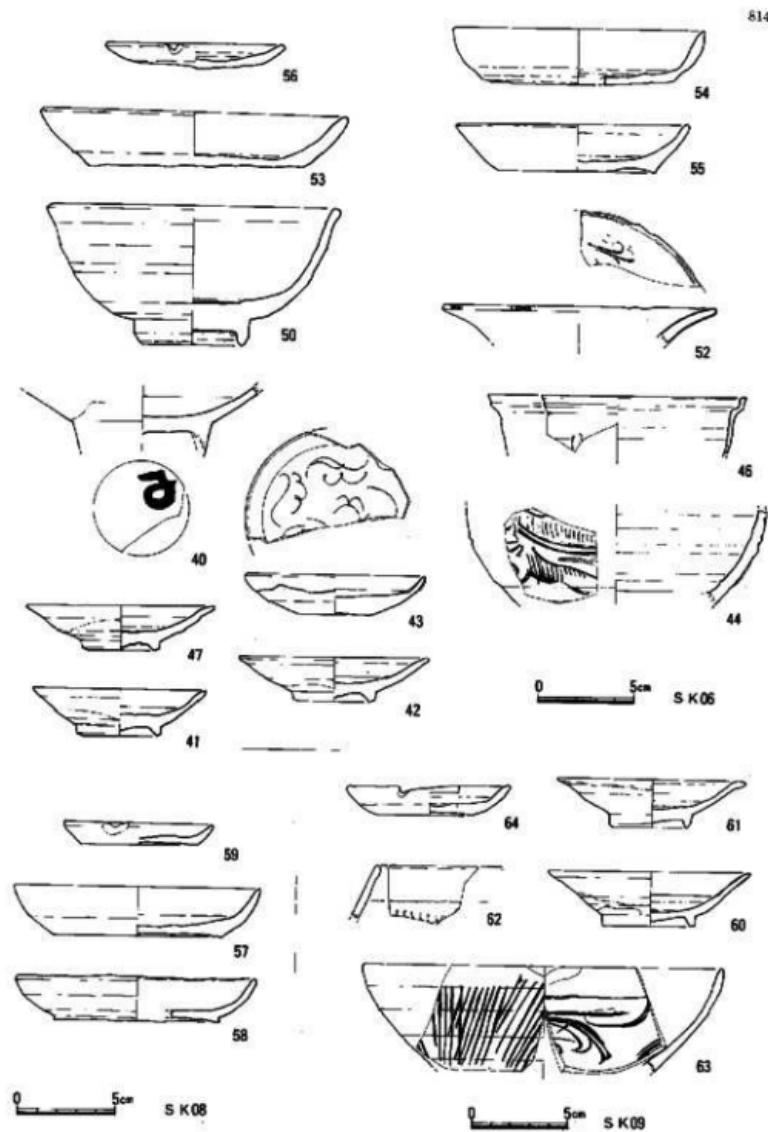


Fig.95 4号出入口 SK06,SK08,SK09出土遺物 (1/3)

8148

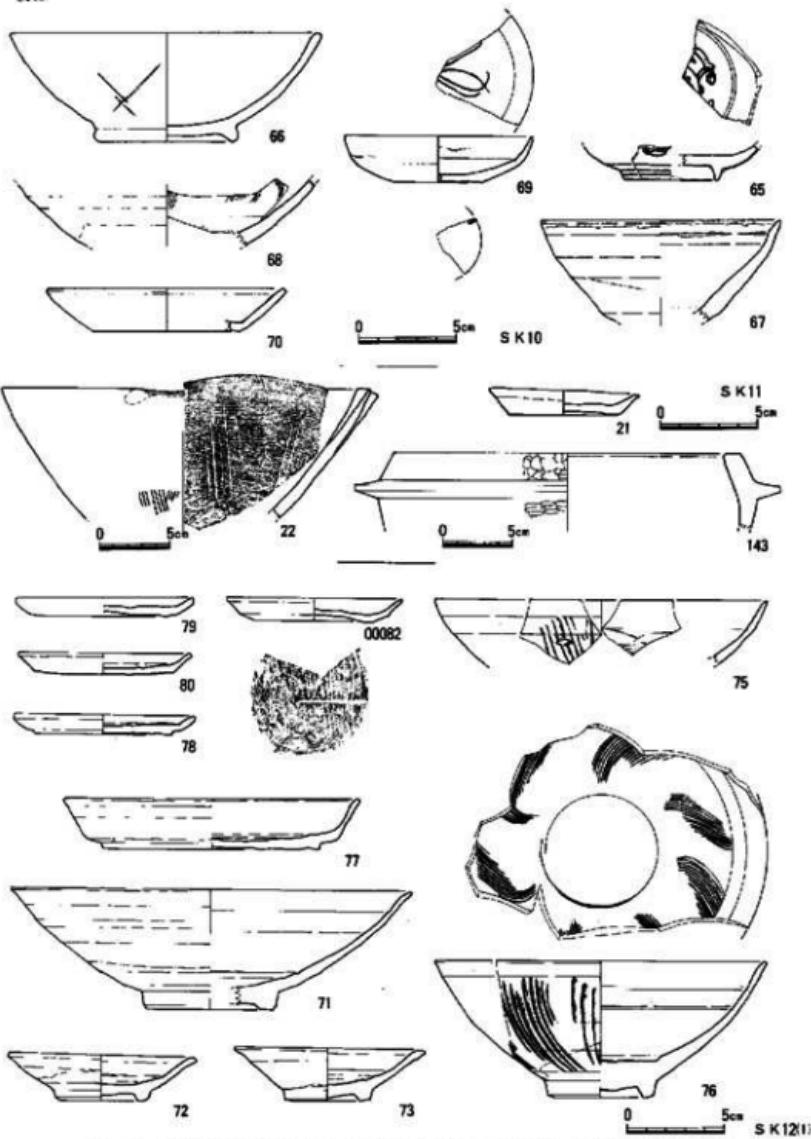


Fig.96 4号出入口 SK10,SK11出土遺物とSK12出土遺物(1) (1/3, 22, 143を除く)

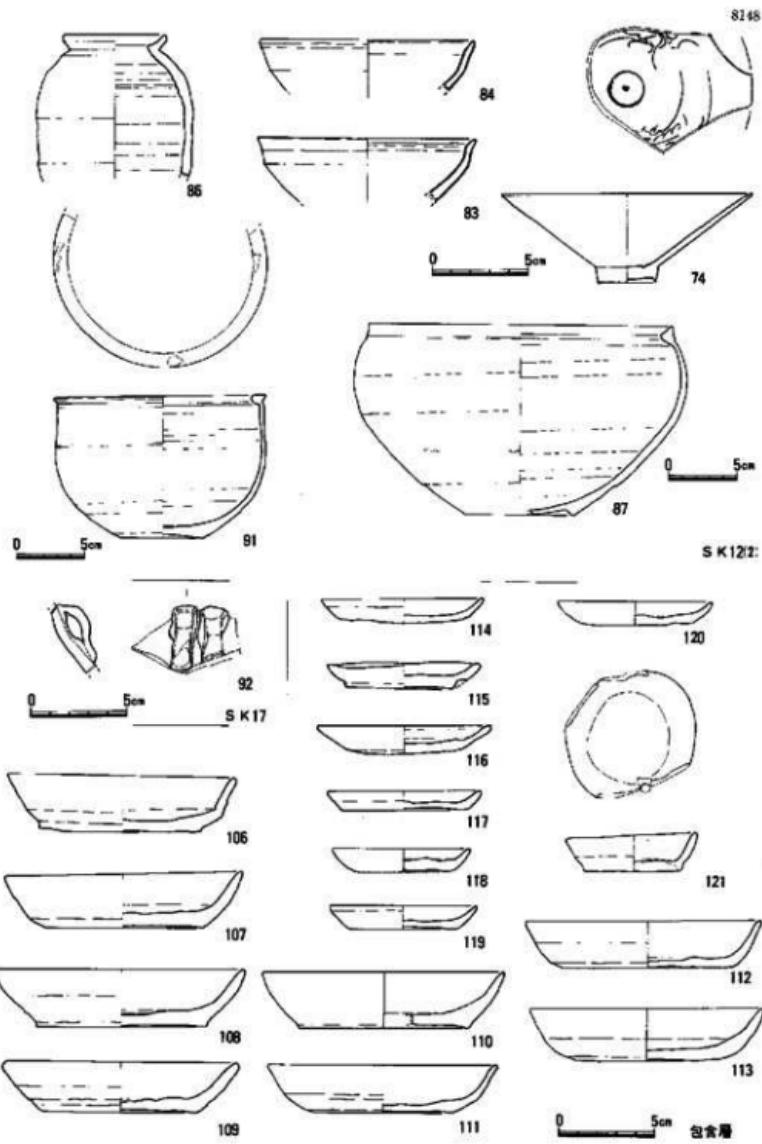


Fig.97 4号出入II SK12出土遺物(2)とSK17出土遺物、遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3, 87, 91を除く)

8148

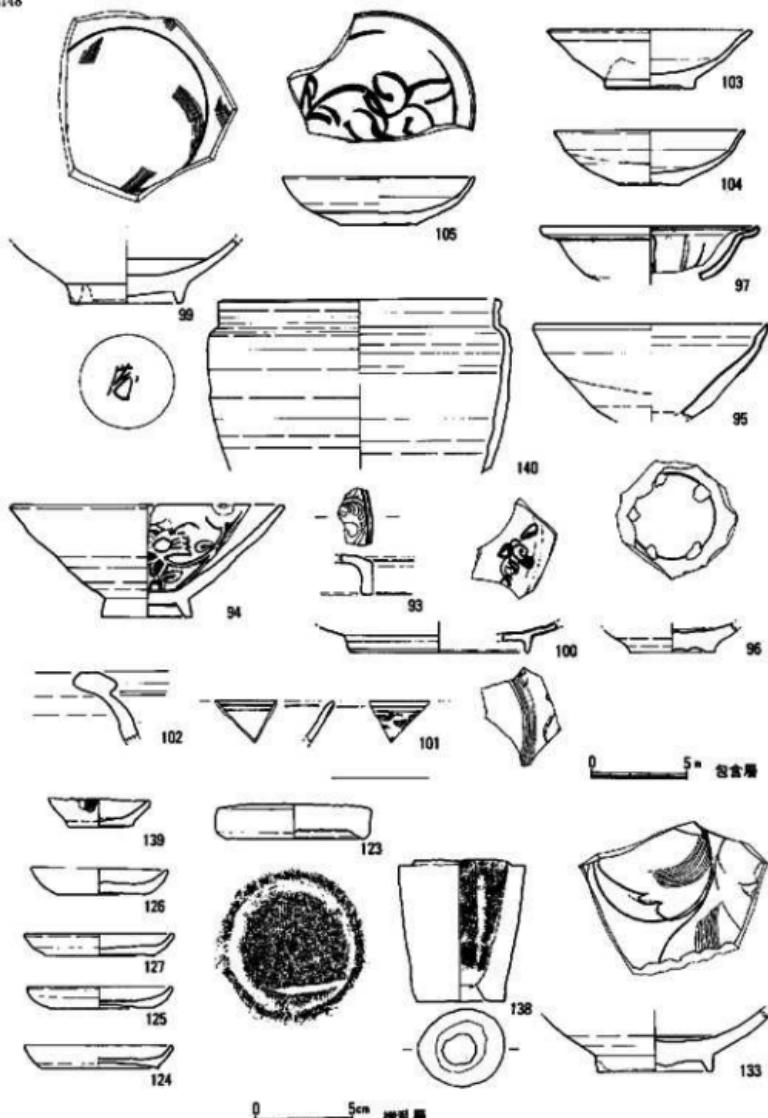


Fig.98 4号出入口 遺構外(包含層・擾亂層)出土遺物(2) (1/3)

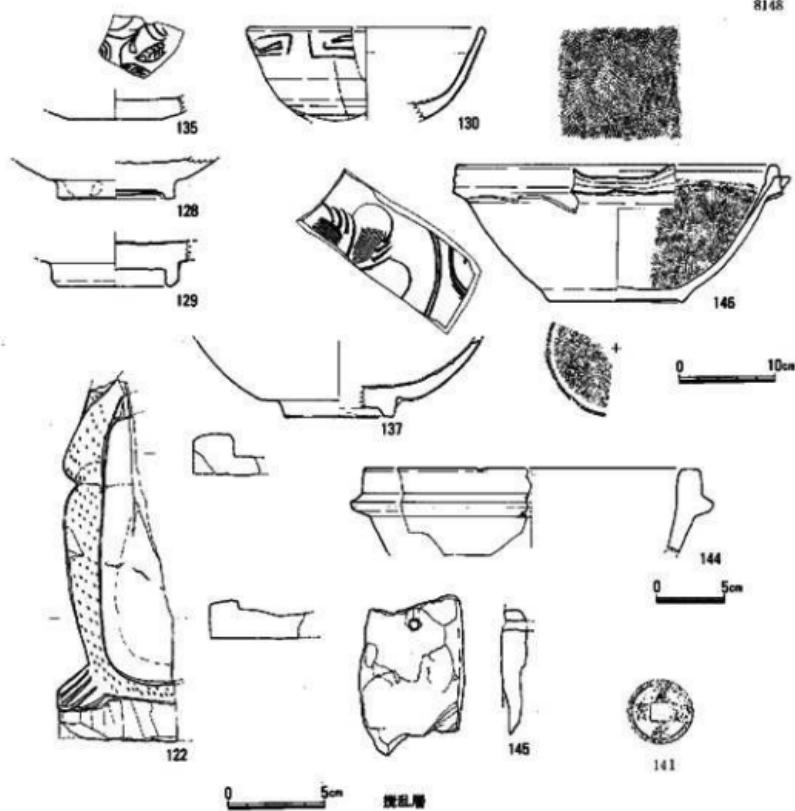


Fig.99 4号出入口遺構外（擾乱層）出土遺物(3) (1/3, 141, 144, 146を除く)

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
48			鏡片を原のよう な模様あり
49			
50		青磁	龍泉が頬碗見 込地カラク取る
51			龍泉ノ頬口縁 部片
52			龍泉 V 頬高台 付皿
53		土師皿	糸切大皿
54			
55			
56			ヘラ切小皿
57	SK08		糸切大皿
58			
59			小皿
60	SK09	白磁	高台付皿 目顔
61		白磁	高台付皿 目顔
62		青磁	同安窯口縁部 I類
63			I I類
64		土師皿	糸切小皿
00065	SK10(井戸)内	明染付	高台付皿
66	↓	瓦礫	碗
67	SK10(井戸)外	黒褐釉	碗
68		白磁	碗見込に目跡 あり
69			平底皿 VI-1類
70			LJハグ皿 (ガ ラス質の物)
71	SK12	白磁	碗 II類
72			高台付皿 目顔
73			↓
74		青白磁	碗
75		青磁	同安窯 I類
76		青磁	その他の青磁
77		土師皿	糸切大皿
78			糸切小皿
79			
80			↓
81			糸切大皿 同一 個体
82		黒褐釉	碗
83			
84			
85			
86		中国陶器B群	越州系 (?)
87			片 3 点
88			鉢口縁部
89			体部
90			体部
91			鉢 1 個体
92	SK17	中国陶器C群	耳付の壺
93	包含層	青磁	壺
94		青白磁	

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
95		黒褐釉	碗
96		朝鮮	碗
97		青白磁	小鉢
98		縹緲	盤
99		白磁	VI - 2 - 口
100		明染付	皿
101		明染付	皿
102		中国陶器 C 群?	大型容器
103		白磁	高台付皿
104			平底皿III
105			平底皿VI
106		土師皿	糸切大皿
107			
108			
109			
110			
111			
112			
113			
114			糸切小皿
115			
116			
117			
118			
119			
120			
121			
122	B 区擾乱	中国か國唐か	碗
123		土師質土器	燒塗器の蓋
124		土器	糸切小皿
125			
126			
127			
128		青磁	龍泉碗 I - 9
129			龍泉碗 V 類
130			V - 3 類
131			↓ V 類
132			同安窯II類
133	↓	白磁	碗 VI - 1 類
137	擾乱	青磁	龍泉碗 I - 4 類
138		土師質土器	燒塗器
139		土器	糸切小皿
140	包含層	白磁	壺
141	擾乱	銅鏡	
142	夾織	↓	
143	SK11	滑石製品	石鏡
144	擾乱		↓
145			石鏡の再加工品
146			同産陶器 (備 前系)
147	包含層	銅鏡	ナリ鉢

第4章 紙園町工区 5号出入口の調査 (Fig. 100~111, PL. 25~29)

遺跡略号 HKT S-8 調査番号 8149

博多区御供所町、紙園町にかけて位置する。紙園町交差点、馬場新町交差点の間、都市計画道路博多駅築港線を横断し、L字状に南側に延びる幅5.8mの狭い調査区である。土留め用シートパイルと路面覆鋼を先行し、調査は覆鋼桁のかかった中で行った。調査工程上、道路に平行する部分を南からA区、B区とし、横断部分をC区と呼ぶ。調査は昭和56年10月12日から12月6日まで行なった。調査面積は184m²である。

検出した遺構は29基の土壙(井戸を含む)と竪穴式住居跡(SC01)、3基の墓、3条の溝、ピット群である。SC01は後世の遺構により寸断されているものの、一辺約4mの方形竪穴で床面に4個の柱穴が穿たれている。覆土中に遺物が含まれておらず正確な時期は決められないが、包含層中に古式土器があり、周辺でも当該期の住居跡が見られることから古墳時代初頭に位置づけられよう。1号墓および2号墓は中世の土壙墓である。不定形の掘方をもつ。1号墓は横臥屈葬である。2号墓出土人骨は開脚の状態で出土しているが、上半はシートパイルで切られている。副葬品は認められない。3号墓は7世紀前半に推定される木棺墓である。1.6m×1.0m前後の掘方に、推定1.1m×0.5mの木棺を埋置したものである。頭位はほぼ真西を向く。この木棺墓は、床面頭位に金環(163)、東端部に骨片、また木棺の中央よりやや頭位寄りに環座金具(165、166)が、棺隅と中央部に棺釘(171~175)がいずれも原位置を留めた状態で出土している。頭位棺外には鉄製鉗(176)が副葬されている。環座金具は中央部に穿孔された円形の鉄板に、ヘアピン状の鉄釘を打込み、棺内外方に折り、さらに棺材に折込んでいる。棺材の厚さは3.5cm強と推定される。通例見られる遊環は見られない。市域内では早良区夫婦塚古墳^(a1)に環座金具の例がある。棺釘はいずれも頭を下方にして直立しており、棺底から釘が打たれたことを示している。鉄製鉗は中央部にかえしをもち、基部の形状は鉗のため不明、先端部は折れ曲っているが先端は平坦でノミ状になり、やや捩れをもつ。被葬者は外洋性漁業に関わりをもっていたと思われる。鉄製漁撈具を出土した古墳時代の遺跡は、これまで古墳28以上、生活址関係11以上、総計39ヶ所以上が知られており、福岡近辺では、北九州市貝島古墳群、春日市門田2号墳、玄海町浜宮貝塚、大島村沖ノ島遺跡などがある^(a2)。本体部I区の1号墓、2号墓や、28次調査区の博多1号墳などの調査結果から、博多1号墳に象徴される首長からの系譜をひく首長層が古墳後期から終末にかけて、外洋性漁撈に関わる小首長に変化してゆく様子を示していると思われる。SK07、09、16、22は井戸である。SK09のみ江戸期であるが掘方から以前の遺物が出土している。SK16は12世紀後半に位置づけられる。他はいずれも鎌倉、室町時代におさまるものである。以外の土壙はほとんどが廃棄物処理用の土壙で各期様々な遺物が混在する。SK08は江戸時代の土壙で、多数の近世陶磁があり、中でも28はオランダ東インド

8149

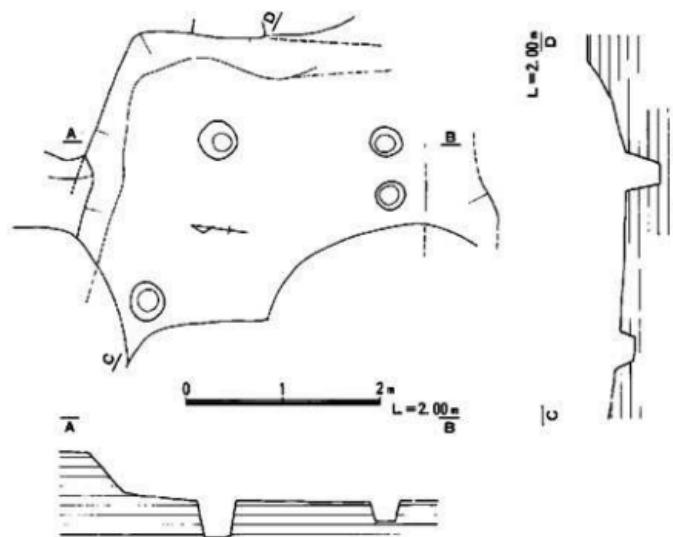


Fig.100 5号出入II SC01 (1/60)

会社の「VOC」マークを描いた古伊万里で注目される。SK10は土師皿がまとまって出土しておりいずれも糸切底で小皿は口径8.5cm、器高1cmに集中する。13世紀後半から14世紀前半にかけての遺構である。SK15は室町期の遺構で土師質土鍋とともに金環が出土しているが古墳時代遺物の混じり込みである。3号墓と同様の遺構が周辺にあるものと思われる。SK21は古墳時代の土壤であるが土師器小破片のみでその性格は不明。SK25は13世紀代の土壤であるが遺物は多くない。白磁碗(127)は底部に花押かと思われる墨書きをもつ。SK26は長方形の竪穴状遺構で遺物は少ない。糸切(137)とヘラ切(138)の土師杯のほか須恵器片、土師質土器片少量が見られるのみである。12世紀代の遺構であるが性格不明。SK27は12世紀中頃の遺構。142の白磁には「+」の墨書きがある。3条の溝も見られるがいずれも東西(SD01、02)、南北(SD03)を向くものである。

注1. 「夫婦塚古墳」 1979 福岡市埋蔵文化財調査報告第51集

注2. 山中英彦 「鉄製漁撈具出土の古墳について」 1980 (『古代探叢』早稲田大学出版部)

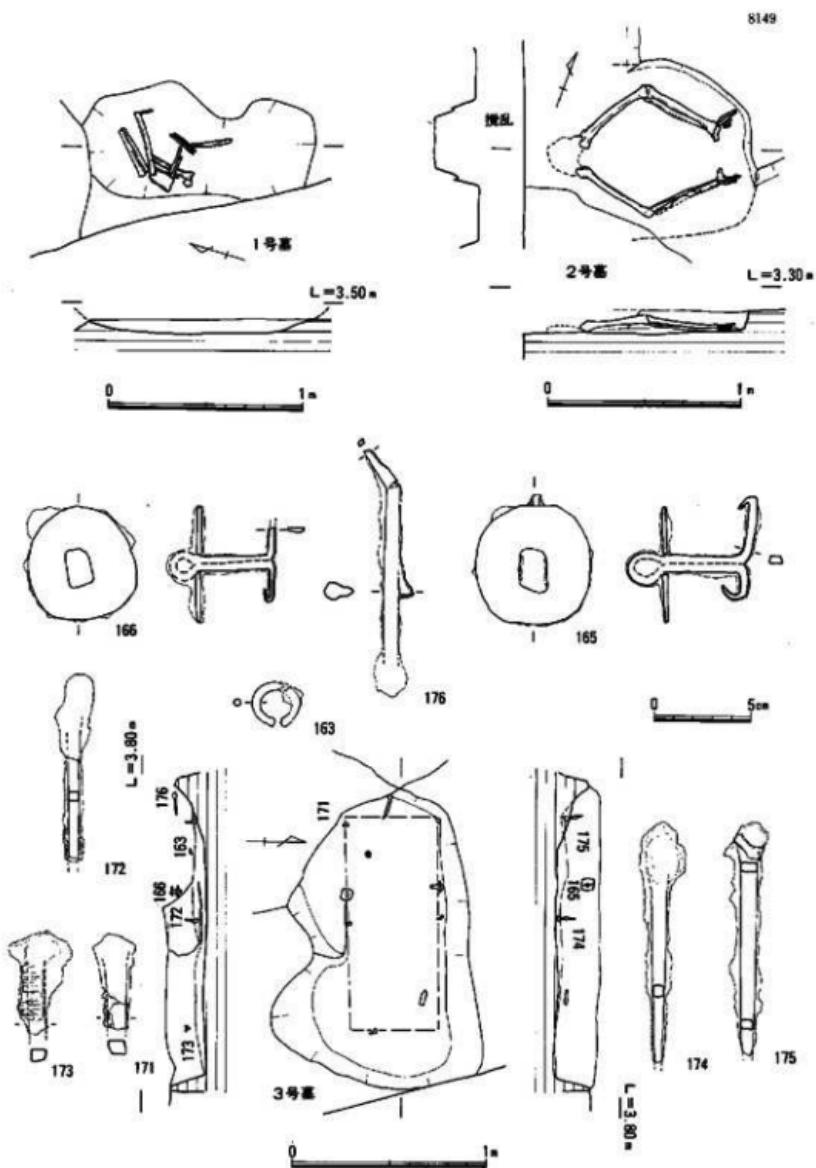


Fig.102 5号出入口 1号墓、2号墓、3号墓と3号墓出土遺物

5149

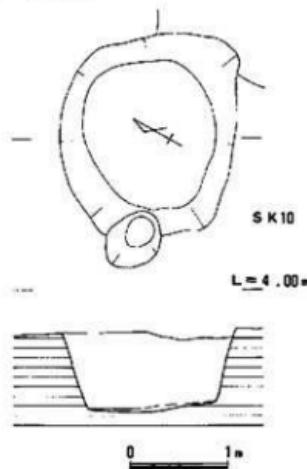
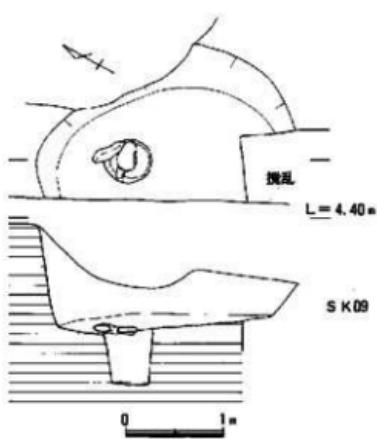
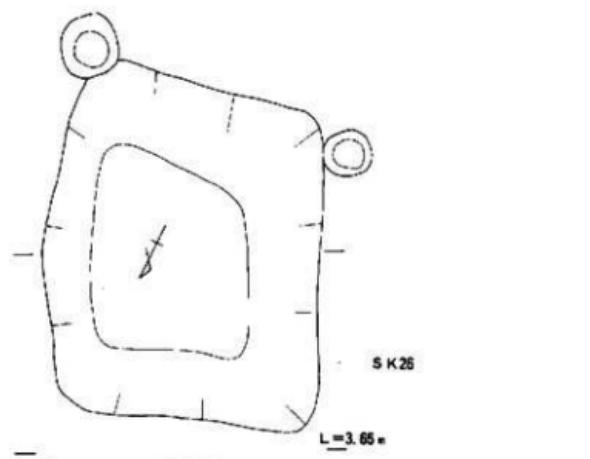


Fig.103 5号出入口 SK09,SK10,SK26

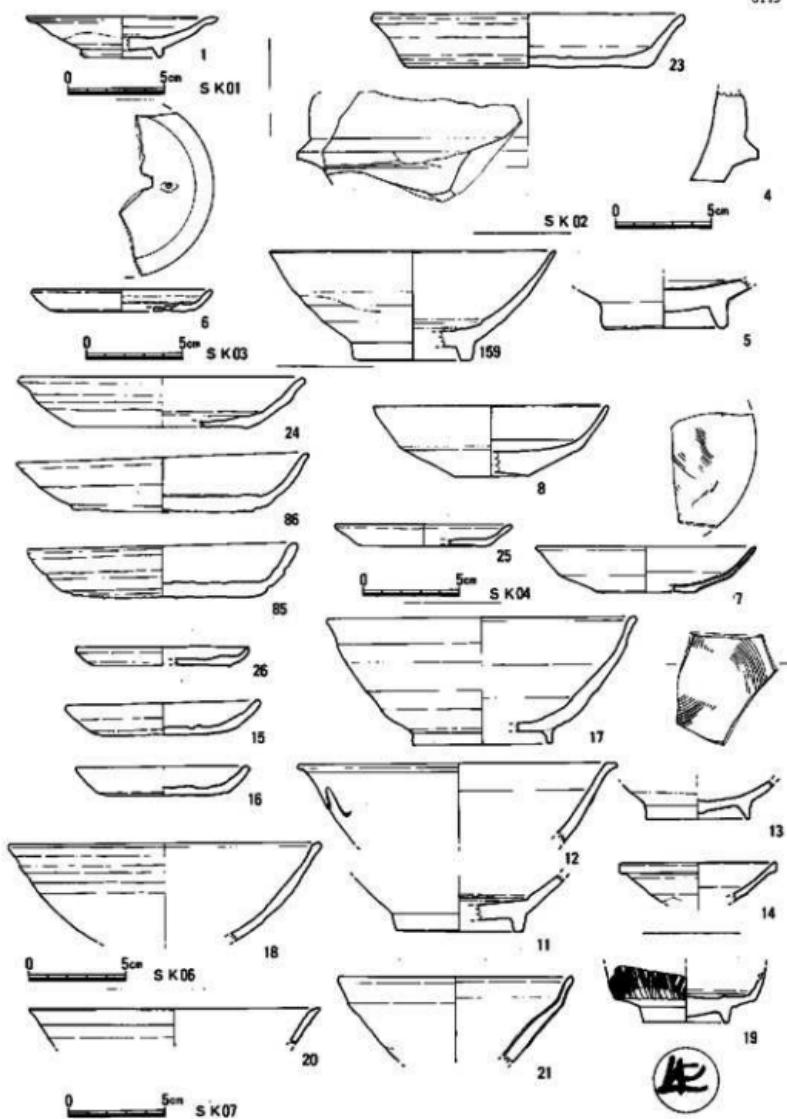


Fig.104 5号出入口 SK01,SK02,SK03,SK04,SK06,SK07出土遺物 (1/3)

8149

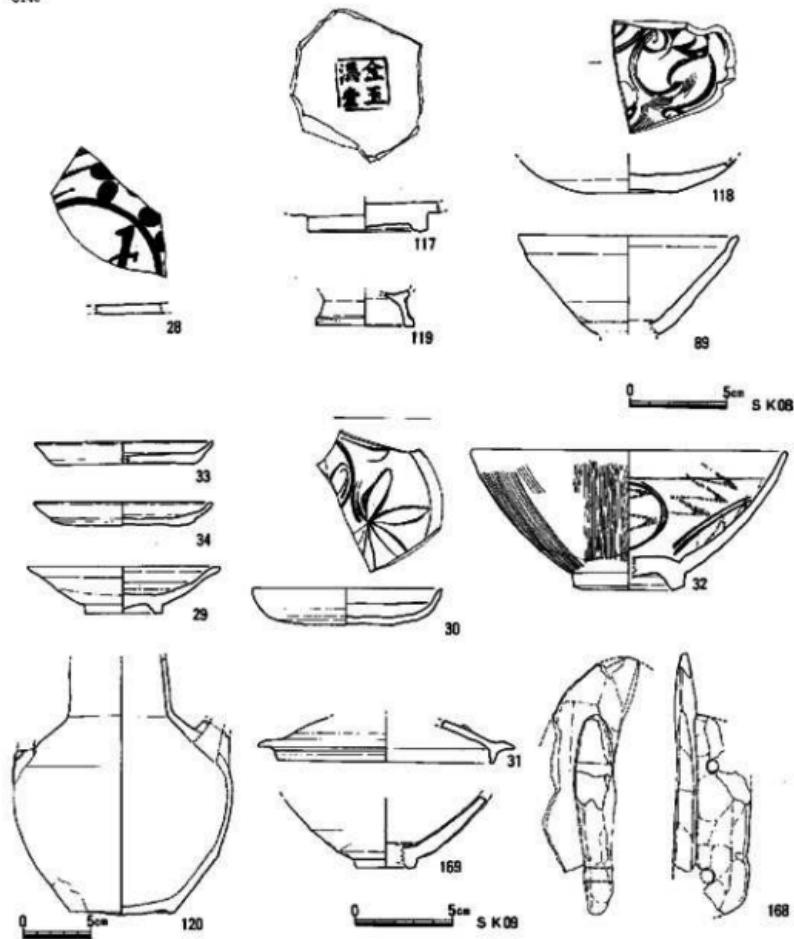


Fig.105 5号出入口 SK08,SK09出土遺物(1/3,120を除く)

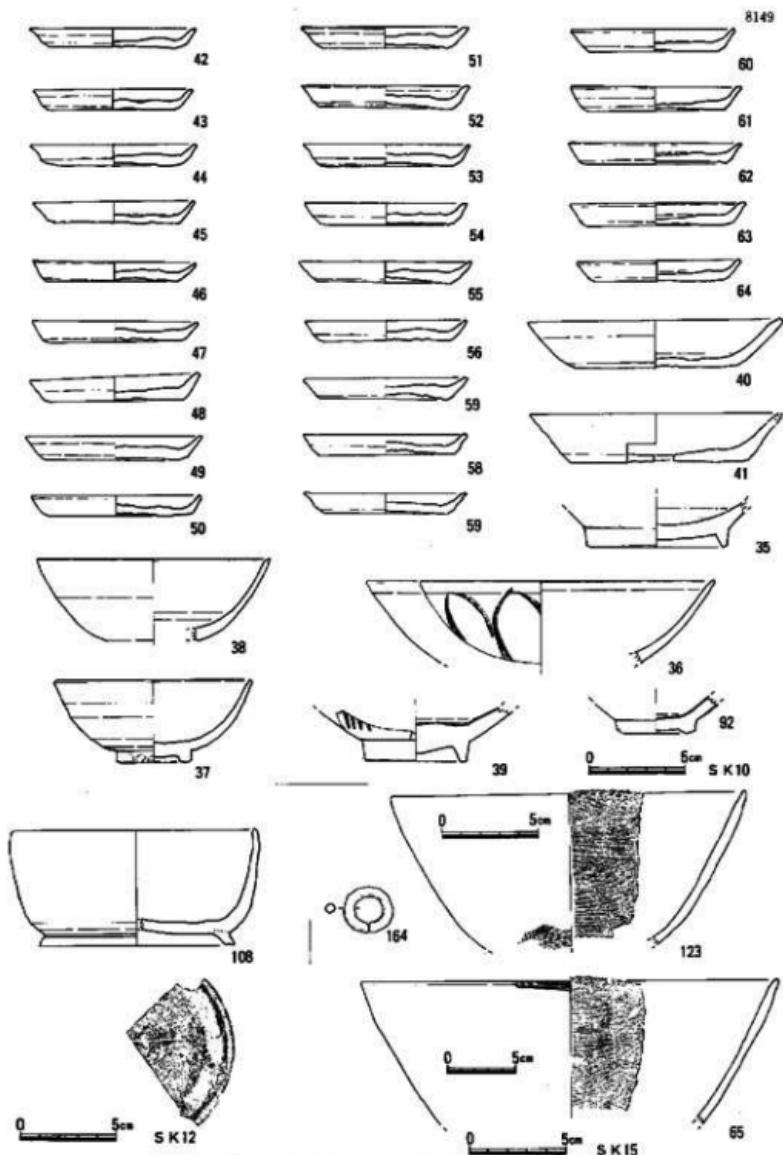
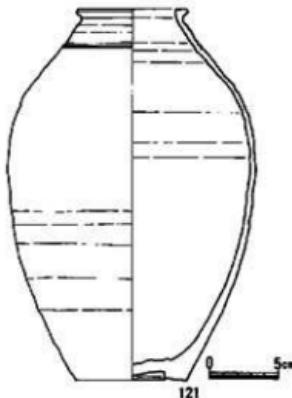


Fig.106 5号出入口 SK10,SK12,SK15出土遺物 (1/3, 123, 65を除く)

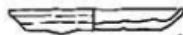
8149



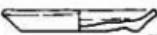
93



124



81



82



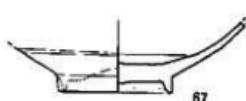
80

76



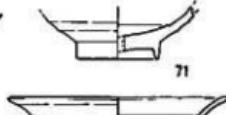
69

70



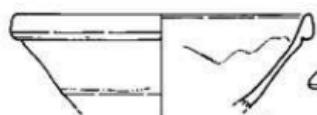
67

68



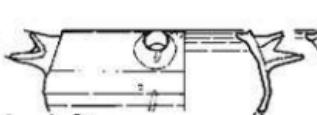
71

66



72

77



73

74



76

Fig.107 5号出入口 SK16 出土遺物 (1/3,75,77,121,124を除く)

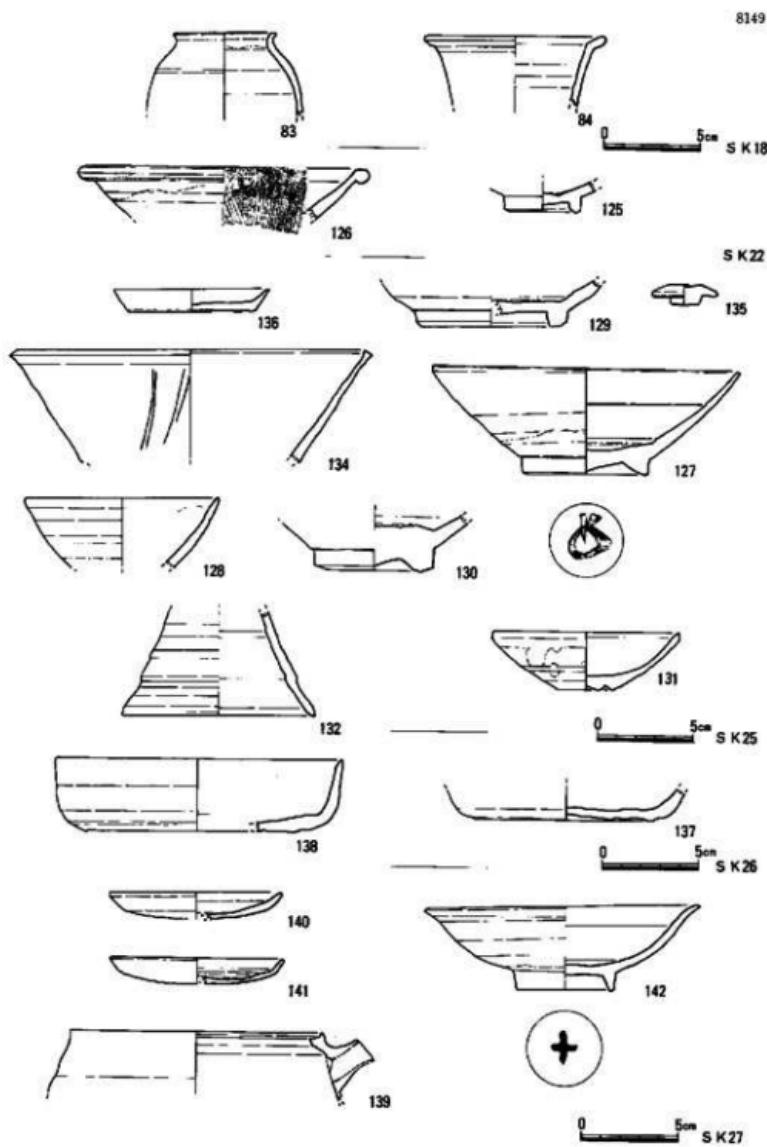


Fig.108 5号出入口 SK18,SK22,SK25,SK26,SK27出土遺物 (1/3)

8149



143



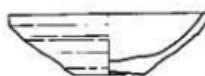
145



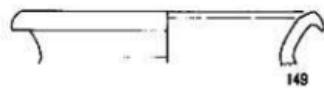
22



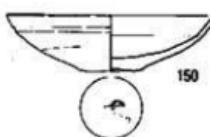
151



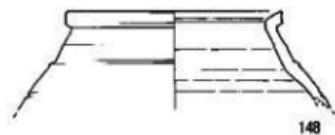
147



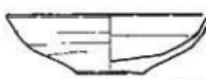
149



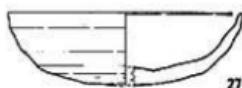
150



148



144



27



146



0

5cm
SK29

Fig.109 5号出入口 SK28,SK29出土遺物 (1/3)

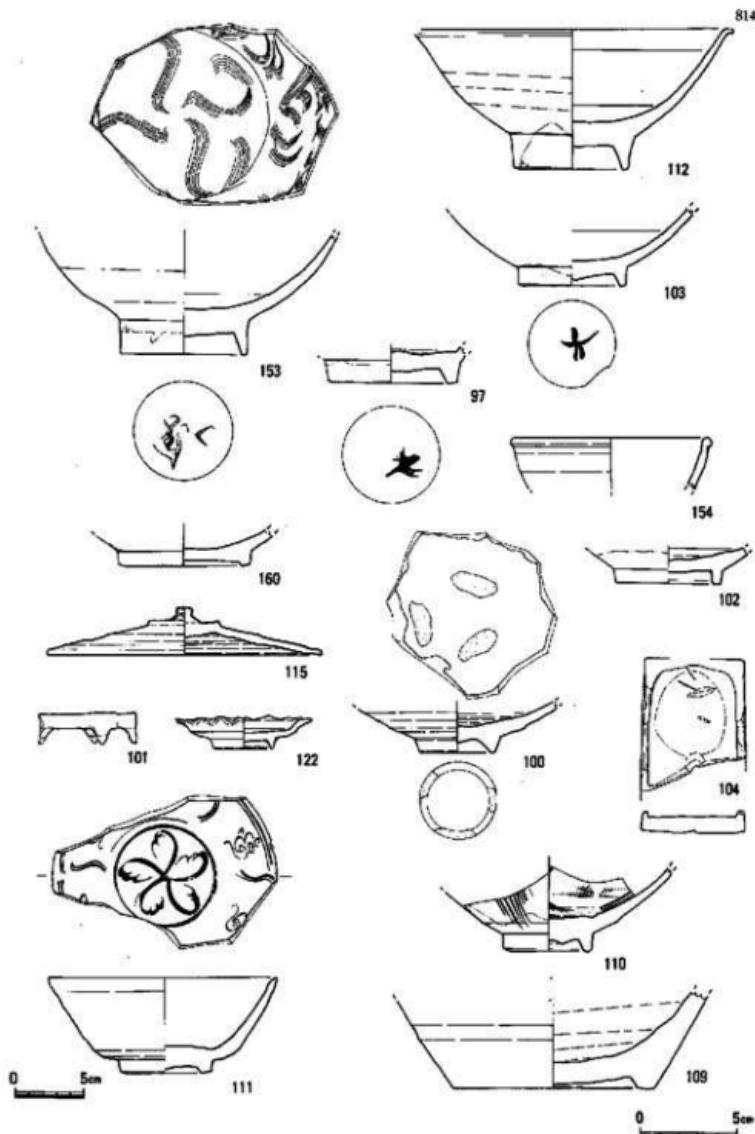


Fig.110 5号出入口造構外出土上遺物(1) (1/3,111を除く)

8149



106



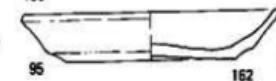
155



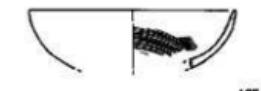
158



95



162



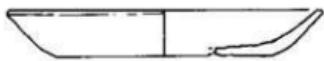
105



107



116



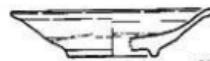
94



161



99



98



113



152



Fig.111 5号出入口造構外出土遺物(2) (1/3)

祇園町5号出入口主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	A 区 SK01	白磁	高台付皿
2	SK02	白磁	碗
3		↓	↓
4		滑石鍋	つば付
5	SK03	青磁	龍泉碗IV
6	↓	上部小皿	穿孔あり
7	SK04	青白磁	皿
8		青磁	龍泉平皿
9		中国陶器	片
10		国産陶器	常滑片
11	SK06	白磁	碗II類
12			↓ VI-1
13			小瓶
14			高台付皿 I-2
15		瓦器	皿
16			皿
17			碗
18			碗
19	B 区 SK07 (井戸)	白磁	蓮形格子文模様 香炉(墨書きあり)
20		越州窯	碗
21		黒褐釉	碗
22		青白磁	半底皿
23	A 区 SK02	土師皿	糸切大皿
24	SK04	土師皿	糸切小皿
25	↓	↓	
26	SK06	土師皿	↓
27	C 区 SK29	須恵器	坏
28	B 区 SK08	VOC マーク 麻付	有田皿
29	SK09	白磁	高台付皿II類
30		↓	平底皿VI類
31		陶器 A 群	蓋
32		青磁	同安碗II類
33		土師皿	糸切小皿
34		↓	ヘラ切小皿
35	SK10	白磁	碗II類
36		青磁	龍泉碗II-2
37			龍泉小碗2
38			龍泉小碗
39			同安碗II類
40		土師皿	糸切大皿
41		土師皿	糸切大皿
42		土師皿	糸切小皿
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50	↓	↓	↓
51	B 区 SK10	↓	糸切大皿
52			
53			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			糸切小皿
62			
63			
64			
65	SK15	土師質土器	土鍋
66	SK16(井戸)	白磁	碗V or VI類
67			碗VI類
68			碗VII類
69			碗VIII類
70			碗IX類
71			小碗
72			高台付皿
73			壺
74		青磁	龍泉碗 II類
75			↓ I類
76			同安碗 II類
77		中国陶器 B群	行平
78			行平の蓋
79	A 区カクラン	白磁	碗IV類
80	B 区 SK16 (井戸)	土師	皿
81		土師皿	糸切小皿
82		↓	↓
83	SK18	中国陶器 B群	短瓶
84		↓	壺の口部
85	A 区 SK04	土師皿	糸切大皿
87		黒褐釉	碟片
88	SK07	中国陶器 A 群	I-盤 1
89	B 区 SK08	黒褐釉	碗
90		↓	
91	SK09		
92	SK10		↓
93	SK16(井戸)		天目碗
94	A 区撲乱	土師皿	糸切大皿
95			小皿
96			小皿
97	B 区撲乱	白磁	碗IV類 (墨書き?)
98		↓	高台付皿II類
99		青磁	龍泉碗 V類
100		朝鮮	碗
101	撲乱		焼台
102		朝鮮	碗
103		白磁	碗V or VI類 (墨書き)
104		石製品	硯
105	包含層下層	土師器	杯
106		須恵器	壺
107		土師器	甕

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
108	包含層	須恵器	高台付杯
109	表探	中国陶器B群	四耳壺
110		青磁	同安窯II類
111	↓		龍泉窯I-6
112	擾乱	白磁	碗VI-1
113		↓	高台付皿
114		青磁	龍泉窯I-9
115		陶器A群	蓋
116		瓦器	皿
117	SK08 江戸時代(擾乱)	青磁	龍泉窯I類(金玉溝窓)
118		↓	熊平底皿I類
119		青白磁	不明
120	SK09	中国陶器B群	水注
121	SK16(井戸)	中国陶器B群	長瓶
122	擾乱	近世(懸戸)	皿(口縁波状)
123	SK15	土師質土器	土鍋
124	SK16(井戸)	銅鏡	崇寧造宝
125	SK22	白磁	小碗
126	↓	國産?	擂鉢
127	SK23	白磁	碗VI類か?(藤井)
128	SK25	白磁	小碗口縁
129		↓	碗VI-4
130		青磁	碗底
131		中国陶器	皿
132		須恵器	頸もしくは脚
133		圓座陶器	無釉陶こね鉢
134		↓	↓
135		白磁	小壺蓋
136	↓	土師皿	小皿
137	SK26	土師皿	糸切大皿
138	*	須恵器	杯
139	SK27	中国陶器A群	行平
140		土師皿	小皿
141		土師皿	小皿
142	↓	白磁	浅鉢V類(墨書き)
143	SK28	土師皿	大皿
144		白磁	平底皿II類
145		↓	未分類碗(6個か?)
146		中国陶器A群	鉢
147	*	B群	皿
148	*	B群	四耳壺か
149	*	C群	壺
150	↓	白磁	平底皿I類(墨書き)
151	SK28	白磁	平底皿未分類(墨書き)
152	擾乱	青白磁	高台付皿

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
153		白磁	碗VI-2-ロ(墨書き)
154			碗片(口縁を丸く外反させるもの)小碗
155		土師皿	糸切小皿
156			
157			
158			
159	SK03	白磁	碗II類
160	擾乱	白磁	未分類
161		瓦器	皿
162		土師皿	糸切大皿
163	墓3号	金環(2破片)	
164	SK15	↓	
165	墓3号	鉄製品	環座金具(No.1)
166	↓	↓	↓(No.2)
167	SK9	滑石製品	石鏡
168		↓	石鏡再加工品
169	↓	黒褐釉	碗小片
170	擾乱	滑石製品	石鏡
171	墓3号	鉄製品	槍釘
172			
173			
174			
175			
176			
177		人骨	鹿骨と筒
40001	SK07	石製品	滑石製石鍋
40002	SK08		
40003	SK09		
40004	SK10	↓	石棺の一部
40006	SK15	石製品	滑石製石鍋
40007	SK16		↓
40008	SK18	↓	石棺の一部
40010	包含層	石製品	砥石
40011	擾乱	↓	磁石・硯・鑿・母片
40013	SK25	石製品	滑石製石鍋
40014	SK28	↓	↓
40016	擾乱	石製品	滑石製石鍋
70001	SK03	鉄片	
70002	SK08	鉄製品	不明
70003	SK09		不明
70004	SK10		釘
70005	SK18	↓	↓
70007	Pit 8	鉄製品	釘
70008	擾乱		
70009	SK28		
70010	擾乱	↓	↓

第5章 祇園町工区 P₂ 出入口の調査 (Fig. 112~118, PL. 30~33)

遺跡調査番号 8435

調査地点略号 HKT S-10

地下鉄祇園駅舎から博多駅地下街へ通じる地下通路の出入口の1つ、殖産ビルから大博多ビル前に通じるP₂出入口の調査である。調査区は博多区博多駅前一丁目、二丁目にかかる。発掘調査は昭和59年4月2日から4月27日まで行ない、調査面積は約215m²である。今回の調査区は幅5m程のL字形をなしており、道路を横断して調査するため、占用の関係上3分割して調査を行ない、道路横断部分を東からA・B区、大博多ビル歩道側をC区と呼んだ。このうちB区については道路占用の関係上夜間調査（午後10時～午前6時）を余儀なくされた。発掘調査は、力武卓治、大庭康時氏の協力を得て池崎が行った。なお調査にあたっては、担当業者である三井建設株式会社九州支店および高木建設株式会社の方々に協力を得た。

この調査区は博多遺跡群推定範囲のほぼ南端部にあたり、矢倉門の地名が示すように中世末の博多における南の要塞として重要な位置にあった。この矢倉門の南側には、元亀、天正の頃大友氏の家臣臼杵安房守が掘ったと伝えられる「房州堀」が設けられ、博多市街とを明確に区画していた (Fig. 112)。明治時代までこの痕跡は残っていたが鉄道の敷設とともに、この地は旧博多駅の構内となり姿は見られなくなってしまった。

遺跡群南端にあたるとはいえ遺構の密度は希薄ではなく、とりわけ中世末から近世にかけての遺構が目立った。37基の土壙、井戸、土壙墓が検出されている。いずれもあえてSKの符号をつけている。土壙は大半が廃棄物処理を目的としたもので不定形の掘方をもち規模も様々である。



Fig.112 房州堀推定線とP₂出入口調査地点

8435

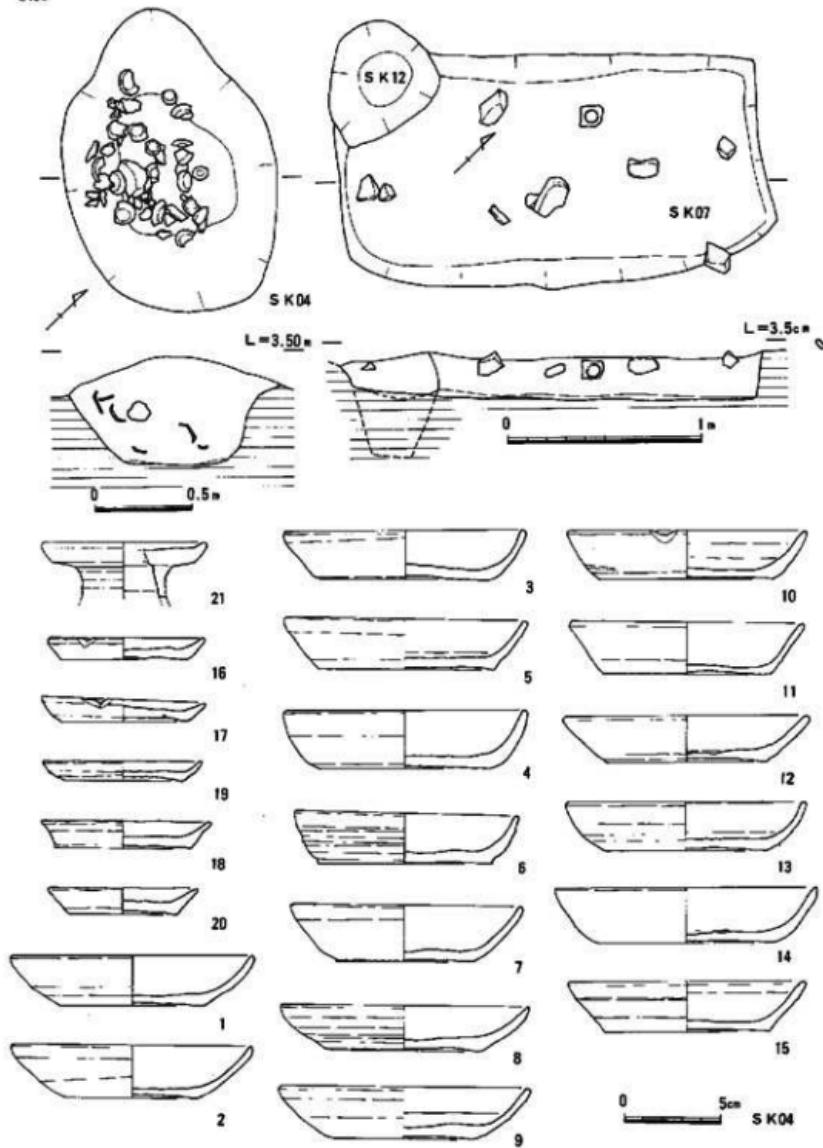


Fig.113 P2出入口,SK04,SK07,SK12とSK04の出土遺物 (1/3)

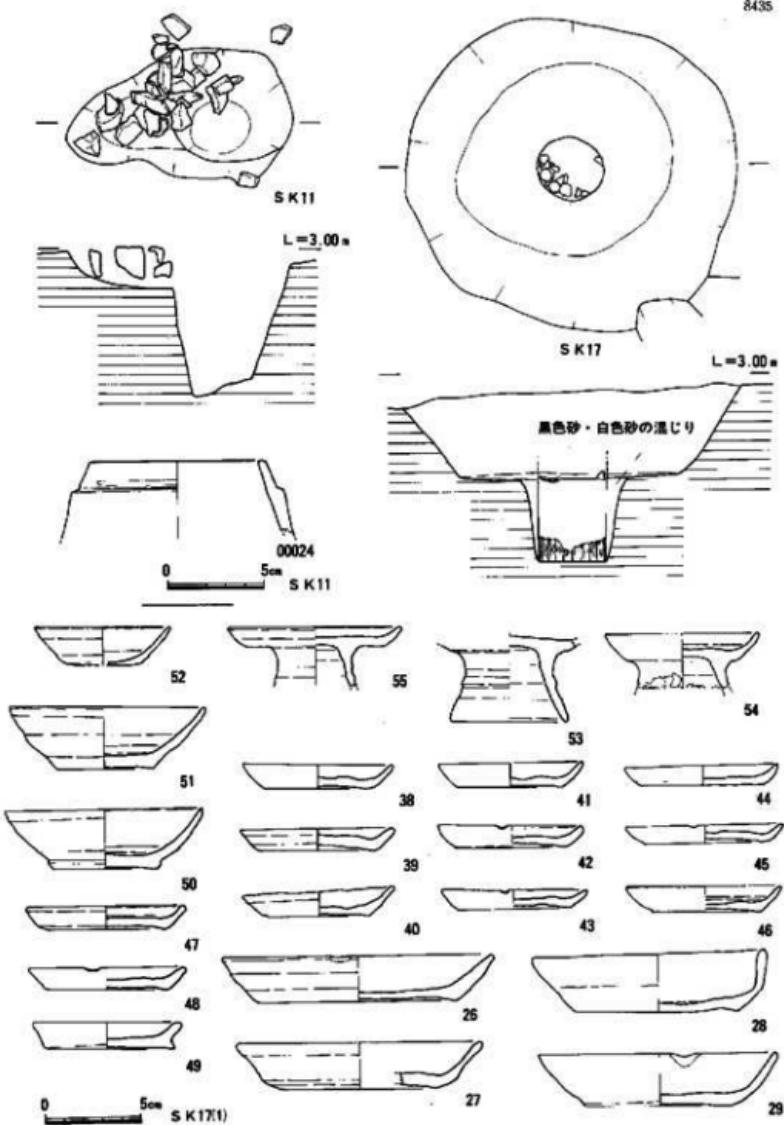


Fig.115 P2出入口 SK11,SK17とSK11,SK17出土遺物(1)

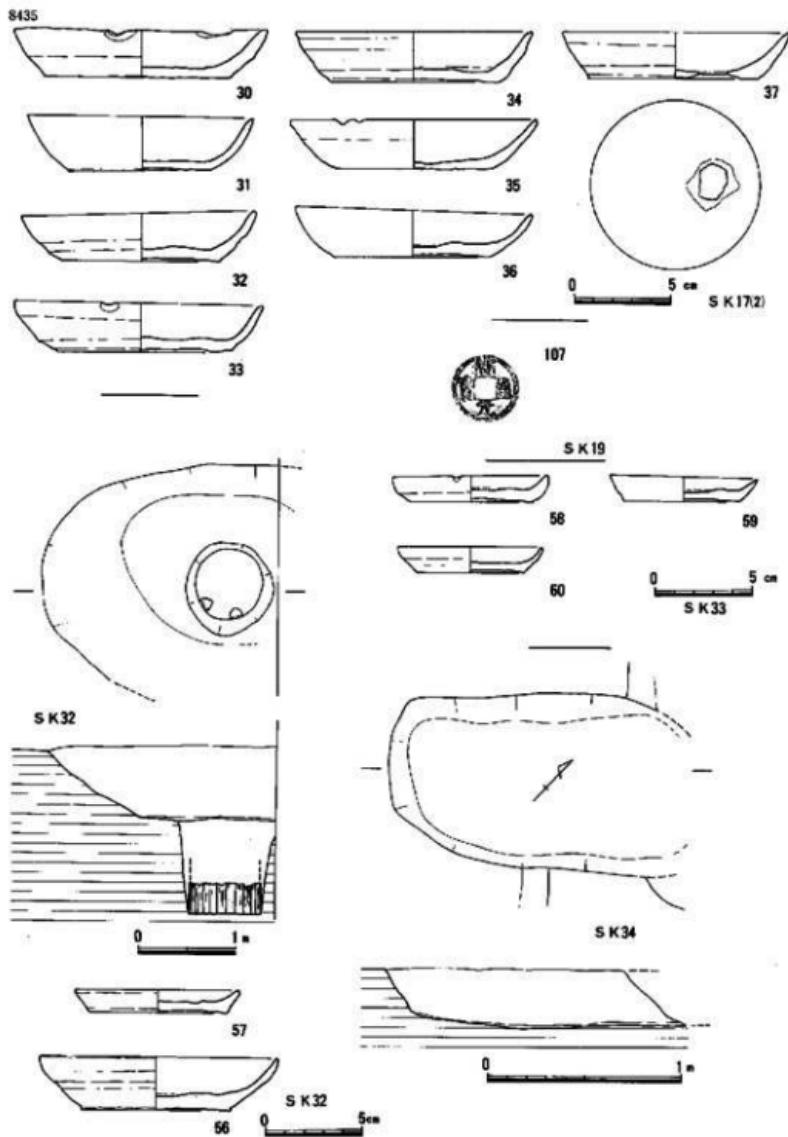
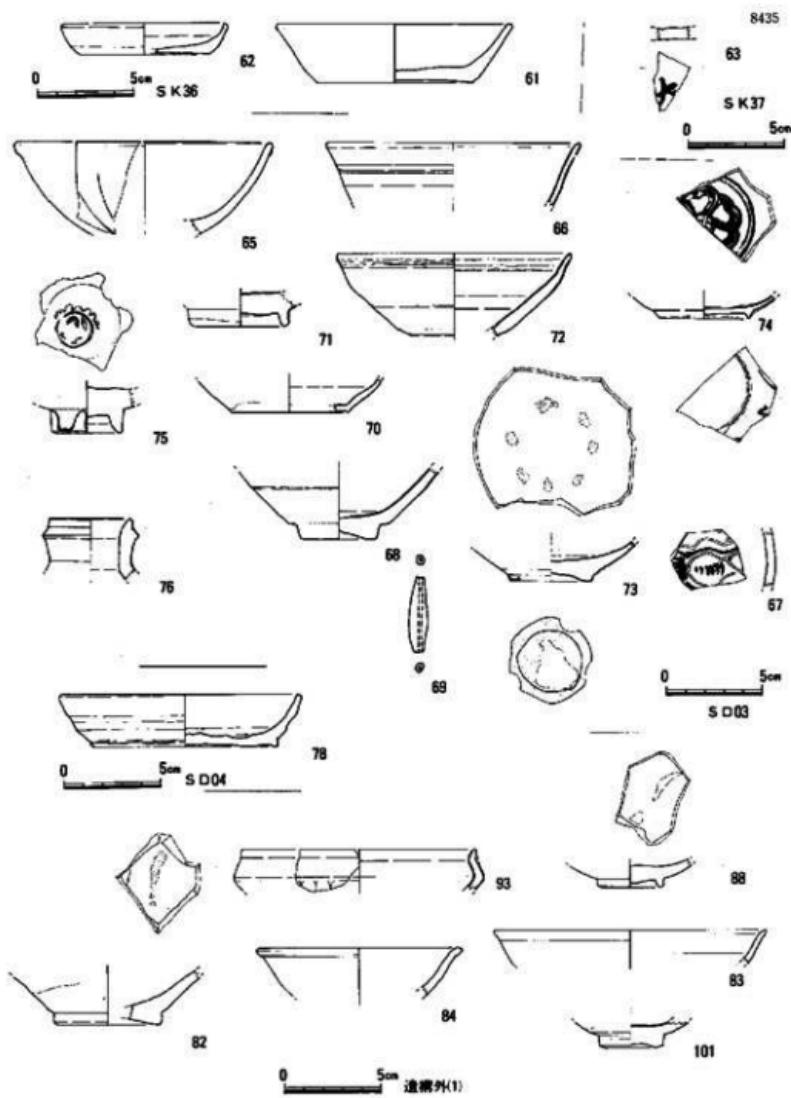


Fig.116 P2出入口 SK32,SK34とSK17,SK19,SK32,SK33出土遺物(1/3,107を除く)



F g.117 P2出入II SK36,SK37,SD03,SD04出土遺物と造構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

8435

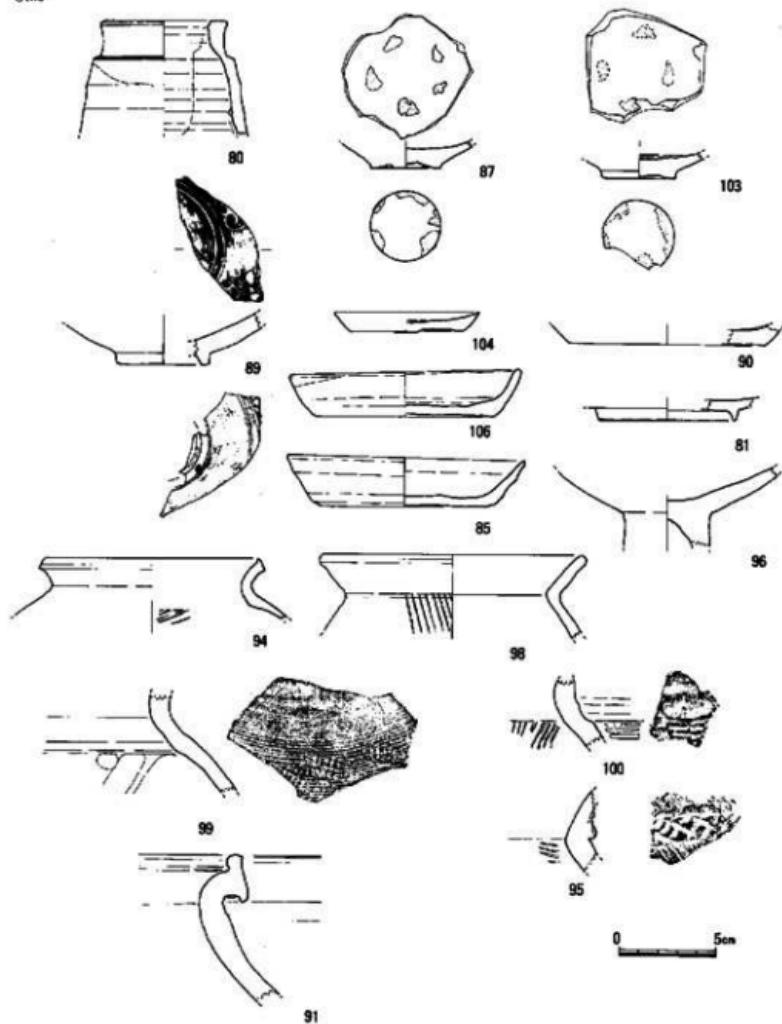


Fig.118 P2出入口 造構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

る。SK04 は糸切土師皿を多量に廃棄した土器層で 16世紀末頃に位置づけられ、高い高台をもつものが特徴的である。SK07 は長方形の明確な掘方をもち土壤墓かと思われる。遺物は小破片のみで明確な時期は不明。近世か。SK11 は二段の掘方をもつ遺構で上段に多くの礫を配す。13世紀前後の廃棄物処理土壌。SK17 は木桶組井戸で井筒内に多量の糸切土師皿を廃棄する。器高の高い杯と高い高台をもつ皿が特徴的である。16世紀末頃に属す。SK32 も同様の井戸で木桶組井筒を残す。内側に土師皿を廃棄しており、16世紀末頃に属す。図示はしていないが、SK26 は円形の掘方で土壤内より骨と寛永通宝 1 点、鉄釘が出土しており、近世墓である。SK34 は一部を切られているもののはば長方形の掘方をもつ近世の木棺墓と思われ、棺釘かと思われる鉄製品がある。SK36 は不定形の掘方をもつ廃棄物処理土壌である。15世紀代か。SK37 も同様の廃棄物処理土壌で、図示した遺物（63）は、須恵器杯底に「大」の墨書をもっている。遺構自体は 14世紀代で、須恵器は混入したものである。4 条の溝も検出されたが、特に SD03 は C 区全体に検出された大規模な溝で、幅は 6m 以上、深さも確認面より 1m はある。方位は現道路よりわずかに北に振れる。地山黄白色砂層を掘り込んで作ったもので壁面には土留め施設の痕跡は認められず、溝底はほぼ標高 2m で南側に向いてわずかに傾斜する。土層から見ると、西側の黄白色砂が堆積したのち、東側から汚れた土が崩れこむということを交互に繰り返している。日常的に水が淀んでいたとは考え難い。この溝からは中世末から近世初頭にかけての遺物が出土しており、その位置も房州堀推定線にほぼ一致するといってよく、この SD03 を房州堀と比定したい。房州堀の江戸時代以降の時間的変化がどのようなものであったかわからないが、SD03 は、中世末から近世初期に致る堀埋没の様相を示しているものと思う。他の 3 条の小溝も SD03 に平行しており、またいずれも江戸時代に営まれたもので、SD03 に規制されたものといえよう。柱穴も見られるが組織的には把握できない。

包含層からも様々な遺物があり、高麗・李朝の陶磁、越州窯青磁、国産練釉陶器皿なども見られる。主要遺物一覧表を参照されたい。

8435

P₂ 出入口出土主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	SK04 (土師 皿) A-2 区	土師器	糸切大皿
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
15			↓
16			小皿
17			↓
18			↓
19			↓
20			↓
21		土師器	台付
22	SK08 A-1-2 区	土師器	糸切小皿
23	SK09 A-5 区	土師器	糸切大皿
24	SK11 織り方 A -5 区	白磁	大型合子か？
25	↓	黒漆軸	疊
26	SK17(井戸) 織り 方 A-1-2 区	土師器	糸切大皿
27	↓	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
28	SK17(井戸)井筒内 A-1 区	土師器	糸切大皿
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			糸切小皿
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51	SK17(井戸)井筒内 A-1 区	土師器	糸切小皿
52		↓	↓
53		土師器	高台付
54			
55			
56	SK32 B-7 区	土師器	糸切大皿
57	↓		小皿
58	SK33 B-7 区	土師器	糸切小皿
59			
60			
61	SK36 B-6 区	土師器	糸切大皿
62	↓	↓	↓ 小皿
63	SK37 B-6 区	須恵か?	壺
64	SD03 上部	青磁	蓮泉碗 V-3
65		↓	↓ V-4
66		口ハゲ	碗 2 片接合
67		朝鮮	傘狀
68		国産黒褐釉	碗
69	↓	土製品	上錫
70	SD03 (第 4 層、下層)	中国陶器 A 群	茶入れ
71	↓	青磁	瓶泉碗底部
72	SD03 (東晉、西晋) 包含層	黒褐釉	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
73		朝鮮	李朝碗
74		明染付	皿
75		青磁	龍泉 V 蓋碗
76	セクションペルト SD03	固面陶器	帳戸 2 片類部
77	↓	↓	↓
78	SD04 B-9 区	土師器	糸切大皿
79	P-3 A 区	瓦器	蓋
80	包含層 A-1 区	中国陶器	短頸壺
81	包含層 A-4 区	縦釉 (國產)	皿
82	横乱 A-1 区	青磁	越州窑青瓷 II 類
83	包含層 B-8 区	白磁	未分類
84		青磁	未分類
85		土師器	糸切大皿
86	包含層 C-10 区	青磁	同安?
87	包含層上層 C-11 区	朝鮮	碗 (目跡あり)
88	↓	白磁	高台が小さい
89	包含層上層 C-12 区	朝鮮	象嵌青磁碗
90	↓	陶器 (底座)	美濃皿
91	包含層第 3 層 C-12	古窯系	
92	包含層、包含層黒褐色土 包含層上部黒褐色土 C-13	青磁	越州窑片
93		↓	龍泉碗
94		土器	
95			腹部に文様
96			高杯 (丹波)
97			把手
98		土師質土器口輪	
99			~
100			頸部に激線文 あり
101	包含層上部	馬頭袖	碗
102		白磁	印文
103		朝鮮	碗
104		土師器	糸切小皿
105	包含層	青磁 (國產)	↓
106	↓	土師器	糸切大皿
107	SK19	鋼鐵	↓
108	SK08	碧玉	管玉
109	SK20	桔瓣車	桔瓣車
110	SK11	石製品	砥石
111	上部包含層	石製品	砥石
112	SD03	石製品	硯
113	↓	石製品	硯臼
114	SD01	なまりか?	
115	SK11	鉄製品	刀子

第6章 博多駅前工区の調査 (Fig. 119, 120)

遺跡略号 HKT-S-4 調査番号 7949

調査区は地下鉄1号線工事区の博多駅前工区にあたり、福岡市博多区博多駅前1丁目、2丁目に位置する。博多駅から築港方向に伸びる大博通りを斜断する形で地下鉄路線は走り、調査を行ったのは、地下鉄工事里程でいえば9k 286mから9k 540mの254mの区間であり、博多駅前1丁目西日本銀行のほぼ中央付近から、2丁目朝日ビルの角あたりまでである。この付近は、昭和36年に現博多駅が開業するまでは、旧博多駅の南側に広がる田園地帯であり、中世都市博多の範囲からははずれている区域である。旧那珂郡に属し、「筑前国続風土記」によると宝曆10(1760)年博多の農民25戸をわかち、犬飼の田地を耕作せしめ、其外犬飼の田地を作るもの博多市中に居れり、とある。前章でも触れたように、博多市街の南側には房州堀と呼ばれる堀が戦国時代には掘られ、博多の範囲を明確に区画していた。この房州堀は明治期の旧博多駅開設前までは痕跡を留めていた。博多古図等を見ると博多の南側に比恵川(石堂川の旧河道)が、東より西に流れ、那珂川と合流し、博多湾に注いでいる。現在の博多駅の工事の際、バスターミナル付近から弥生式土器が発見されたこともあり、房州堀と比恵川の関係、遺物の存在する層位、旧比恵川の河道の確認等を目的に調査を行った。調査期間は昭和54年12月から昭和55年8月までで、調査担当は折尾学である。遺構の存在は予想されないため、工事による表土掘削、地中梁架設の際に立会し、土層図を作成した。現地表面のレベルは駅前の都市区画整理事業で埋め立てられ、標高3.5~3.9m程度であるが、埋立前の標高はほぼ2.7~3mである。Fig. 120が作成した土層図である。覆鋼桁をかける際に、地表面から1m強を掘り下げており、旧地表面はほとんど見られないが、それでも水田および畑の耕作土と思われる粘性をもった黒褐色土、黒褐色土が標高2m付近に見られる。以下粘質の強いヘドロ様の土層をはさむがほぼ砂層の堆積である。9k 460m調査地点中央部付近で基盤の八女粘土かと思われるシルト質の層が標高0.9m付近で検出できた。しかし他のトレンチでは確認していない。旧比恵川の河道は立上がりの部分が見られず、作成した土層図の砂層部分はほとんどが氾濫源にあたるものと思われる。おそらくこのシルト層の左右に河道が見られるものと思われ、河道の変遷が予想される。遺物はいずれの層からも出土していない。9k 420m調査地点で、木桶組の井戸が1基検出されている。新聞と呼ばれる集落の中にあったものと思われる。また9k 286m調査地点では、房州堀と推定される落ち込みは全く見られず、博多17次調査区、地下鉄祇園町工区Q区と9k 286mとの間、おそらく第一生命ビル、西日本銀行ビルにはさまれた道路付近に求められるであろう(前章Fig. 112)。調査にあたっては福岡市高速鉄道建設局(現交通局)と工事担当の竹中土木株式会社九州支店の各位に御配慮いただいた。

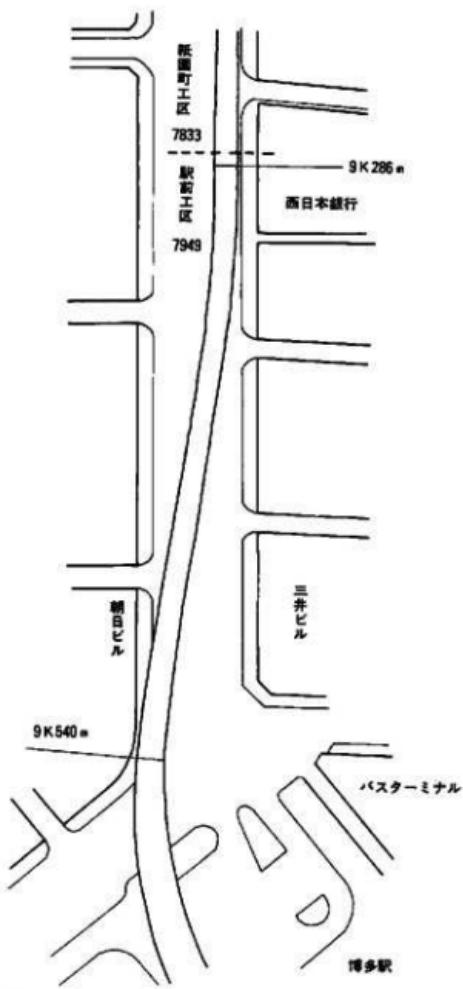


Fig.119 駅前工区調査区全体図

第7章 吳服町工区本体部の調査 (Fig. 121-131, PL. 34-38)

遺跡略号 HKT-S-3 調査番号 7835

博多遺跡群における地下鉄2号線関係の調査で、呉服町駅舎部にあたる。路線は旧電車通り(實線)を東西に走り、博多駅築港線(大博通り)と直交する。この交差点を呉服町交差点と呼んでいる。この交差点はFig. 2の博多遺跡群地形図に見られるように、沖の浜、博多浜の両砂丘にはさまれた低地で、福岡市博多区店屋町、綱場町、上呉服町、下呉服町にかかる。長い間「袖の湊」の故地であると考えられ、地下鉄路線内遺跡の調査に先がけて、福岡市教育委員会が想定した遺跡にも「袖の湊跡」として掲出されている。また路線がこの推定港跡の中央部を通るために遺構については近世の埋立て以外に見られないものと考え、港湾内の土層図の作成を目標に、2号線0k 350m地点にAトレンチ、0k 520m地点にBトレンチ、0k 560m地点にCトレンチを設定し、土層の観察につとめることになった。発掘調査は折尾学が担当し、白石公高、信行千尋、日野孝司らがこれを補助した。調査にあたっては福岡市高速鉄道建設局(現交通局)と呉服町工区担当の大日本土木株式会社の協力を得た。土層図(Fig. 122)の作成にあたっては、工事の地中梁架設の各段階でおこない、これをのち合成するとした。土層写真についても同様の方法で合成した。調査に要した期間は昭和53年11月27日から昭和54年5月23日までである。

調査概要を述べる前に「袖の湊」について触れておこう。袖の形をした入江がその名の由来であるという。「袖の湊」については、近世の古絵図、地誌類に記されており、江戸時代においてもその伝承と位置の比定は度々おこなわれている。これについては、福島金治、佐伯弘次氏が「博多袖ノ湊関係史料集(1)」1987「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」付編にまとめられている。位置については沖の浜の砂丘と博多浜にはさまれた低地に大まかに比定されているが、その築造年代と築造者に言及したのは中山平次郎博士であった。沖の浜の土層の観察から、人工的な盛土が入江の浚渫によるものと考え、「袖の湊」の和歌に用いられる年代と一大事業である港築造の指揮権の強さから、「袖の湊」は応保2(1161)年頃、大宰大式に任せられた平清盛の手によるものであり、その経験がのち大輪田泊の築造に生かされたといわれている。また、「袖の湊」の具体的な遺構として、昭和27年東邦生命ビル(現エレデ寿屋)の建設工事に際し、奥野武氏は多数の遺物とともに出土した杭列を「袖の湊」の棧橋と考えた。これらのことから呉服町交差点は港の中であるとの説が一般的であった。

以下各トレンチの概要を述べる。

Aトレンチ (Fig. 123-125) 2号線里程で0k 350mの地点である。現在表面標高は3.1mで、地表下2.5m程度は覆鋼桁架設のため掘削され、以下を調査した。標高+0.5m強から-5m程度までの土層図を作成し、それは実測図および写真に示すとおりである。遺構には調査土



Fig.121 2号線呉服町本体部トレンチ (1/2500) と袖ノ湊(黒田如水伝より)

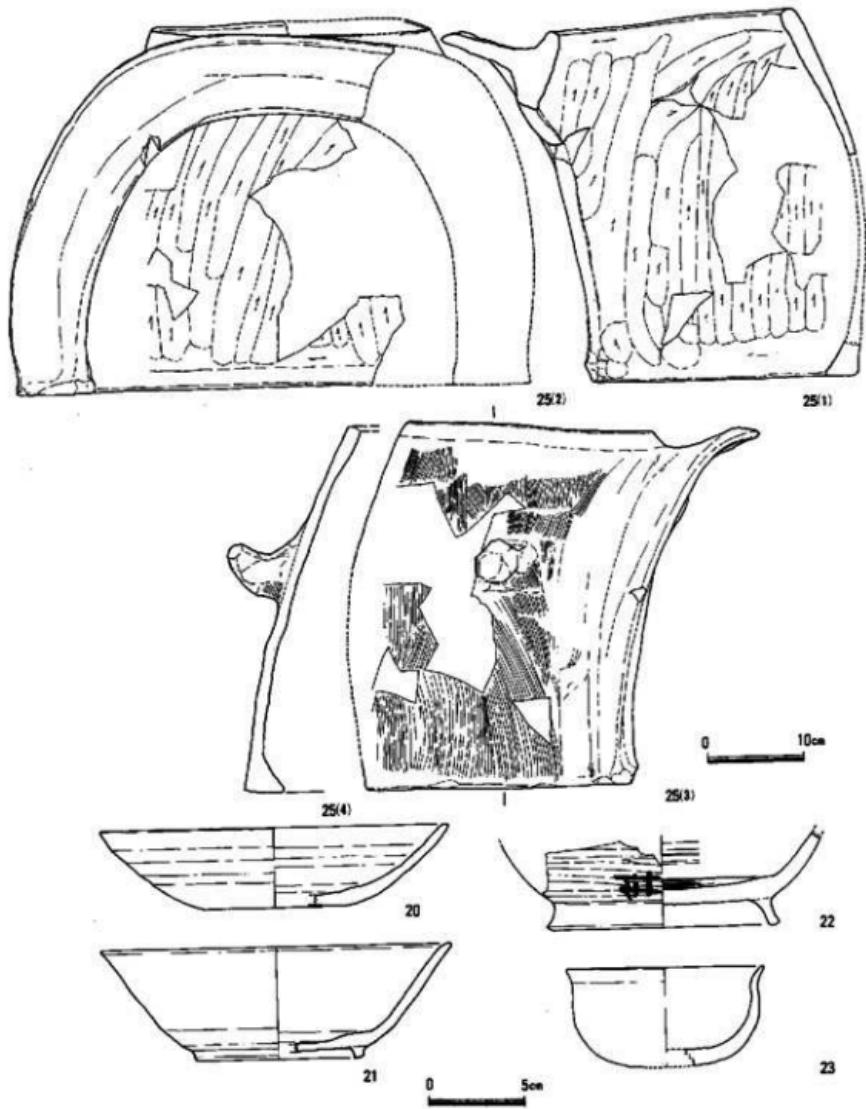


Fig.123 A トレンチ 出土遺物(1)(1/3,25(±1/6)

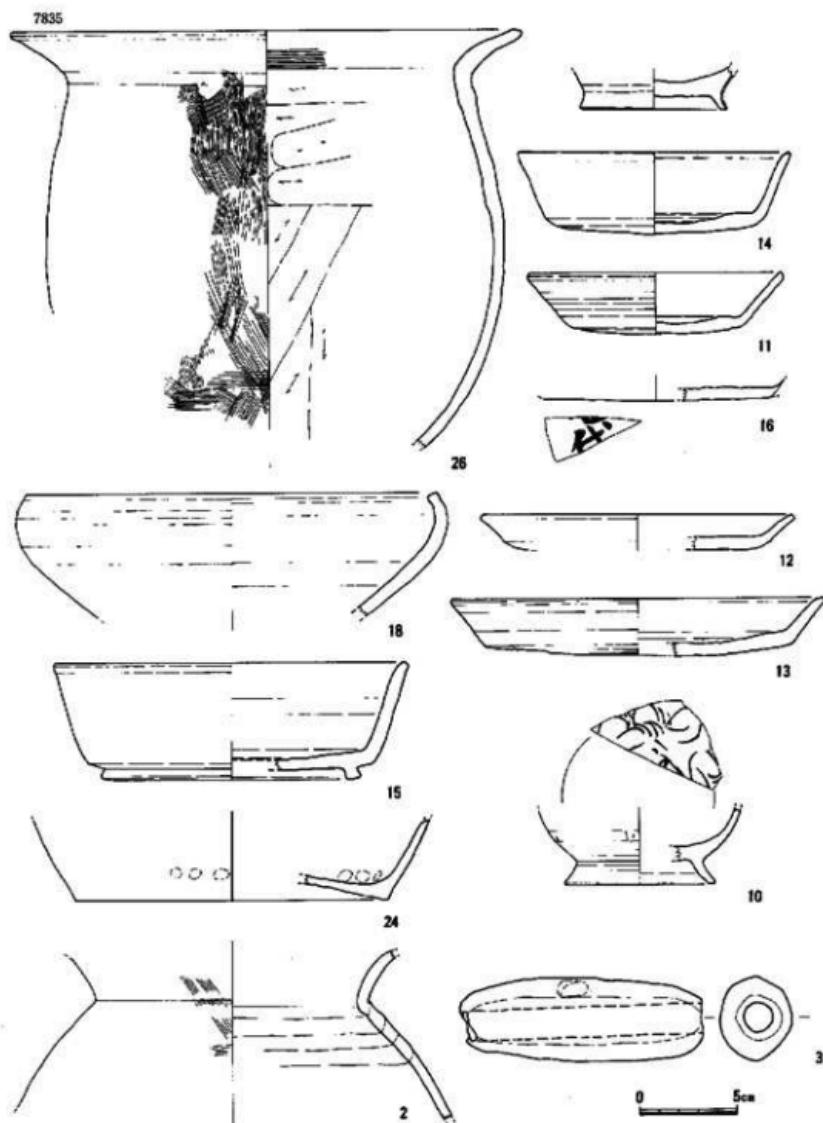


Fig.124 Aトレンチ出土遺物(2) (1/3)

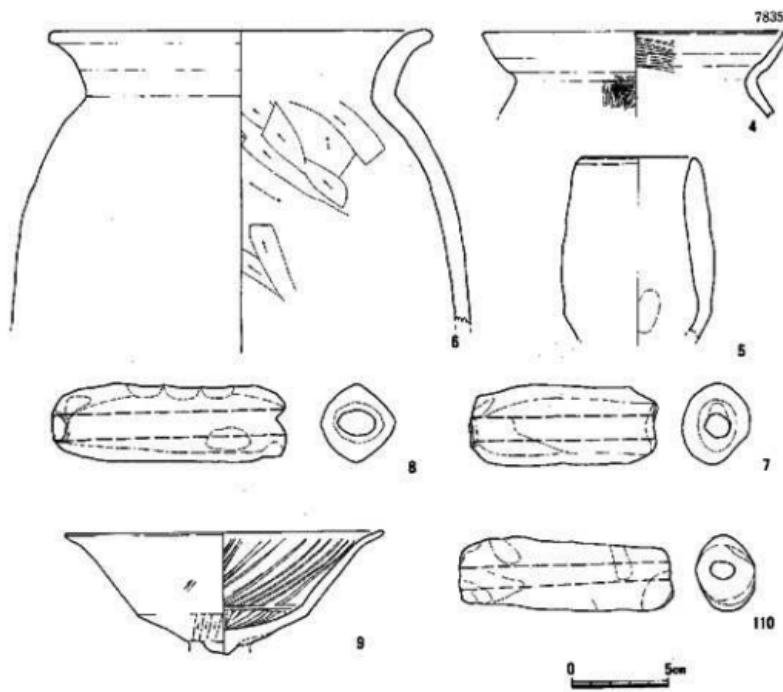


Fig.125 A トレンチ出土遺物(3)(1/3)

7835

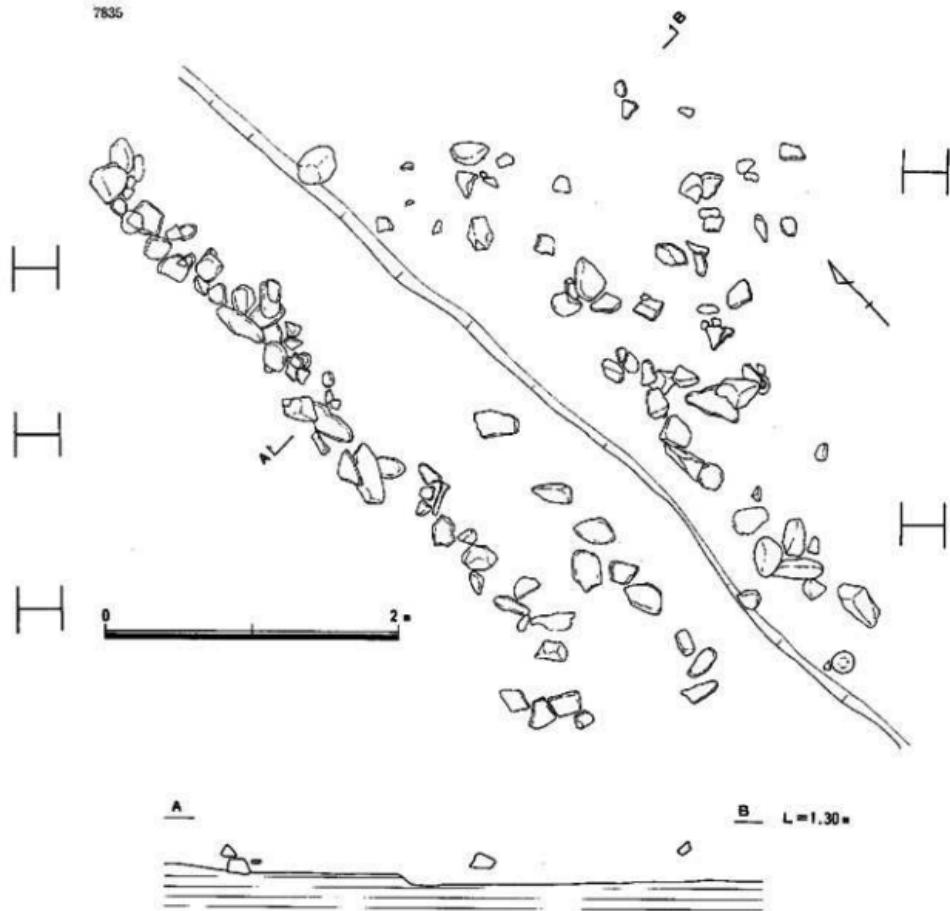
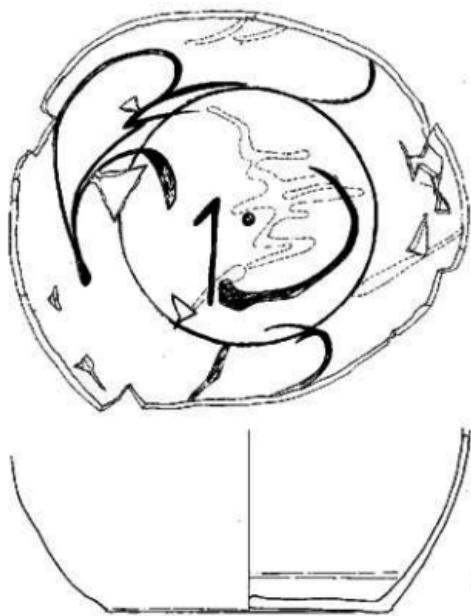
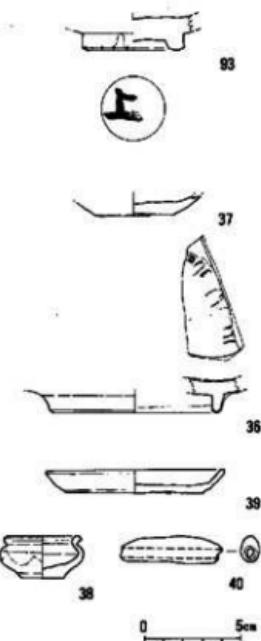


Fig.126 B トレンチ E-I-a区検出遺構(1/40)

7835



94



0 5cm

Fig.127 Bトレンチ出土遺物(1)(1/3, 94+1/6)

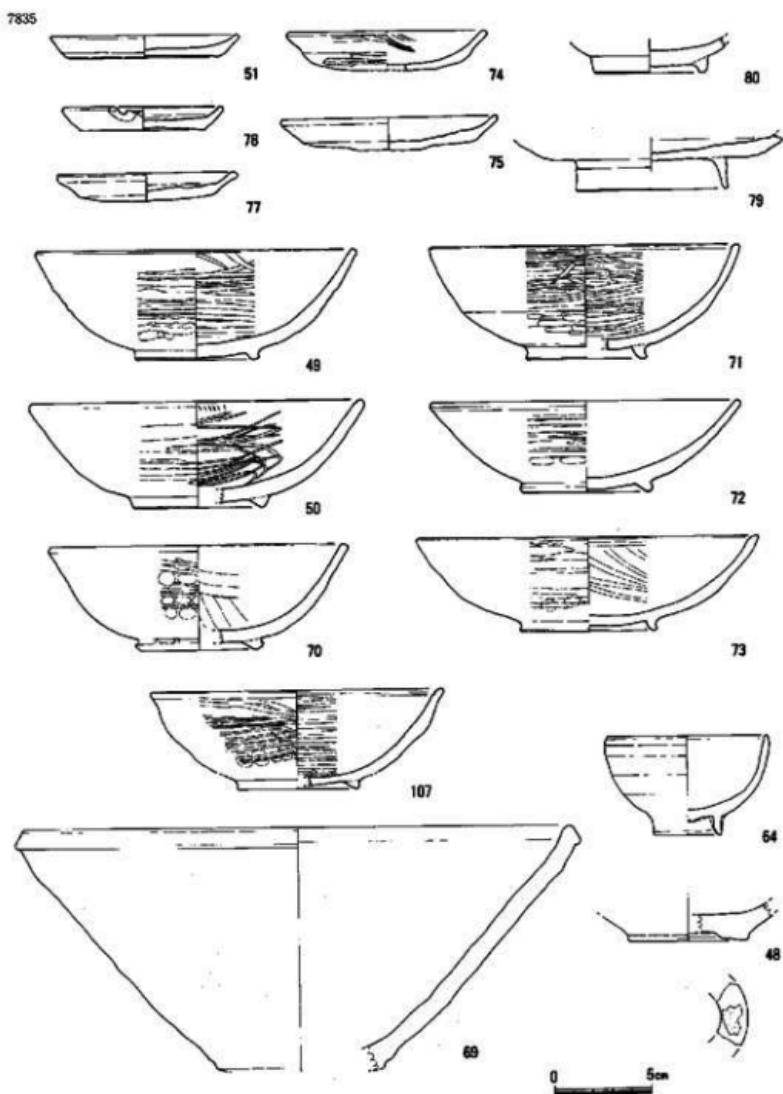


Fig.128 B トレンチ出土遺物(2)(1/3)

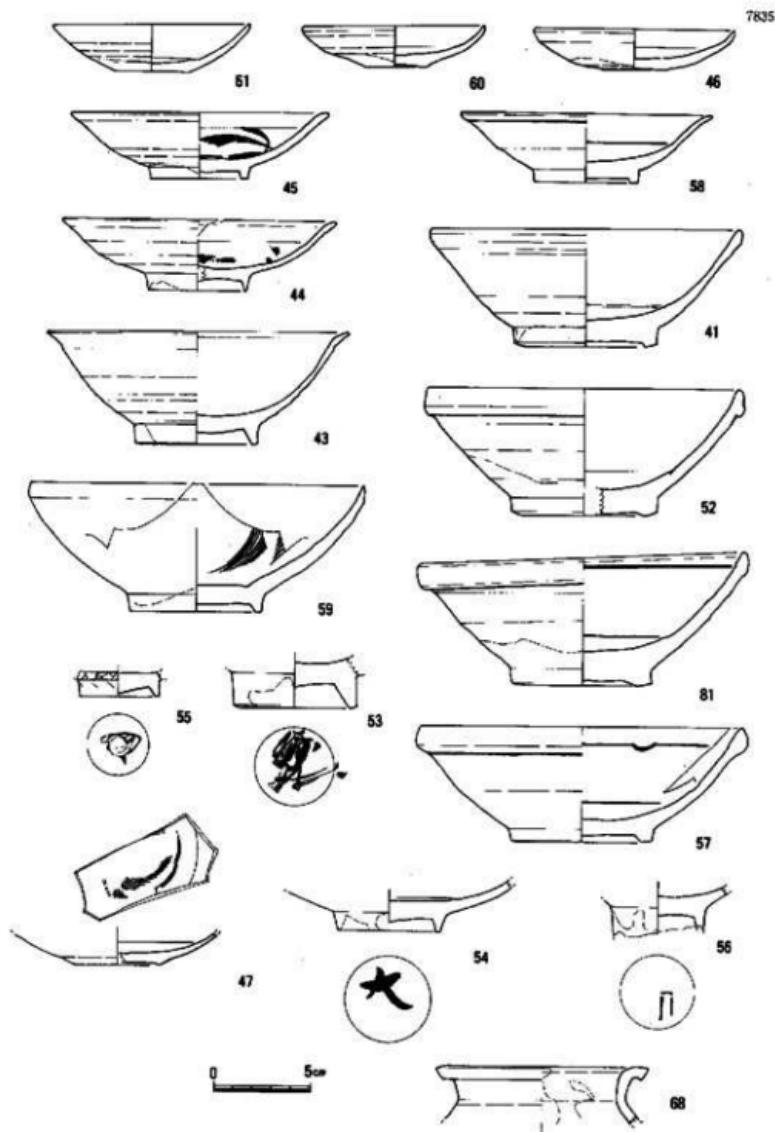


Fig.129 B トレンチ出土遺物(3) (1/3)

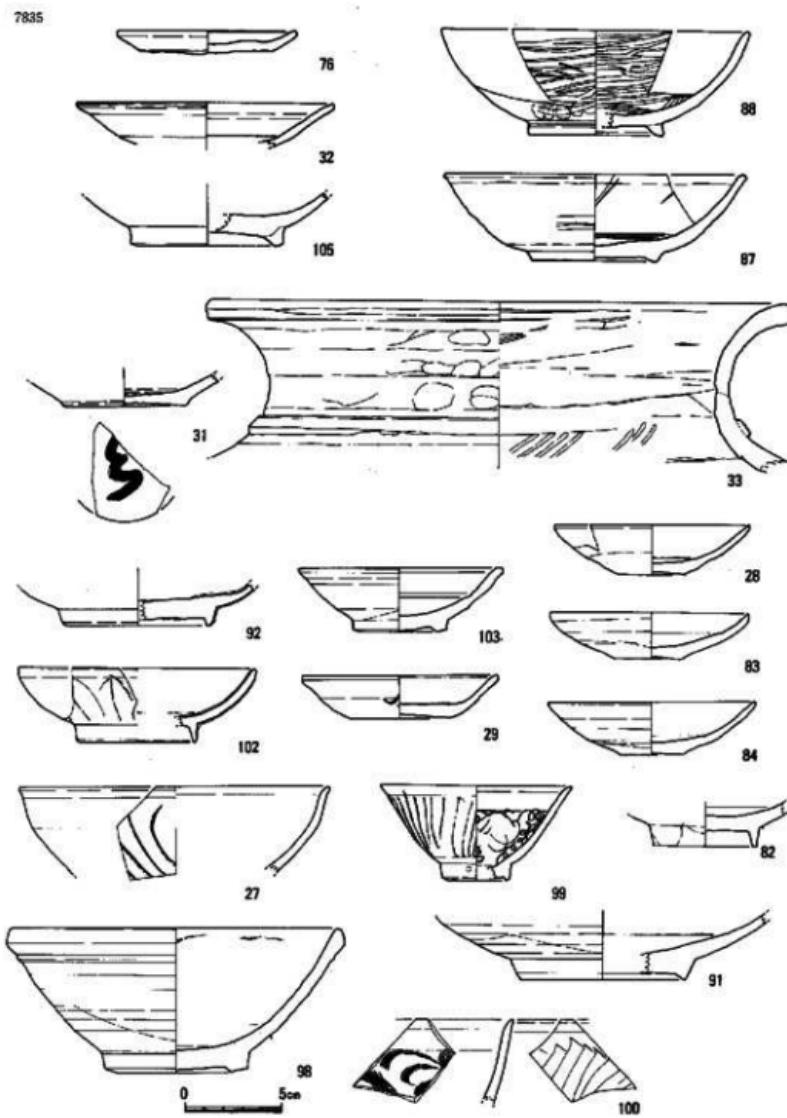


Fig.130 B トレンチ出土遺物(4)(1/3)

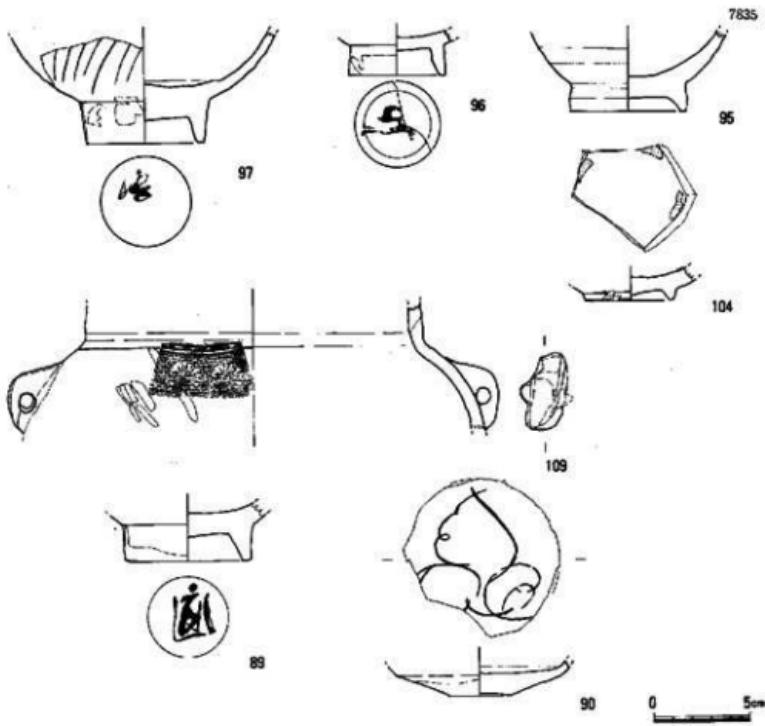


Fig.131 B レンチ出土遺物5 (1/3)

層最上面で確認された杭があり、-1.5 m、12層のあたりまで打ち込まれている。近接する第29次調査区で確認されている16世紀から17世紀初頭にかけての入江埋立工事に見られる杭と同様に土留杭であろう。東から順次埋立てられており、今回の土留杭は29次調査よりあとのものである。擾乱部を除いて、2、3層は後世の掘込みであり、4、5層が近世初期の埋立客土となる。9層、6層以下は自然堆積によるものである。12層ではまとまった量の遺物がある。近世初期の陶磁をはじめ、8世紀代から9世紀前半代の須恵器、土師器や内面に細かいヘラ描き花文をもった越州窯青磁碗(10)なども混じる。16は須恵器杯で「口代」の墨書きがある。現在の博多港の平均潮面は標高0.029 mで、大潮満潮面が同じく0.829 mであり、干満の差が最大2.13 mである。これからすると、標高+0.829 mから-1.301 mまでは干潟の状況にあるといつてよい。干潟の状態で廃棄あるいは流れ込んだものであろう。12~14層はこのような状況であるが15層はほぼ水面下に没している部分である。古式土師器等の古墳時代初頭の遺物が見られるが流れ込みである。砂の堆積は左下がりに堆積しており遠浅の砂浜の如き様相を呈している。既にこの時期には大型の船舶が着岸するような港湾ではなく、漁船などが出入する程度の港になっていたと思われる。天正末年(1591年頃)の豊臣勝俊の『九州のみちの記』に「袖の湊とことごとしくいはれたるはいづくぞ、尋見ばやと申しければ、あるじ心ある人にて、しるべしけるに、あるじ云く、今こそ汐のさしきて水も少はれ、常は無下にいふかひなく侍ふ物をとぞ申ける、誠にもろこし舟よせつべき浦とも覚えず」とあり、12~14層はこの時期の様子を示している。15層は天正末年以前で港湾としての機能を果たしていた時期である。16層以下は41層までは水平な堆積をなしており、汀線近くの堆積とは認め難い。遺物は25、27、40層で微量の古墳、奈良時代の土師器が出土している程度である。平安末以降の遺物は認められない。42層では土師器高杯、須恵器、土錐等が出土している。43層以下は遺物を含まない。16層以下に平安時代末の遺物を含まないことは、42層~16層が古墳時代~奈良時代の堆積であることを示している。このことから15層が平安時代以降~中世末までの堆積となる。この地が「袖の湊」の一部であることの蓋然性は高いが、やや奥水の浅い港であったといわねばなるまい。とはいえ、本来ならば砂丘と化して当然と思われるこの地が港として残ったのは、度重なる浚渫の結果であり、15層の堆積も主要な機能を果たし終えてからのものであろう。

Bトレンチ(Fig. 126~131) 2号線里程で0k 520 m、興服町交差点の中央部にあたる。先に述べたように、この地点は「袖の湊」の中央部にあたると考えられていた。そのため地中梁の架設を先行し、標高+1 m~-2 m程の土層断面図の作成を行った。ところが、土層断面の清掃作業中、標高約1 mのレベルに遺物包含層があり、その面にあわせ精査したところ、Fig. 126に示すような配石列が検出され、雨落ち溝のような段落ちも観察された。かつ、それらの方向はほぼ南北を向き、あまつさえその時期は遅くとも12世紀前半代に比定しうる。この事実は興

服町交差点が、12世紀後半に築造された「袖の湊」の中央部にあたるというこれまでの定説とは全く矛盾した結果であった。呉服町交差点は、平清盛以前、既に12世紀前半には陸地化していたのである。この結果をもとに、呉服町工区の換気塔、出入口等も改めて正式に調査することとなり、第8、9章で述べるとおり、呉服町交差点周辺の古地形が徐々に明らかにされて来ている。検出遺構は標高+1.0m付近であり、先に述べたとおり12世紀前半には比定しうる。以下の砂層では少量の遺物は出土しているが、いずれも以前の時代のもので遺構は検出できない。-2mまでの土層図を作成しているため、Aトレンチの土層図との全体的な比較は困難であるが、Bトレンチ遺構面以下の粗砂層は、Aトレンチの15層と51層との間に比定されるものと考えられる。Aトレンチでは長期間に亘る浚渫作業で除去された層が、Bトレンチではそのまま堆積したものであろう。なお、土層図に見られる木桶組の井戸は上層から掘り込まれたものである。出土遺物は表および図に示した通りであるが、上層掘削時の新しい遺物も混在しているが、大半は12世紀代に位置づけているものである。

Cトレンチ (Fig. 122) 2号線里程で0k 560m、呉服町交差点東側にあたる。他のトレンチと同様に標高+1.0m付近のレベルから-2mまで土層図の作成を行った。この結果、上層から掘り込まれた木桶組井戸のほか遺構は検出されず、Bトレンチで観察できた黒褐色土等の遺物包含層も見あたらず、-2m付近で見られる暗灰色シルト層まで砂層が重なっており、遺物もほとんど見られない。これは調査以前の表土掘削の際に既に遺構面は削平されてしまっているからである。B換気塔の調査でも同様の結果であった。第8章でも触れることになるが、平安時代末期において、Aトレンチは海、Bトレンチは+1m付近に遺構があり陸地、Cトレンチでは+1m以上に遺構があつて陸地といふ、西から東への地形の変化が認められる。

発掘調査にあたっては、当然ある程度の予想は必要であろうが、先入観が大きすぎても事を見失う恐れがある。袖の湊や博多古地形に関するデータが殆どないという当時の状況から止むを得ないことであったとはいえ反省すべき点の多い調査であった。

呉服町工区本体部主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器形
00001	Aトレンチ青白 色砂層最下層	須恵器	壺
2	黄褐色砂層14層	土師器	甕
3	↓	土師質	土瓶
4	黄白色砂層15層	土師器	甕
5		土師質	たこ壺
6			甕
7			土瓶
8	↓		↓
9	42層	土師器	高杯
10	12層	青磁	碗
11		須恵器	壺
12			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器形
13			↓
14			碗
15			壺
16			小片
17			蓋
18			鉢
19		土師器	碗
20	↓	↓	大壺
21	12層	土師器	甕
22		↓	鉢
23		土師質土器	不明
24		陶器	壺
25		土師質	かまと
26	↓	↓	甕

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
27	BトレンチD-I-a第1層	白磁	碗
28	↓		平底皿
29	上層		↓
30	↓	陶器	不明
31	中層	須恵器	壺か
32		陶器	皿
33		須恵器	大壺の類
34		青磁	碗
35	井戸-2裏込中		↓
36	井戸-2内		盤
37	↓	須恵器	皿
38	井戸-3内	陶器	小甌
39	↓	土師器	皿
40	↓	土師質	土錐
41	E-I-a	白磁	碗
42			-
43			-
44			-
45			-
45			↓
46			平底皿
47		青白磁	皿
48		青磁	碗
49		瓦器	
50		↓	↓
51	BトレンチE-I-a	土師器	皿
52	↓	白磁	碗
53	E-I-a 包含層(上)		↓
54			高台付皿
55			↓
56			小碗
57			碗
58			高台付皿
59			碗
60			↓
61		白磁	平底皿
62		↓	水注
63		青白磁	香炉
64		青磁	小碗
65		↓	不明
66		陶器	壺
67			四耳壺
68		↓	壺
69		須恵質	鉢
70		瓦器	碗
71			-
72			-
73			↓
74		↓	皿
75		土師器	
76			-

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
77			
78			↓
79			碗
80	E-I-a 包含層		↓
81	E-I-a 包含層(上)	白磁	碗
82	F-I-a茶褐色土 褐黃灰色粗砂層		↓
83			平底皿
84			↓
85		染付	碗
86		↓	
87		瓦器	
88	F-I-a暗褐色 粗砂層	↓	
89	F区表面探査	白磁	↓
90	↓	青磁	平底皿
91	G-I-a上層	白磁	鉢
92	↓	青磁	高台付皿
93	H-I-a井戸内	↓	碗
94	↓	陶器	壺
95	H-I-a	↓	碗
96	C-I-a	白磁	小碗
97			碗
98			↓
99			小碗
100		商	碗
101	BトレンチC-I-a	青磁	平底皿
102		↓	高台付皿
103		白磁	↓
104		青磁	皿
105		陶器	鉢
106		↓	壺
107		瓦器	碗
108	Bトレンチ付 近表面探査	白磁	八角杯
109	区不明表探	瓦質	羽釜
110	Aトレンチ	土師質	土錐
111	BトレンチE-I-a 包含層(上)	石製品	石錐
112			
113			
114			
115			
116			
117			
118			
119			↓
120			石玉
121			石玉
122			馬平蹠
123	E-I-a		防錆車
124			墨石
125	C-I-a		石鍋

第8章 呉服町工区換気塔部の調査 (Fig. 132—137, PL. 39・40)

遺跡略号 HKT-S-5 調査番号 8037

第7章で述べたように、当初「袖の湊」の中央部を横断するという予想で、呉服町工区本体部の調査は3本のトレンチを設定し、土層の観察を行うこととした。その結果、Aトレンチでは港底と思われる層が確認され、また中世末以降の埋立の一部検出し、さらに港築造以前の層も確認できた。また、Bトレンチでは予想もしなかったことに12世紀代建物等の遺構が検出され、呉服町交差点付近は博多浜、沖の浜とを結ぶ陸橋の如き地形をなしていることが確認できた。これらの結果を踏まえ、換気塔および出入口の工事については以後確実に調査することとなった。換気塔の調査区は2ヶ所であり、それぞれの概要を述べる。

朝日生命換気塔の調査 (Fig. 132~134) 博多区店屋町に位置し、昭和56年7月4日から7日まで調査を行った。対象地は630 m²であったが、真下を通る1号線シールドとの工法上の問題からトレンチ調査を行なうこととした。トレンチ長は12.5 mである。現地表面の標高は3.4 mで、地表より2.5 mは近世以降の埋立による盛土であり、地中梁の架設等のため先行除去している。Fig. 132 に示したように1、2層はネズミ色の粗砂層で、須恵器片を少量含んでおり、本体部Aトレンチの12層にはほぼ相当する。この層は山側に向ってやや高くなり、上面に堆積したヘドロ層(4~8層)もやや右下りに堆積している。標高0 mを中心としたこれらの層は潮間帯にあたり、干潟状の様相を示している。ヘドロ層は近世初頭の堆積物で、傾斜を見せることから岸辺に近い部分であろう。このヘドロ層の上面から、1、2層まで達する杭が集中して打ち込まれている。これらの杭は、29次調査で確認されたような入江の低湿地部分を埋め立てていった近世の土留遺構とも考えられるが、江戸期の古地図を現在の地図と重ね合せてみると、「大水道」の推定線の一部がこの調査区にかかり (Fig. 134)、この杭列が「大水道」の土留めの一部である可能性もある。残念なことに上層部分が既に削られており断定はできない。今後の周辺部の調査に期待したい。なお「大水道」は、近世地誌、地図などに記されているように、中世期の「袖の湊」の名残りとして認識され、「今は入海(袖の湊)なくなり、其跡のみわづかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を大水道と号す。(筑前国続風土記)」などと記されている。また「殊に、西町(現店屋町)・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂浮、或は船具の類出る事まゝ多し。(博多古説拾遺)」と考古学的知見を記していることは注目に値する。「袖の湊」、「大水道」については「博多袖ノ湊関係史料(1) 地誌編」福岡市埋蔵文化財調査報告第156集 1987 付録として佐伯弘次、福島金治氏がまとめられているので参考にしていただきたい。

B換気塔の調査 (Fig. 135~137) 博多区上呉服町に位置し、昭和56年3月27日から3月31日まで調査を行なった。調査面積は82 m²である。東邦生命ビル(エレデ寿屋)の北角に隣接する。昭和27年3月東邦生命ビルの建設工事の際、奥村武氏らが様々な遺物を採集し、「博多袖之

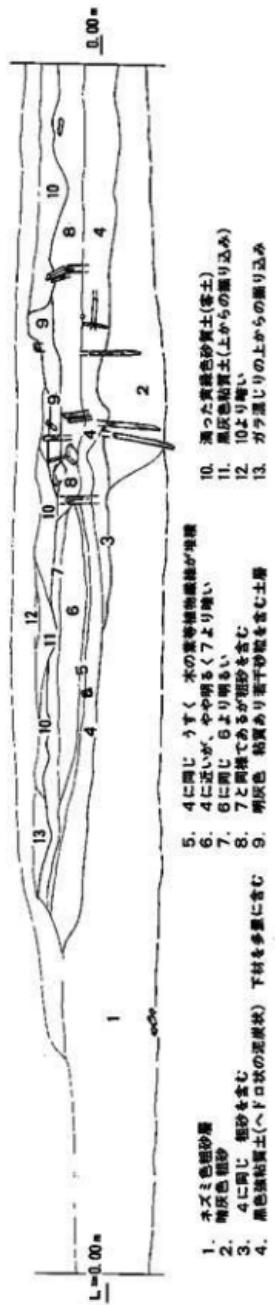


Fig.132 前日生命換気塔調査区西壁土層圖(1/60)

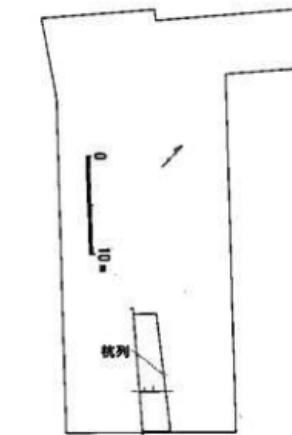


Fig.133 朝日生命換気塔トレチ位置図



Fig.134 朝日生命換気塔調査地点と人水道推定線

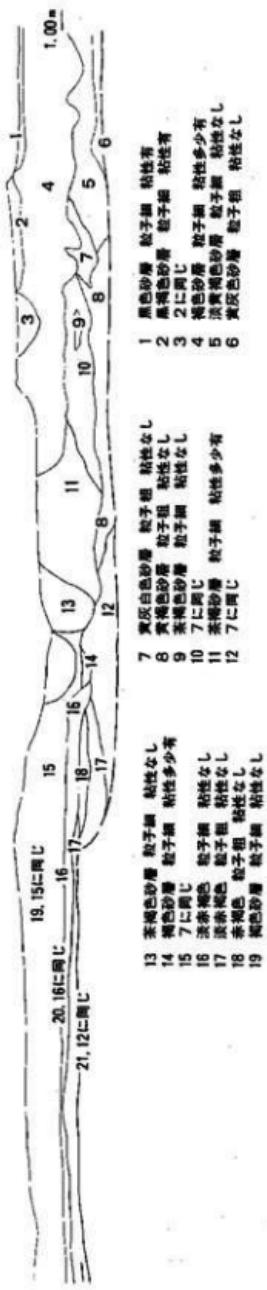


Fig.135 B換気塔調査区土層図(1/60)

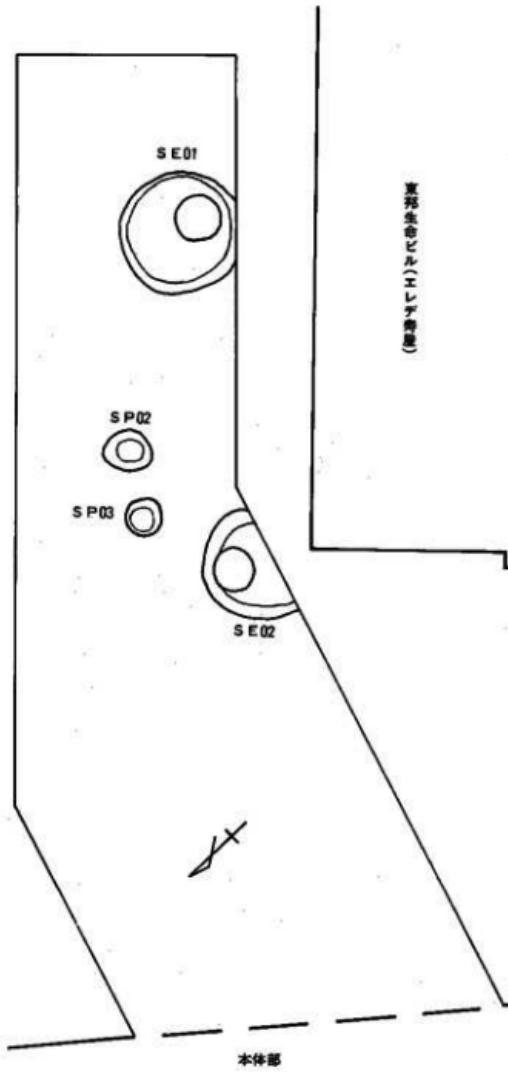


Fig.136 B換気塔調査区全体図

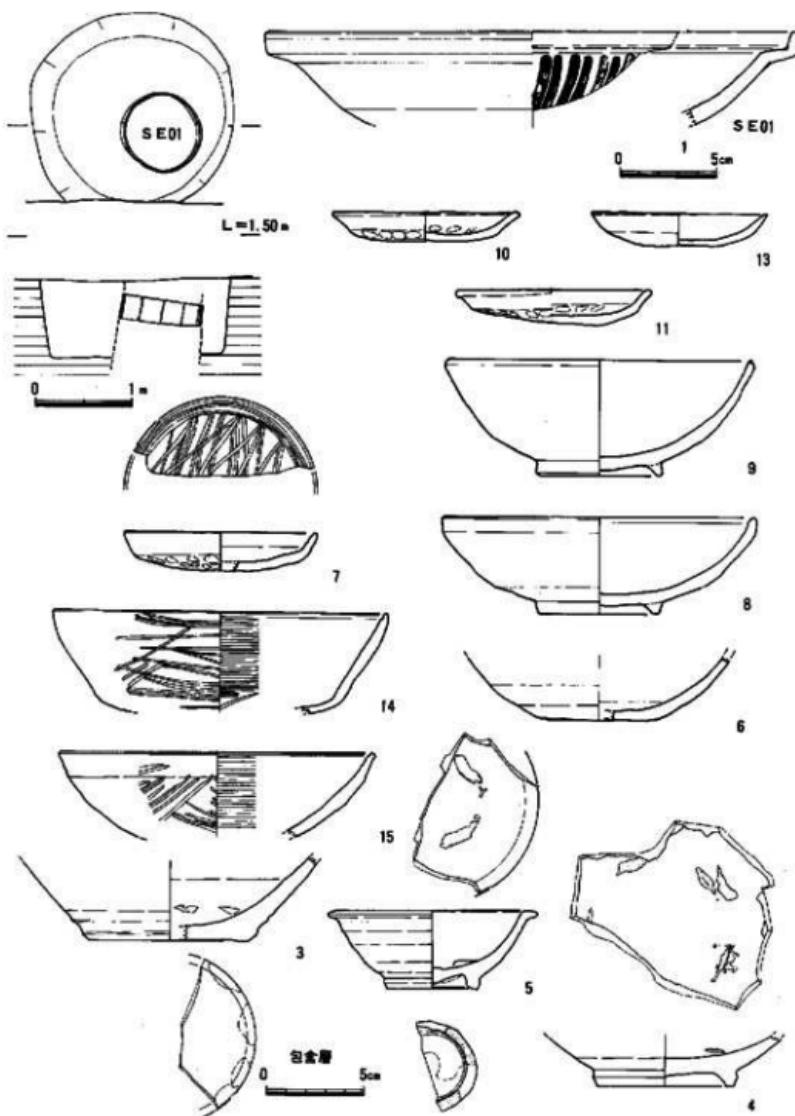


Fig.137 B換氣塔出土遺物(1/3)

湊址発掘文化財品名目録(福岡県文化課蔵)1953。「博多袖の湊遺跡出土文化財について」、「うわき25-9~12】1953所収にまとめてある。ここでは周辺博多の調査と同様、地表下1.5m程は擾乱と見なし、調査に先行して覆鋼桁架け、地中梁の架設までを行い、以下を調査した。地表面の標高は3.2m程度である。ここでは、呉服町交差点付近で行なった呉服町駅出入口A、B、Cの各区および本体部Bトレントの様相が異っている。標高1.5m~0.6mの間の調査を行なつたにもかかわらず、遺物を多量含む遺構面は確認されず、また遺構も上層から黄灰色粗砂層中に掘り込まれた近世以降の井戸2基と平安~鎌倉期のピット2個が検出されただけであった。出土した遺物も遺構出土の例をのぞいて、いずれも辛うじて残された包含層である1~3層(黒褐色細砂、黒色細砂層)から出土したものである。このことは、この地点での遺物包含層および遺構は標高1.5m以上のところにあったことを示しており、調査以前の表土剥き取りの段階で包含層の殆んどを削平してしまったことが指摘される。地中梁を必要とする工事工法との兼ね合いで、このような結果となってしまったのは残念なことであるが、ここでの事実は呉服町交差点部における陸橋部の旧地形を理解する上で重要である。交差点西端のA・B出入口では標高+1.0m前後で溝などの生活遺構が検出され、交差点中央部に位置する本体部Bトレントでは標高+1.0mで列石遺構が検出され、交差点東端に位置するC出入口では標高+1.5m付近で溝、土壤などの生活遺構が営まれている。これらの遺構はいずれも12世紀初頭から後半までに位置づけられるものである。交差点を更に東に行った本体部Cトレントでは、標高+1m以下を調査したため、既に包含層は削りとられ、遺物すら検出できなかった(第7、9章参照)。B換気塔の場合、標高+1.5mで包含層は殆んど削られ、痕跡程度に残すのみであった。また、Cトレントのすぐ海側、中呉服町吉田ビル駐車場の試掘調査では標高+1.7m程で遺構が認められている。B出入口の西に近接する第16調査地点では急激な落込みが確認され15世紀代以降に埋め立てられている。これらのことから、博多浜部と沖の浜とを結ぶ陸橋部は呉服町交差点西端からはじまり、東に向って高くなり、B換気塔部との比高差は60cm以上を測る。残念ながらB換気塔より東側のデータがないため陸橋部幅は明確に出来ないが、現在確認できる分だけでも100mを越し、かなり広いものであったようだ。

B換気塔で検出した遺構と遺物について若干の説明をしておく。

SE01(Fig. 137) 近世の井戸である。瓦組井側をもつが最下面是木桶組であり、その痕跡を残す。少量の近世陶磁に混じり龍泉窯系青磁大盤(1)が出土している。

SE02 SE01と同様の近世井戸である。木桶組の井筒が最下位に残る。遺物は少ないが堀方粗砂中から、ローリングを受けた黒曜石製の石鍤が出土している。二次堆積によるものである。

ピット(SP01、2) 上層にあった遺構の一部が辛うじて残ったもので、瓦玉、滑石製石鍤がそれぞれに出土している。平安時代末もしくは鎌倉時代初頭の遺構であろう。

遺物は辛うじて残った黒色細砂層から出土したものと、以下の二次堆積粗砂から出土したものがある。6は粗砂層から出土した古墳時代の須恵器壺で、以外は上層の出土である。3~5は越州窯系青磁である。10、11、13は土師器小皿でヘラ切、指頭圧痕が残る。6~9、14、15は瓦器碗および皿である。14、15は細かい研磨が見られ、畿内の楠葉型瓦器碗と共に通する。

吳服町換気塔出土主要遺物

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	B区換気塔 1号七塗(井戸)	青磁	大盤
2	ピット1	瓦質	瓦玉
3	包含層	青磁	碗
4			↓
5			高台付皿
6		須恵器	碗
7		瓦器	皿
8			碗
9			↓
10		土師器	皿
11			↓
12			↓
13			↓
14		瓦器	碗
15			↓
16			↓
17		土師質	土鍋
18	擾乱	瓦	軒先瓦
19	↓	陶器	壺
20	ピット2	石製品	滑石製鍋
21	B区換気塔擾乱	石製品	砥石

第9章 呉服町工区出入口の調査

呉服町工区本体部調査の段階で「袖の渓」の中であると推定されていた呉服町交差点内に、平安時代末期以降の遺構・遺物の存在することが明らかになり、呉服町駅舎に付設する出入口部分の調査が必要となった。交差点の四隅にA～Dの出入口が設けられることになっていたがD出入口については既に本体部および東邦生命ビル建設時に破壊されており、A～Cの調査を行なうこととした(Fig.138)。実際の調査区は網部分である。調査は昭和56年4月1日から5月16日にかけて行なった。交通頻繁な交差点にあり、また覆鋼面から2m程の余裕があることから、路面覆鋼、地中梁の架設を先行し、覆鋼板下で人工光に頼って発掘調査を行なった。

遺跡略号 HKT-S-5 遺跡調査番号 8150である。以下各出入口について調査概要を述べる。

1. A出入口の調査 (Fig.139～148)

呉服町交差点南側、博多区店屋町側角に位置する。実際の調査面積は70m²程度である。ここでは標高+0.8～1.2mのところで遺構が検出されている。

SK01 (Fig.140、146) 標高0.85mのレベルで検出された砾および陶磁器等の集積遺構である。泥炭状土層が西側に向ってわずかに傾斜しており、この中に投棄されている。満潮時の最高水位にほとんど一致する。同安窯系青磁碗(1)、陶器鉢(2)、東播系の鉢(3)などが出土している。12世紀後半から13世紀前半代である。

SD01 (Fig.140、143) 浅い溝状の落ち込みで、大半は調査区外にかかり規模および性格は明確でない。大小の砾とともに多数の遺物が出土している。12世紀後半代の遺構である。

SD02 (Fig.141、144) 標高1.2～1.3m程度で検出された溝である。人頭大の砾と杭、板を用いて土留めを行なっている。土留板は網代編になっている。本来的には更に深かったものであり、板や杭も上半部を欠失している。この溝中の覆土と検出面上には全体に泥炭状土層がかぶっており、下駄、板草履等の木製品が多数含まれていた。34は古相の龍泉窯系青磁で外底に墨書きをもつ。32は高麗青磁、36は花押墨書きをもつ白磁碗である。12世紀半ばの遺構である。

SD03 (Fig.140、144) 標高0.9m付近で検出した溝である。人頭大砾を杭、板を用いて土留を行なう。ここではSD02と異なり、横板を土留に用いている。直角に曲る部分も見られる。砾を土留の補強に用いている。泥炭状土が溝内にはあり有機物の遺存状態が良好である。ここでは溝中から同形の同安窯系青磁碗が4個まとめて出土している(45～48)。42は薄胎の青白磁碗である。12世紀後半代の遺構である。

SD04、05 (Fig.142、145) 標高1.0mのレベルで検出されている。SD05は人頭大砾を杭、板を用いて土留した溝で、SD04はこれに直交する杭列である。SD05の土留板は縦に用いられている。溝の中と上面には泥炭状の土が堆積し、木製品、陶磁器等多量の遺物が出土して

いる。図示した遺物は49が白磁碗Ⅲ類で、50は古相をもつ龍泉窯系青磁碗である。SD04では滑石製の鍋も出土している。いずれも12世紀後半代の遺構である。

包含層から多くの遺物が出土しており、表および図に示すとおりである。78は白磁八角杯で内底に4ヶ所の目跡を残す。77は枢府タイプの白磁碗で内面に陽文があり、「府」の一部かと思われる文字も見える。140は白磁平皿で内底に印花文を施し、「正」の文字が見える。80は土師質の婧壺。168は中国製天目碗であるが釉は赤褐色を呈す。317は瀬戸のおろし目皿である。墨書のある陶磁も多数あり(Fig. 148)、122は「鄭口」の中国人姓が読める白磁碗、163は「+」の数字が記された龍泉窯系青磁碗である。

2. B出入口の調査 (Fig. 149~157)

吳服町交差点西側、博多区綱場町側の角に位置する。実際の調査面積は約90 m²である。中間杭を境に2回に分けて調査した。標高+1.0 m付近で3条の溝、5基の井戸、4基の土壙、ピット群を検出した。以上主な遺構、遺物の概略を述べる。

SK01 (Fig. 151、152) 調査区西隅で検出された廃棄物処理土壙であるが全体のプランは不明。双魚文の印文を施した龍泉窯系青磁Ⅲ類碗(176)や陶器B群皿などが出土している。13世紀後半か14世紀初頭にかけての遺構である。

SK09 (Fig. 152) 調査区東端で検出された浅い落ち込み状の遺構である。廃棄物処理用にいられたものであろうか。ほぼ12世紀後半代に位置づけられる。182は龍泉窯系青磁碗で、高台内に、SK10の184と共に墨書が記されるが判読できない。

SK10 (Fig. 152) 浅い不明確な落ち込みで性格は明確でない。12世紀後半代の遺物が多い。墨書のある青磁4点があるが、図示したのは184のみで、他は判読できない。

SK11 (Fig. 152) 12世紀後半代の土壙である。遺物は少量で性格不明。186の白磁碗には仮名様の文字が墨書きされている。

SD01 (Fig. 151、152) 標高0.9 mで検出されている。幅40 cm程のせまい溝で北から西に20°程偏る。東側の壁は長い横板と杭とによって土留されている。南端は収束しているように見えるが本来は上半部もあって南に延びていたものと思われる。遺物は少ない。12世紀後半から13世紀にかけてのものか。SD02、03もほぼ同様の時期である。

泥炭状土を含む包含層から多数の遺物が出土しており、主要なものは表および図に示した通りである。Fig. 153の271・2は瀬戸おろし目皿、蓋。193~202は徳化窯系の白磁で、193には「+」、194には「上-」の墨書きがある。203、204、300は枢府タイプの白磁である。Fig. 155の227は龍泉窯系青磁Ⅲであるが内外底に目跡が見られる。245は高麗末もしくは李朝初期の青磁八角杯である。Fig. 156の213は仮文字墨書きをもつ皿。248~250は中国製天目碗で、248には底部下半分の露胎部に墨書きが見られる。246、247は李朝粉青沙器で白い象嵌が見られる。252は黄と

縁の二彩を施した陶器で外面に印花文がある。明代のものか。

3. C 出入口の調査 (Fig. 158~178)

呉服町交差点北側、博多区中呉服町側の出入口である。標高1.5 m 程のところで多くの遺構が検出できた。18基の井戸、3条の溝、11基の土壙、ピット群などである。ここでは第7章、第8章でも触れたように、陸橋部分が東側に向って高まってゆくことが確認でき、A、B 出入口より遺構面のレベルは50~60 cm 程度高くなっている。

井戸 (Fig. 161、165~167) は平安末期から近代にまで及ぶ。SE01 は方形板組で16世紀末から17世紀。SE02 は木桶組で16世紀末。SE03 は上に瓦と板を用い、下段に木桶を用いた近世初頭。SE04 は木桶組の近世井戸で、土鍤も出土。SE05 は木桶組で近世初頭か。SE06 は13世紀代の木桶組で石鍤が出土。SE07 は木桶組で13世紀後半代か、龍泉窯双魚文鉢 (391) や磁州窯系白釉片などがある。SE08 は12世紀代か。本体部は不明。SE09 は本件部不明である。「て」の字口縁の土師皿がある。12世紀後半代。SE10~12 は近代井戸。SE13、14 は近世井戸であるが掘方から多量の中世遺物が出土している。SE15 は近世井戸で木桶を2段階以上重ねるが、上部には瓦を組んだと思われる。SE16 は木桶を2段以上組む近世井戸で、掘方から中世遺物が多数出土する。SE17 は方形板組井戸で13世紀代か。SE18 は近世木桶組井戸である。

SD03 (Fig. 160、168、169) き幅70~90 cm 程の浅い溝で、ほぼ南北に向く。泥炭状の土が埋り多数の遺物が出土している。ここでは糸切土師皿、青磁は含まれず、12世紀初頭の遺構である。瓦器椀が多く見られる。陸橋部最古の遺構の一つである。SD01 も直交する方向をもつが時期は不明、SD02 (Fig. 167) は12世紀後半代の溝で、主軸は北から約20° 西に偏る。

SK02 (Fig. 162) は土壙墓で12世紀後半代に位置づけられる。主軸はほぼ南北に向く。

SK03 (Fig. 162、163) は木棺墓である。棺釘の位置から1.3×0.5 m の木棺が想定でき、主軸は北に向く。頭位西側に副葬遺物がまとまっている。12世紀後半に位置づけられる。

SK07 (Fig. 160) は中世末もしくは近世初頭の木棺墓で、SD03 を切る。主軸は北に向く。明代の染付片が出土している。

SK11 (Fig. 164) は SD02 のなだらかな壁斜面に龍泉窯青磁碗 (8個体) と魚文皿 (3個体) がまとまって出土したもので明確なプランは認められず、墓の副葬品ではない。碗は2枚づつ重ね、皿も3枚が重ねて伏せられている。箱詰めにしたものがそのまま埋没したような印象をもつ。青磁碗の文様も429と428の2つのパターンだけである。

この他、多数の遺物が出土しているが、誌面の都合上詳しく紹介することができない。図と表を参照願いたい。

8150

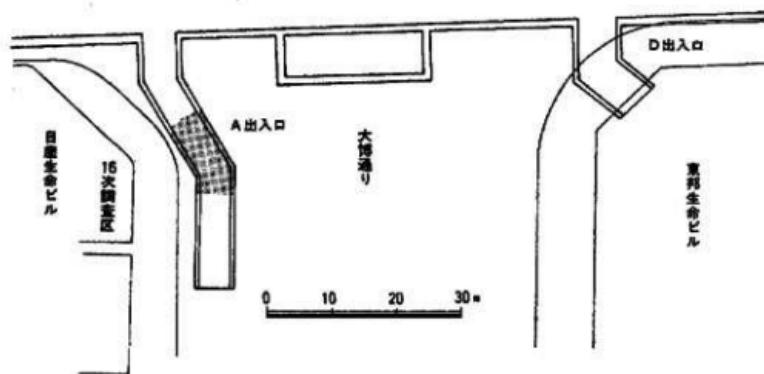
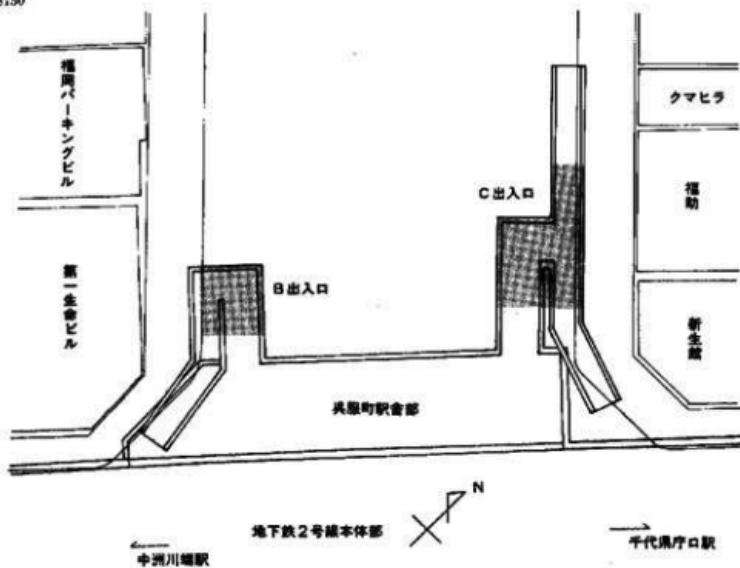


Fig.138 共服町工区 出入口調査地点

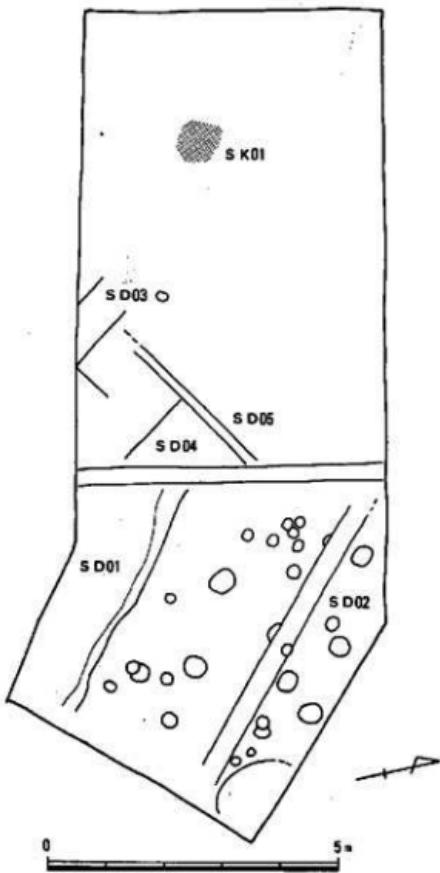
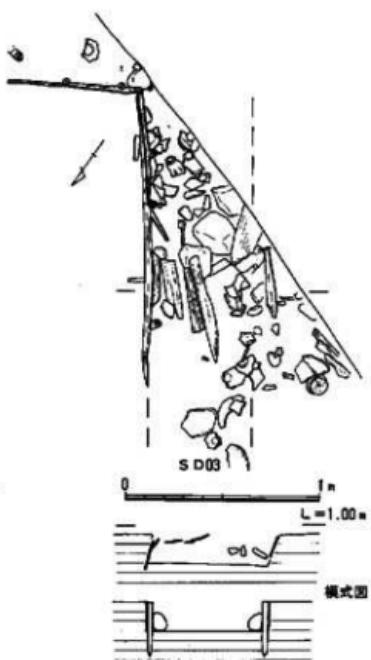
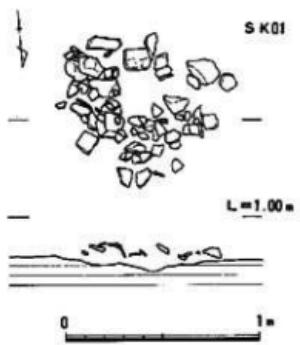
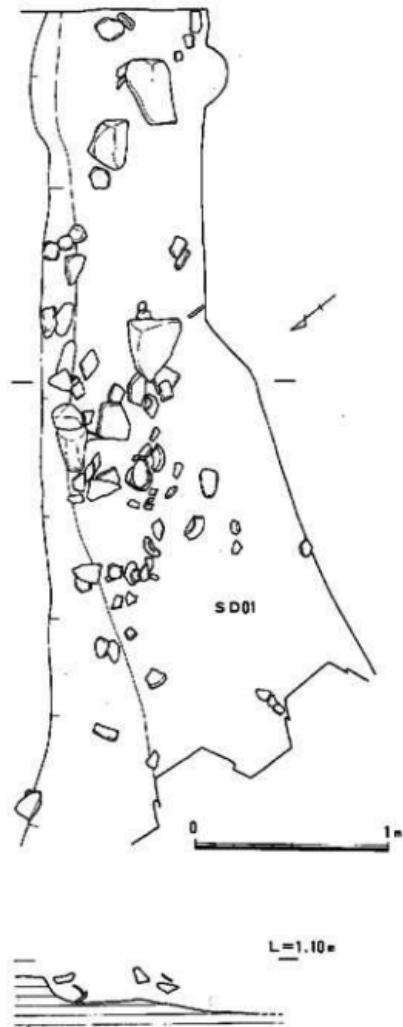


Fig.139 兵庫町工区A 出入口構造全体図

8150



模式图

Fig.140 A出入口SK01,SD01,SD03

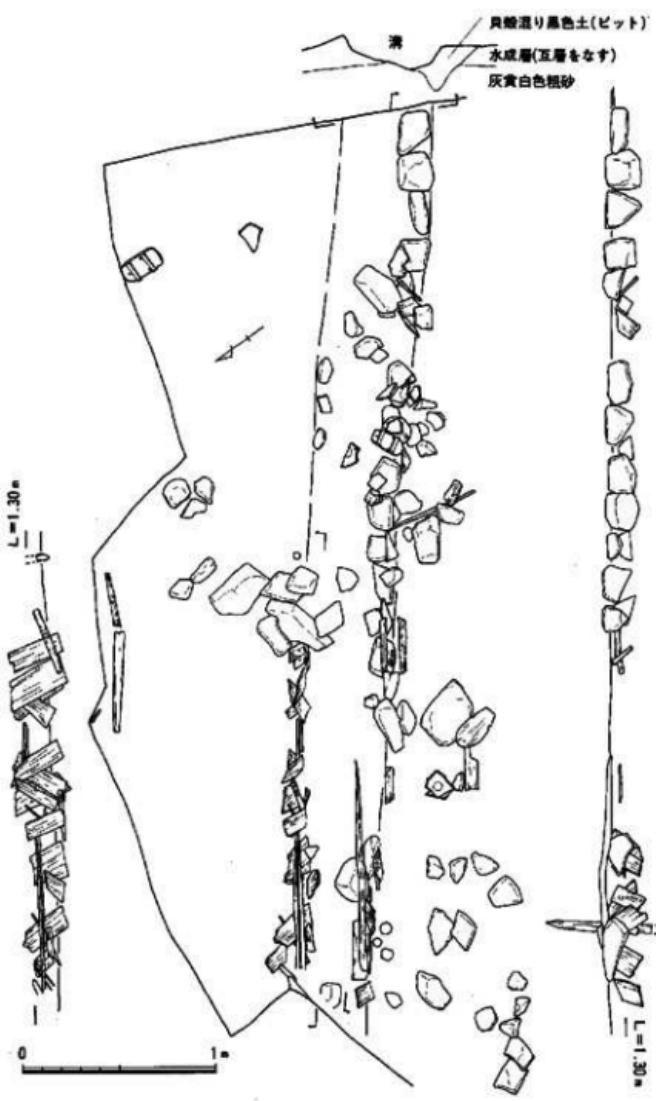


Fig.141 A出入口 SD01

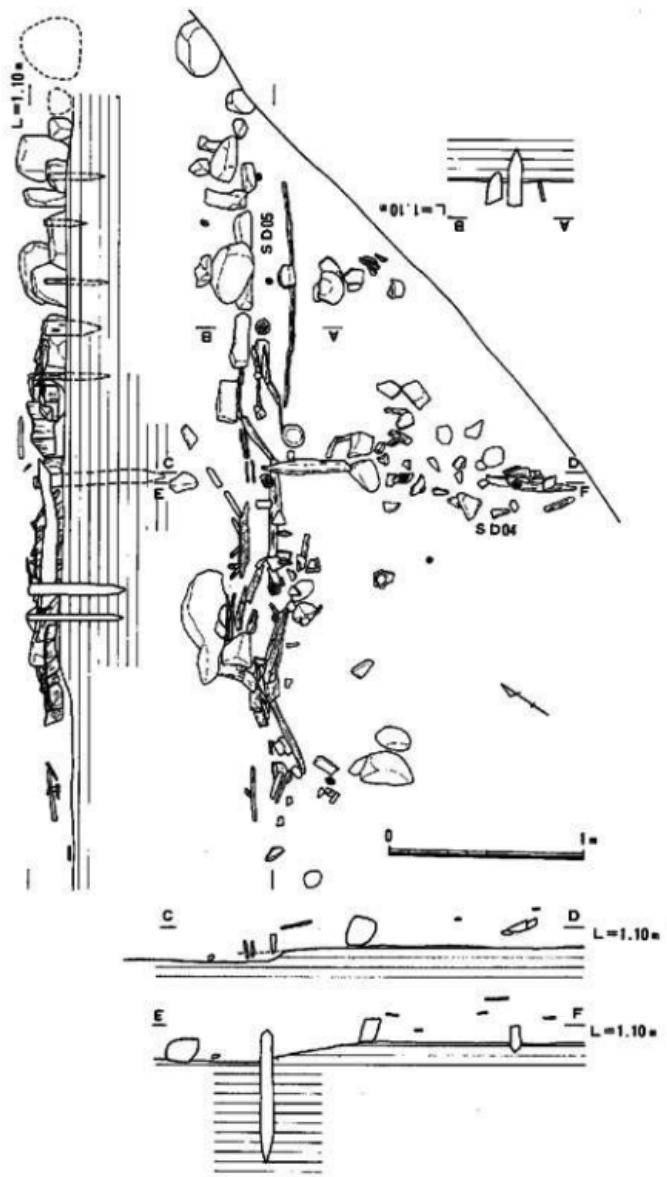


Fig.142 A出入口 SD04,SD05

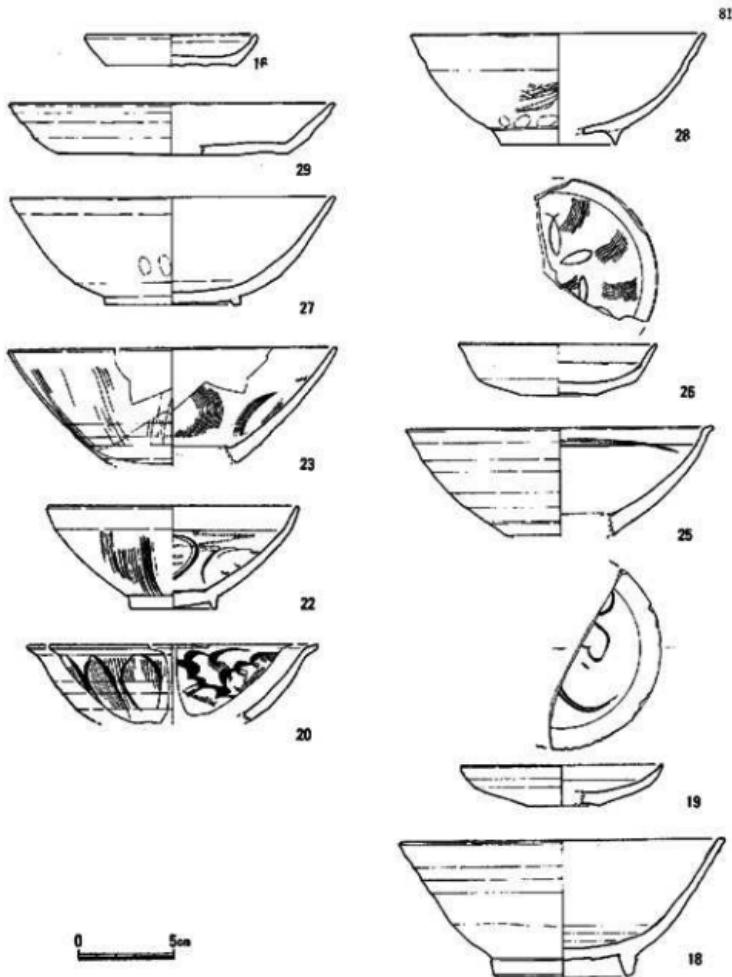


Fig.143 A出入口 SD01出土遺物(1/3)

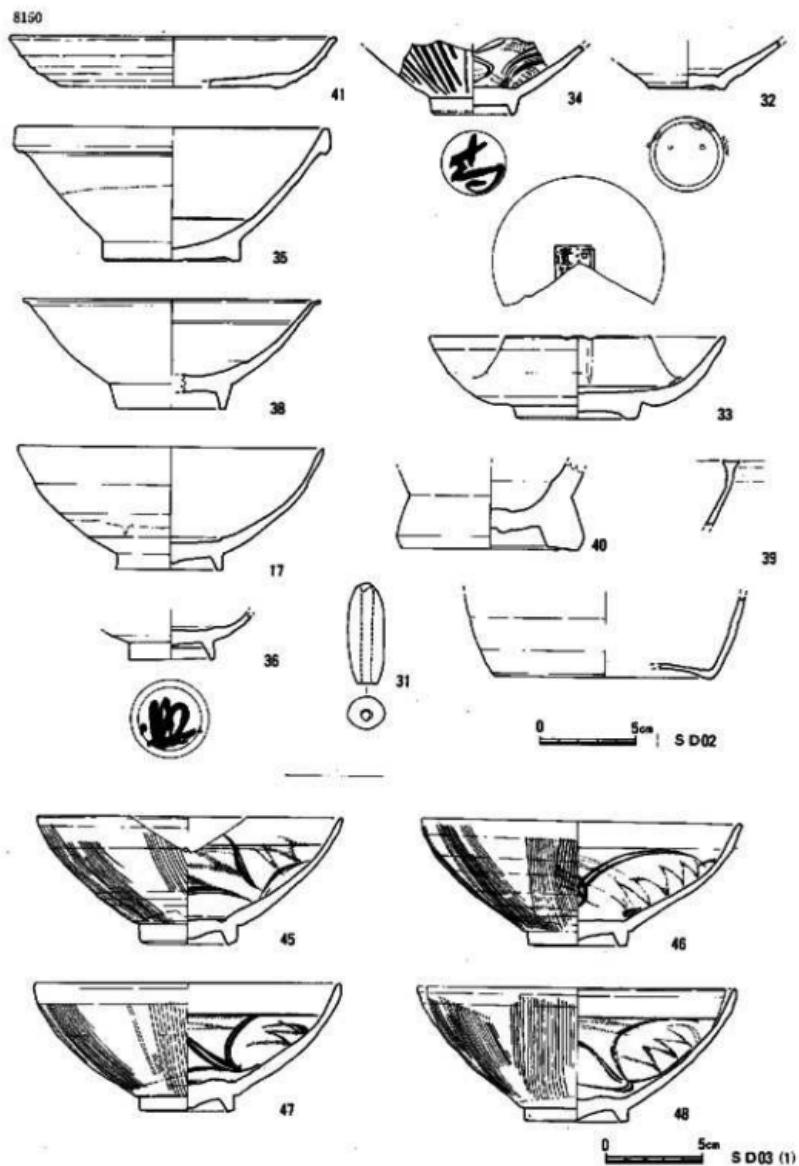


Fig.144 A出入口 SD02出土造物とSD03出土造物(1) (1/3)

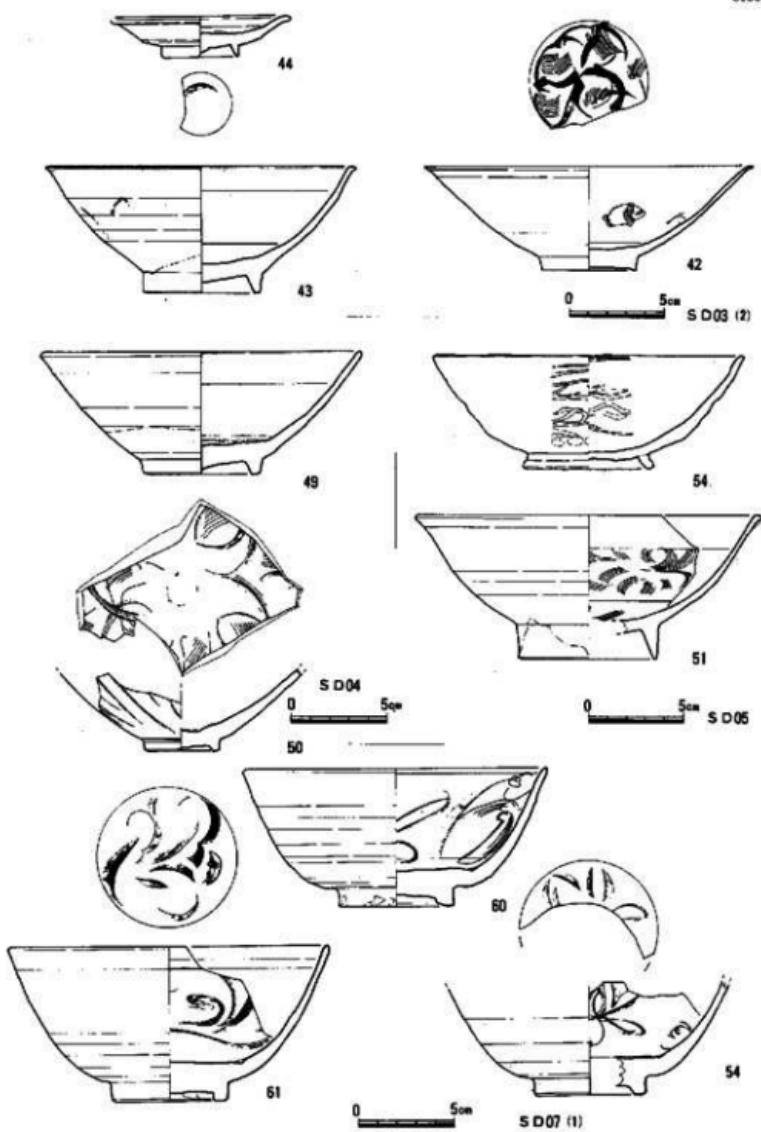
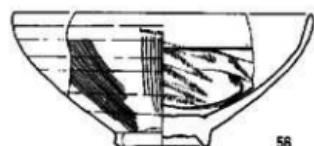


Fig.145 A出入口 SD03,SD04,SD05出土遺物とSD07出土遺物(1)(1/3)

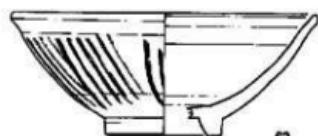
8150



56



57



62



58



55



63

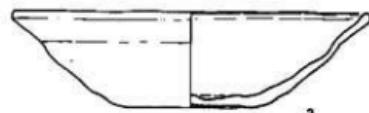


64

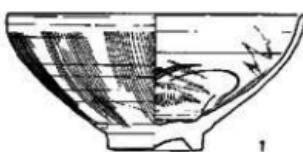


65

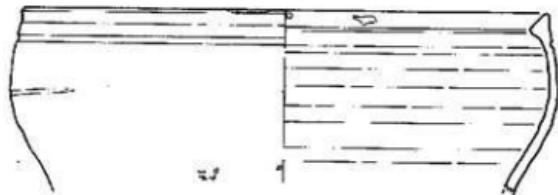
0 5cm SD07(2)



3



1



4

2

0 5cm SK01

Fig.146 A出入口 SD07出土遺物(2)とSK01出土遺物(1/3)

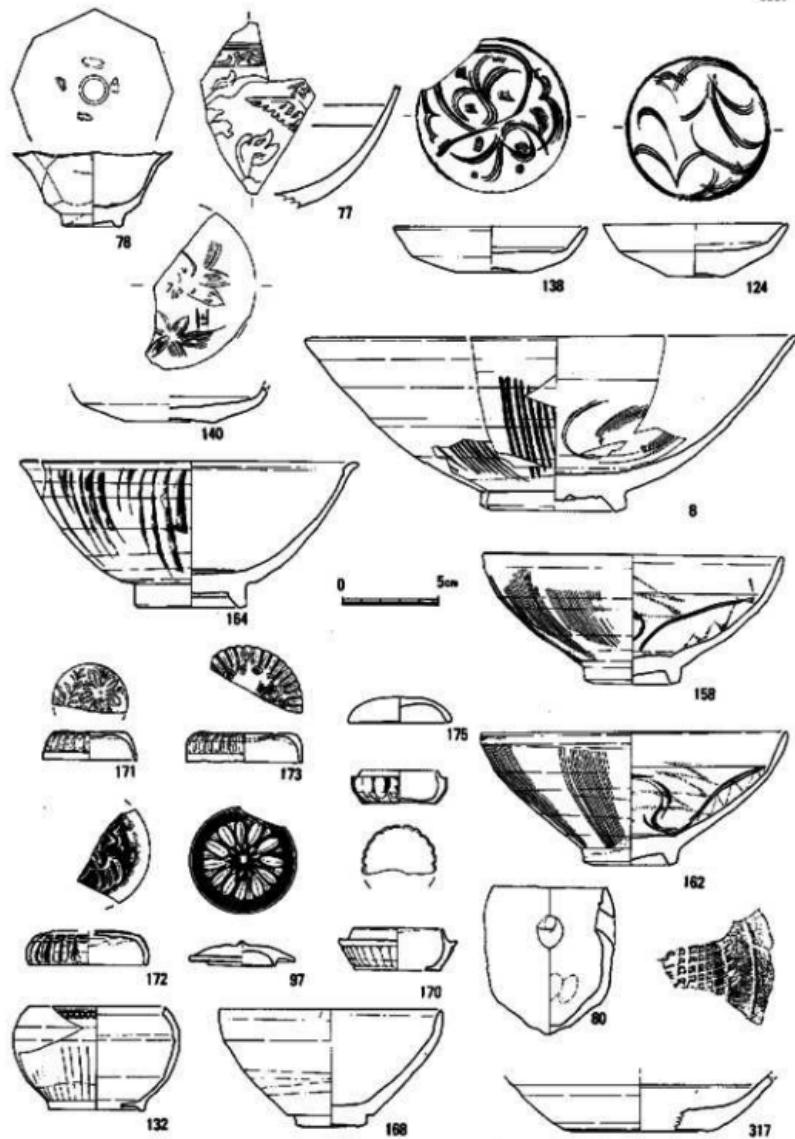


Fig.147 A出入口 造橋外出土遺物(1)(1/3)

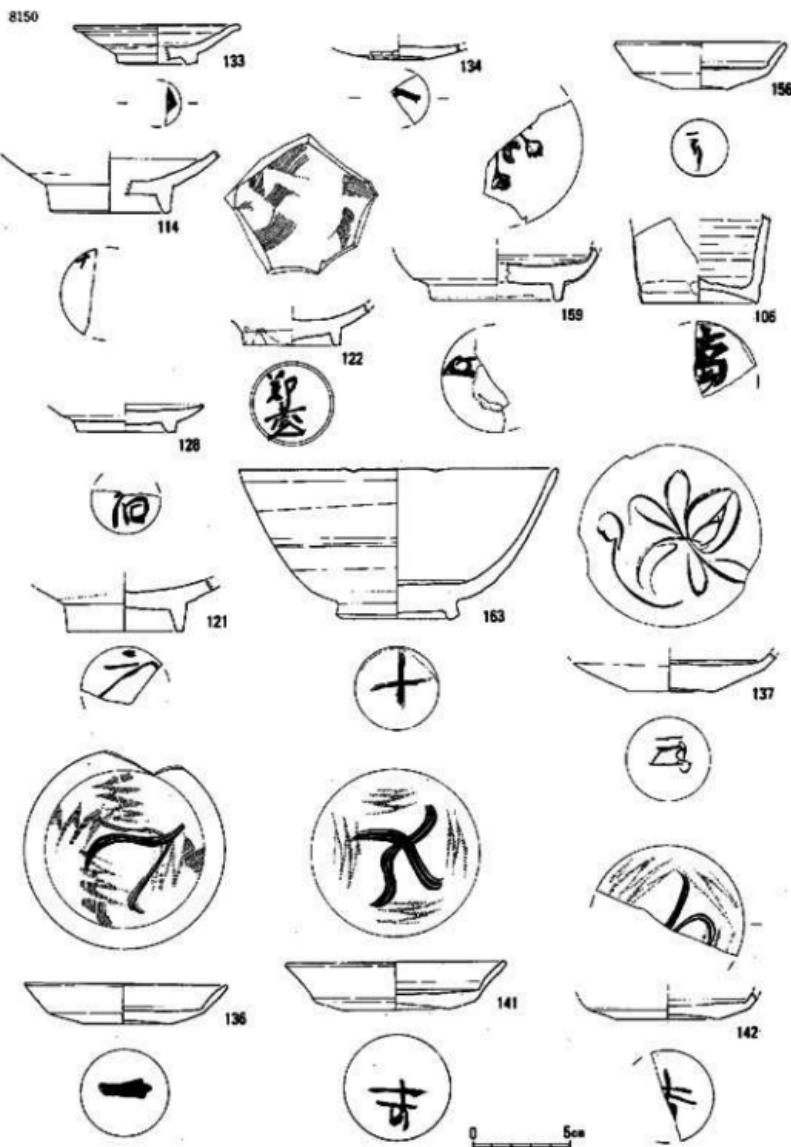


Fig.148 A 出入口 遷構外出土遺物(2) (1/3)

1.褐色砂層	粒子細かく粘性多少あり	8.茶褐色砂層	粒子細かく粘性なし
2.茶褐色砂層	粒子粗く粘性なし	9.黄褐色砂層	粒子粗く粘性なし
3.黄褐色砂層	粒子粗く粘性なし	10.茶褐色砂層	粒子粗く粘性なし 土器片含む
4.黄褐色砂層	粒子細かく粘性あり	11.茶褐色砂層	粒子細かく粘性あり カーボン層あり
5.暗褐色砂層	粒子細かく粘性あり	12.黄褐色砂層	粒子細かく粘性なし
6.黑褐色砂層	粒子細かく粘性あり	13.明茶褐色砂層	粒子細かく粘性あり カーボン層あり
7.黒褐色砂層	粒子細かく粘性あり カーボン片あり	14.茶褐色砂層	粒子細かく粘性あり
		15.暗褐色砂層	粒子細かく粘性多少あり カーボン、土器片含む

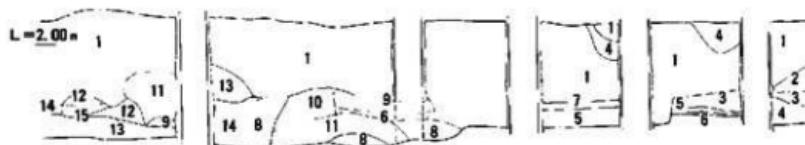


Fig.149 B出入り口土層図 (1/60)

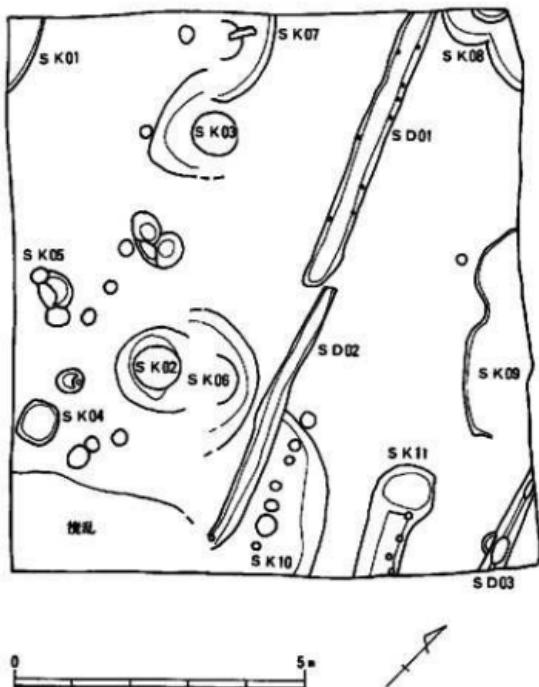


Fig.150 B出入り口造構全体図

8150

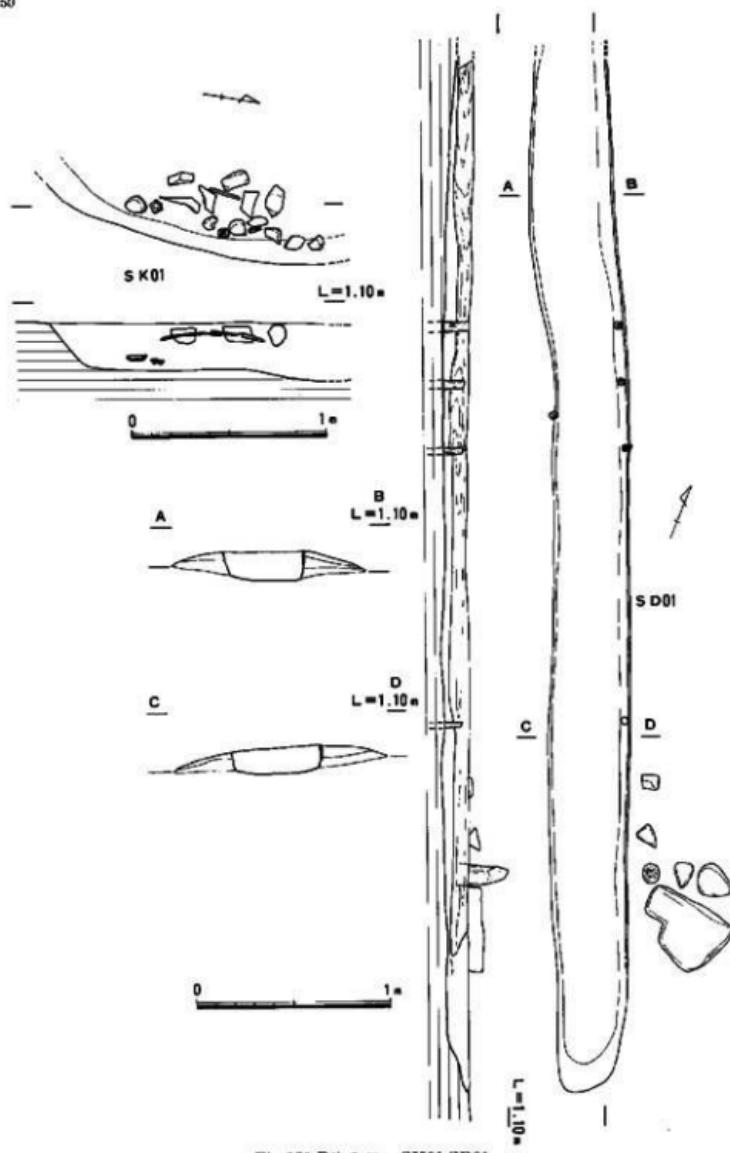


Fig.151 B出入口 SK01,SD01

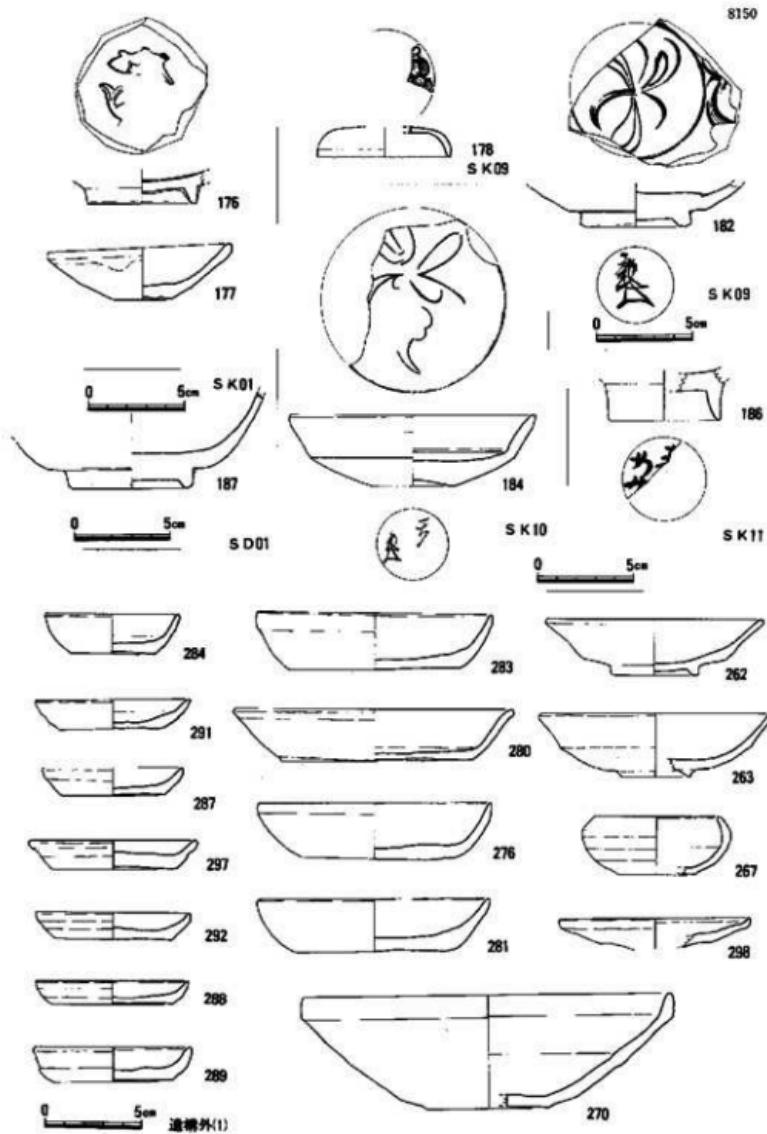


Fig.152 B出入口 SK01,SK09,SK10,SK11,SD01出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(I) (1/3)

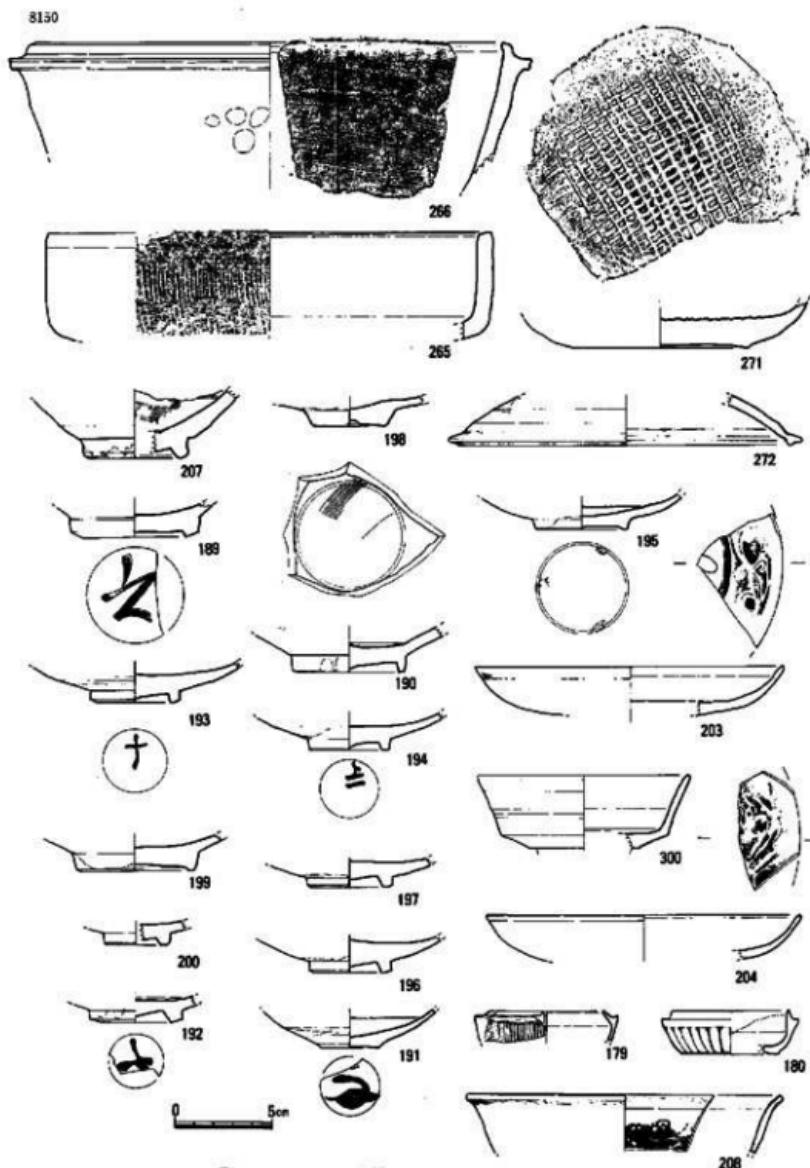


Fig.153 B出入口 造構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

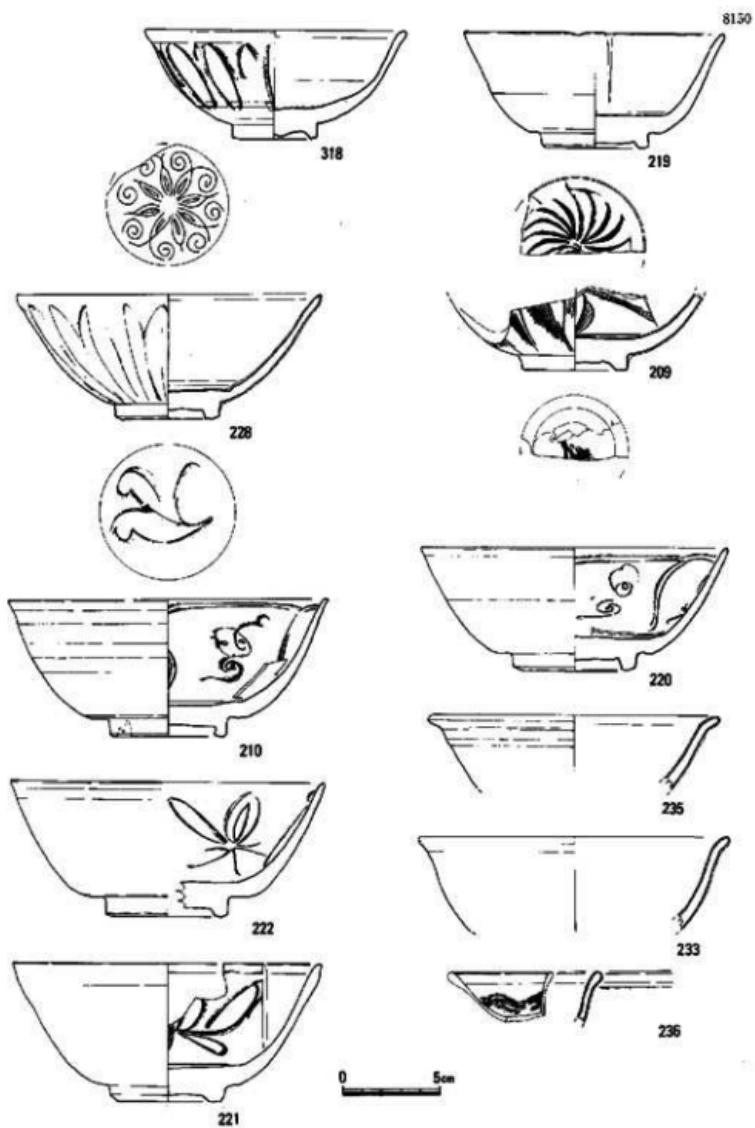


Fig.154 B出入口遺構外(包含層)出土遺物(3)(1/3)

8150

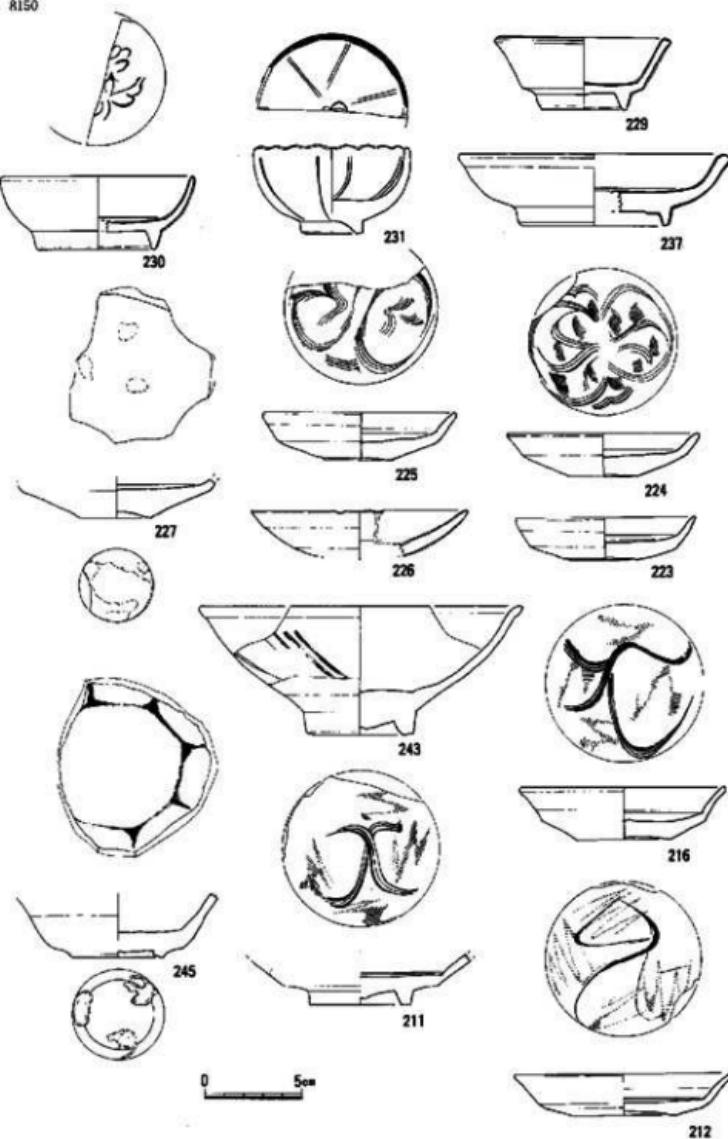


Fig.155 B出入口造構外(包含層)出土遺物(4)(1/3)

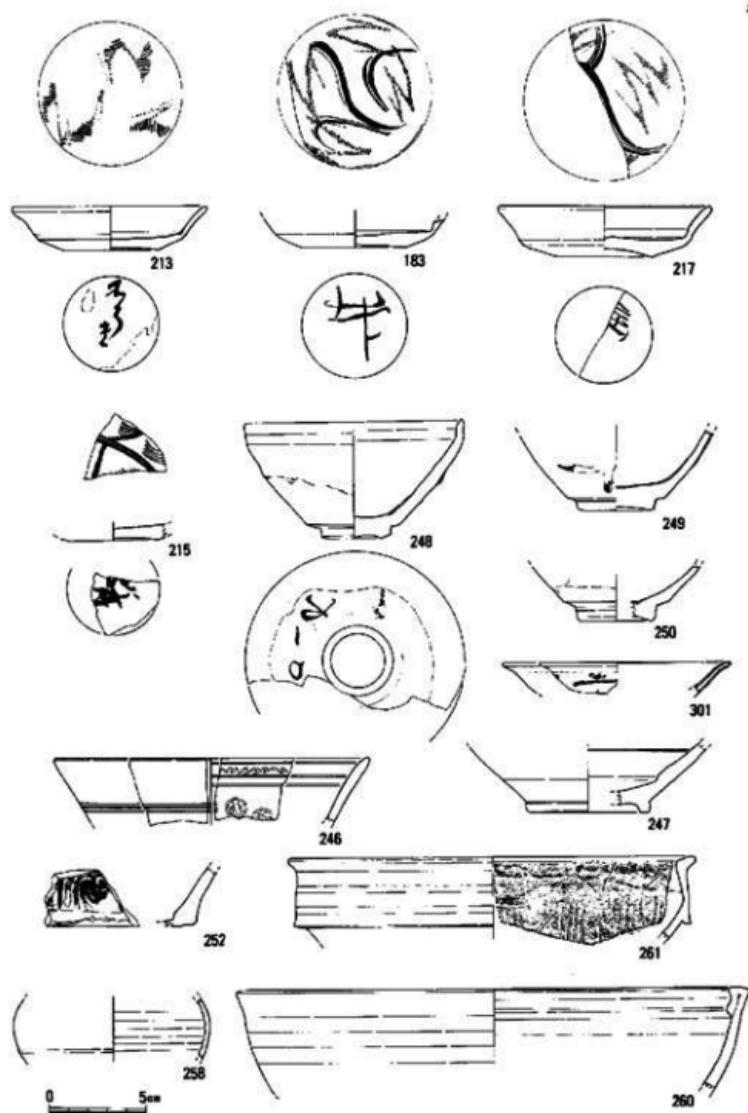


Fig.156 B出入口 造構外(包含層)出土遺物(5)(1/3)

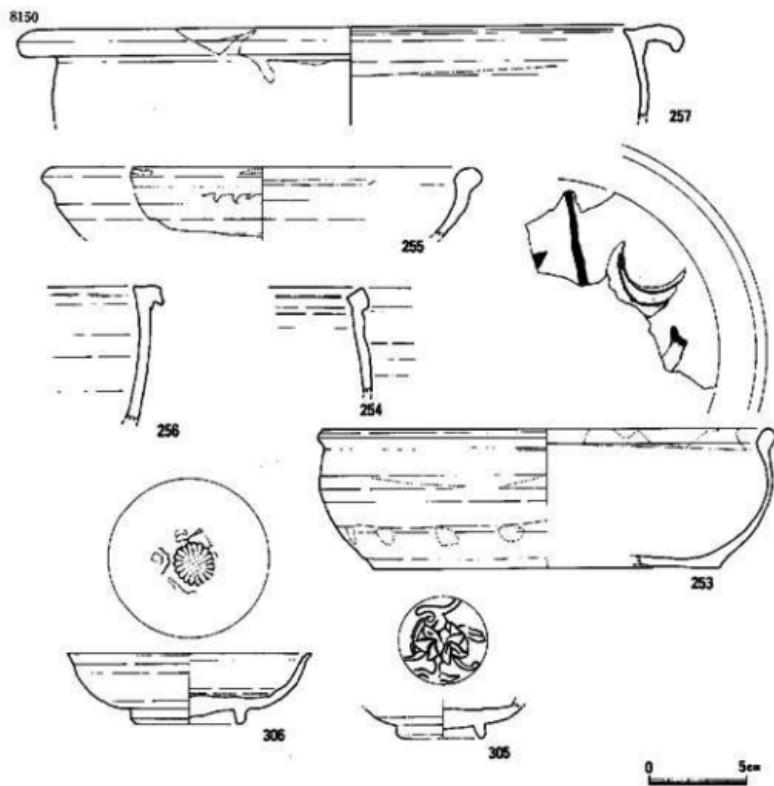


Fig.157 B出入口 這構外(包含層)出土遺物(6)(1/3)

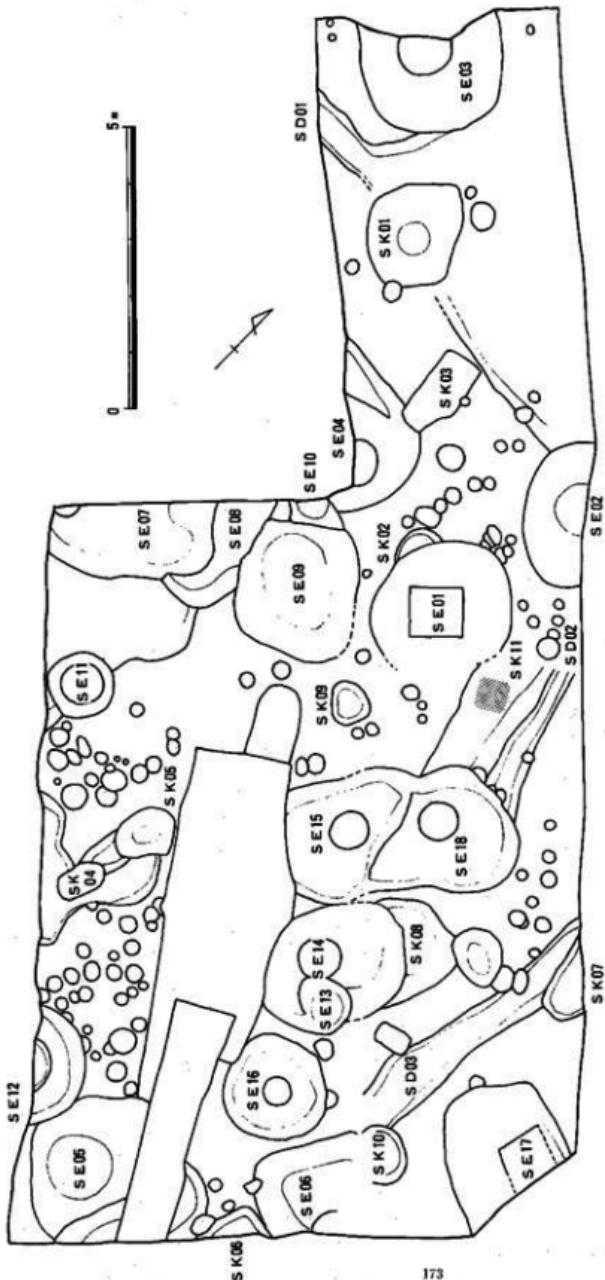


Fig.158 鳥取町T区C出入口造構全体図 (1/100)



- 1 対白色砂 (本施色彩ブロック壁、下端に黒色水波線)
- 2 灰色砂と灰褐色との互層 (水波層)
- 3 灰色砂と黄白色砂との互層 (水波層)
- 4 黄白色砂とうすい灰砂 (黄白色) (無彩色)

Fig.159 C出入口 西壁上部断面図 (1/60)

8150

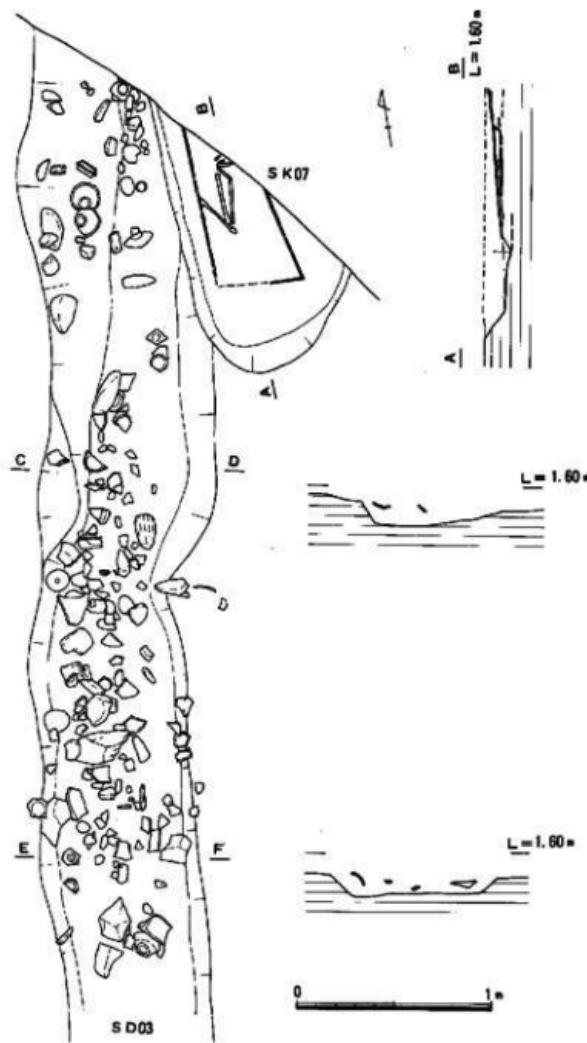


Fig.160 C出入口 SD03

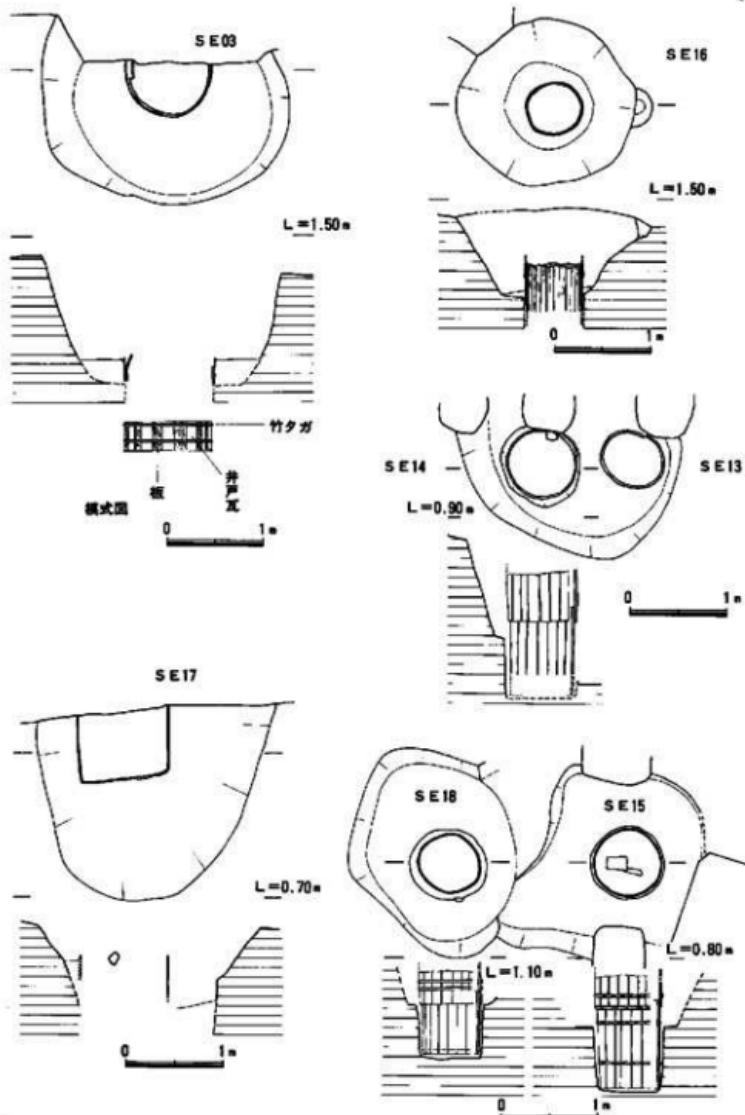


Fig.161 C 出入り口 SE03,SE13,SE14,SE15,SE16,SE17,SE18

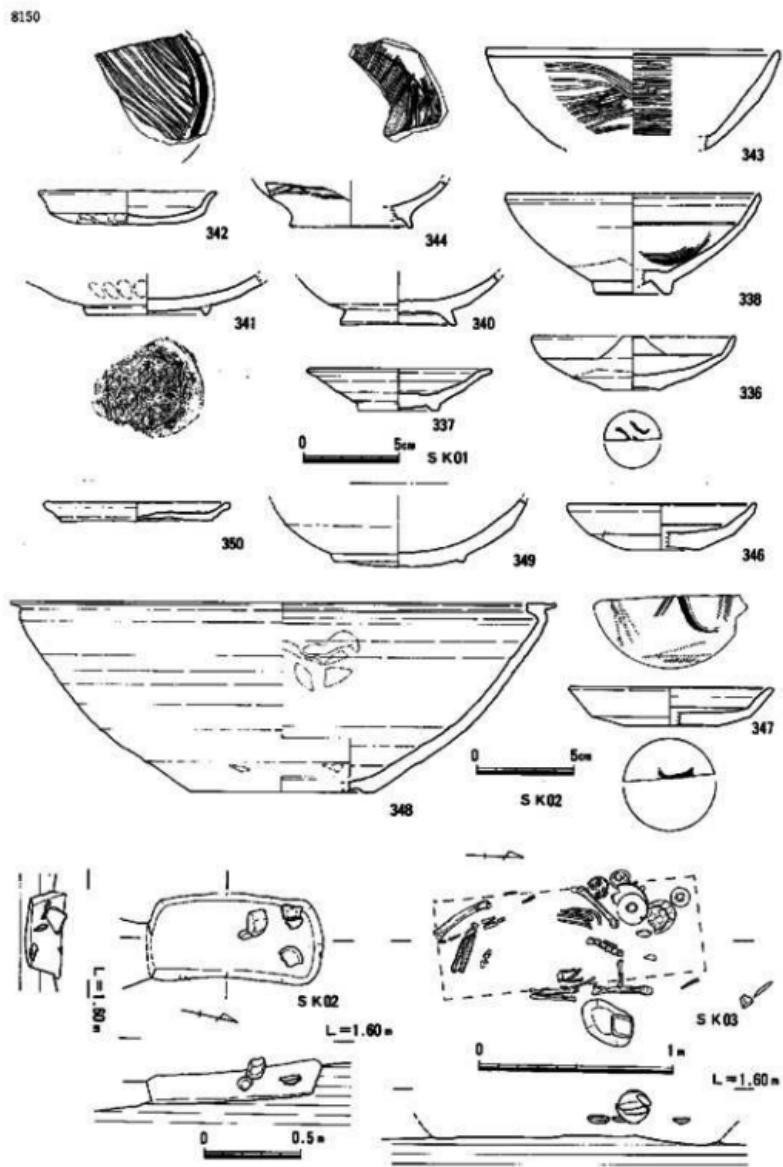


Fig.162 C出入口 SK02,SK03とSK01,SK02出上遺物(1/3)

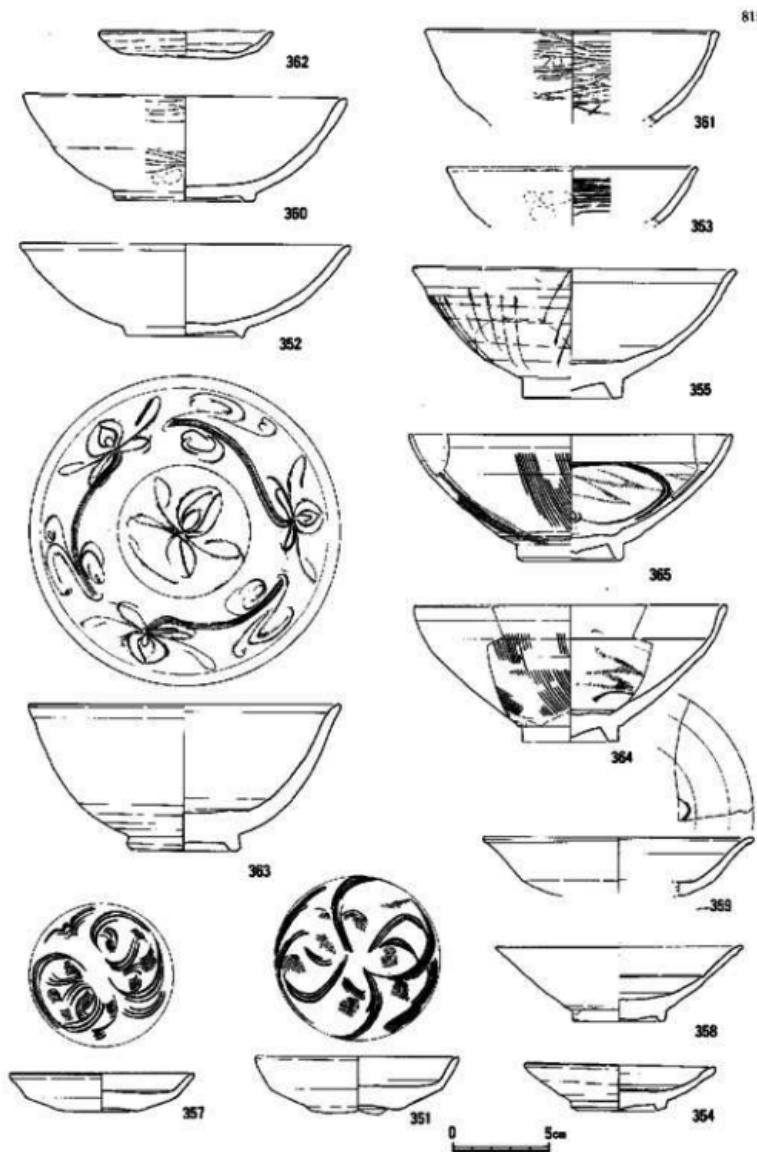


Fig.163 C 出入口 SK03出土遺物(1/3)

8150

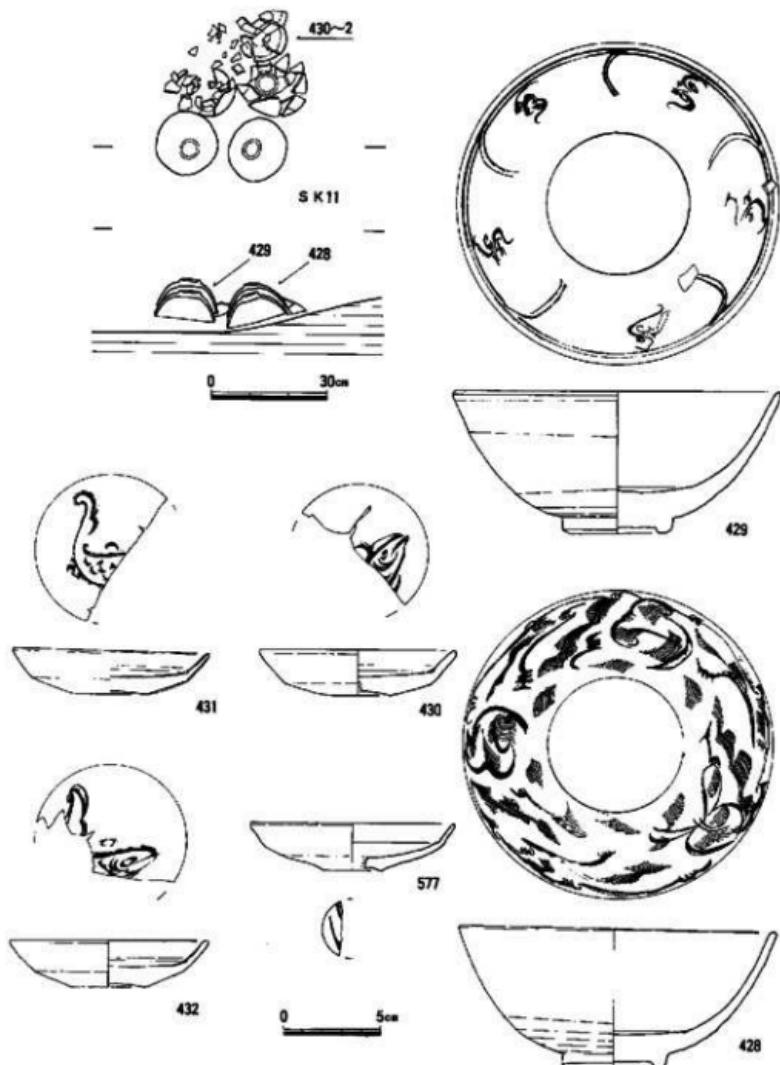


Fig.164 C 出入口 SK11と出土遺物(1/3)

8130

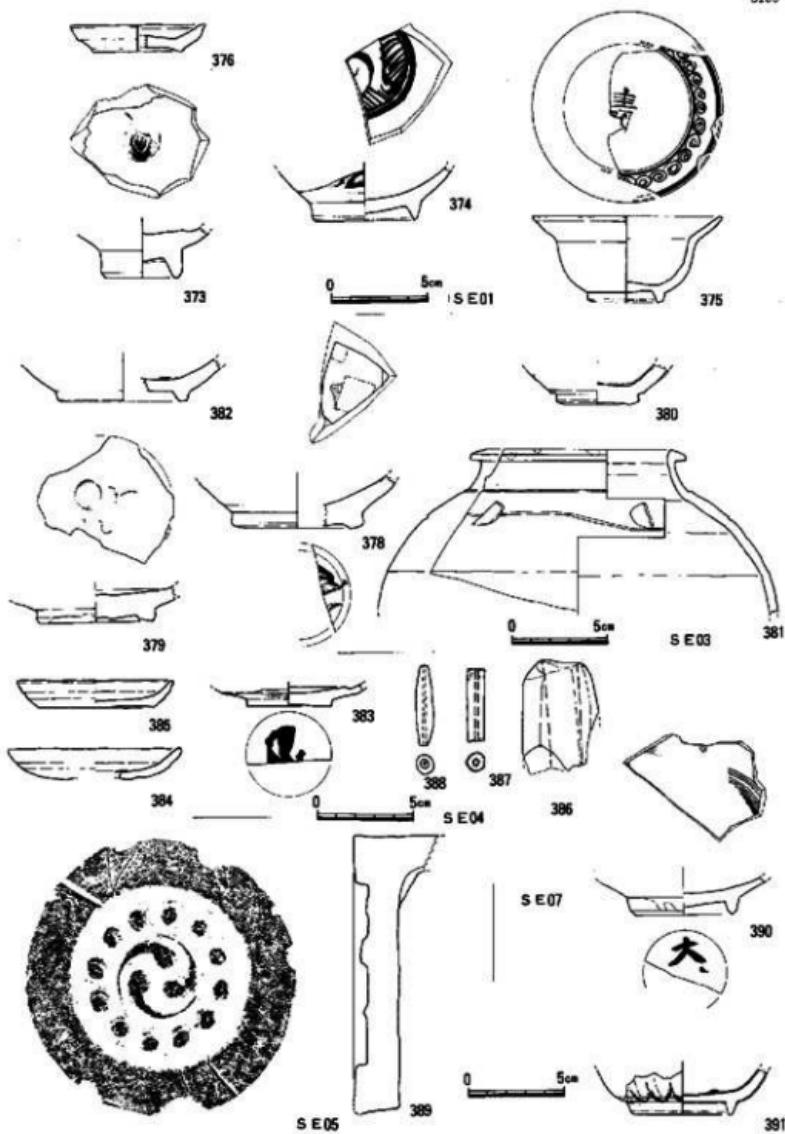


Fig.165 C出入口 SE01,SE03,SE04,SE05,SE07出土遺物(1/3)

8150

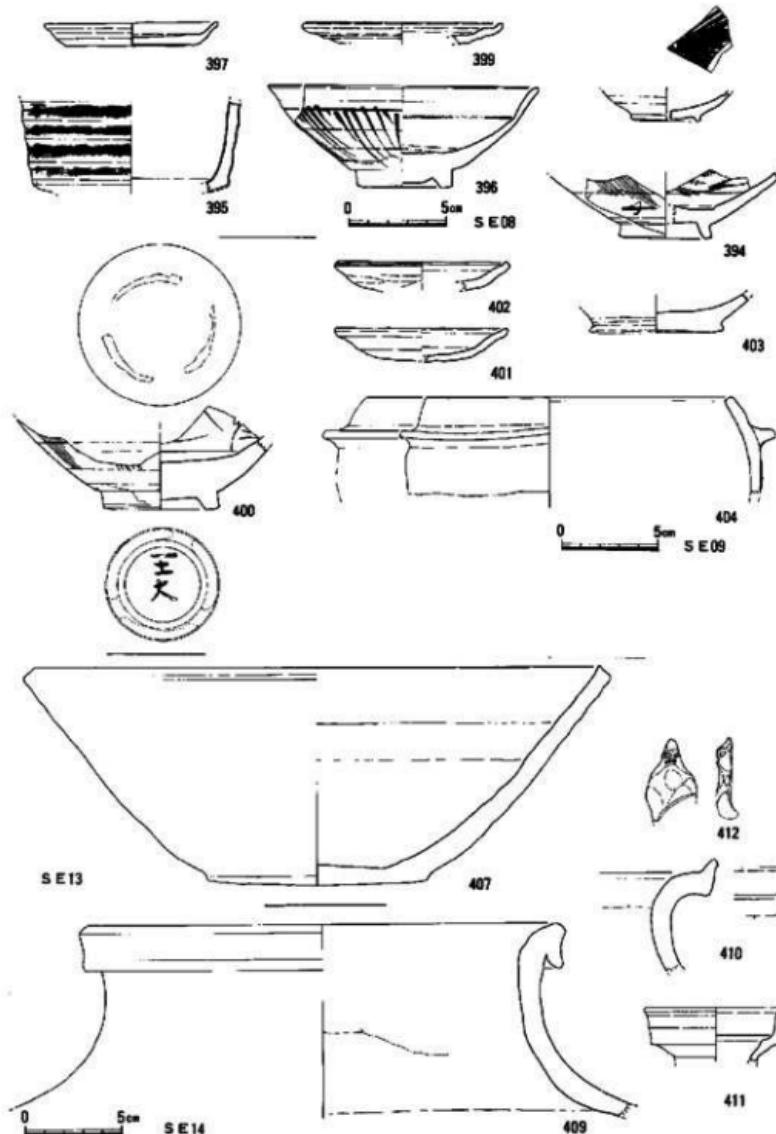


Fig.166 C 出入口 SE08,SE09,SE13,SE14出土遺物(1/3)

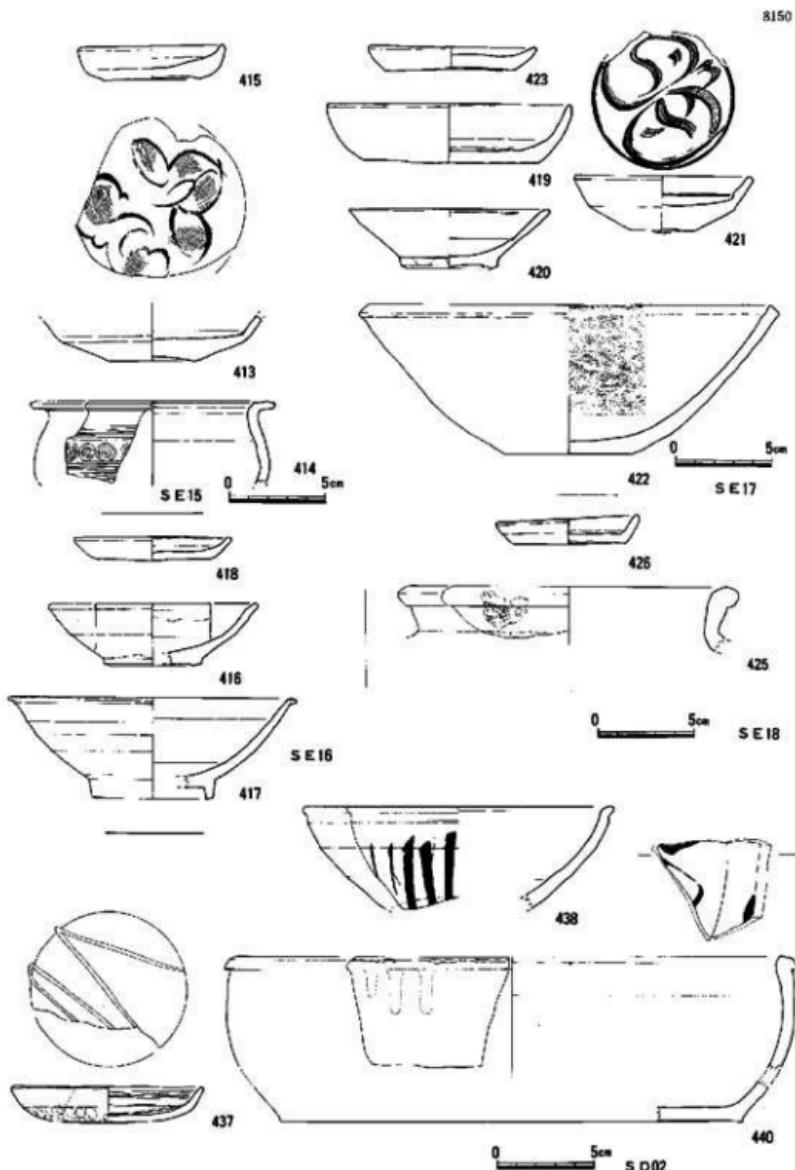


Fig.167 C 出入口 SE15,SE16,SE17,SE18,SD02出土遺物(1/3)

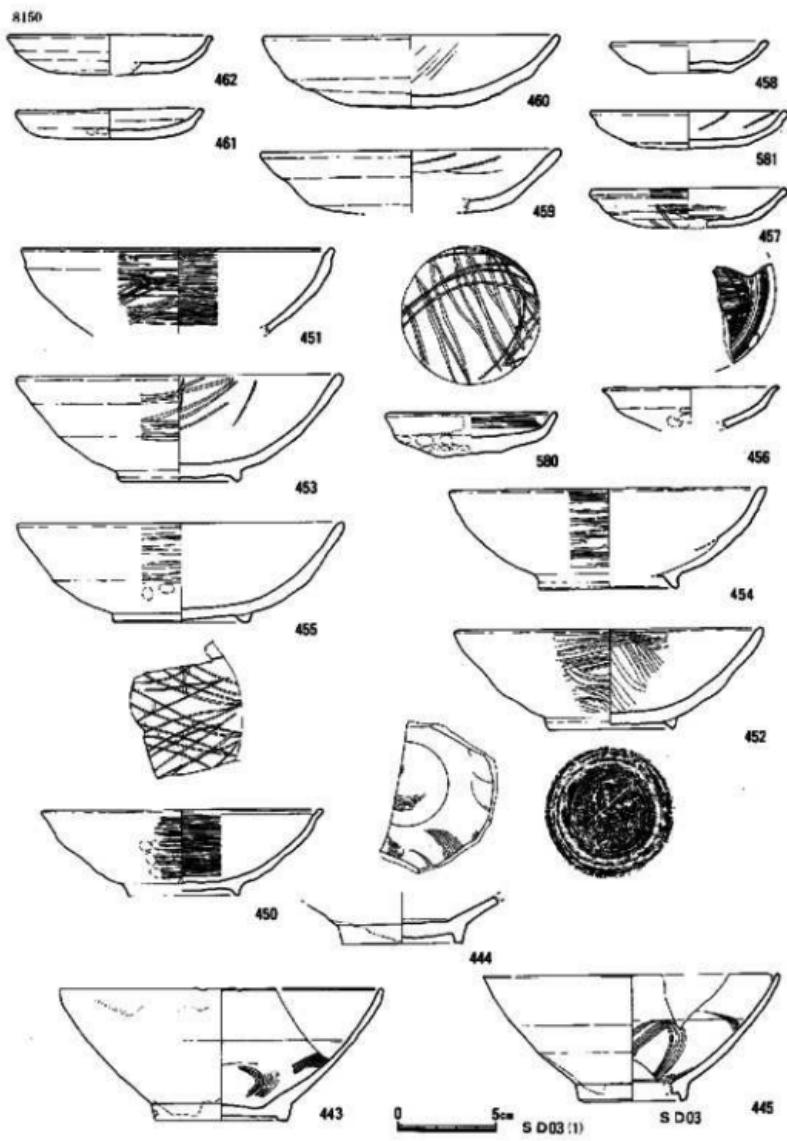


Fig.168 C 出入口 SD03出土遺物(1)(1/3)

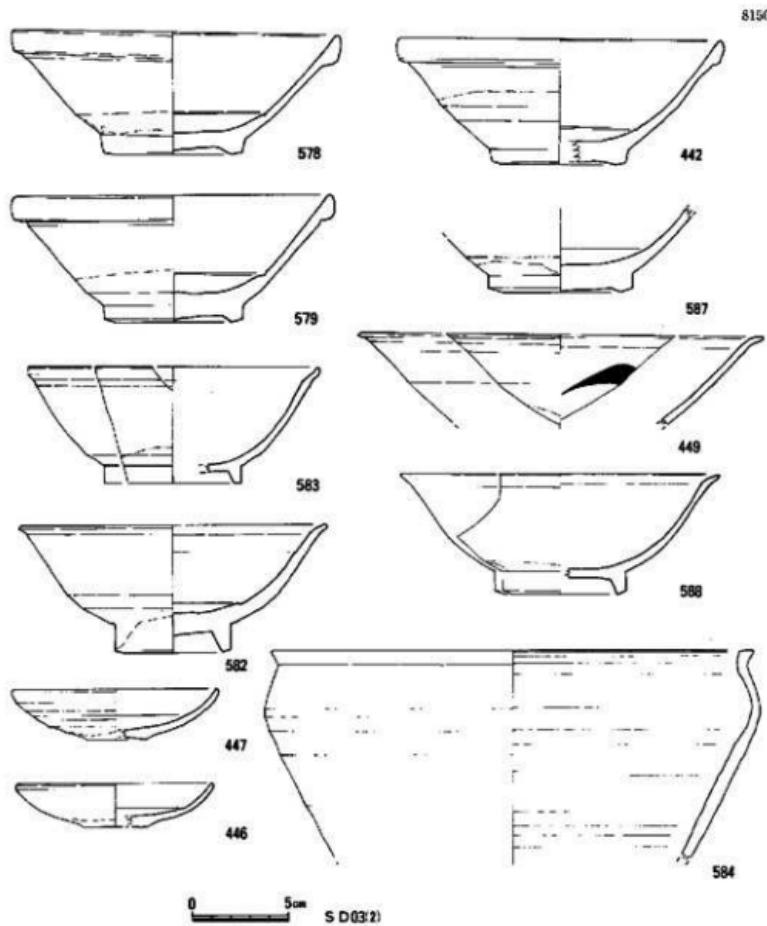


Fig.169 C出入口 SD03出土遺物(2)(1/3)

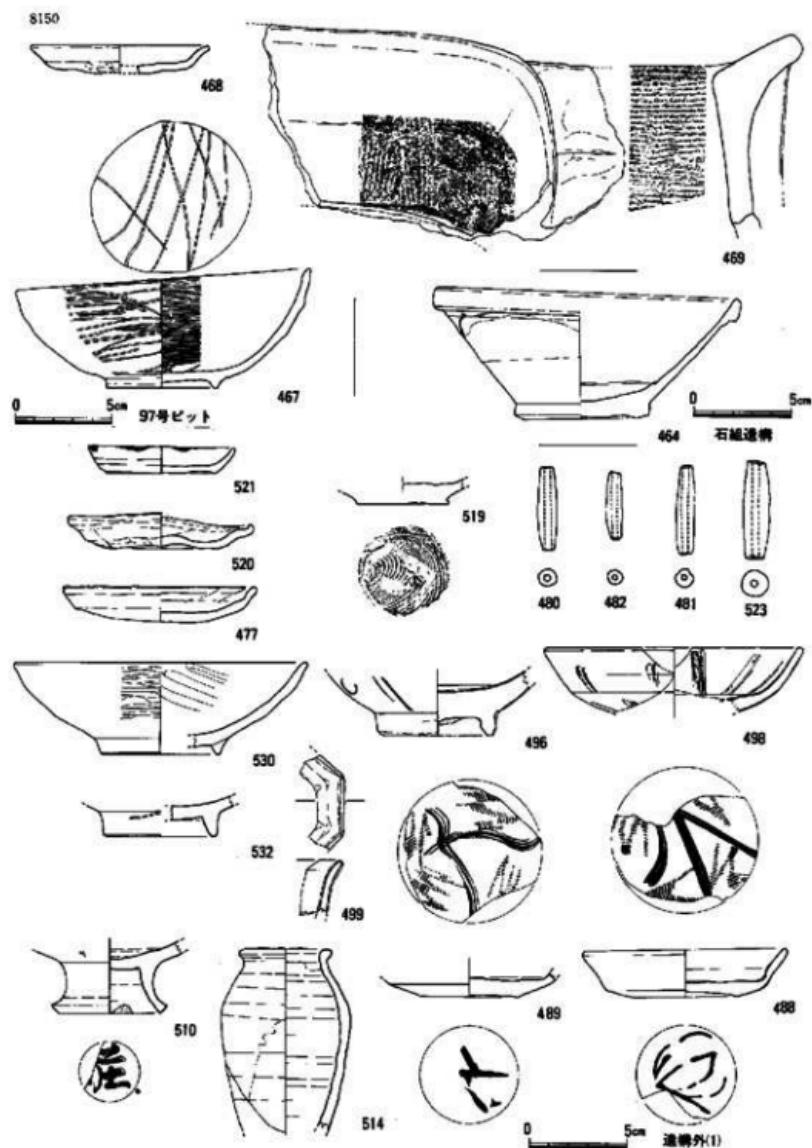


Fig.170 C 出入口 97号ビット、石組造構出土遺物と造構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

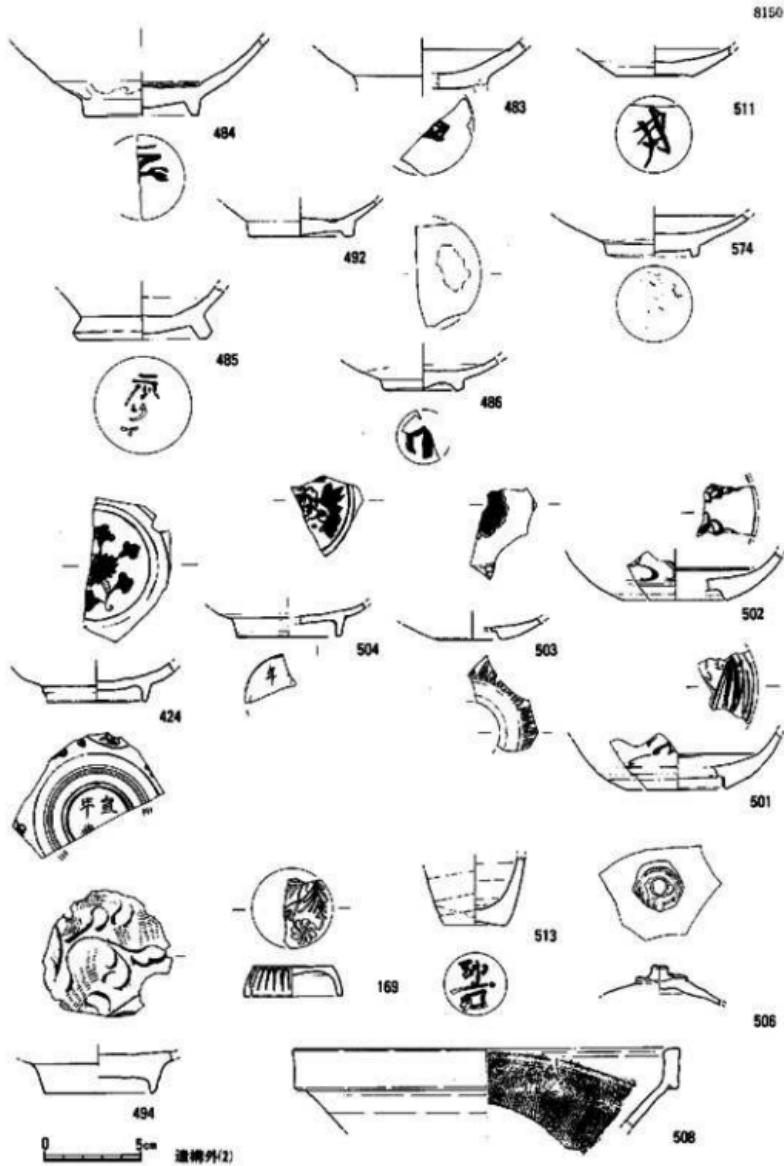


Fig.171 C 出入口 遺構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

8150

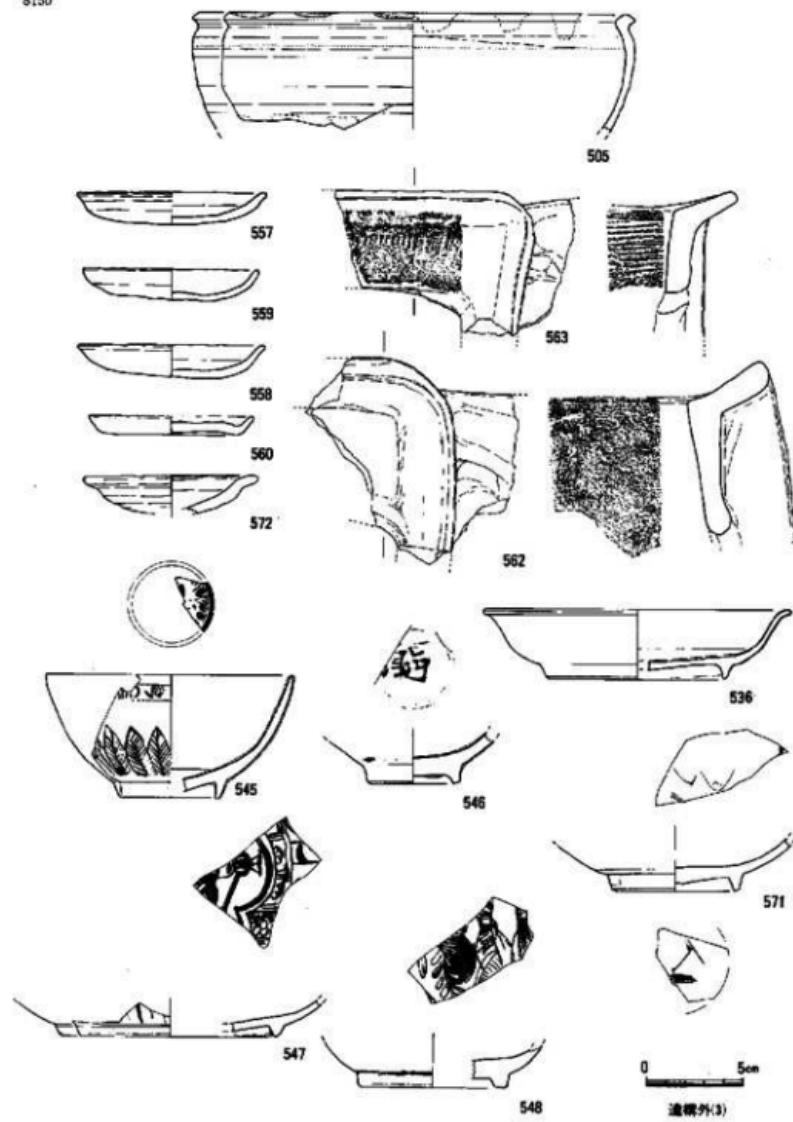


Fig.172 C 出入口 造構外(包含層, 損亂)出土遺物(3)(1/3)

8150

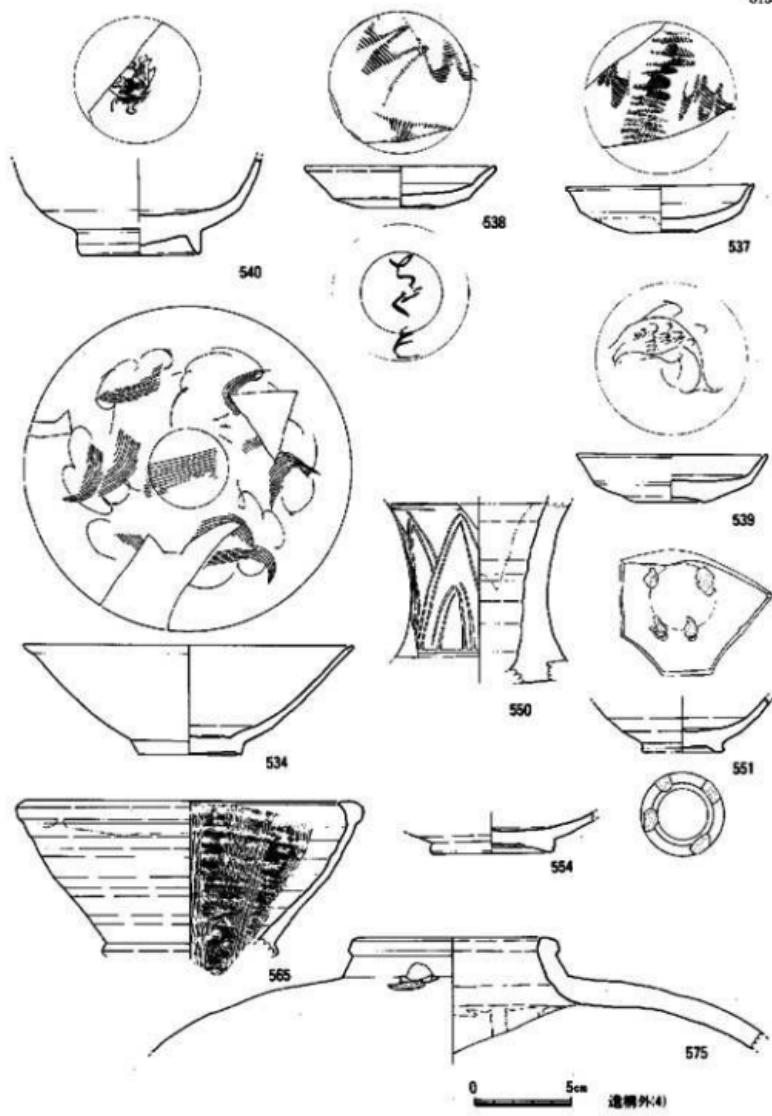


Fig.173 C 出入口 造構外(搅乱)出土遺物(4)(1/3)

呉服町工区出入口主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	A 区出入口 SK01	青磁	碗
2		陶器	鉢
3		須恵器	鉢
4	ピット切込包 含層	青磁	碗
5		↓	皿
6		青白磁	碗
7		白磁	高台付皿
8		青磁	鉢
9		瓦器	碗
10		↓	皿
11		土師器	
12			
13			
14			
15			
16	SD01	↓	↓
17		白磁	碗
18			↓
19		↓	皿
20		青磁	碗
21		青磁	碗
22			小碗
23			碗
24			
25		↓	↓
26		↓	皿
27		瓦器	碗
28		↓	↓
29		土師器	皿
30		↓	↓
31	SD02	土師質	土鏡
32		青磁	小碗
33			高台付皿
34		↓	小碗
35		白磁	碗
36			
37			
38		↓	↓
39		陶器	小盤
40		↓	底部
41		土師器	皿
42	SD03	青白磁	碗
43		白磁	↓
44		↓	高台付皿
45		青磁	碗
46			
47			
48		↓	↓
49	SD04	白磁	↓
50	↓	青磁	小碗
51	SD05	白磁	碗
52		↓	平底皿
53		瓦器	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
54	↓		高台付皿
55	SD07	白磁	高台付皿
56		青磁	碗
57			↓
58			小碗
59			碗
60		↓	↓
61		青磁	碗
62		↓	↓
63		陶器	小口瓶
64			蓋
65		↓	長瓶
66	包含層	青磁	碗
67		白磁	小蓋
68		青磁	
69		白磁	碗
70		青磁	
71			
72			
73		↓	
74		馬蹄形	↓
75		土師器	高台付碗
76	↓	↓	皿
77		白磁	碗
78	↓	八角杯	
79		陶器	四耳付長壺
80		土師質	たこ蓋
81		土師器	皿
82			
83		↓	
84		白磁	碗
85	↓		極厚タイプ腰折皿
86		青磁	小碗
87		繩付	碗
88		青白磁	
89		白磁	↓
90			皿
91		↓	平底皿
92		青磁	碗
93	↓		小鉢
94		土師器	皿
95		青磁	小碗
96		↓	碗
97		青白磁	蓋
98		白磁	平底皿
99		↓	碗
100		土師質	たこ蓋
101	A 区出入口 包含層	土師質	土鏡
102		土師器	皿
103			↓
104			碗
105		↓	皿
106		陶器	小口瓶

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
107		白磁	小碗
108		青磁	鉢
109		陶器	壺
110		土師質	火鉢
111	↓	土師器	皿
112		陶器	壺
113		青磁	↓
114		白磁	碗
115		青白磁	皿
116		土師器	碗
117	↓	↓	↓
118		白磁	平底皿
119		白磁	皿
121		白磁	碗
122			↓
123	↓	口ハゲ皿	
124		青磁	平底皿
125		陶器	四耳壺
126	↓	春	
127	↓	土師器	皿
128	第一遺構面	白磁	高台付皿
129		青磁	碗
130	↓	↓	↓
131		白磁	高台付皿
132	泥炭状土層	青白磁	小壺
133		白磁	高台付皿
134	↓	↓	平底皿
135		青白磁	小碗
136		青磁	皿
137			
138			
139	↓	土師器	↓
140	泥炭状土層(上)	白磁	平底皿
141		青磁	平底皿
142			↓
143	↓	つば皿	
144		陶器	四耳壺
145	↓	盤	
146		土師器	皿
147			
148	↓	↓	↓
149	泥炭状土層(下)	青磁	碗
150		陶器	壺
151	↓	↓	鉢
152	包含層(上)	青白磁	碗
153		白磁	鉢
154			不明小片
155			平底皿
156		青磁	↓
157			小碗
158	↓		碗
159	包含層		皿
160	包含層(上)		碗
161	↓	陶器	盤
162	包含層(下)	青磁	碗
163			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
164			↓
165	↓	陶器	壺
166	包含層	青磁	碗
167	↓	↓	↓
168	↓	黒褐色	↓
169	C区出入口包 含層	青白磁	蓋
170	A区出入口		身
171			蓋
172			↓
173			↓
174			身
175			蓋
176	B区出入口 SK01	青磁	碗
177	↓	陶器	皿
178	SK10	青白磁	蓋
179	SK10		身
180	↓	↓	↓
181	SK09	白磁	碗
182	↓	青磁	↓
183	SK10		皿
184	↓	↓	平底皿
185	SK11	青白磁	壺
186	↓	白磁	碗
187	SD01	青磁	↓
188	↓	↓	香炉の脚
189	包含層	白磁	碗
190			↓
191			平底皿
192			高台付皿
193			皿
194			
195			
196			
197			
198			↓
199			碗
200			小片
201			
202			↓
203			皿
204			
205			↓
206			水注
207	↓		碗
208		青白磁	
209		青磁	
210			↓
211			高台付皿
212			平底皿
213			
214			
215			
216			
217			
218			↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
219			碗
220		↓	↓
221		青磁	碗
222			↓
223			平底皿
224			
225			
226			
227			↓
228			碗
229			小鉢
230			↓
231			小杯
232			碗
233			
234			
235			
236			↓
237			高台付皿
238			香炉
239			
240			↓
241	青磁	小片	
242		香炉	
243			碗
244			瓶
245			八角小杯
246		粉青沙器	碗
247		↓	
248		黑褐釉	
249			
250		↓	
251	陶器	盤	
252		型物	
253		盤	
254			
255			
256			
257			
258			茶入れ
259			↓
260			鉢
261		↓	すり鉢
262	土師器	高台付皿	
263			↓
264			碗
265	土師質	鍋	
266			↓
267			小鉢
268			土瓶
269			↓
270		須恵質	鉢
271		陶器	おろし皿
272			蓋
273		↓	小片
274	土師質	瓦玉	

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
275		-	円盤
276		土師器	皿
277			↓
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295			
296			
297			
298			↓
299			耳皿
300		白磁	板府型皿
301	↓	染付	皿
302	表土層	白磁	
303			↓
304			碗
305		↓	高台付皿
306		青磁	↓
307		染付	瓶
308		↓	皿
309		土師器	
310			
311			
312			
313			↓
314	A区出入口包 含層	青磁	碗
315			
316		↓	
317	泥炭状土層(上)	陶器	おろし皿
318	B区出入口包 含層	青磁	碗
319	A区出入口	石製品	石鍬
320			
321			
322			↓
323	SD01		砥石
324			石鍬
325			↓
326			
327	SD02		碗
328			小石鍋

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
329			滑石錐
330			
331			
332			↓
333			鉛止石錐
334	↓		滑石製品
335	SD04	↓	石錐
336	C区出入口 SK01	白磁	平底皿
337		↓	高台付皿
338		青磁	小碗
339		陶器	壺
340		土師器	壺
341		瓦器	輪
342			皿
343			壺
344			↓
345		磁器	不明片
346	SK02	白磁	平底皿
347		青磁	↓
348		陶器	鉢
349		瓦器	壺
350		土師器	皿
351	C区出入口 SK02	青磁	平底皿
352		瓦器	壺
353		↓	↓
354		白磁	高台付皿
355		青磁	輪
356			↓
357			平底皿
358		白磁	高台付皿
359		青磁	↓
360		瓦器	壺
361		↓	↓
362		土師器	皿
363	SK02 基	青磁	碗
364	SK03 基		
365	↓		
366	SK06	瓦器	↓
367	SK07 (木棺墓)	染付	壺
368	SK08	白磁	碗
369	SK09	青磁	高台付皿
370		須恵器	壺
371		瓦器	壺
372		土師器	たこ壺
373	SE01	青磁	碗
374		染付	↓
375		↓	小鉢
376		土師器	皿
377	SE02	染付	↓
378	SE03	白磁	碗
379	SE03	青磁	↑
380	↓	黑褐色	↓
381	SE03 内	陶器	四耳壺
382	SE03 外	青磁	碗
383	SE04	白磁	皿

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
384		土師器	
385		↓	
386		土師質	上鍵
387			↓
388		↓	
389	SE05	瓦	瓦当
390	SE07 圓方	白磁	碗
391		青磁	小鉢
392		陶器	不明小片
393	SE08	青白磁	皿
394		青磁	碗
395			香炉
396		↓	碗
397		土師器	皿
398		土師質	たこ壺
399		土師器	皿
400	SE09	青磁	碗
401		土師器	皿
402			↓
403		↓	不明
404		土師質	羽釜
405			たこ壺
406		↓	
407	SE13	須恵質	鉢
408	SE14	青磁	皿
409		陶器	壺
410			↓
411		↓	壺
412		土製品	玩具か
413	SE15	青磁	平底皿
414		粉青沙器か	壺か
415		土師器	皿
416	SE16	白磁	高台付皿
417		↓	碗
418		土師器	皿
419	SE17 (内)	↓	↓
420	SE17	白磁	高台付皿
421		青磁	平底皿
422		須恵質	鉢
423		土師器	皿
424	包含層	染付	碗
425	SE18	陶器	壺
426	↓	土師器	皿
427	SK11	青磁	碗
428			
429			
430			平底皿
431			
432			
433			碗
434			
435			
436			
437	SO02 (上)	瓦器	皿
438	↓	青磁	碗
439	SD02 (下)	陶器	盤

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
440			
441			↓
442	SD03	白磁	碗
443			↓
444			↓
445			↓
446			平底皿
447			↓
448			甌
449			鉢
450		瓦器	碗
451	SD03	瓦器	碗
452			↓
453			↓
454			↓
455			↓
456			皿
457			↓
458		模擬實	小皿
459		土師器	丸底杯
460			↓
461		土師器	皿
462			↓
463		土師質	土鍤
464	石組遺構土器-1	白磁	碗
465	ピット12	土師器	皿
466	ピット56	↓	↓
467	ピット97	瓦器	碗
468		土師器	皿
469		土師質	かまと
470	包含層	上部器	皿
471			↓
472			↓
473	包含層(上)		丸底杯
474	包含層	土師質	三脚付上鍤
475		瓦器	皿
476		黑色土器	
477		土師器	
478	包含層(上)	瓦器	↓
479	包含層	↓	碗
480		土師質	土鍤
481			↓
483			↓
483		白磁	碗
484			↓
485			甌
486			高台付皿
487			平底皿
488		青磁	
489			↓
490			↓
491	包含層(上)	白磁	碗
492	包含層		↓
493			皿
494		青白磁	碗
495		磁器	不明片

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
496		青磁	碗
497			↓
498			皿
499			八角の類
500		染付	碗
501			↓
502			↓
503			↓
504			碗
505		陶器	盤
506			蓋
507			甌
508			すり鉢
509			鉢
510	包含層(下)	青磁	台付小肴か
511		白磁	平底皿
512		染付	皿
513		陶器	小瓶
514			↓
515			盤
516			↓
517			↓
518			↓
519	包含層	土師器	不明
520	↓	↓	皿
521	包含層(下)	土師器	皿
522			↓
523		土師質	丸底皿
524			↓
525	包含層(最下層)		↓
526	包含層(下)	瓦器	碗
527			↓
528			↓
529			↓
530			↓
531			↓
532			↓
533			↓
534	攪乱	青白磁	碗
535			↓
536		白磁	皿
537		青磁	平底皿
538			↓
539			↓
540			↓
541			碗
542			盤
543			瓶
544			小壺
545		染付	碗
546			↓
547			皿
548			↓
549		三彩陶器	不明
550		象嵌粉青沙器	梅瓶
551		陶器	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
552			大甕
553			四耳甕
554			碗
555			↓
556		土師器	皿
557			
558			
559			
560			↓
561		土器質	土器
562			かまど
563			↓
564			瓦
565		陶器	すり鉢
566			おろし皿
567			壺
568			↓
569			↓
570	↓		すり鉢
571	耕土中	白磁	瓶
572	*	土師器	皿
573	現代擾乱	↓	↓
574	溝下包含層	白磁	高台付皿
575	耕土中	陶器	四耳甕
576	*	↓	↓
577	SK11	白磁	平底皿
578	SD03		碗
579			↓
580		瓦器	皿
581		黒色土器	皿
582		白磁	碗
583		↓	↓
584		陶器	鉢
585	SE05	象嵌粉青沙器	碗
586	東側セクション下層	土師器	皿
587	SD03	白磁	碗
588		↓	↓
589		土器質	かまど
590	区不明	陶器	鉢
591	↓	須恵器	瓶の頸
592	A 区出入口 SD07	石製品	石錐
593	不明 1		磁石
594	↓		円盤
595	不明 3		石錐
596	不明 4		青石擦鉢
597	不明10		石錐
598	不明22		石玉
599	泥炭状土層		磁石
600	↓		小石錐
601	A 区出入口包含層(上)		磁石
602			石錐
603	↓		磁石
604	ピット 9		↓
605	SK01		石錐

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
606	B 区出入口包含層		磁石
607			↓
608			磁石
609			
610			
611			
612			
613			
614			
615			
616			
617			
618			↓
619			鏡
620			石玉
621			↓
622			滑石製錬
623			
624			
625			
626			
627			石錐
628			石錐の再加T品
629			
630			
631			↓ 個
632			↓ 体
633			磁石
634			焼けた壁土
635			↓
636			石製品
637			↓
638			石玉
639	C 区出入口 SK01		滑石製錬
640	SK02		石錐
641	SE06		石製品
642			↓
643	SE09		磁石
644	*		石錐
645	SE18		↓
646	SD03		滑石錐
647			
648			
649			
650			
651			
652			
653			粘板岩錐
654			石錐
655			加工ある砂岩
656			石錐
657			包含層
658			石玉
659			↓
660			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
661			
662			
663			
664			
665		磁石	
666		石錐	
667		↓	
668		滑石錐	
669			
670			↓
671	↓		石錐
672		包含層(下)	石玉

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
673			石錐片
674			滑石錐
675			
676			↓
677			滑石円盤
678	擾乱		くぼみ石
679			石錐片
680			磁石
681			石錐
682			石錐
683	SK11	青磁	碗
684	↓	↓	↓

III 高速鉄道関係箱崎・馬出遺跡群

第1章 調査に到る経過

福岡市高速鉄道（地下鉄）は、姪浜～博多駅間の1号線、中洲川端駅から分岐し、東区貝塚駅までの2号線の2本が計画された。このうち1号線関係の工事が先行し、2号線については順次南の方から工事発注が行なわれていった。昭和57年頃から千代町庁舎以北の工区についても発注された。宮崎宮を中心とした一帯は、第2章で述べるように古代中世の遺跡の存在することは十分予測されていたが、一帯がすでに密集した市街地となっており、分布調査等一般調査でその実態を知ることは困難であって、福岡市教育委員会が昭和56（1981）年度に発行した「福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）」においても、わずかに元寇防壁推定線のみが記載されているにすぎない。宮崎宮周辺の工事発注に際し、福岡市交通局と福岡市教育委員会は協議を行ない、路線内遺跡の範囲を工事発注後の側壁柱布掘の立会調査によって決定し、遺跡の存在が確認された時点で、本調査へと移行することにした。なお、千代町～九大病院間は、県庁舎新築前の福岡県教育委員会による試掘調査によって遺跡の存在が認められていないことや、宮崎宮参道以北は路線が江戸時代の汀線部を通過するため遺跡の所在が考えられないことから布掘りの立会調査は、馬出東、馬出西、宮崎宮参道の三工区約900mについて行なった。

宮崎宮参道工区の立会は昭和57（1982）年4月から9月まで断続的に行なった。この工区では元寇防壁の推定線が路線内を斜断しており、その存在も当然考えられた。しかし、路線全区に立会したにも拘らず、石塊の存在する認められなかった。この事実は元寇防壁推定線の再検討を要するのか、それとも、後世の大規模な石材抜取りによるものか見解の分れるところであろう。いずれにせよ今後の研究に期待したい。この工区では、地表下約50cmで黄白色地山砂層に達し、また、1m強の深さで湧水が見られるなど、遺物包含層は全く見られなかった。

馬出東・西工区は、昭和58（1983）年3月から6月にかけて立会調査を行なった。これらの工区は古砂丘上を南北に走る通称「大学通り」を境に東・西の工区に分れる。馬出西工区では、現馬出電報電話局近付に「お綱池」と呼ばれる池があって、この池の西方は東公園に連なる松原であったといわれている。ちなみに「お綱池」のほとりに、黒田藩お綱騒動で知られる明石四郎左衛門の妻お綱親子の墓所があり、また馬出の曲物屋の材料の木材をここに漬け保存したという。立会調査の結果ではこの池の東側から遺物が出土しはじめ、遺跡の西端がここに求められることが明らかになった。東工区では、西鉄バス専用路線の南側で包含層が初めて現れ、更に南側に延びることが確認された。こうして路線内遺跡の範囲はFig.173のように推定できた。福岡市教育委員会ではこの遺跡を「姪崎・馬出遺跡群（遺跡略号HZM）」と呼び、路線内の要調査区域とした。発掘調査は昭和58（1983）年7月4日から行なった。発掘調査に係る組織は以下のようであった（職名・氏名は当時のまま）。

調査委託 福岡市交通局

8342

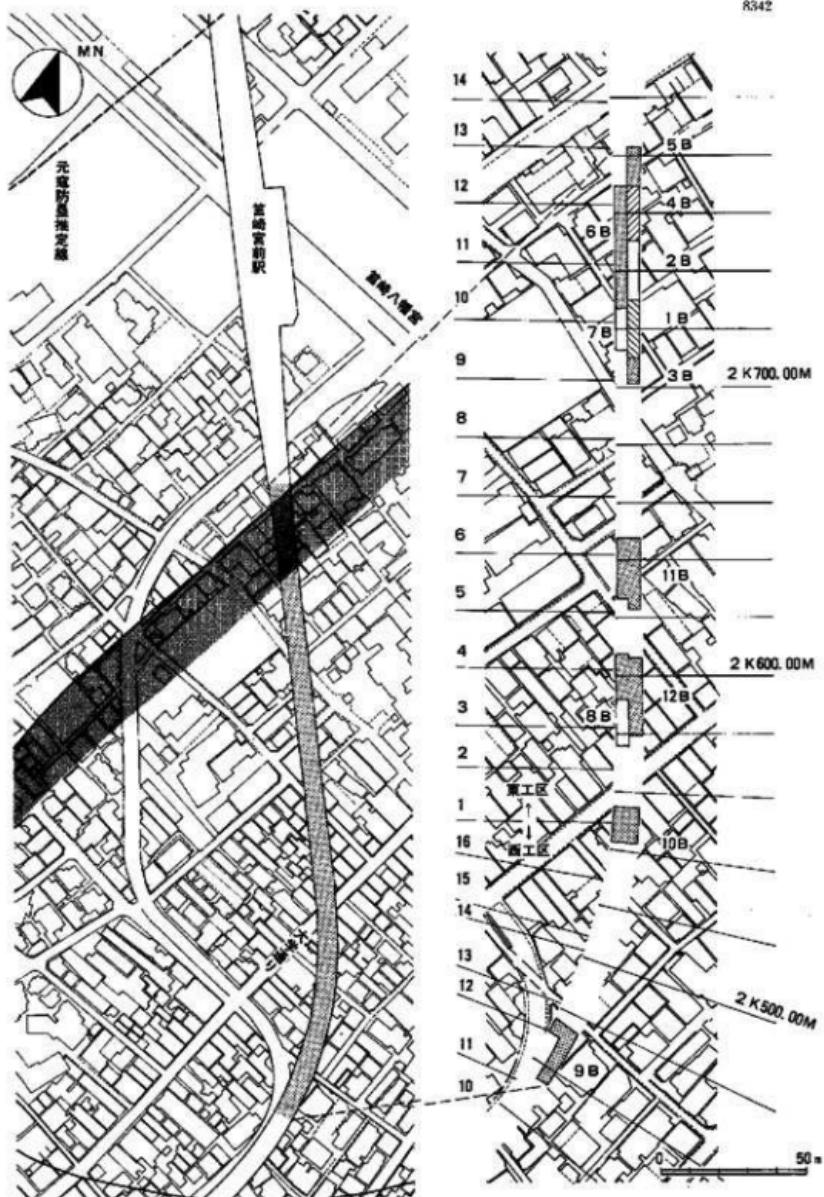


Fig.174 | 裕崎馬出遺跡群と調査区位置図(1/3000, 1/2000)

交通事業管理者 大石秀雄

調査本体 福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

文化部長 中田 宏 文化課長 生田征生

埋蔵文化財第1係長 柳田純孝

事務担当 岡崎洋一、古藤国生

調査担当 塩屋勝利（立会調査）、池崎謙二、小畠弘己

調査協力団体 大成・梅林共同企業体 代表 大成建設（株）九州支店（馬出西工区）
地崎工業（株）福岡支店（馬出東工区）
西松建設（株）九州支店（菅崎宮参道工区）

発掘調査協力者 調査補助 木村幾太郎、林田憲三、白石公高
発掘作業 中山 彰、翁永武義、鳴滝謙史、岡本照男、手島敏秀、吉野清藏
高田勘四郎、日野光嗣、津村道喜、池見寿夫、山本二郎、波田幸信、中村博之
今倉紀尚、村上タマエ、平山道子、松尾節子、松尾なおみ、永松ヤエ子
柴田スマ子、安部サエ子、永田恭子、安部国恵、大畠ミツ子、児玉真由美

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

箱崎、馬出遺跡群はことさら言うまでもなく、菅崎八幡宮を中心に形成された、古代から中世にかけて繁栄した都市遺跡といつていい。福岡市東区に位置し、旧柏原郡に属す。博多湾岸に発達した千代の松原から箱崎松原まで南北に伸びる古砂丘上に立地しているが、現在までのところ調査件数が少なく、北側範囲の確定はできない。西は博多湾に臨み、東を多々良川の支流、須恵川、宇美川が区切る。この東側の後背には、かつて「箱崎ノ津」と呼ばれる入海が深くはいり込み、菅崎八幡宮の専用する私的港としての機能を果たしていた。

菅崎八幡宮の歴史は古く、延長3（923）年にさかのばる。延喜21（921）年、大宰府觀世音寺の巫女樋瀬子に八幡大菩薩の託宣があって、それにより稚波郡にあった大分宮を現在の地に遷座・創建したものとされている。その理由の一つに、八幡大菩薩の重要祭事の一つ放生会の最適地であることがあげられ、今なお菅崎宮の放生会は、博多の人々にとって秋を告げる風物詩として親しまれている。また託宣には、北方新羅の来寇を防ぐとともに、外国の賓客を受入れるために美麗な宮殿を營むべとの指示もあったという。新羅来寇を祈護する「異賊降伏」の一面と官人らによる対外交易との両面を併せもっていたといえる。永承6（1051）年、石清水八幡宮別当清成が菅崎大僕校職に補任された。保延6（1140）年、菅崎宮、香椎宮、大山寺の大衆、神人が大宰府以下の屋舍数十家を焼き払う事件があり、仁平元（1151）年には大宰府

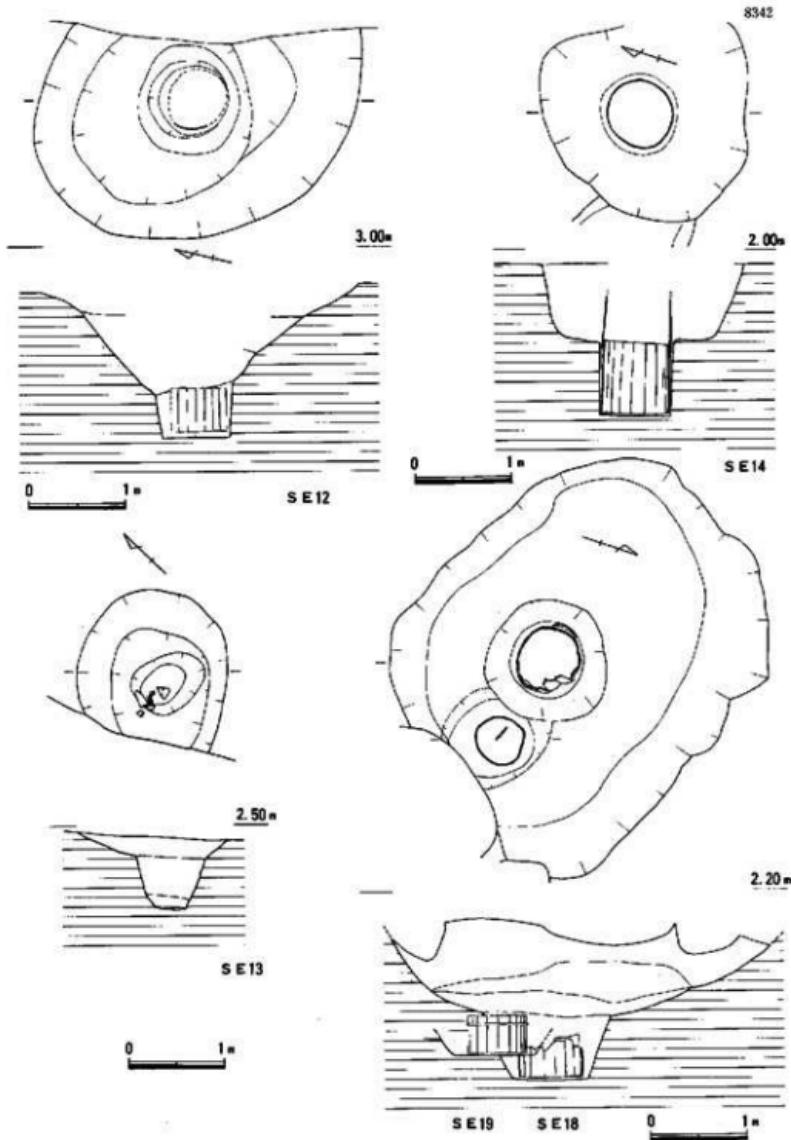
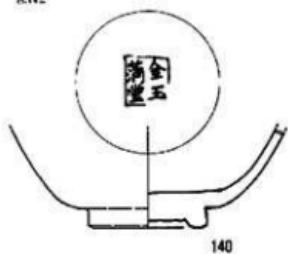


Fig.178 SE 12,13,14,18,19

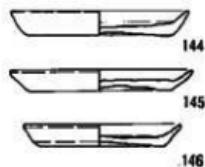
SE12



140



139



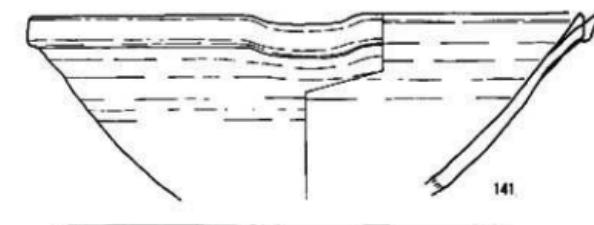
144

145

146



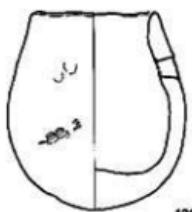
142



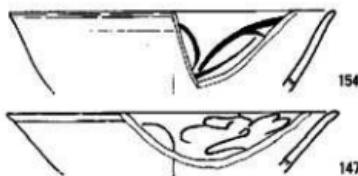
141



137



136



154

147



150



SE13

0 5cm

Fig.179 SE 12, 13出土遺物 (1/3)

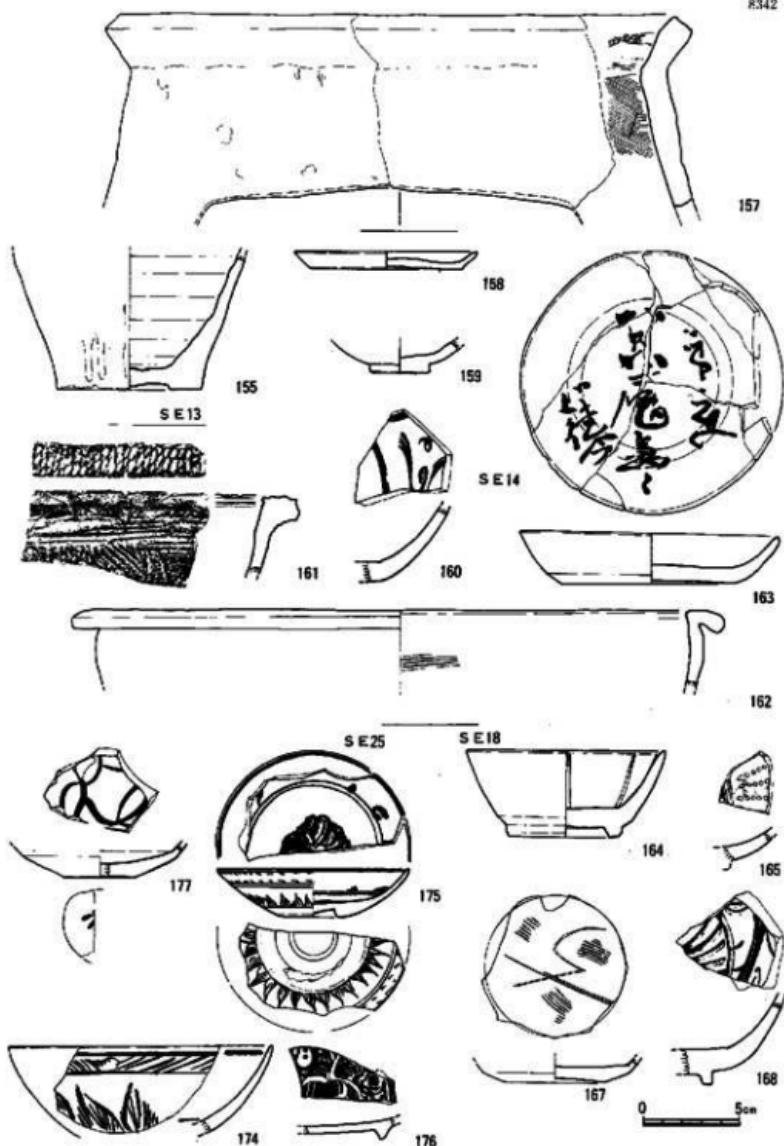


Fig.180 SE 13,14,18,25出土遺物

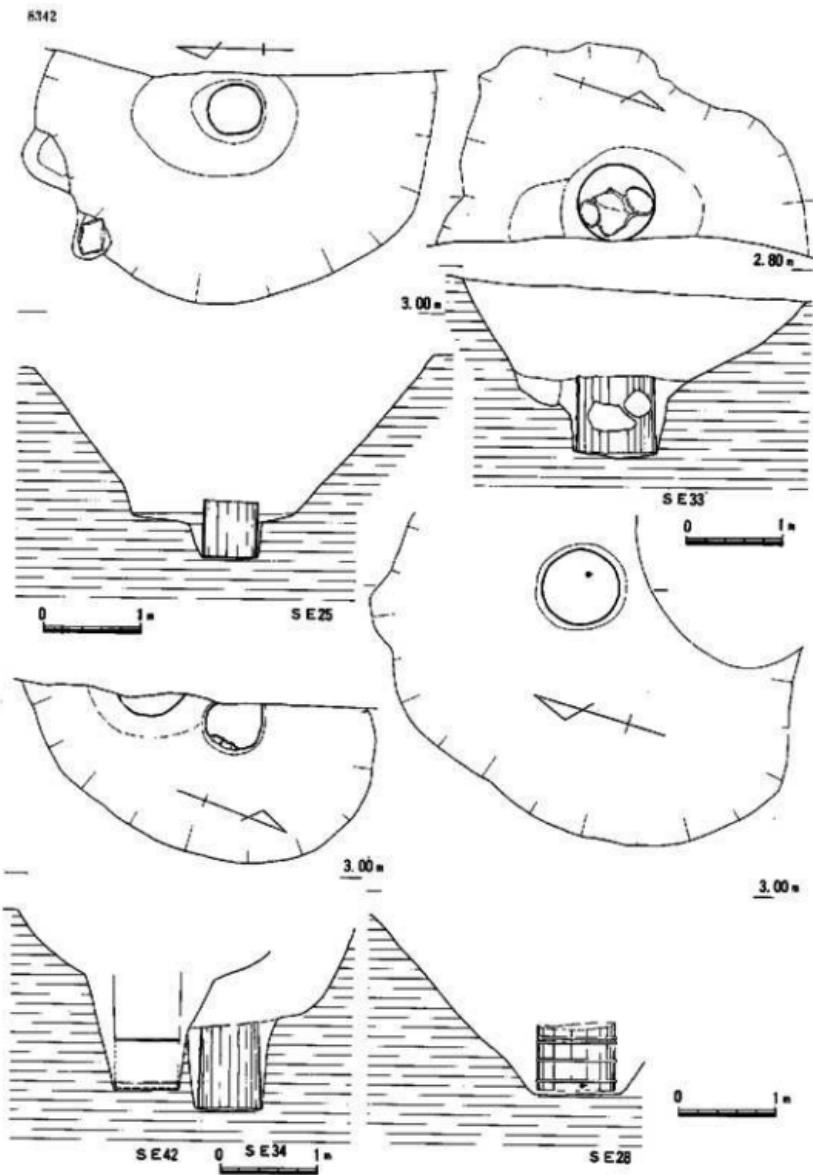


Fig.181 SE25,28,33,34,42

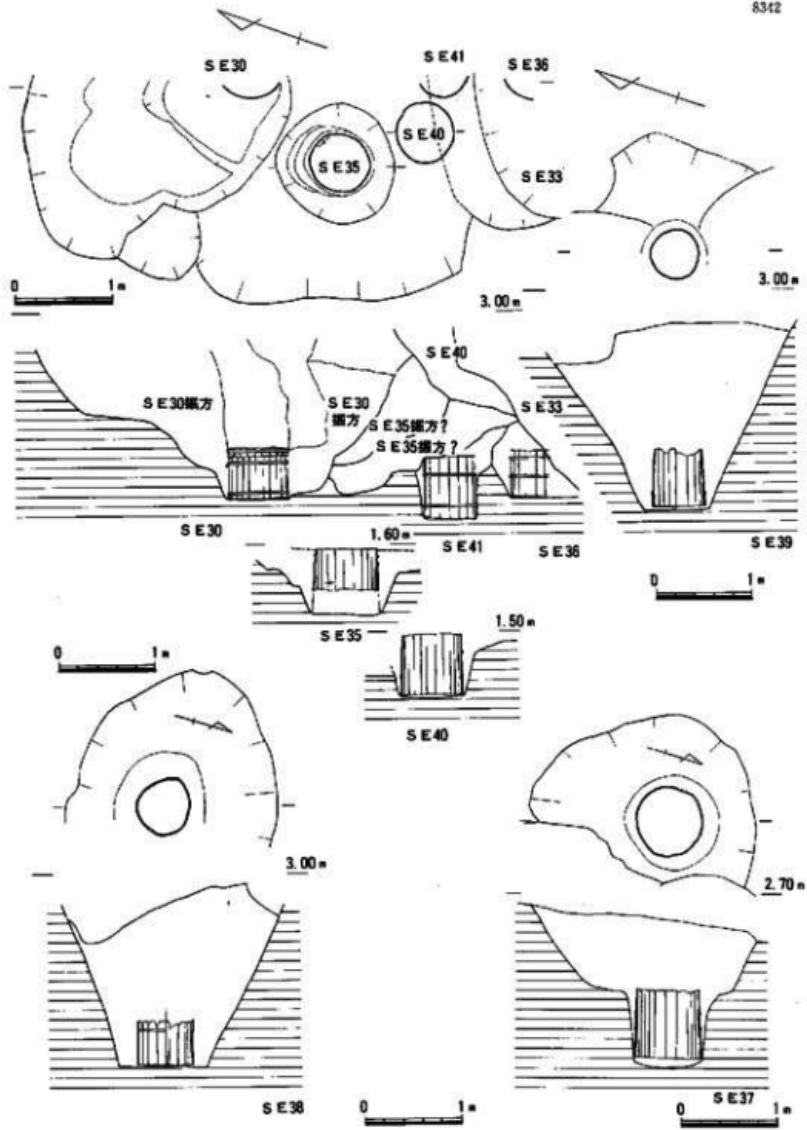


Fig.182 S E 30,33,35,36,37,38,39,40,41

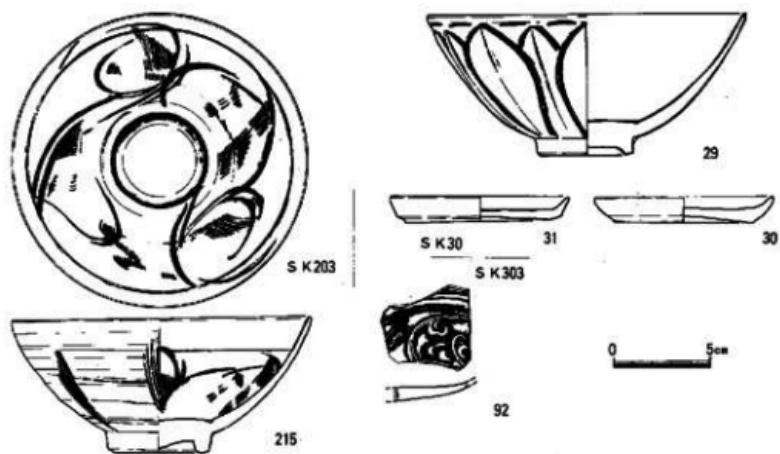
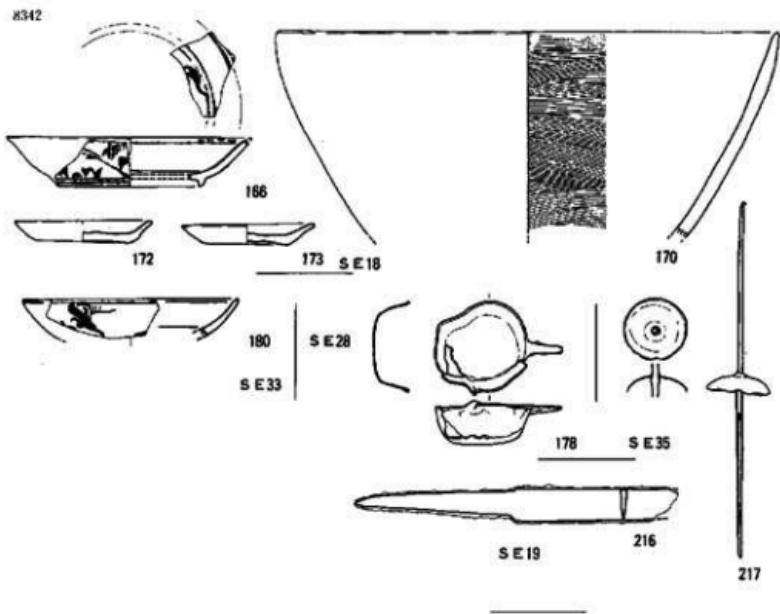


Fig.183 S E 18, 19, 28, 33, 35出土遺物と S K 30, 203, 303出土遺物 (1/3)

8342

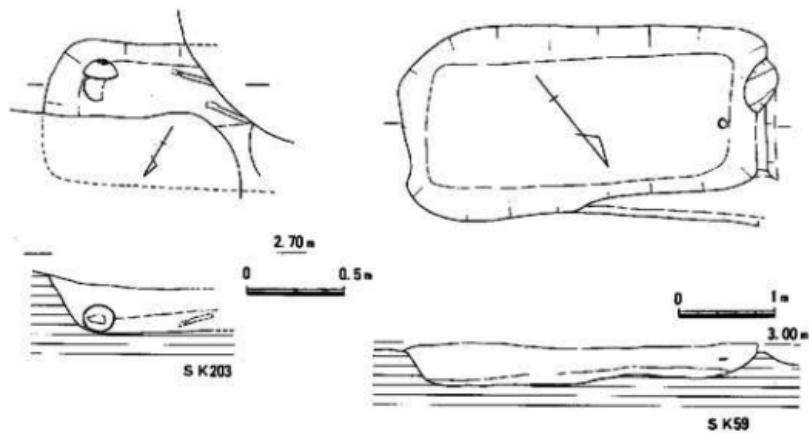
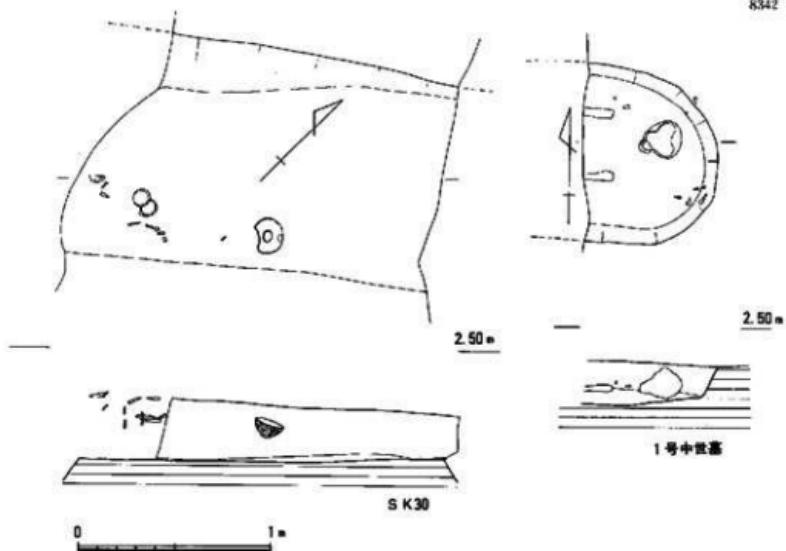
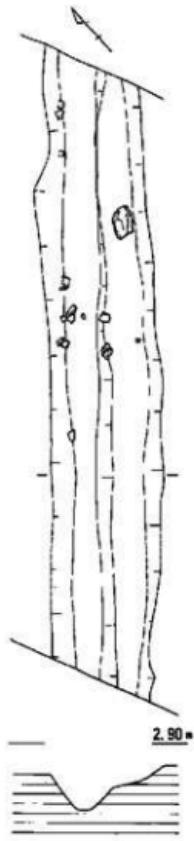


Fig.184 S K 30,59,203と1号中世墓

SD12



SD12



SD13



S X01



Fig.185 SD12,13とS X01

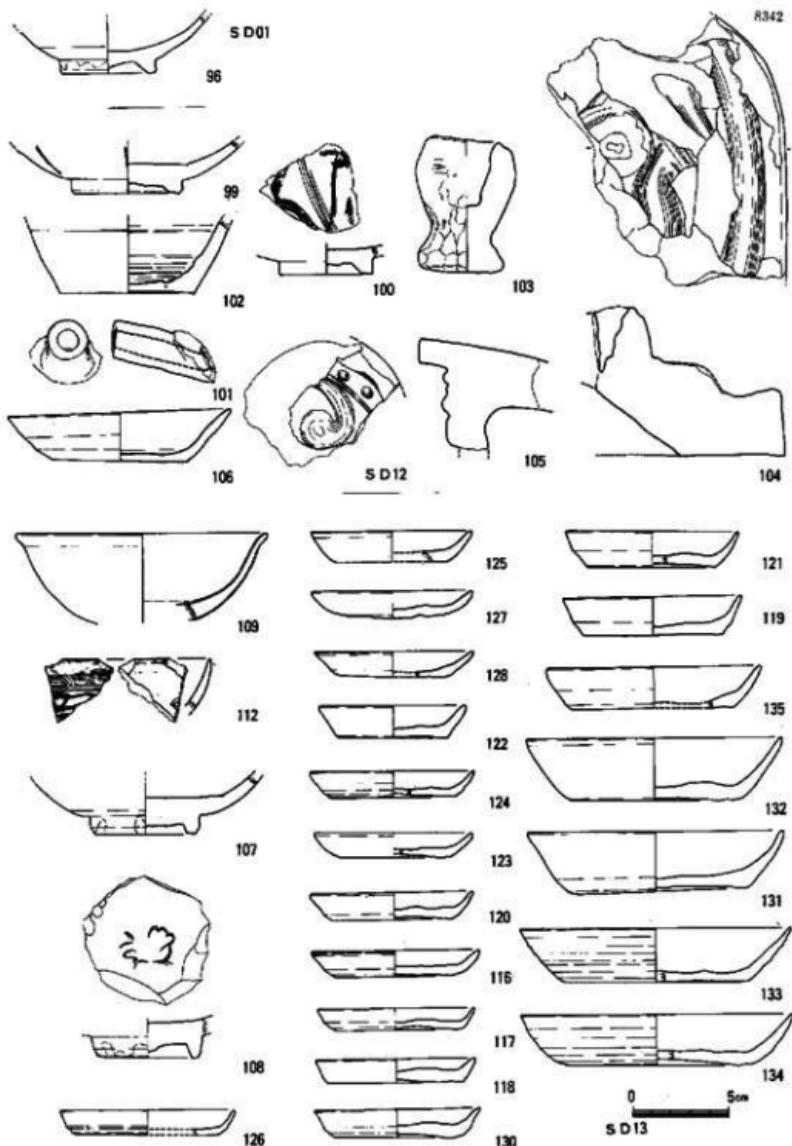
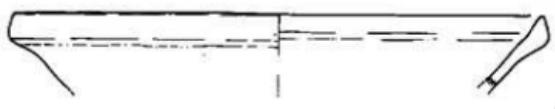
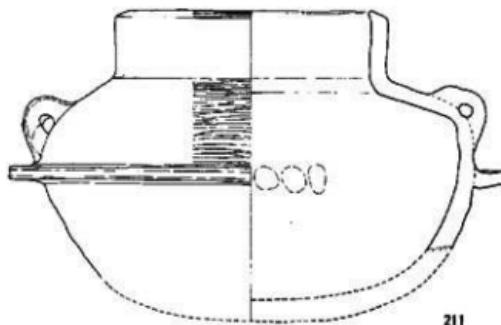
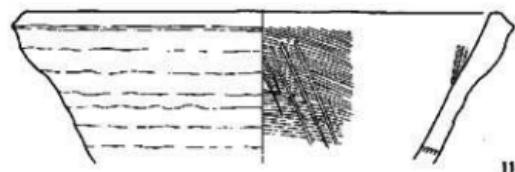


Fig.186 SD01,12,13出土遺物(1/3)

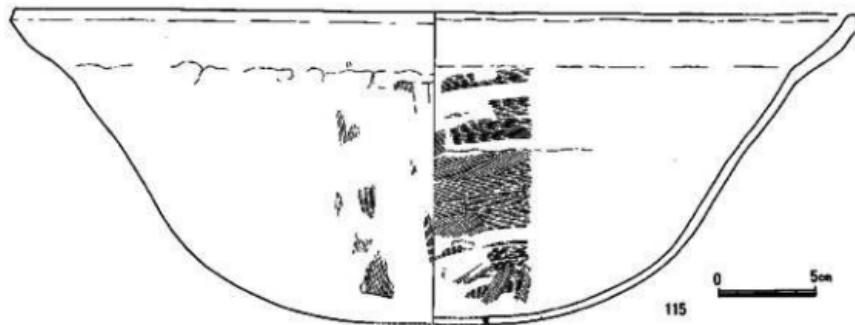
8312



113



114



115

Fig.187 S D13出土遺物 (1/3)

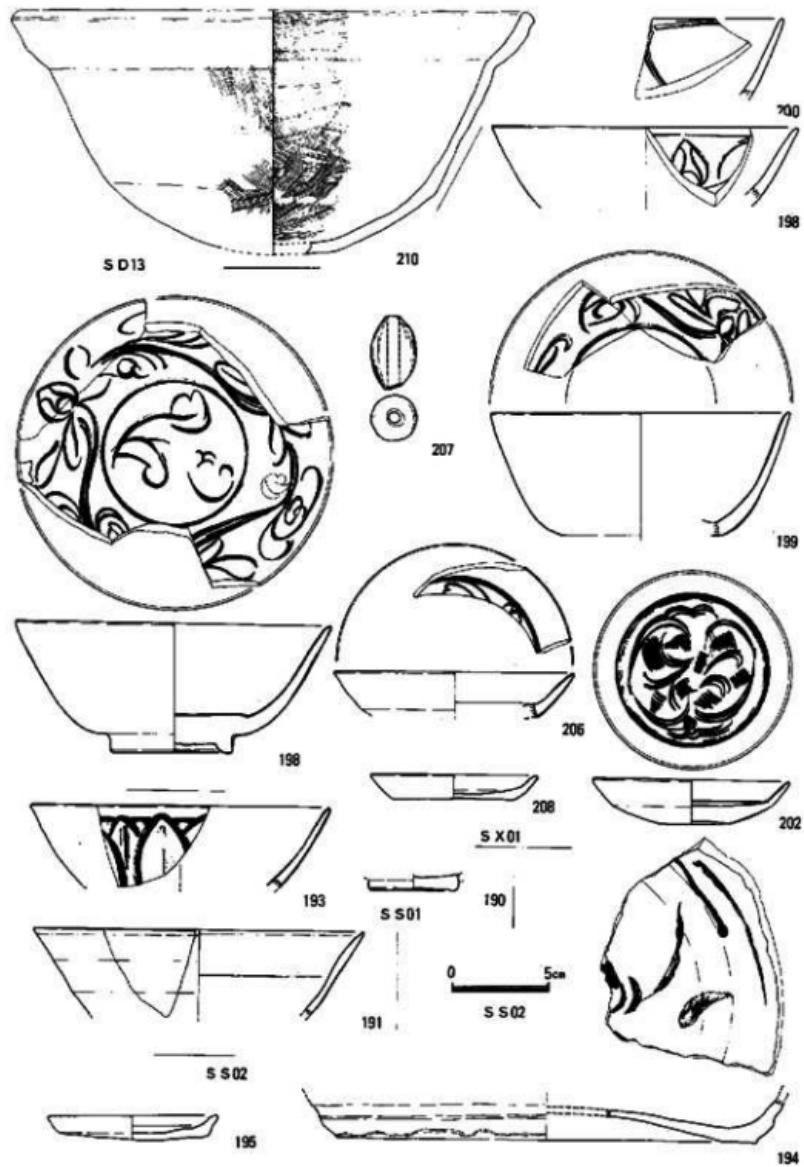


Fig.188 S D13, S X01, S S01,02出土遺物(1/3)

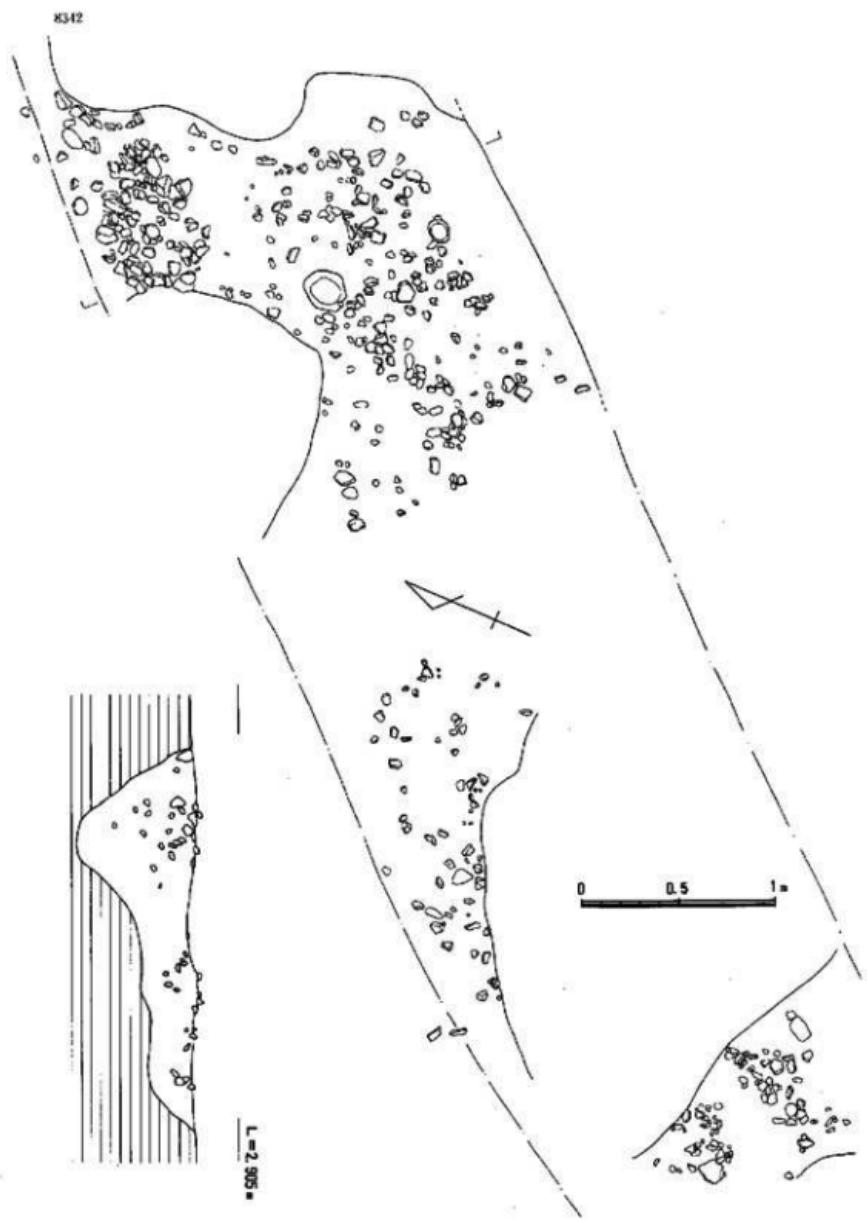


Fig.189 SS01

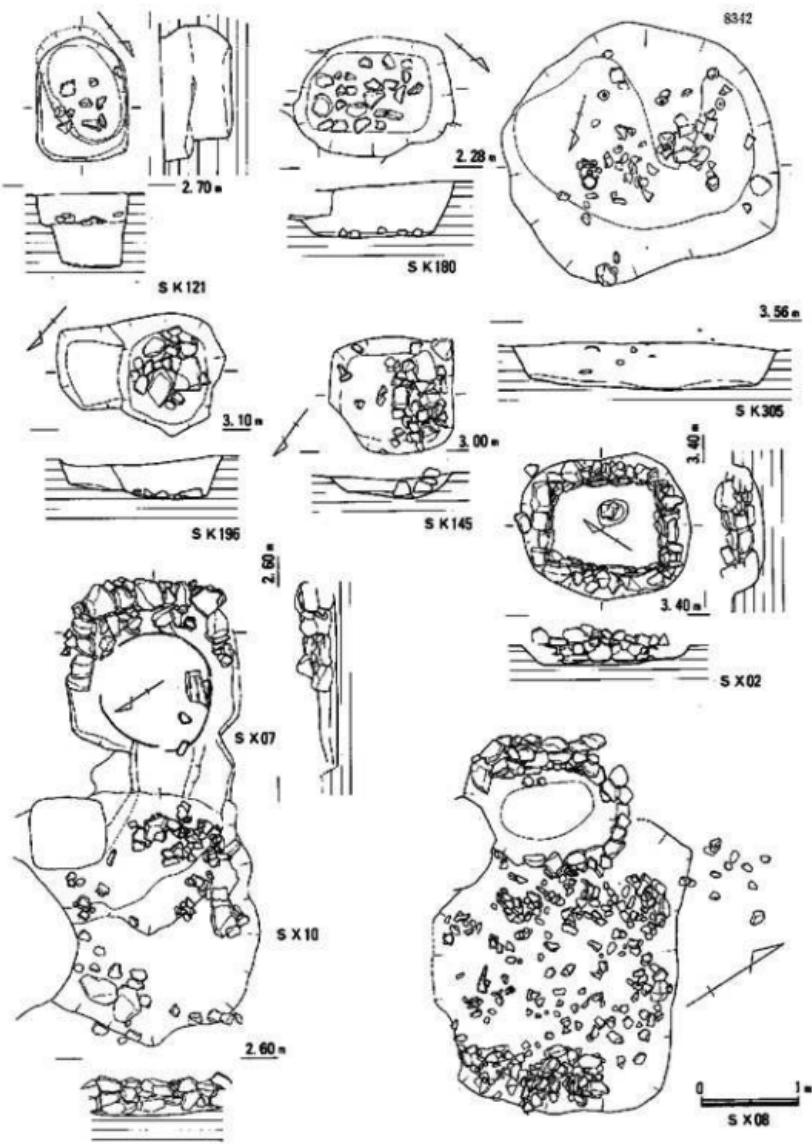


Fig.190 SK121,145,180,194,305とSK02,07,08,10

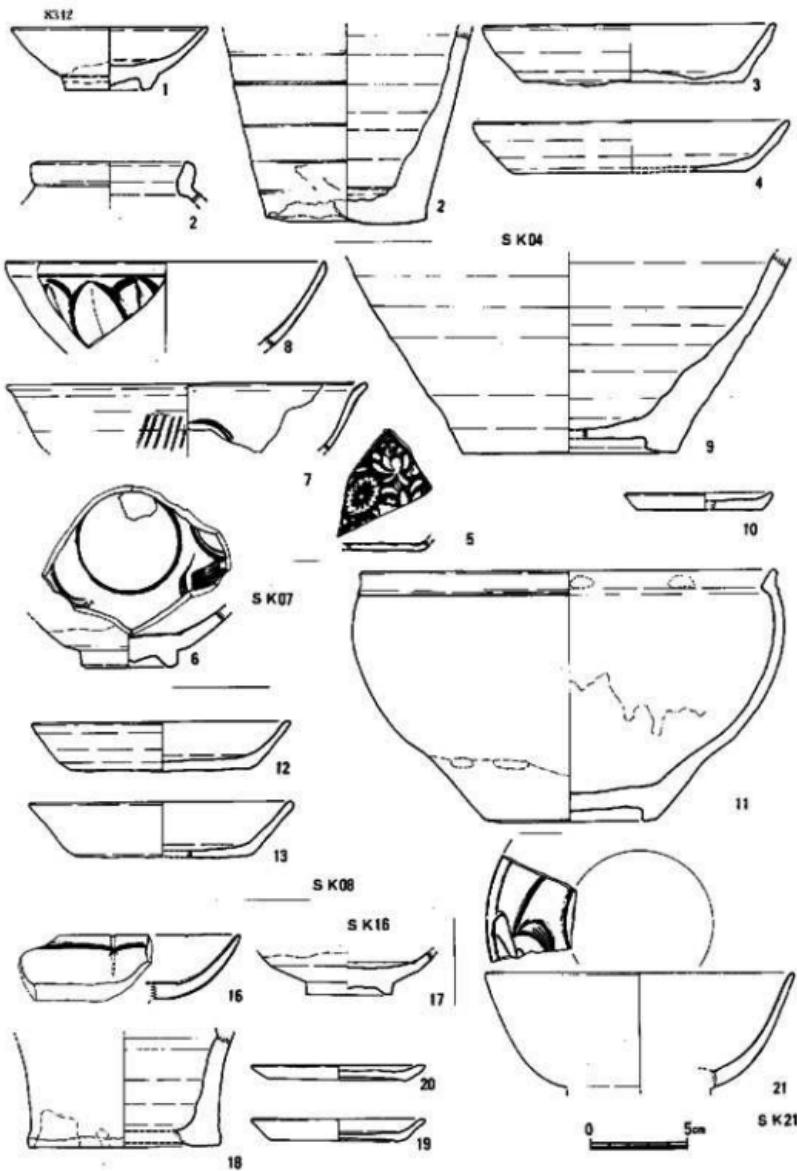


Fig.191 SK 04,07,08,10,16,21,出土遺物(1/3)

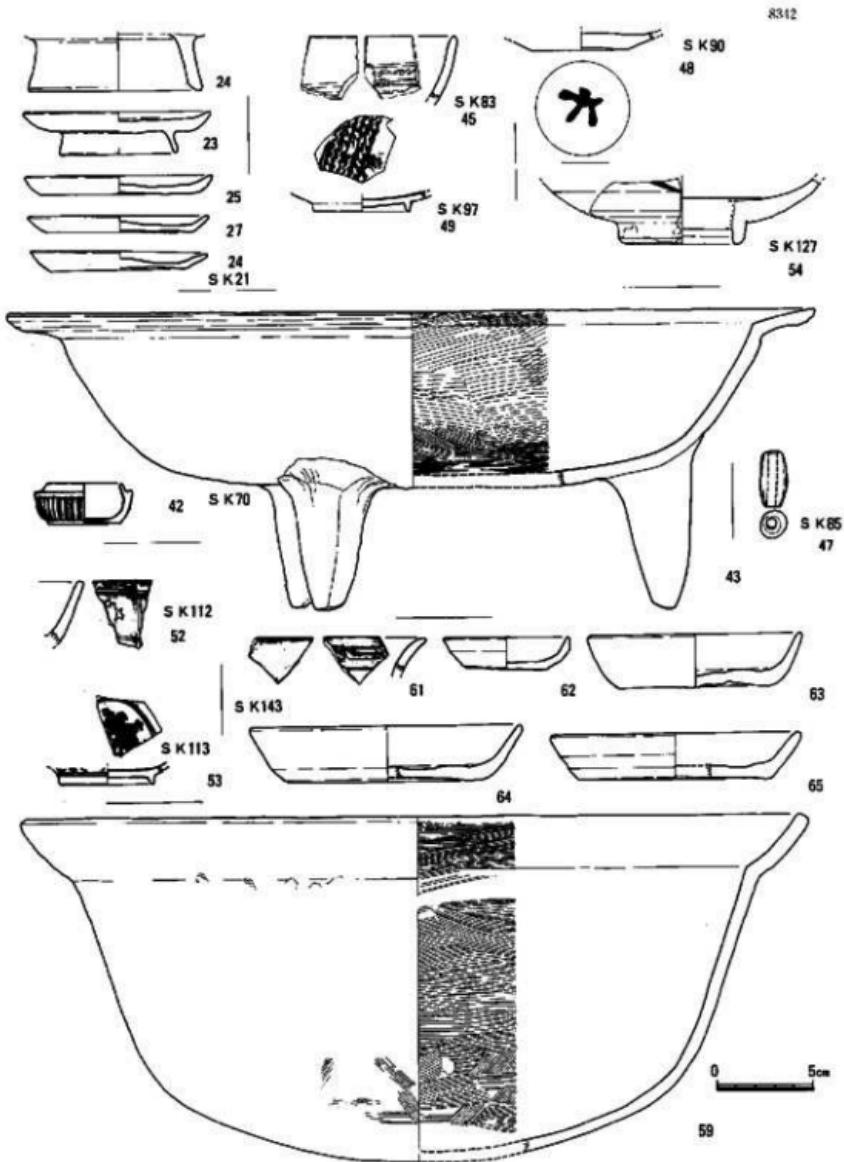


Fig.192 SK21,70,83,85,90,97,112,113,127,143出土遺物 (1/3)

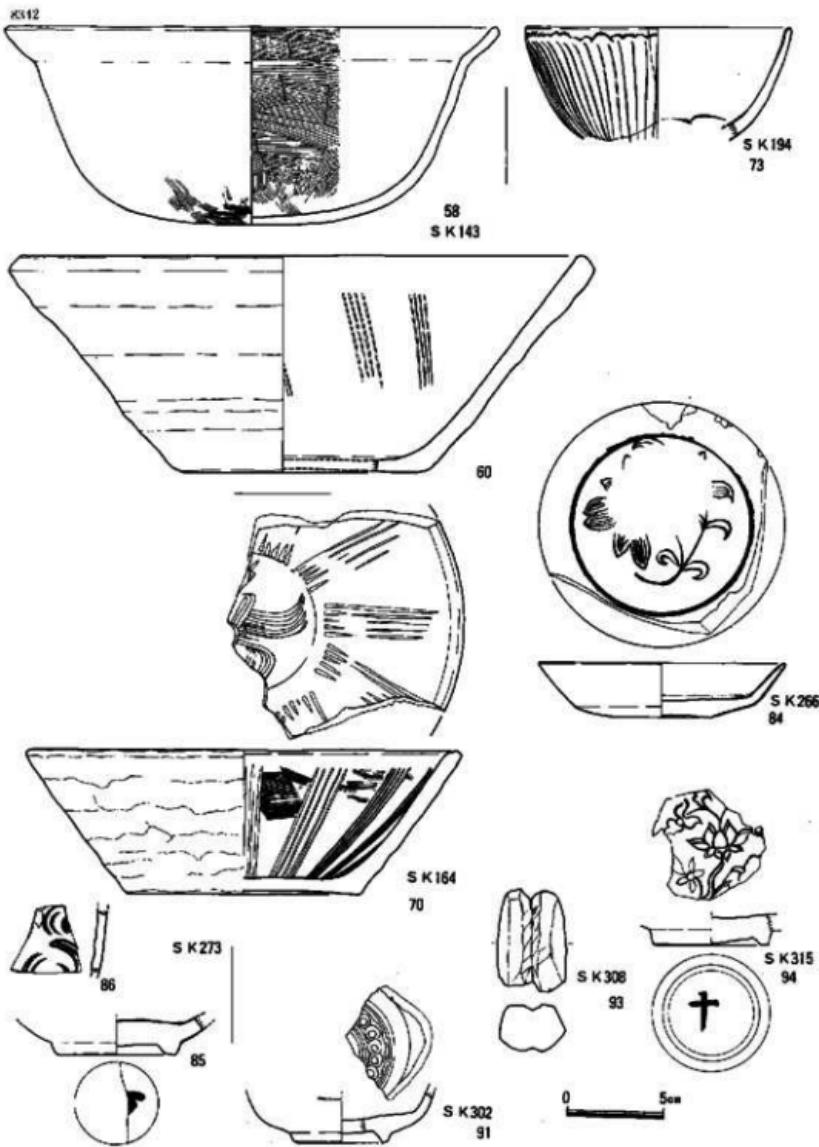


Fig.193 SK 143, 164, 194, 266, 273, 302, 308, 315出土遺物(1/3)

官人五百余騎が箱崎・博多の大追捕を行ない、宋人王昇後家をはじめ千六百家の資財物を奪いとり、筥崎宮にも乱入している。文治元（1185）年、石清水八幡宮の道成が筥崎宮僕役に補任され、以後中世を通じて石清水八幡宮領として存続した。これらの間、先程の大追捕や、「武備志日本考」に見られる如く、周辺に宋商らの多数居留していたことが推定される。文永11（1274）年の蒙古襲来には戦火を蒙り焼失した。

このような文献史分野からのアプローチで様々な転変が知られているが、考古学的な知見は今まで殆んど知られていないかった。筥崎宮宝物館に所蔵されている白磁茶碗程度であろうか。口径15.2cm、器高5.8cmのほぼ完形品で、桐箱蓋裏に墨書きがあり、「白磁碗1個、大正14年1月14日に筥崎宮境内正中線をはさんで『湧出石』に相対するところの老松の根本から発掘された物である」旨記されている。添付書には同様に「大正14年境内老松の根本から発掘したもので、高麗青磁の一種、朝鮮からの伝来品である」旨記されている。実見したところ、中国製の白磁で通常IV類と呼んでいる三角の大きな玉縁口縁をもつ碗であった。今回の発掘調査が、箱崎、馬出遺跡にはじめて加えられた本格的な考古学的調査のメスであり、これを契機として、福岡県教育委員会でも筥崎宮近辺の柏屋合同庁舎建設にともなう発掘調査が行なわれた。蒙古襲来による火災に起因する焼土層や、多くの遺構、遺物が発見されている。今後の周辺部の調査の進展によって、文献史料の裏付け等が進むであろうし、より具体的な人々の生活の様相が明らかにされるであろう。

第3章 発掘調査の概要

箱崎、馬出遺跡群における地下鉄関係の発掘調査は昭和58（1983）年7月4日から開始した。各工事区における小工区にしたがって、馬出東工区を1~14区に、馬出西工区を1~16区に小区分した。馬出東・西両工区間の発掘調査の工程調整を交通局にお願いし、馬出東工区の北半の調査を先行し、その後馬出西工区を終了させ、再び馬出東工区南半の調査を行うことになった。調査に先行して行なった土留杭布掘り立会調査の際にかなりの近現代擾乱が認められたため、チャンネル取付け工事の際の表削土掘時に再度立会して、調査不能の部分を摘出した。また生活用道路の確保のため、道路部分については先行して覆鋼したが、地表面から遺構面まで浅いため発掘作業は不可能であり、道路についても調査は行なえなかった。また、各工区間の工程上の問題で、発掘調査は各小工区毎ではなく、1~12のブロックに分けて行った。遺跡略号HZM、遺跡調査番号は8342である。調査は同年12月18日をもって完了した。以下、調査地点北側から1~7ブロック、11ブロック、8~12ブロック、10ブロック、9ブロックに分けその調査概要を記すことにしたい。

1~7ブロック (Fig. 174)

2号線工事里程2 k 700 m 付近から2 k 783 mまでの調査である。67基の土壌と13基の井戸12本の溝、2ヶ所の集石造構などが検出されている。標高3.4 m程度の現表表面から、80 cm程掘り下げるところは黄白色砂の地山となり、この中に遺構は掘り込まれている。工事による用地買収前まで集落があり、近現代の搅乱が多く、遺構、特に土壌については近世以降の廃棄物処理用土壌が多い。実測図についてはこれら近世以降のものを除き、比較的良好な遺存状態をしている遺構と、その出土遺物を中心に掲載している。以下それらについて説明する。

7・6ブロックから4ブロックにかけて5条の溝が、調査区を斜断する形で平行に走っている。この溝の主軸は磁北から40°程度東に偏しており、砂丘最高位を走る大学通りと平行している。周辺の町筋はこの大学通りを基準としたものであり、この溝も町筋の区画を示すものであろう。また、これらの溝の西側に面してSS01 (Fig. 187、188) があり、溝と平行する。この遺構は溝状の掘方の中に小礫とやや濁った茶褐色砂が充填されているものである。道路と考えるべきであろう。これらの遺構はいずれも13世紀後半頃から14世紀前半代に位置づけられ、またここを境に西側（海側）では中世遺構は見られず、わずかに土鍋が1点完形に近い形で伏せた状態で遺構とともになわざ出土した程度である。このことから、鎌倉時代の後半期には、この溝が、集落の西端を面していたのである。またこの事実は遺跡範囲確認調査時の結果と一致する。1・7ブロックでは、これらの溝と平行する溝 (SD12) と直行する溝 (SD01、10) がある。SD12からは鬼瓦 (104) や三色文軒丸瓦 (105) が出土している。14世紀代である。SD01、10は今まで使用されていた道路と一致し、その側溝である。

SK04 (Fig. 190) 現代の搅乱によって切られ、プランは明確にしがたいが、ほぼ13世紀代の廃棄物処理土壌である。糸切り底の土師皿がやまとまって出土している。1ブロック検出遺構。

SK07 (Fig. 190) 1ブロック検出の廃棄物処理土壌である。SE03に切られ全体プランは不明。同安窯系青磁碗 (6、7)、鎌蓮弁文青磁碗 (8)、青白磁印花文皿 (5) などが出土している。13世紀後半代に位置づけられよう。

SK08 (Fig. 190) 1ブロック検出遺構。明確なプランは認められないが、土師皿 (12、13) や陶器B群鉢 (11) が集中している。13世紀後半から14世紀前半代に位置づけられるが性格は不明。

SK16 (Fig. 190) 2ブロック検出遺構。12世紀後半代の土師皿がまとめて出土し、輪花をなし、堆線を施す龍泉窯系青磁皿 (16) や高麗青磁梅瓶 (18) などが混じる。廃棄物処理土壌である。

SK21 (Fig. 190、191) 2ブロック検出。長軸1.5 m、短軸1.1 mの長方形をなす。12世紀

後半代の廃棄物処理土壌である。口径9 cm 前後、器高1.1 cm 程度の糸切土師小皿がまとめて出土しており、高台付のものもある。21は龍泉窯系青磁碗である。

SK30 (Fig. 182, 183) 3 ブロック検出の木棺墓である。遺構プランは明確でない。龍泉窯系鶴蓮弁文碗（29）と糸切底土師小皿（30, 31）が副葬されており、鉄釘8本も散在する。13世紀後半代に位置づけられよう。遺物は必ずしも原位置を留めているとは思えない。

SK59 (Fig. 183) 7 ブロック検出遺構である。3.5 m × 2 m の長方形の大きな掘り方をもつ。焼けた壁土が出土していることから火災の際の整地に関するものかもしれない。12世紀前半代からの遺物も一部混じるが、遺構年代は13世紀後半代である。土師皿や中国製陶磁が多い。硯も出土している。元寇（文永の役、12年）の際、宮崎宮と周辺は火災にあっており、あるいはこの時に營まれたものかもしれない。

SE12 (Fig. 177, 178) 2~7 ブロックにかけて検出した井戸である。径3.3 m 程の擂鉢状の掘方をもち、井筒は木桶組である。13世紀後半から14世紀前半にかけての遺構で「金玉満堂」のスタンプを捺した龍泉窯系青磁碗（140）、印花文を施した白磁皿（139）、東播系片口鉢（141）や蛸壺（136）があり、焼けた壁土や鹿角も出土している。

SE13 (Fig. 177, 178, 179) 7 ブロックで検出。建物基礎の機乱で一部を切られる。1.5 m + a + 1.5 m の長円形の掘方をもつ。井筒等の痕跡は残っていないが、井戸であろう。13世紀後半から14世紀代に位置づけられる。147は龍泉窯系青磁碗である。157は土師質のかまど、ひさしをもたない。

SX01 (Fig. 184, 187) 7 ブロック検出遺構。明確なプランをもたず、砾と陶磁器類が集中する。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。内面に割花文を施すI類の龍泉窯系青磁碗皿がまとまっている。207は土師質の土鍤である。

11ブロック (Fig. 175)

この調査区では妙徳寺の旧墓地に一部かかり、中世遺構の遺存状態は良好ではなかった。調査区の一部に二条の溝（SD14, 15）が検出され、磁北より40° 程東偏する。この溝は用地買収時まで機能を果たしていた道路と一致しており、その側溝である。またこれに平行して下水管が走っている。

近世墓 墓域は道路によって区画され、調査区の北、西側に展開する。江戸時代から明治時代にかけての墓65基が検出されている。墓域の縮小によって改葬され、棺の抜き跡のみを残すものもあったが、未改葬のまま打ち捨てられたものも多かった。陶器甕を直立させ、上に蓋石を置くのが一般的な葬法である。人骨は九州大学医学部第2解剖学教室に依頼して取上げていただき、また遺存状態の良好なものについては同教室に保管していただいている。以外の人骨

については、妙徳寺によって供養していただいた。

1号中世墓 (Fig. 183) 近世墓域の東端で検出されている。下水管によって半分程が断ち切られている。土壌内に棺釘が残り木棺管であるが、副葬品は認められない。近世墓と葬制に明確な違いがあり、また周辺で13世紀後半頃の同様の墓があることから、ほぼ鎌倉時代後半期のものと考えたい。頭蓋骨と上腕骨が残る。

SK266 (Fig. 192) 近世墓域内の小土壙である。土師皿、土鍋、近世甕棺の破片に混じり、白磁印花文平皿 (84) が出土している。

SK273 (Fig. 192) 近世墓域外、東側が検出された径3m程の大きな廃棄物処理土壙である。器高の高い土師小皿等とともに青白磁梅瓶 (86) や高台内露胎部に墨書のある龍泉窯系青磁碗 (85) などが出土している。14世紀前半代の遺構である。

この他、図示していないがSK255からは中国製綠釉陶器が、SK277では焼けた壁土が出土している。いずれも13~14世紀代の廃棄物処理土壙である。

8・12ブロック (Fig. 175)

大学通りの北西側に面する調査区である。ここでは10ブロックと同様に、中世末の町屋の構造を知る上で興味深い事実が指摘できる。まず、大学通り寄りのところに柱穴群があり、建物があったことを示し、大学通りから見てその裏手に井戸群がベルト状に並び、更にその奥に石塀の遺構が集中するという点である。

まず柱穴群から見てみよう。柱穴群は工事里程2k 580mを中心にしており、南側の大学通り側は道路覆鋼の関係で調査は不可能であった。多くの柱穴が集中しており、各建物の柱穴の組織的な把握は困難であるが、行駆主軸は大学通りと直行する方向をもっている。径30~40cm程の据立柱で、中には扁平碟の礎板を置くものも見られる。この建物群は何回もの建て替えを行っており、かなりの切合いを見せている。この柱穴群の分布範囲からは、土壙も出土しているが、いずれも14世紀以前または、近現代の時期のものがほとんどである。

井戸群はほぼ大学通りに平行しベルト状に分布する。23基程が集中している。以下主なものについて簡単に見てみよう。

SE14 (Fig. 177, 179) 8ブロック検出。木桶組井戸で、下から2段目までが残る。この井筒内から「八月八日 魔 鴟々如律令」と墨書した土師器杯が出土している。水にかかる物忌札として用いられたものであろう。13世紀中~末頃と考えられる。

SE18, 19 (Fig. 177, 179, 182) いずれも木桶組である。SE18が19を切る。SE18は15世紀後半頃、SE19は刀子 (216) が出土する程度であるが15世紀前半代か。SE18では李朝青磁角碗 (164)、三島手碗 (165)、明代染付皿 (166) が出土している。

SE28 (Fig. 189, 182) 木桶組井戸である。底に把手付鍋形青銅器（178）があった。他には土師皿小破片が1点みられるのみである。SE29（石組井戸）に切られるが、時期は明確にしがたい。中世末から江戸時代にかけてのものか。

SE34, 42 (Fig. 180) ともに木桶組井戸でSE34が新しい出土遺物はほとんど見られず時期は明確にしがたいが、中世末から江戸時代にかけてのものであろう。

SE33 (Fig. 180, 182) 12ブロック北東部の井戸集中部にある。木桶組で井筒内に大棟3個が投げ込まれていた。時代染付皿（180）が出土しているのみ。16世紀代以降である。

SE30, 35, 36, 40, 41 (Fig. 181, 182) 12ブロック北東部で複雑に切合って検出された。それぞれの前後関係は、SE33→30→35→36→40・41の順に古い。いずれも木桶組で、遺物の量は少なく、土師皿小破片、輸入陶磁小破片が小量みられるにすぎないが、江戸時代以降の遺物は含まれておらず、おそらく、14世紀後半もしくは15世紀頃から16世紀代にかけて営まれたものであろう。同一家屋に付属する井戸であろう。SE35の井筒底から銅製紡錘車（217）が出土している。

これら井戸の西側には、石垣に組んだ長方形の遺構とそれに付属するとと思われる集石遺構とが出土している（SX07+10、SX08）。これらの遺構はほぼ江戸時代の遺構であるが、井戸、柱穴にも当該期のものがあり、三者の配置的な関係は14世紀後半もしくは15世紀以降ほぼ近代頃まで続いているものと考えられる。このような石積施設は、博多遺跡群や一乗谷遺跡などで検出されており、貯蔵施設もしくは便槽と考えられている。中世から近世にかけての都市における宅地のあり方からすると、道路に直交する方向で間口がせまく奥行の深い建物があり、井戸があり、畠地と便所があるという例が多い。ここで検出された石積遺構についても便所施設であろう。

廐棄物処理土壤を主とした土壤も多い。SK70（Fig. 191）では、三脚付の土鍋（43）や青白磁合子（42）が出土している。SK302（Fig. 192）では李朝の象嵌青磁碗（91）があり、SK308では滑石製の石鍤（93）がある。これらの土壤には15世紀代～近世のものも見られるが、13、14世紀代、および近現代のものもある。

各遺構の時間的な変遷と空間的な占地を見てみると、次のような事が言えそうである。13、14世紀の遺構は井戸、土壤等があるが密度は薄く、集落の中心からははずれた地域である。14世紀末もしくは15世紀代から、現大学通りに向って間口のせまい商家風の建物が形成され、その裏手に井戸と畠地または庭をもっていた。江戸時代にはいると石積みの便所施設を設け、畠地での肥料等に屎尿を用いた。このような状況は以後は近代頃まで続いていたのではないか。

10ブロック (Fig. 176)

馬出西区である。大学通りの南側にあたる。路線はこの付近よりカーブを描く。14 m × 11 m 程の狭い調査区であったが、上・下2面に分けて調査できた。SE22～27の6基の井戸と、SK144～203の60基の土壙および数回の建替があるものの2～3棟の掘立柱建物の柱穴が検出されている。

調査面積がせまいため、建物の全容は把握できないが、1棟分については、ほぼ把えうる。この建物は大学通りに面し、直交する方向で建っており、柱筋が直線に並ぶ。1間1.8 mで、間口2間もしくは3間、最大奥行が5間+αの細長い建物である。柱穴には扁平疊の礎板を置く例も多い。建替回数は明らかにしがたいが、5回以上は繰り返されていよう。しかし、道路側柱の密度の濃さに比べ、奥側は薄く、ある時期に奥が増築されているように見える。15世紀から近代まで継続した町家のあり方であろう。

井戸群も11ブロックとほぼ同様の分布をしめし、家屋の裏手に集中する傾向を見せてている。SE22、23は近代のポンプ井戸である。SE24は調査区外に半分があり、井戸かどうか明確でない。SE26、27は近世井戸である。SE27は瓦組の構造をもつ。

SE25 (Fig. 179, 180) 大きな掘方をもつ木桶組井戸で、多量の遺物が出土している。明代の染付(174～176)、白磁を中心、鎌倉、室町時代の遺物が混在する。判読できないが底部に墨書きもつ白磁平底皿(177)もある。16世紀代に位置づけられよう。

土壙には廃棄物処理用と考えられるものが多いが、土壙墓や、長方形の掘方をもつもの、またさらに石積みを行うものなどが見られる。

SE203 (Fig. 182, 183) 近世掘方に切られ全容は不明であるが、ほぼ長方形の土壙墓である。頭蓋骨と大腿骨が遺存するが状態は不良。頭部に同安窯系青磁碗(215)を副葬する。頭位をほぼ北東に向いている。13世紀代。当該期の墓は他になく、単独で営まれている。

SX02 (Fig. 189) 1.25×1.0 m の長方形のプランをもち、外壁を石垣状に石積みする。近世の遺構で、中から近世陶磁類が多数出土し、最終的には廃棄物処理に用いられているが、11ブロックでも述べたように、本来的には便槽として用いたものであろう。

SK145 (Fig. 189) SX02に近接する。本来は同様の石積をもつものと思われる。近世遺構である。

SK180 (Fig. 189) 1.5×1.2 m の長方形の掘方である。床面に礎が置かれている。遺物は見られない。

SK194 (Fig. 192) 径0.75 m 程の不整円形の掘方である。16世紀代の廃棄物処理土壙で線描き細蓮弁文青磁碗(73)や明代染付などが出土している。

SK196 (Fig. 189) 1.7×1.25 m 程の不整長方形の掘方で、片側に礎が集中して置かれる。土鍋、瓦質鉢などの遺物が小量出土している。

これらの土壌は鎌倉時代から現代に到るまでの時期のものが含まれる。

9 ブロック (Fig. 176)

馬出西工区で、2 k 254 m から 470 m を中心とした地点の調査を行った。箱崎馬出遺跡群のはば西端に位置するが、一部西鉄線バス専用道路にかかり、L字状の範囲のみの調査となつた。ここでは上下二面に分けて調査できたが、必ずしも明確な時期差を示すものではない。SK83～143 の 61 基の土壌と、1 基の近代井戸、1 条の溝状遺構、ピット群が検出された。ピット群は範囲がせまいものもあって建物の配置等は明確にできない。

SD13 (Fig. 184～187) 調査区南端にあり、一部調査区外にはずれているため全容は不明である。西側には石垣状の石積みがあり、浅いテラス状の段の東側に深い溝状の落ち込みがあり、多量の遺物が廃棄されている。あるいは池であったかもしれない。土師皿類が小破片も含め 500 余点出土しているが、いずれも糸切で実測可能なものについては図示している (116～135)。109 は見込攝取の龍泉窯系青磁碗、112 は白と黒の象嵌をした李朝青磁碗である。このほか瓦質の鈎付湯釜 (211)、東播系の須恵質鉢 (113)、口縁部を鈎状に外反させ内外面をハケ目調整する土師質土鍋 (115、210) などがある。15世紀代の遺構である。

SK121 (Fig. 189) 1.2 m × 1.0 m のほぼ長方形のプランをもつ。覆土中央部に礫が置かれている。遺物は少ないが土鍋等が見られる。石積をもつ同形の遺構とはやや性格を異にし廃棄物処理専用と考える。15世紀代であろう。

このほか多くの土壌が見られるが13世紀代から近現代まで時期は様々であるが、出土する遺物は各時期のものに混って11世紀後半代のものも出土している。

第4章 まとめ

地下鉄2号線の工事にともなう箱崎馬出遺跡群の調査は、古代から中世を通じて栄えた宮崎八幡宮の周辺の初めての調査で、遺跡が広い範囲に存在することを明らかにした。県教育委員会でも柏屋総合庁舎新築にともなって発掘調査が行なわれるなど、今後も調査が行なわれていくものと思われ、それらの資料の集積によって、宮崎周辺遺跡、すなわち箱崎馬出遺跡群の具体的な様相も次第に明らかになってゆくだろう。今回の調査では、遺跡群の西南端をかすめるような調査区であったため、「大唐街」など宮崎宮と関りのある中国商人の居留地などは明確にできなかったが、遺物としては11世紀代のものから見られ、平安時代末期から室町期まで集落が形成されていたものと思われる。ここで指摘しておかねばならないのは、砂丘最高位を走る大学通りを中心としてその両側に、14世紀末もしくは15世紀代に定形化した集落が形成されはじめることである。それ以前の遺構の散漫な分布に対し、明確な占用区分が見られ、それ

が近現代まで継続されているといえる。この頃、菅崎宮の門前町あるいは、街道沿いの商家街が形成されてゆくのであろうか。出土遺物については博多遺跡群にこそ比較のしようがないが、遺跡群端部に位置することを考えても、多量の中国、朝鮮など貿易陶磁の出土することは、菅崎宮の対外交渉の拠点としての性格を明らかにするに充分である。

箱崎馬出遺跡群出土主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形	遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器 形
00001	SK-4	白磁	高台付皿	59		↓	↓
2		陶器	長瓶	60		瓦質	壺鉢
3		土師皿		61	SK-143	象嵌	
4	↓			62		土師皿	
5	SK-7	青白磁	皿	63			
6		青磁	碗	64			
7				65		↓	
8				66	SK-162	石製品	砾石
9		陶器	西耳壺又付水注	67	↓	↓	↓
10	↓	土師皿		68	SK-164	石器	
11	SK-8	陶器	鉢	69		滑石	石鍋
12		土師皿		70		瓦質	壺鉢
13	↓			71		上師皿	
14	SK-9	青白磁	皿	72		↓	
15	SK-10	石製品		73	SK-194	青磁	碗
16	SK-16	青磁	高台付皿	74	SK-199	土師皿	
17		白磁か朝鮮	碗	75			
18		高麗青磁	壺瓶か	76			
19		土師皿		77			
20	↓			78		↓	
21	SK-21	青磁	碗	79	SK-255	青磁	盤か鉢
22		陶器		80		白磁	壺口縁
23		土師皿		81		陶器	壺鉢
24				82		↓	査
25				83		縄物	
26				84	SK-266	白磁	平底皿
27	↓			85	SK-273	青磁	碗
28	SK-24	碗	羽口	86	↓	白磁	壺瓶
29	SK-30	青磁	碗	87	SK-297	土師質	土鍋
30		土師皿		88		土師皿	
31	↓			89			
32	SK-56			90		↓	
33	↓			91	SK-302	象嵌青磁	
34	SK-59	陶器	盤	92	SK-303	白磁	板府タイプ
35		滑石製品		93	SK-308	滑石	石錐
36		把手		94	SK-315	白磁	印花文
37		↓		95	SK-318	土師皿	
38		石製品	裏	96	SD-01	白磁	碗
39		土師皿		97	SD-11	針織皿	
40	↓			98	↓	↓	
41	SK-59	土師皿		99	SD-12	青磁	碗
42	SK-70	青白磁	合子の身	100	↓	↓	高台付皿
43	↓	土師質	脚付土鍋	101	SD-12	陶器	水注の注口
44	SK-80	天目	碗(国産)	102		↓	瓶
45	SK-83	象嵌		103		須恵質	杯
46	SK-84	朝鮮	碗	104		鬼瓦	
47	SK-85	土錐		105		軒丸瓦	
48	SK-90	青磁	皿	106		土師皿	
49	SK-97	青白磁	高台付皿	107	SD-13	青磁	碗
50	SK-101	土師質	壺鉢	108			
51	↓	石製品	鏡	109			
52	SK-112	朝鮮	象嵌	110		↓	
53	SK-113	染付		111		黒褐釉	
54	SK-127	青磁	碗	112		朝鮮	象嵌
55	SK-137	石製品	砾石	113		須恵質	鉢(東播系)
56		土師質	土鍋	114		↓	壺鉢(ヨ)
57	↓			115		土師質	土鍋
58	SK-143						

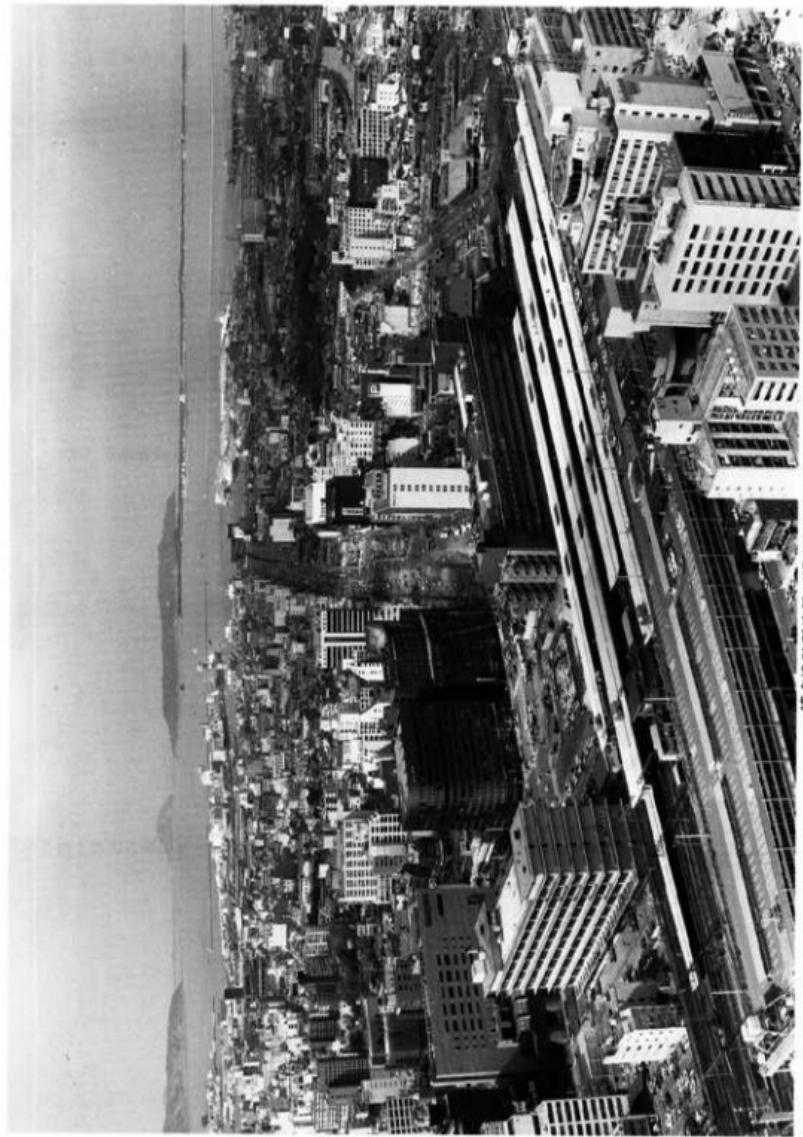
遺物番号	地区・層位・達拂	遺物の種類	器 形
116		土師皿	
117			
118			
119			
120			
121	SD-13	土師皿	
122			
123			
124			
125			
126			
127			
128			
129			
130			
131			
132			
133			
134			
135			
136	SE-12	土師質 たこ巻	
137		陶器	蓋か甕
138		土師質土器	釜
139	SE-12本体	白磁	平底皿
140	-	青磁	碗
141	SE-12本体	東播系	鉢
142		土師質	土鍋の把手
143		鹿の角	
144		土師皿	
145			
146			
147	SE-13	白磁	碗
148			↓
149			高台付皿
150			平底皿
151		貨物	
152		青磁	皿
153			碗
154			↓
155		陶器	四耳壺
156	1		↓
157		土師質土器	かまど
158	↓	土師皿	
159	SE-14本体	黒褐釉	碗
160	↓	青磁	↓
161	SE-14本体	土師質	土鍋
162		↓	↓
163	↓	土師皿	
164	SE-18頃方	朝鮮青磁	八角碗
165		↓	象嵌碗
166		染付	皿
167		青磁	↓
168			碗
169			盤
170			土鍋

遺物番号	地区・層位・達拂	遺物の種類	器 形
171		土師質	たこ巻
172		土師皿	
173			
174	SE-25	染付	碗
175			皿
176			↓
177		白磁	平底皿
178	SE-28	銅製品	鍋型仏具
179	SE-30頃方	石玉	
180	SE-33	染付	瓶
181	SE-36頃方	滑石製	石鍋
182	SE-38(本体)	↓	↓
183		燒土	
184		土師皿	
185			
186			
187			
188			
189	SE-38頃方	↓	
190	SS-01	白磁	高台付皿
191			口ハゲ碗
192			↓
193		青磁	碗
194	SS-02	陶器	盤
195		↓	十鈴皿
196	SS-不明	青磁	碗
197		↓	土師皿
198	SX-01	青磁	碗
199			↓
200			↓
201	SX-01	青磁	碗
202			平底皿
203			碗
204		白磁	巣
205			碗
206			平底皿
207		土製品	土鉢
208		↓	土師器
209	SX-07	陶磁器(朝鮮)	象嵌碗
210	SD-13	土師質土器	土鍋
211		瓦質土器	湯釜
212		土師器	皿
213	SE-34		
214	↓		↓
215	SK-203	青磁	碗
216	SE-19	鐵製品	刀子
217	SE-35		紡錘車
218	SK-88	↓	
219	SK-109		滑石製品
220	SK-113	鐵製品	釘
221			かすがい
222			釘
223			釘
224	SK-117		鉤
225	SK-169	↓	

写 真 図 版

PLATES

*縮尺不同
遺物番号は挿図と一致する。



博多港跡遠景（博多駅上空から）



1. I区調査風景（北から）



2. I区調査風景（西から）



3. 夜間調査区表土剥ぎ風景

1. N区調査風景（北から）

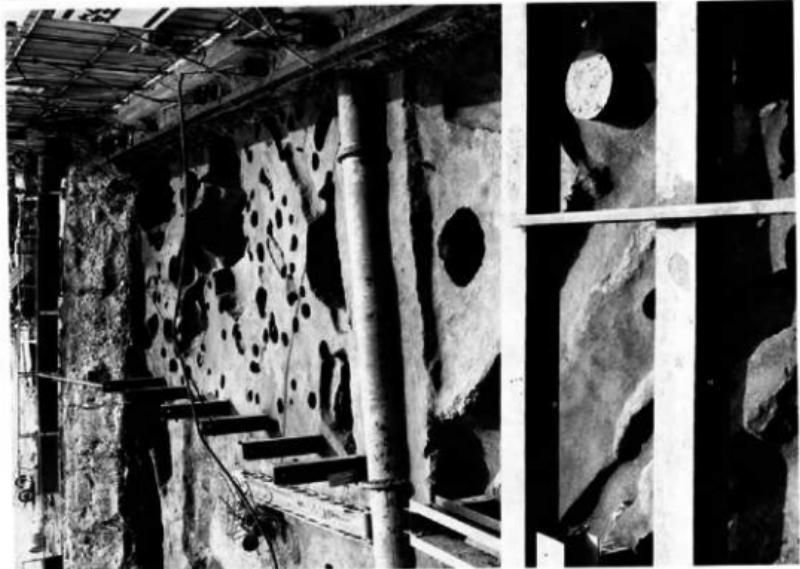


2. L区調査風景（東から）

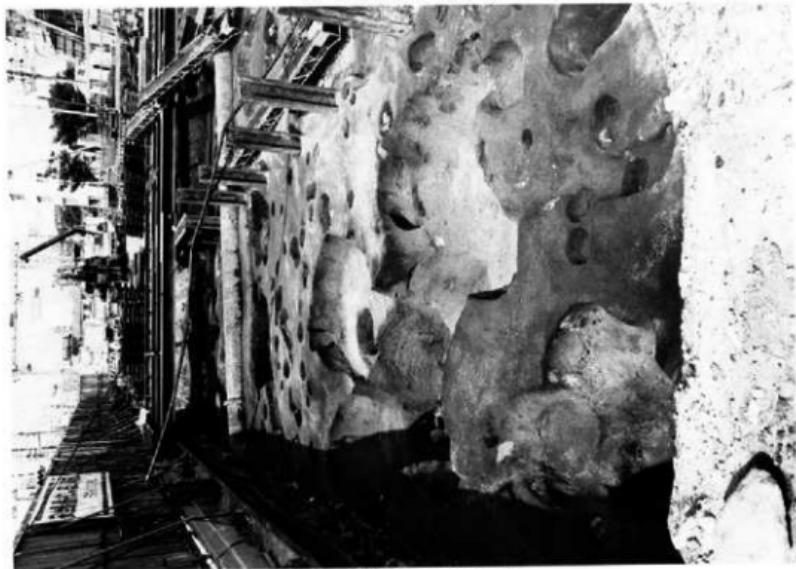


3. Q区調査風景（南から）

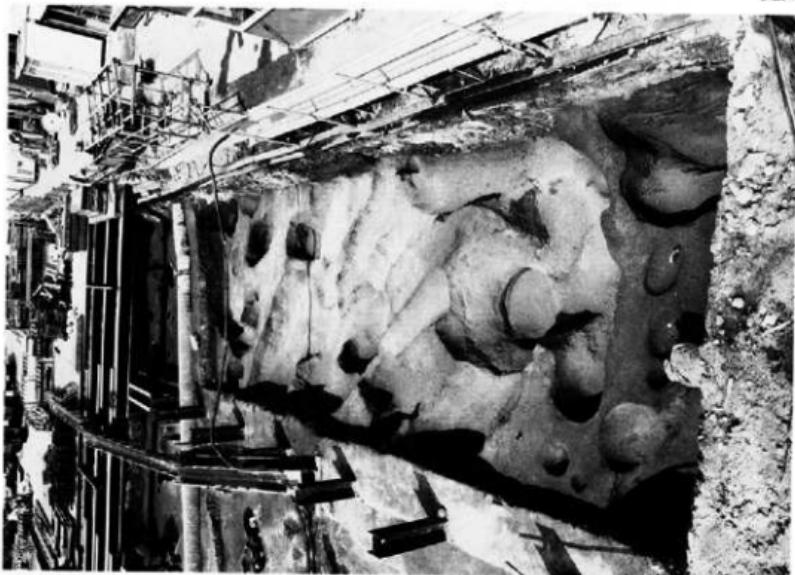




1. H-II区全景（北西から）



2. H-II区全景（南東から）



1. H-III区全景（南から）



2. H-III区全景（北西から）



1. HIK SDOI (東から)



2. HIK SDOI (西から)

1. HK SK17 (L)



2. HK SK17 (M)



3. HK SK17 (F)



1.
I—I区下面（南東から）



2.
I—I区上面（南東から）



1. I-II区下面全景
(北西から)



2. II区 SDOI (西から)





1. II区 1号墓（西から）



2. II区 2号墓（西から）

1. II区 SK25 (北東から)



2. II区 SK28, 29, 30 (西から)

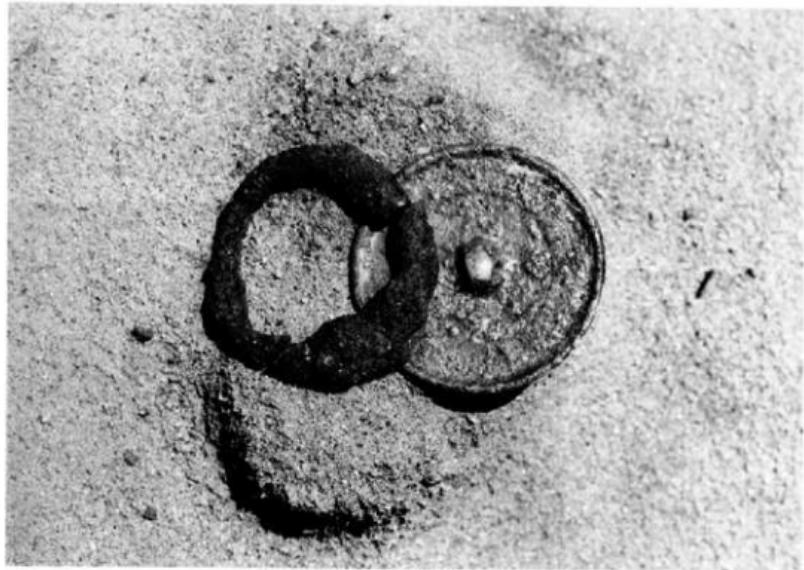


3. II区 SK29
遺物出土状況 (西から)





1. L区 SK14 (南東から)



2. L区 SK14 遺物出土状況 (西から)



1. M-II区全景 (南東から)



2. MII区 SCII (北東から)



1. N区
SCO 1 (東から)



2. N区
SCO 3 (東から)



3. N区
SCO 3 (南東から)



1. N区 SD 02, 03 SK01 (南西から)



2. N区 SD 02, 03 (北西から)



1. N区 SD03 遺物出土状況
(東から)



2. N区 SK01 (北東から)



3. N区 SK02 (北東から)



4. N区 SK05 (南西から)



1. O区 SK11 (北西から)



2. O区 SK15 (南西から)



1. Q区
遺構全景
(北西から)

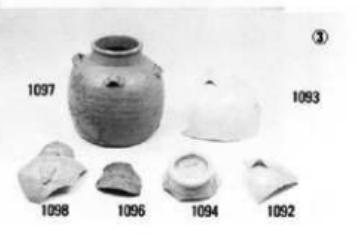
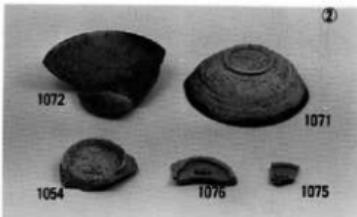
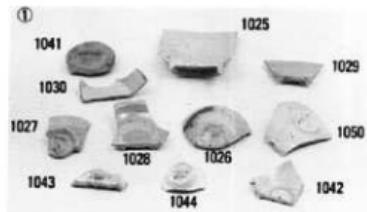


2. Q区
SK01
(南西から)



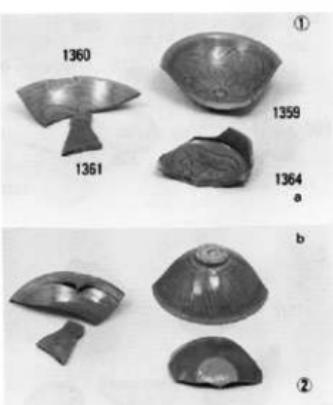
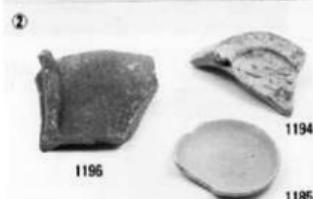
3. Q区
SK07
(北から)

1) HK SK 0 7



2) HK SK 14



1) H区
S K
492) H区
S D
0 3

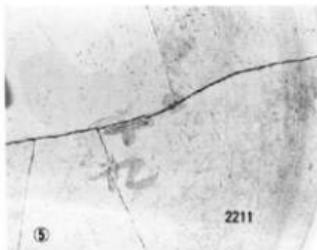
3) H区 造構外

4) H区
造構外5) H区
造構外

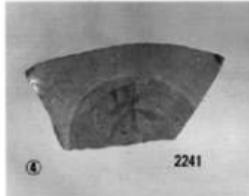
1377

1) 夜
SK
672) 夜
SK
655) N区
SC043) L区
SC016) N区
SK114) L区
SK14

1) Q区SK04

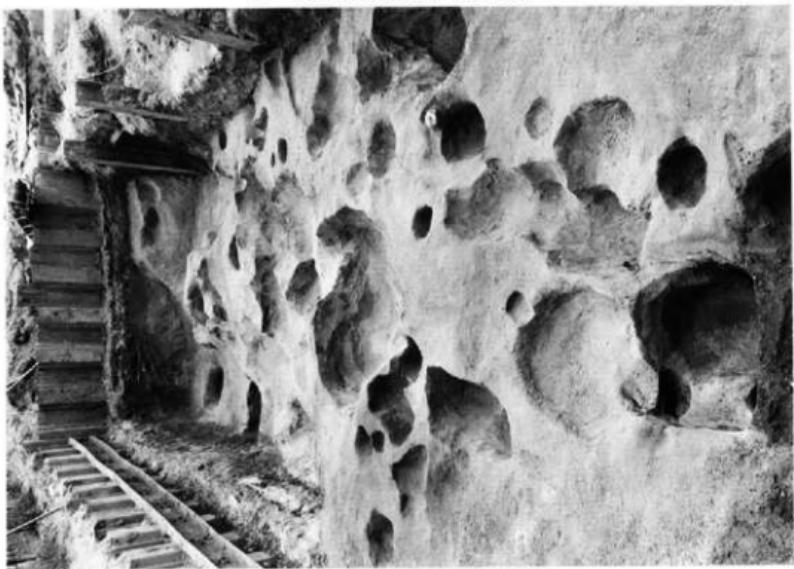


2) H+Q区墨書陶



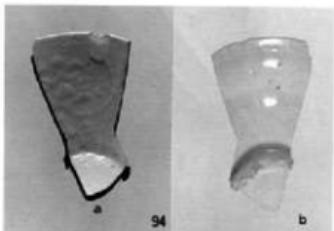


1. 4号出入口造構全景（南東から）



2. 4号出入口造構全景（北西から）

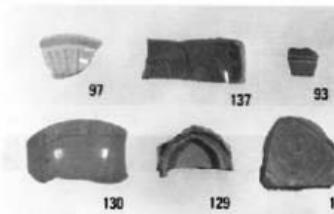
1) SK 0 1



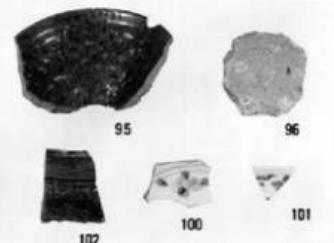
2) SK 0 3



3) SK 10

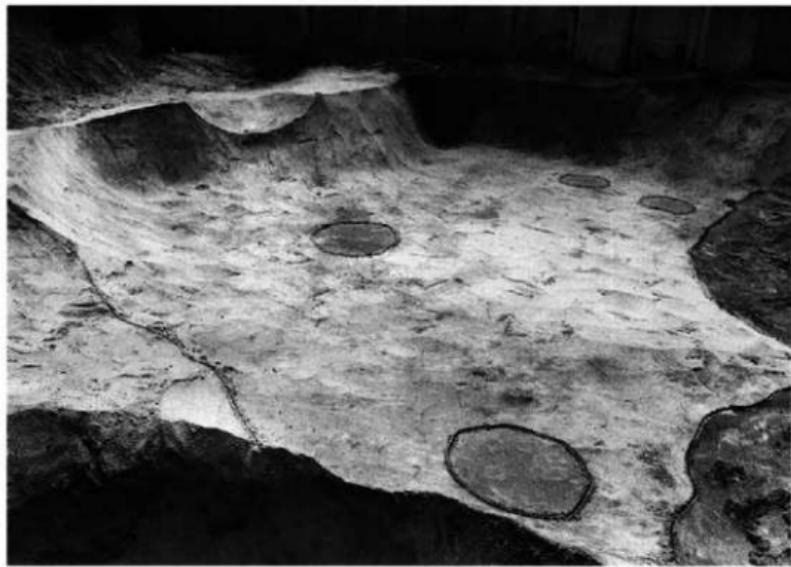


4) 造構外





1. 5号出入口 調査風景（北西から）



2. 5号出入口 SC01（北西から）

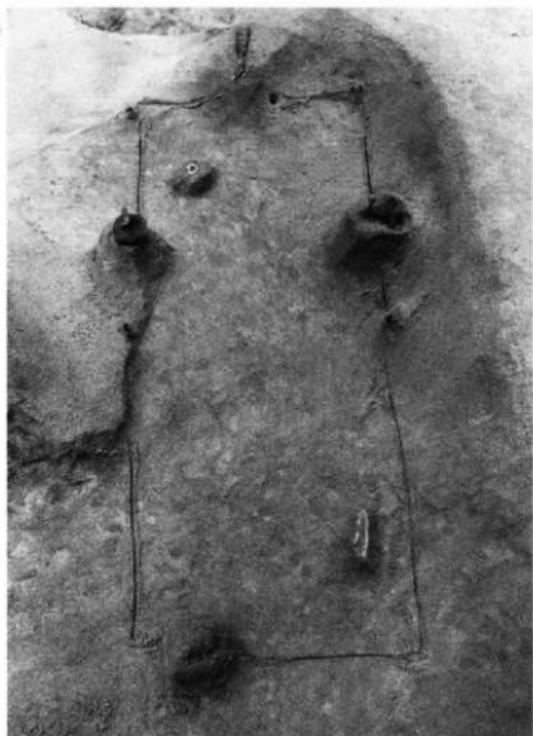


1. 5号出入口 1号墓（西から）



2. 5号出入口 2号墓（南から）

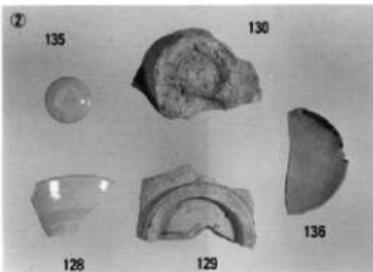
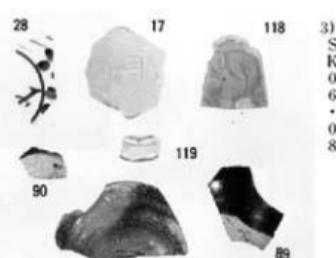
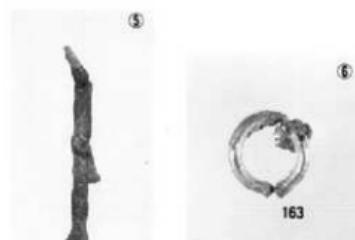
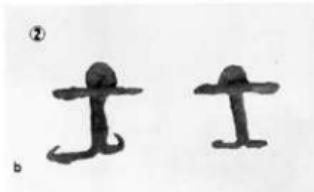
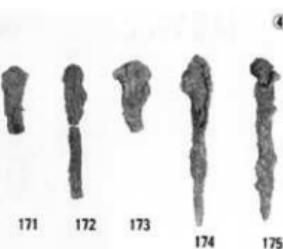
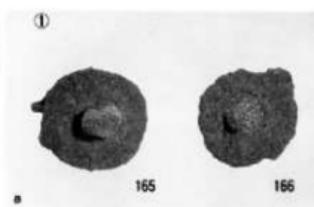
1. 5号出入口
3号墓(東から)



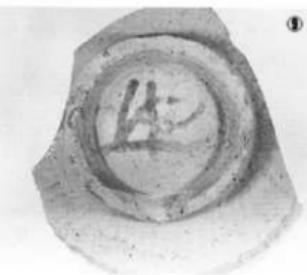
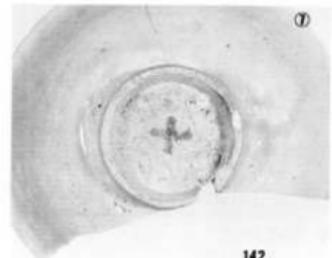
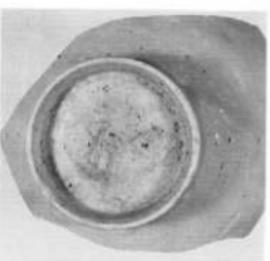
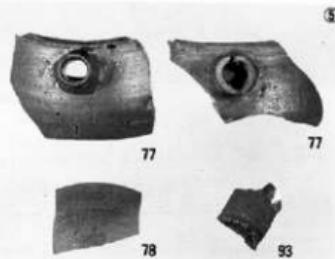
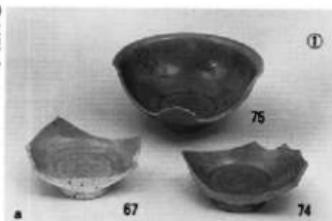
2. 5号出入口
3号墓遺物出土状況
(東から)



1)
3
号
墓



1) 造構外





1. P₂出入口 A区調査風景 (北西から)



2. P₂出入口 全景 (南西から)



1. P₂出入口 SD03 (南東から)



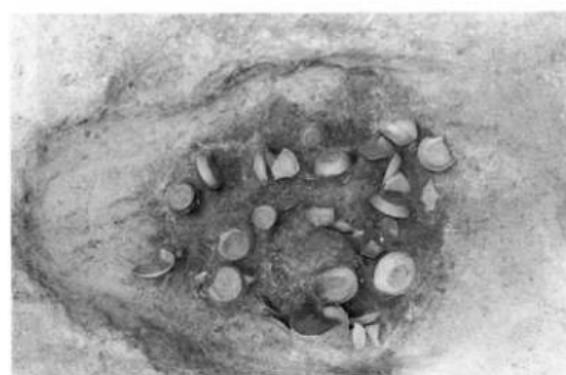
2. P₂出入口 SD03 (北西から)



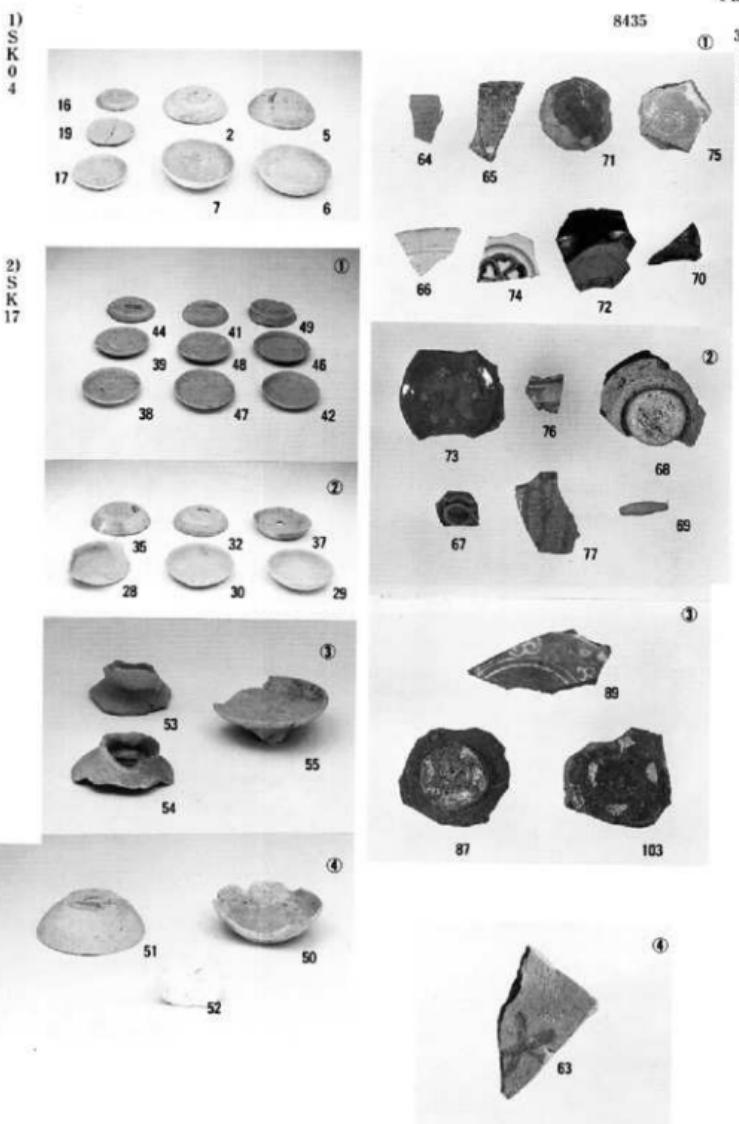
1. P₃出入口
C区全景 (南東から)



2. P₃出入口
SD03 土層断面
(南東から)

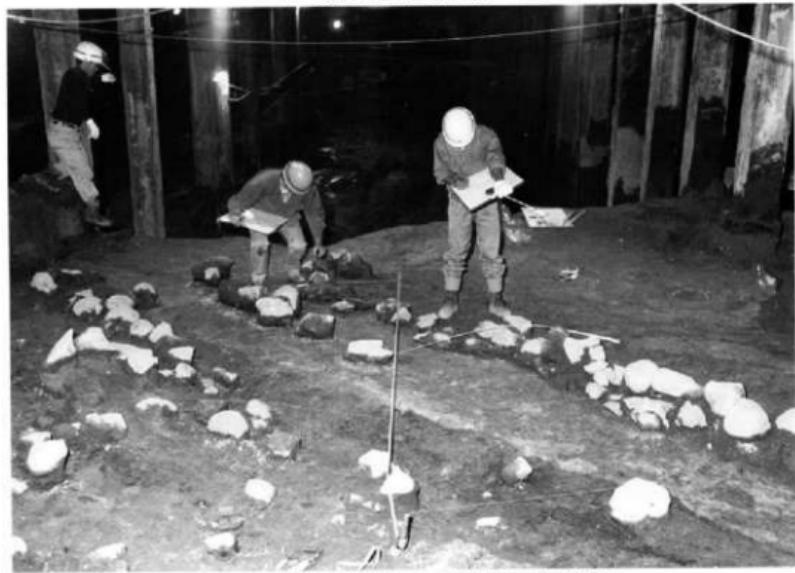


3. P₃出入口
SK04 (南西から)

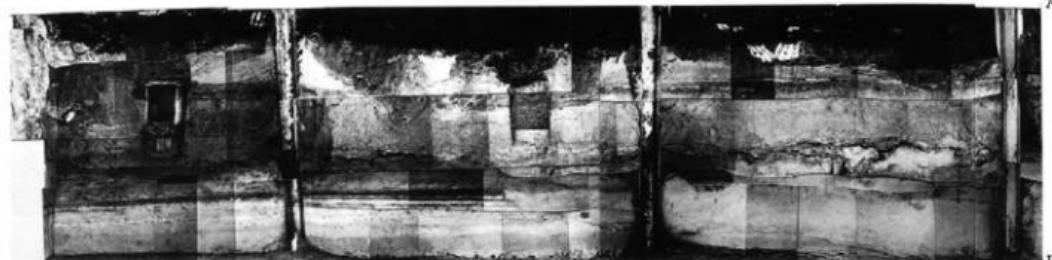




1. 貴福町交差点遠景（南から）



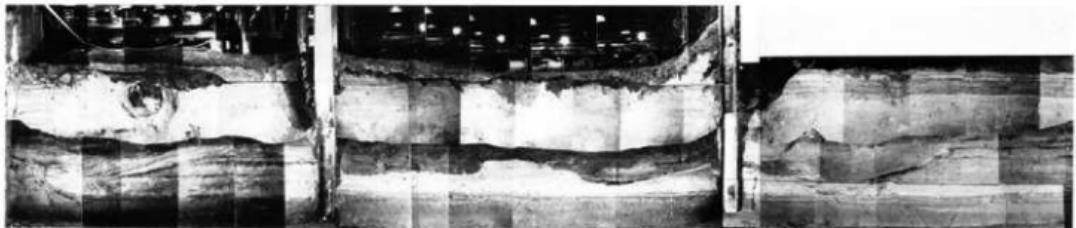
2. 貴福町工区 Bトレンド検出構造（北東から）



貴服町工区 B トレンチ土層合成写真 (約 1 / 100)

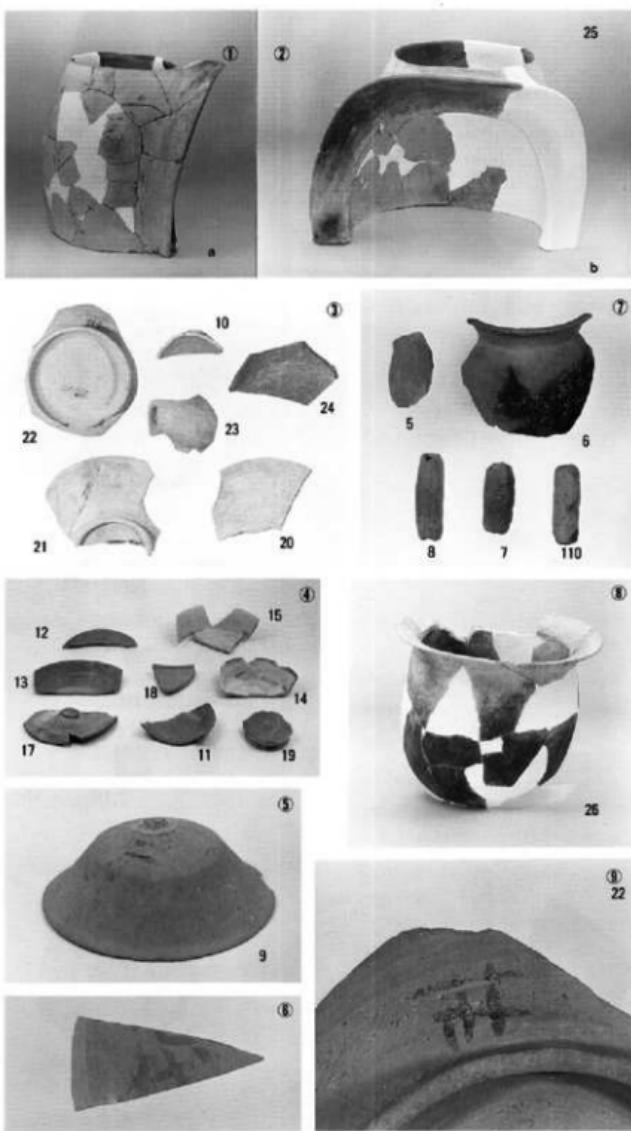


1. 豊服町工区 A トレンチ土層合成写真 (約 1/100)

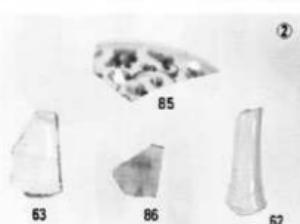
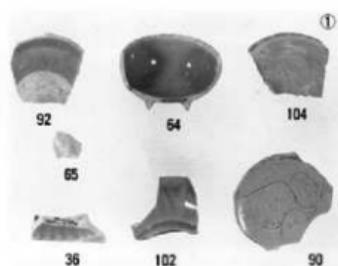


2. 豊服町工区 C トレンチ土層合成写真 (約 1/100)

Aトレンチ出土遺物



B
トレンチ出土遺物





1. B換気塔調査風景（南から）



2. 朝日生命換気塔調査区（北西から）



1. 朝日生命換気塔 土層断面（東から）



2. 朝日生命換気塔 土層断面（北東から）

1. A出入口
調査風景



2. A出入口
調査風景



3. C出入口
調査風景





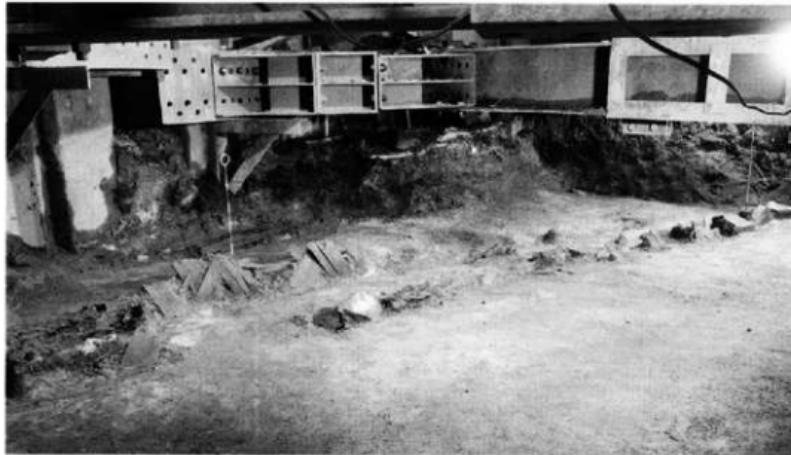
1. A出入口 SD02 (西5, 5)



2. A出入口
SD02 (東5, 5)



3. A出入口 SD01
道物出土状況 (東5, 5)



1. A出入口
SD02 (西から)



2. A出入口
SD02 (南東から)



1. A 出入口 SD 02 (西から)



2. A 出入口 SD 02 部分 (南東から)



1. A出入口 SD03 (東から)



2. A出入口 SD03 (北から)



1. A出入口 SD03 遺物出土状況（北から）



2. A出入口 SD04, 05 (西から)

1. A出入口
SD94, 05
(北東から)



2. A出入口
SK01
(北西から)





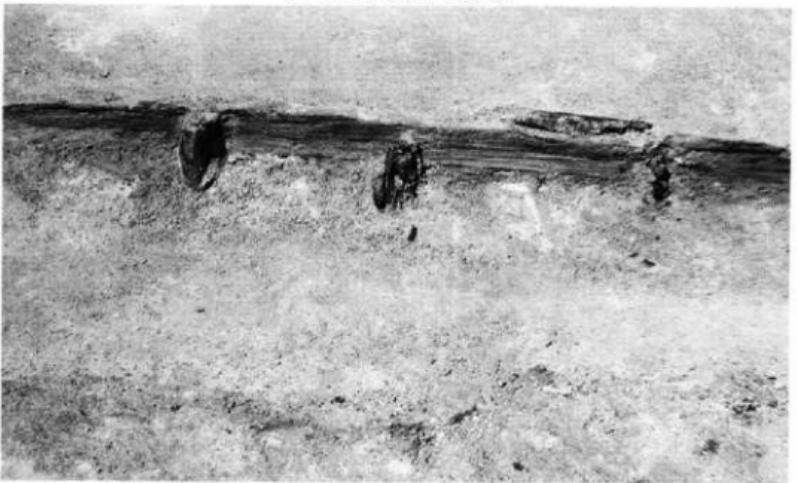
1. B出入口 I区全景 (南東から)



2. B出入口 II区全景 (南東から)



1. B出入口 SD01 (南から)



2. B出入口 SD01上留状況 (南西から)



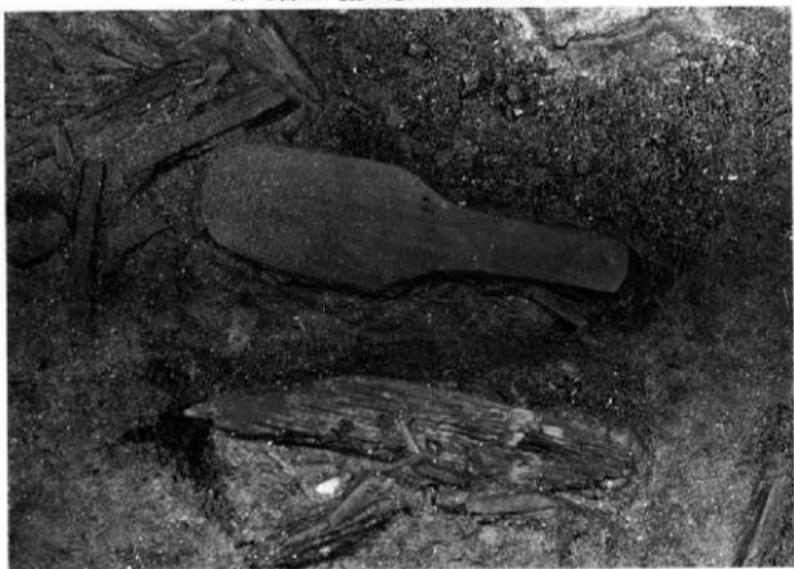
1. B出入口
SD02と杭列
(北から)



2. B出入口
SK09(西から)



1. B出入口 SK09 遺物出土状況（西から）



2. B出入口 SK09 しゃもじ形本製品出土状況（西から）



1. C出入口 SK03 調査風景



2. C出入口 SK03 (西から)

1. C出入口
SK03 (南から)



2. C出入口
SK03
副葬品出土状況
(西から)





1. C出入口 SD02とSK11 (南から)



2. C出入口 SK11遺物出土状況 (北から)

1. C出入口
SD03 (南から)



2. C出入口
SD03
遺物出土状況
(南西から)



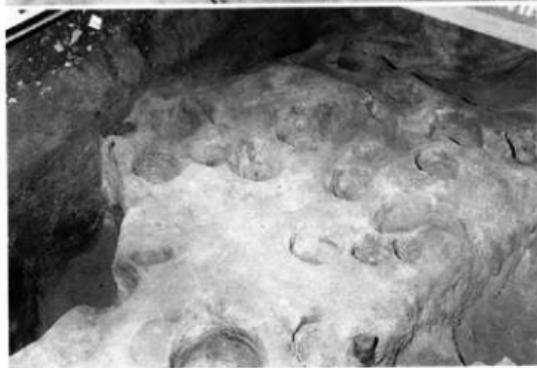
1. C出入口
SK07 (南から)



2. C出入口
SK02 (北から)



3. C出入口
ビット群 (東から)





1. C出入口 SE03 (南から)



2. C出入口 SE07 (東から)

3. C出入口 SE07部分





1. C出入口
SE04 (東から)



2. C出入口
SE13, 14 (南西から)



3. C出入口
SE15, 18 (東から)

1. C出入口
SE15 (東から)



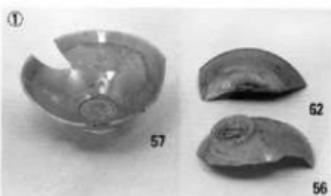
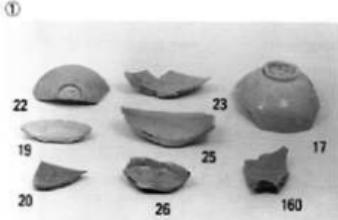
2. C出入口
SE16 (西から)



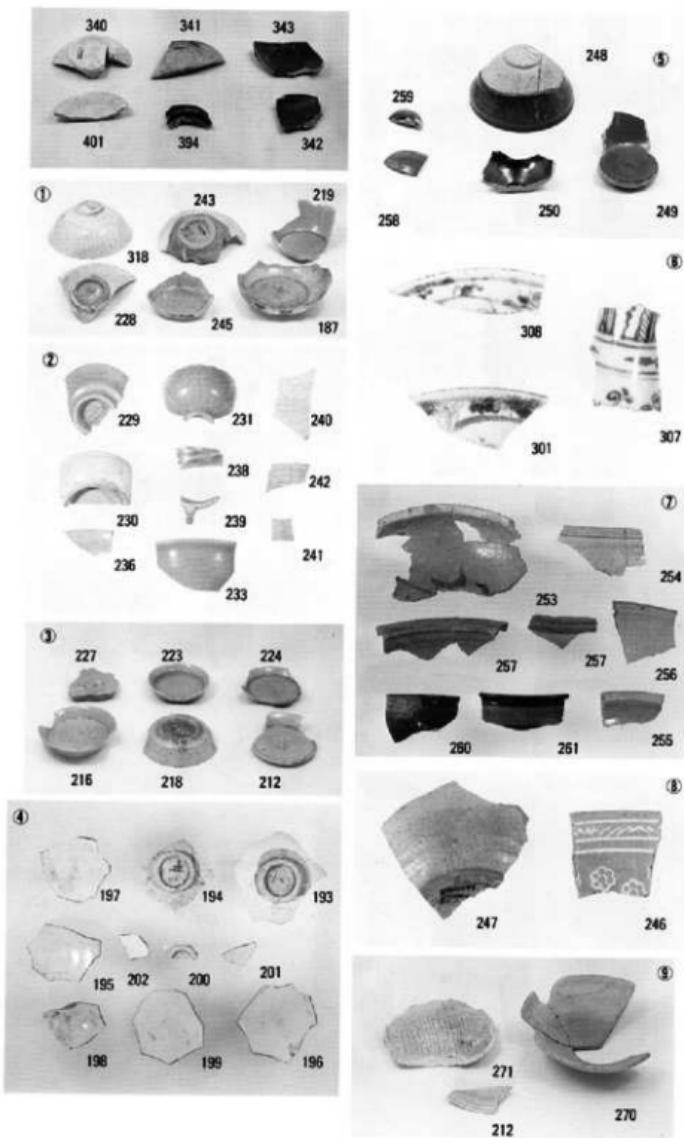
3. C出入口
SE17 (西から)



1) A出入口 S D 0 1



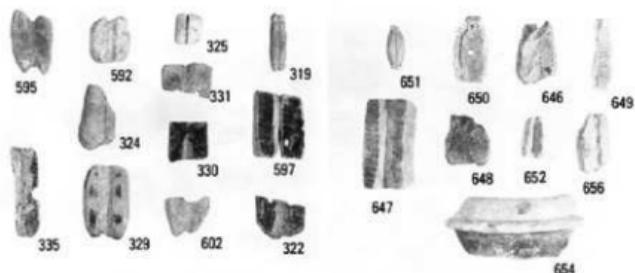
1) C 出入口 SK 0 1
2) B 出入口 造構外



PL. 62

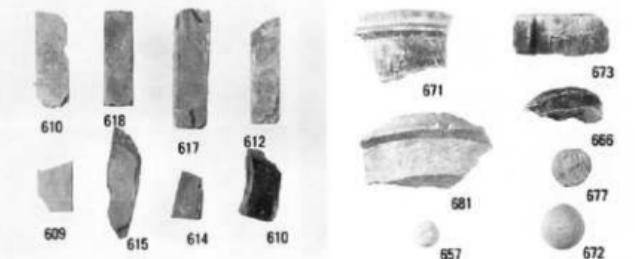
8150

1)
A
出入口

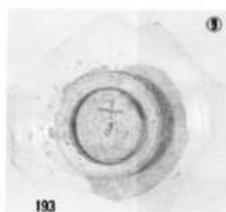
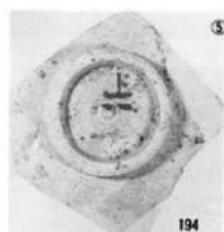
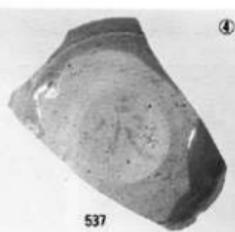


3)
C
出入口

2)
B
出入口



黒書陶磁





1. 9ブロック
調査風景
(北から)



2. 10ブロック
調査風景
(南から)



3. 11ブロック
近世墓調査風景

1. 2ブロック
調査区全景
(北から)



2. 6ブロック
調査区全景
(南から)

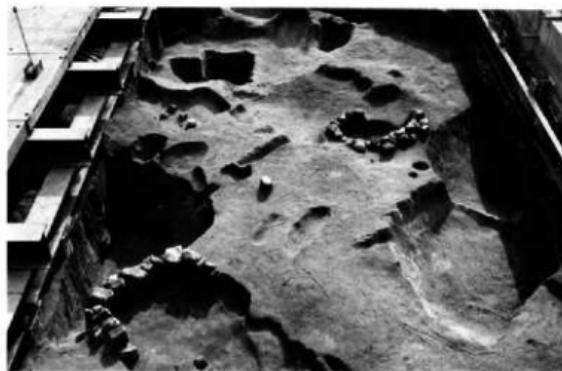


3. 6ブロック
調査区全景
(南から)





1. 8ブロック
調査区全景
(南西から)



2. 8ブロック
調査区全景
(南から)



3. 9ブロック
調査区全景
(南西から)

1. 10ブロック
上部遺構全景
(南から)



2. 10ブロック
上部遺構
(西から)



3. 10ブロック
上部遺構
(北から)





1. 10ブロック
下部遺構全景
(北から)



2. 10ブロック
下部遺構
(南から)



3. 10ブロック
下部遺構
(南から)



1. 11ブロック全景（南から）



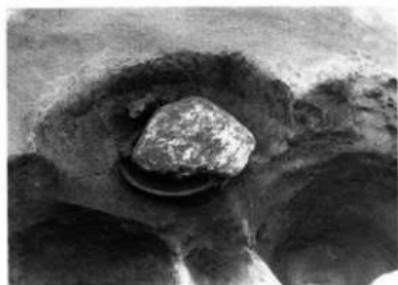
2. 11ブロック全景（南から）



3



4



5



6



1. 10ブロック
SX02遺物出土状況
(南から)



2. 10ブロック
SX02完掘後
(東から)

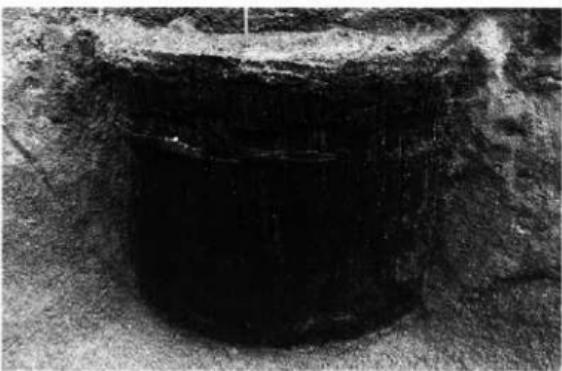


3. 12ブロック
SX07
(北から)

1. 11ブロック
井戸群
(西から)



2. 11ブロック
SE30
(西から)

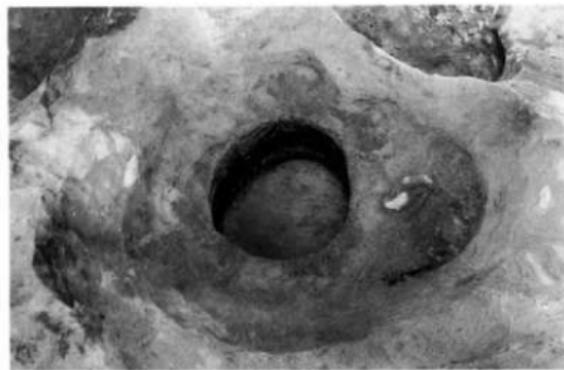


3. 11ブロック
SE33
(西から)





1. 11ブロック
SE3
(西から)



2. 11ブロック
SE37
(西から)



3. 11ブロック
SE39
(東から)



1. 9 プロフク SD 13 (東から)



2. 9 プロフク SD 13 遺物出土状況 (東から)



3. 10 プロフク SK 203 (北から)



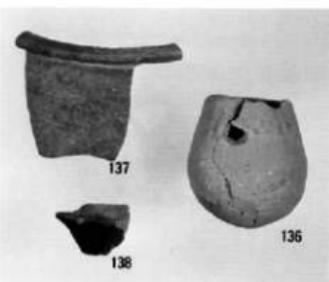
4. 12 プロフク SK 3016 (西から)

1)
S
E
04

8342



217

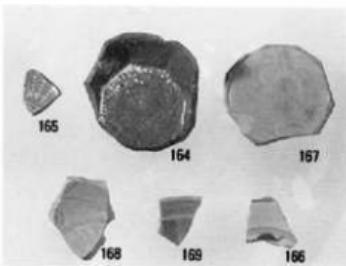
2)
S
E
12

137

136



163

3)
S
E
14

165

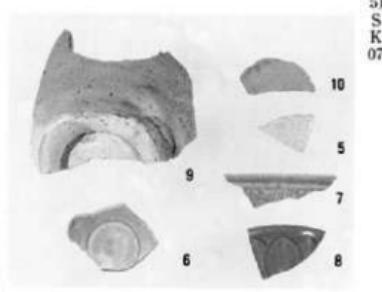
164

167

168

169

166

5)
S
K
07

10

5

7

8



a 11



b



29

31

7)
S
K
30

30

8342

5)
S
K
2971)
S
K
203

215

2)
S
K
70

42

43

3)
S
K
80
•
83
•
84
•
85

44



46

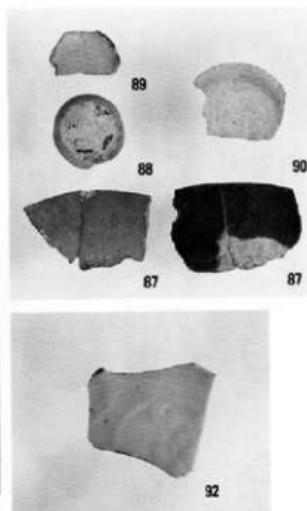


45

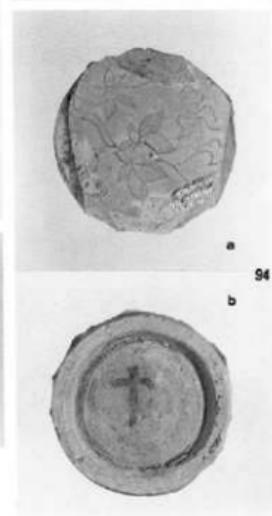
47

4)
S
K
266

84

6)
S
K
303

92

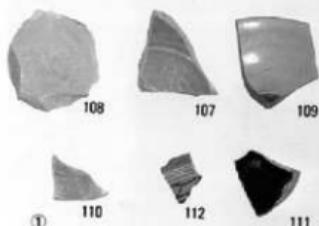


a

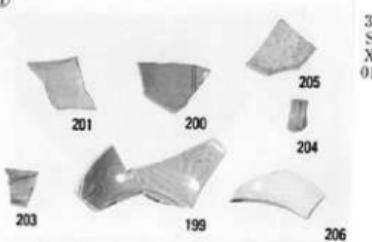
b

94

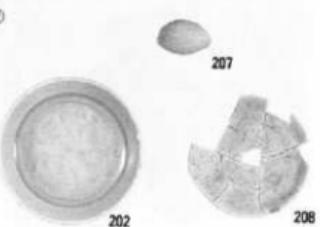
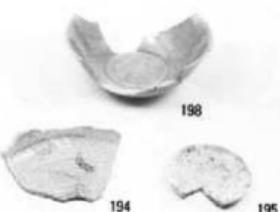
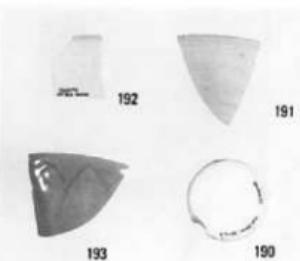
8342

1)
S
D
122)
S
D
13

①

3)
S
X
01

②

4)
S
S
025)
S
S
01

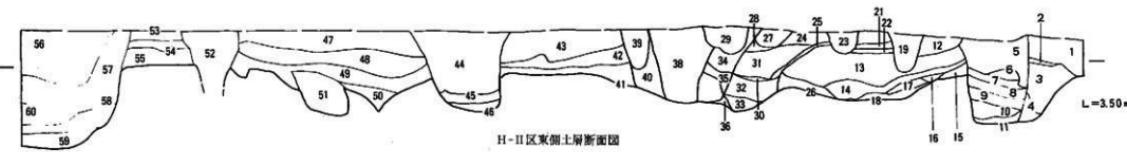
高速鉄道関係埋蔵文化財報告VII

博 多

昭和63年 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10-29

印 刷 秀巧社印刷株式会社
〒815 福岡市南区向野2丁目13-29



- 46 黄褐色砂層 砂層 粘なし
47 茶褐色 粘有 砂層 土器片 カーボン層有
48 茶褐色 粘なし 粘無 砂層
49 黑褐色 粘なし 粘無 砂層
50 黑褐色 粘なし 粘無 砂層
51 黑褐色砂層 粘無 粘なし
52 灰白色砂層 粘有 粘無 土器片有
53 茶褐色 粘有 粘無 砂層
54 茶褐色 粘有 粘無 土器片有
55 黑褐色砂層 粘无 砂層
56 黑褐色砂層 粘无 砂層
57 黑褐色砂層 粘多少有 粘無 砂層 カーボン多少有
58 黑褐色 粘多少有 粘無 砂層 カーボン層有
59 黑褐色砂層 粘無 粘なし
60 黑褐色砂層 粘無 粘なし 粘少有
- 31 茶褐色砂層 粘無 粘なし
32 茶褐色砂層 粘無 粘なし
33 黑褐色砂層 粘無 粘有 カーボン有
34 茶褐色砂層 粘無 粘なし
35 黑褐色砂層 粘無 粘なし
36 黑褐色砂層 粘無 粘なし
37 茶褐色砂層 粘無 粘なし カーボン有
38 黑褐色砂層 粘無 粘なし カーボン有
39 黑褐色砂層 粘無 粘なし
40 茶褐色砂層 粘無 粘なし
41 黄褐色砂層 粘無 粘なし
42 黑褐色砂層 粘無 粘無
43 黑褐色砂層 粘無 粘なし カーボン有
44 黑褐色 粘無 粘有 砂層 カーボン層有
45 黑褐色砂層 粘無 粘なし 砂層
- 16 灰褐色 粘無 粘なし
17 黑褐色砂層 粘なし 粘無
18 黑褐色砂層 粘無 粘なし
19 茶褐色 粘無 粘なし
20 黑褐色砂層 粘無 粘なし
21 黑褐色砂層 粘無 粘なし
22 黑褐色砂層 粘なし 粘無
23 黑褐色砂層 粘なし 粘無
24 黑褐色砂層 粘無 粘なし
25 黑褐色砂層 粘無 粘なし
26 黑褐色砂層 粘無 粘なし
27 黑褐色砂層 粘無 粘有
28 黑褐色砂層 粘無 粘なし
29 黑褐色砂層 粘無 粘有 土器片有
30 黑褐色砂層 粘無 粘有
- 1 茶褐色砂層 粘無 粘なし
2 黄褐色 粘無 粘なし
3 茶褐色砂層 粘無 粘なし 砂層有
4 粉色砂層 粘無 粘なし
5 黑褐色砂層 粘無 粘無 カーボン、 磷片有
6 黑褐色 粘有 砂層
7 黑褐色 粘有 砂層 カーボン層
8 灰白色砂層 粘無 粘無
9 黑褐色 粘有 砂層 カーボン有
10 茶褐色 粘無 粘土質
11 茶褐色
12 茶褐色 粘無 粘なし
13 黑褐色 粘無 粘なし カーボン、 磷片 土器片有
14 黑褐色砂層 粘有 砂層 粘無 粘土層
15 黑褐色 粘無 粘有



Fig. 7 試掘町工区 H-II区土層断面図 (1/80)